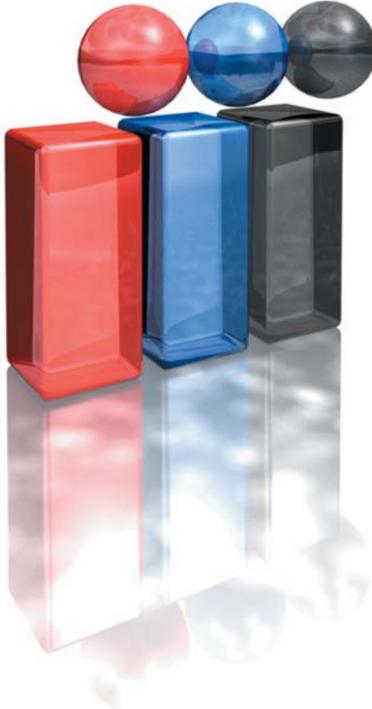


東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

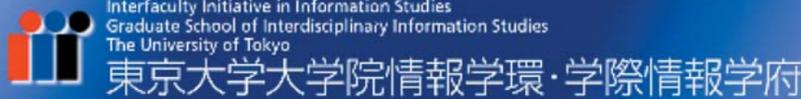
Annual Report

第8号
(通巻40号)

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo



2012



東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

二〇一二年度 第八号(通巻四〇号)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

第 8 号 (通卷 40 号)

2012 年度

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

I. 現状と課題	1
1 組織説明	1
1.1 概要	1
1.2 理念と沿革	3
1.3 行動シナリオ	6
1.4 教職員数	7
1.5 財務	8
1.6 運営	11
1.6.1 情報学環教授会	11
1.6.2 学府委員会	12
1.6.2.1 社会情報学コース	12
1.6.2.2 文化・人間情報学コース	12
1.6.2.3 先端表現情報学コース	13
1.6.2.4 総合分析情報学コース	13
1.6.2.5 アジア情報社会コース	14
1.6.3 教務委員会	16
1.6.4 情報学環戦略企画室	16
1.6.5 入試・カリキュラム制度検討委員会	16
1.6.6 施設整備委員会	17
1.6.7 福武ホール管理運営委員会	17
1.6.8 情報セキュリティ委員会	18
1.6.9 情報ネットワーク委員会	18
1.6.10 情報倫理審査会	19
1.6.11 業績評価委員会	20
1.6.12 ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会	20
1.6.13 企画広報委員会	20
1.6.14 図書・出版委員会	20
1.6.15 国際活動委員会	21
1.6.16 産学連携委員会	21
1.6.17 知的財産室	21
1.6.18 利益相反アドバイザー	22
1.6.19 ハラスメント予防担当者	22
1.6.20 社会情報研究資料センター	22
1.6.20.1 情報学環メディア・コンテンツ研究機構	23
1.6.21 総合防災情報研究センター運営委員会	23
1.6.22 ユビキタス情報社会基盤研究センター	24

1.6.23	現代韓国研究センター	24
1.6.24	駒場カリキュラム連携運営委員会	24
1.6.25	学生・留学生委員会	25
1.6.26	教育部委員会	25
1.7	事務組織	26
2	教育活動	27
2.1	概況	27
2.2	教育カリキュラム	27
2.3	カリキュラム支援体制	28
2.3.1	主指導教員・副指導教員の配置	28
2.3.2	修士・博士 研究計画書の作成	28
2.3.3	修士課程研究構想発表会	29
2.3.4	修士論文中間発表会	29
2.3.5	博士課程コロキウム	29
2.3.6	E-learning 授業 (iii online)	29
2.3.6.1	iii online の目標	29
2.3.6.2	iii online の概要	30
2.4	学際情報学府への進学	32
2.5	修士論文及び博士論文の執筆	33
2.6	学際情報学府からの就職・進学動向	36
2.7	学際情報学府以外の教育活動	36
2.7.1	教育部	37
2.7.2	学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」	38
2.7.3	ベネッセ先端教育技術学講座(寄付講座)	38
2.7.4	「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座	39
3	研究活動	40
3.1	概況	40
3.1.1	文理の相互作用と連携	40
3.1.2	流動教員制度	40
3.2	大型研究プロジェクト(1,000万円以上規模)	41
3.3	附属センターの役割	44
3.3.1	社会情報研究資料センター	44
3.3.2	総合防災情報研究センター	44
3.3.2.1	災害情報の生産—伝達—受容過程の解明	45
3.3.2.2	首都直下地震災害の全体像の把握	45
3.3.2.3	大学SCMモデルの開発	45
3.3.2.4	防災制度の設計と運用に関する研究	45
3.3.2.5	災害情報教育の実施とプログラム開発	46

3.3.3	ユビキタス情報社会基盤研究センター	46
3.3.4	現代韓国研究センター	46
4	社会との交流	47
4.1	国際的委員会	47
4.2	政府・自治体委員会	49
4.3	学協会活動	51
4.4	他組織役職	56
4.5	セミナー・研究会・公開講座	57
4.6	出版活動	68
4.6.1	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』	68
4.6.2	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』	69
4.6.3	『英文紀要』	69
4.7	定期刊行物・ホームページ	70
4.7.1	定期刊行物	70
4.7.2	ホームページ	70
4.8	国際交流	71
II.	資料	73
1	沿革	73
2	学環の教員（定員）	74
3	学府の学生数	75
4	教育部	76
5	予算	77
6	土地・建物面積	78
7	入試定数と受入数	78
8	年度別入試データ詳細	78
9	修了者数の推移	84
10	学生支援機構（旧育英会）奨学生数	85
11	日本学術振興会特別研究員数	85
12	リサーチアシスタント数	85
13	就職状況	86
14	研究員（客員）等	90
15	学会賞など受賞者リスト	90
16	論文数	91
17	特許出願・公開数	91
18	国際団体役員・委員数	92
19	政府関係委員会委員数	92
20	地方公共団体関係委員会委員数	92
21	ジャーナル編集・会議運営	93

22	定期刊行物一覧	93
23	留学生数の推移	94
24	留学生国籍別一覧	95
Ⅲ.	個人業績編	97
Ⅳ.	外部資金獲得状況	229

I. 現状と課題

1 組織説明

1.1 概要

東京大学大学院情報学環・学際情報学府は、従来の研究科とは異なる形態の大学院組織として、2000年4月に設置された。この大学院組織は、研究組織（教員が所属）である情報学環と教育組織（学生が所属）である学際情報学府という2つの対をなす機構によって構成されている。大学院の組織モデルとして、研究科が研究と教育の統合モデルであるのに対して、学環・学府は分離モデルだといえる。従来の研究科が専門深化と恒常性を基本的な特質とするのに対して、この大学院組織は、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するのに適した形態として考え出された。

その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にある。すなわち、研究組織である「情報学環」は、固有の基幹教員と、学内既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に教員枠及び身分を異動する多数の流動教員によって構成されている。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合を目指している。教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員と流動教員が行うが、授業科目の担当は、これらの教員以外に他研究科・研究所等に所属する教員にも委嘱する。また、副指導教員制や副専攻制度の積極的な運用を図ることによって、情報関連の広範な学問分野を覆う幅広い学際的教育を目指している。

研究組織である大学院情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏という2つの学圏から構成されている。それぞれの学圏は、次のようにいずれも5つの学域からなっている。

大学院 情報学環

■学際情報学圏

情報生命・思想学域

情報システム・言語学域

情報表現・造形学域

情報環境・認知学域

情報社会・制度学域

■社会情報学圏

ジャーナリズム・メディア学域

情報行動・機能学域

情報法・政策学域

情報経済・産業学域

情報文化・歴史学域

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies & Graduate School of Interdisciplinary Information Studies



教育組織である大学院学際情報学府では、一方では情報現象についての文理を越境する幅広い視野を、他方では社会情報学からコンピュータ科学までの高度な専門的能力を、同時に身につけた人材を持続的に社会に提供していくために、それぞれの自律性と相互の連携をあわせもったカリキュラムを編成し、それを運営する以下のような5つのコースを設置している。このコース制は、教育効果を上げるために学生をコースに振り分けるものであって、教員がコースに帰属するものではない。教員は学環に帰属している。

また、学際情報学府は学際情報学の1専攻という形式をとってはいるが、この「専攻」は従来の研究科における専攻とは異なるものであり、そこに教員が帰属しているわけではない。

社会情報学コース

このコースでは、メディア、コミュニケーション、社会情報に関わる社会現象・文化現象を分析するための学識を養い、専攻分野における研究および応用の能力を培うことを目的とし、社会情報学の発展に貢献できる研究者を養成するとともに、社会人を受け入れて研究手法を身につけさせ、知識の高度化をはかる教育を行っている。

文化・人間情報学コース

このコースでは、情報学の視座から文化・人間科学の諸領域を体系的に再編し、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの21世紀的な諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいくことのできる深い学識と精緻な方法的能力をそなえた研究者や実践者を養成する教育を行っている。

先端表現情報学コース

このコースでは、21世紀の社会・産業・個人の情報環境の基盤となる専門的な理数情報学の知を深めるとともに、あわせて他分野と協調して学際的に情報学のフロンティアを切り拓いていくための幅広い学識を身につけた研究者及び表現者を養成している。

総合分析情報学コース

このコースでは、センサーから大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、保存・解析したうえで、有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している

アジア情報社会コース

このコースでは、情報通信技術の影響をますます受けつつある現代アジアの諸社会や国際関係に対する分析力や洞察力を養成する為の大学院教育を行っている。講義や指導はすべて英語で行われ、学年は10月から始まる。

これらの5つのコースそれぞれで、一般の入試と並び、実践的な経験や目的を重視し、社会人を主要な対象とした特別選抜を実施している。

情報学環教育部

また、学部生を対象とした教育カリキュラムとして、情報学環教育部がある。教育部では、大学2年次以上の在学者及び大学卒業者の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年50名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限2年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

1.2 理念と沿革

* 情報学環・学際情報学府設立の経緯

情報学環・学際情報学府設立の背景には、次のような認識があった。近年にみられる情報技術の急速な発展と利用の拡大によって、「情報」が現代社会において果たす意味は、決定的に重要なものとなってきた。技術的体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面が、「情報」の様式変化のインパクトによって、根本的な変革を促されつつある。21世紀には、この情報様式のあり方が、地球上の生命や人間、社会の動向を大きく規定する基盤となることは確実だ。こうした状況を背景に、「情報」に関する、より総合的でより高度な教育研究の社会的意義が高まり、それに応えうるような教育研究体制の整備が、喫緊に求められていた。

情報にかかわる教育研究は、今日、きわめて多様な学問領域で行われており、しかも、各個別領域に

固有な対象や方法とも深く結びつきながら発展してきている。こうした実態を有効に生かしながら、相互間の有機的連携を促し、学際的な教育研究をすすめることが、情報学の総合的な発展のためには不可欠だと考えられた。また、情報学は、急速な発展途上にある学問分野であることから、一方では研究面で、先端的な学融合に就中に取り組みうる緊密な共同体制を設ける必要があると同時に、他方では教育面で、カリキュラム編成や研究指導體制の幅広さと研究内容の進展や時代の要請の変化に即応できる組織的柔軟性を確保する必要があった。こうした特性をもっている情報学の教育研究上の目的を効率的かつ実効的に達成するために、平成12年4月から、学校教育法第66条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」が設置されたのである。

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科とは違って、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するにふさわしい形態をとった。

前述の通り、その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にあり、その組織構造は次のように作られた。研究組織である「情報学環」は、基幹教員と流動教員によって構成された。基幹教員とは情報学環が固有のもつ教育枠で採用される教員であり、流動教員とは既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に定員及び人が移され、それによって情報学環教員となる教員のことである。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合が目指された。

教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員及び教育にも従事する流動教員が行なう。学際情報学府における授業科目の担当は、これらの教員が行うほか、他研究科・研究所等に所属する教員にも兼担当教員として委嘱する。

*** 社会情報研究所の合流、新組織設立に至る経緯**

このようにして設立された情報学環・学際情報学府は、2004年4月1日、東京大学社会情報研究所と組織統合し、新たな一步を踏み出した。社会情報研究所は国立大学附置研究所であり、その歴史をたどれば約75年間にわたる伝統をもつ研究機関であった。

1929年10月1日、東京帝国大学文学部に新聞に関する学術研究施設として新聞研究室が設置された。新聞研究室は、帝国大学の法学部、文学部、経済学部からそれぞれ1名の指導教授が横断的に参加し、1名の指導補助、および3名の研究員が置かれるという、規模は小さいが、今日の情報学環のさきがけをなすような仕方で東京帝国大学を横断的につなぐ学際的な研究組織であった。またその運営は、渋沢栄一や阪谷芳郎、本山彦一、徳富蘇峰、杉村廣太郎といった、当時の財界、新聞界の名士たちが協力して募られた寄附金によってまかなわれ、今日の産学連携のさきがけをなす形態をとっていた。設立時の新聞研究室の指導教授としては、法学部から南原繁教授が、文学部から戸田貞三教授が、経済学部から河合崇治郎教授がというように、戦前期日本の法学、社会学、経済学をまさしく代表する教授3名が参

画し、指導補助として実質的な研究組織の中核を担った小野秀雄（初代新聞研究所長）を支えていた。

このような前史を経て、戦後の1949年に新聞研究所が正式に東京大学附置研究所として発足した。その根拠をなす国立学校設置法（49年5月31日公布）には、「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」と規定されていた。すなわち、新聞研究所は設立の当初から、狭義の新聞に限らず、雑誌、放送、映画などを含むマス・メディア全般を研究対象とする学際的な研究組織として出発していたわけである。また、「新聞」という言葉そのものも、今日のように狭義の新聞紙だけを指していたわけではなく、ニュースや報道媒体全般をも含みこんだ概念であるという理解がその当時にはあった。

やがて、新聞研究所は20世紀後半の放送をはじめとするマス・コミュニケーションの発展を受けて組織の拡充と研究部門の再編を重ねていった。1957年度からは、基礎部門：マス・コミュニケーション理論、歴史部門：マス・コミュニケーション史、特殊部門1：コミュニケーション過程、特殊部門2：マス・コミュニケーション・メディア、特殊部門3：世論及び宣伝という5研究部門の構成となり、63年度からはこれに放送部門が、さらに74年度からは情報社会部門が、80年度からは社会情報システム部門が加わった。このような部門構成から明らかなように、東京大学新聞研究所は、マス・コミュニケーション研究を基本に据えながら、トータルな社会的コミュニケーション研究をも視野に収めつつ、日本の国立大学では唯一の現代社会の最も中枢的な研究課題たる情報の社会的側面に関する学際的、総合的な研究として発展し、高い評価を得た。

そして、このような実績を基盤にして、1992年4月1日、「社会情報の総合的研究」を目指して新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた。改組後の社会情報研究所は、情報メディア、情報行動、情報・社会という3大部門を置き、旧新聞資料センターを改称した情報メディア研究資料センターを附置するという体制をとって、1992年から95年まで続いた文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」をはじめ、情報化社会に対する学際的な取り組みを本格的かつ先端的に進めた。1996年には外部評価を実施し、高い評価を得た。そのときの産業界パネルの委員は小池唯夫（毎日新聞社長）、川口幹夫（NHK会長）、関本忠夫（日本電気会長）、大塚信一（岩波書店社長）、福川伸次（電通総研所長）の方々であった。

高度情報社会の深まりのなかで、東京大学における情報をめぐる教育研究体制の再編が議論になるたびに社会情報研究所は、文系の研究所として、その流れに身を置いてきた。そして、情報学環・学際情報学府の設立構想の際には積極的に関わり、人的リソースの提供において文系部局としては最大の貢献を果たした。社会情報研究所は情報学環・学際情報学府の設立後も密接な関係をもち、学環・学府を支援してきた。そして、国立大学法人化を前にした、国立大学附置研究所の見直し方針のなかで、社会情報研究所は情報学環・学際情報学府との合併を選択し、大学附置研究所から大学院組織へと全面的に移行したのである。それは、文系のなかでの学際的研究から、文理相互浸透のなかでの学際的教育研究へのシフトであり、情報現象を研究対象として組織としてはある意味で必然的な流れであり、新たなスプリングボードであったといえよう。

1.3 行動シナリオ

部局別行動シナリオ「情報学環・学際情報学府」

濱田純一総長のもとで策定された「行動シナリオ FOREST 2015」の部局別行動シナリオ(改訂版)において、情報学環・学際情報学府は次のような行動シナリオを掲げた。

2010年度に設立十年を迎えた大学院情報学環・学際情報学府は、「新たな十年」に向けて次のような課題に積極的に取り組みます。

1. 学術研究の深化と卓越性の追求

文理を越えた学際情報学研究の大学院として、世界最先端の総合的な情報学研究を推進し、世界の先端的研究機関と国際的な連携体制を構築する（「ユビキタス情報社会基盤研究拠点」、「メディア・コンテンツ国際研究拠点」、「アジア情報社会国際研究拠点」の推進）。

2. 教育の新たな取り組み

1) プログラム 学部前期から博士後期まで学際情報学授業科目群を展開する。能動的人材の育成のための「情報学環人材育成プログラム」を設置する（「教養学部後期課程新学科」への参画、「学部・大学院横断プログラム」の充実、「高等教育情報化研究機構」の設立）。

2) 国際化の推進 海外派遣プログラム・国際インターンシップを推進する。国際連携校との間に授業交換・単位互換および博士共同指導制度を導入する。英語での授業を充実させ外国人教員を積極的に登用する（「国際教育研究拠点ネットワーク」、「メディア・コンテンツ国際研究拠点」の設置、「留学生オフィス」の拡充、「現代韓国研究センター」の展開）。

3) 院生・ポスドク支援 RA・TA 制度を充実させ、院生・ポスドク支援のための「博士学位取得研究支援プログラム」、「学際情報学府インターンシップ」の導入をはかる。

3. 社会との連携

1) 組織 大学の社会連携コミュニケーションのための実践的研究機関を設立し「知の共創」イニシアティブを推進する。情報社会基盤の研究開発の産官学の連携と学内ベンチャーの育成のための教育研究プログラムを推進する（「知の共創センター」の設立、「情報社会基盤教育研究プログラム」の設置）。

2) 人 社会連携・産学連携のための「学環フェロー」、「学環フォーラム」の制度を発足させる。日常的な交流の場として、学術カフェ「U-Talk」などの社会活動を拡充する。

3) 社会貢献 震災からの復興・再生など、社会の重要課題の解決に学際情報学の立場から積極的に貢献する（「総合防災情報研究センター(CIDIR)」ほかの社会貢献活動の強化）。

4. ガバナンス・コンプライアンスの向上

情報学環の「流動システム」をさらに発展させて組織の流動性を確保し人材の絶えざる活性化を実現する。情報倫理・研究倫理教育を学府カリキュラムのなかに位置づける。教員の自己統治能力の向上、透明性とコンプライアンス推進のための「賢いFDプログラム」を導入する。

5. 研究基盤・教育施設の整備

新たな教育研究棟の建設、研究・教育施設の整備に全力をあげる。情報学環の先進的な情報基盤技術のノウハウを活かして、21世紀の持続可能社会のモデルとなる「スマート・キャンパス」の実証実験を実現する（「スマート・キャンパス」型研究棟の建設と「情報社会基盤研究拠点」および「次世代アーカイブ研究拠点」の設置を追求）。

1.4 教職員数

給与の財源が運営費交付金となっている教職員（常勤教職員）の採用枠は75人となっている。内訳は図1-4-1のとおり、教授等の常勤教員61人、常勤職員14人となっている。このほか、大学院情報学環は、外部資金に基づく特任教員や研究補助等の非常勤職員から構成される。

また、大学院情報学環の組織の一つとなっている基幹教員と流動教員の内訳について見ると、図1-4-2のとおりとなっている。基幹教員の定員数は38名、流動教員の定員数は23名とおおむね同数であり、両方の教員で情報学環の研究教育組織が等しく支えられていることがわかる。

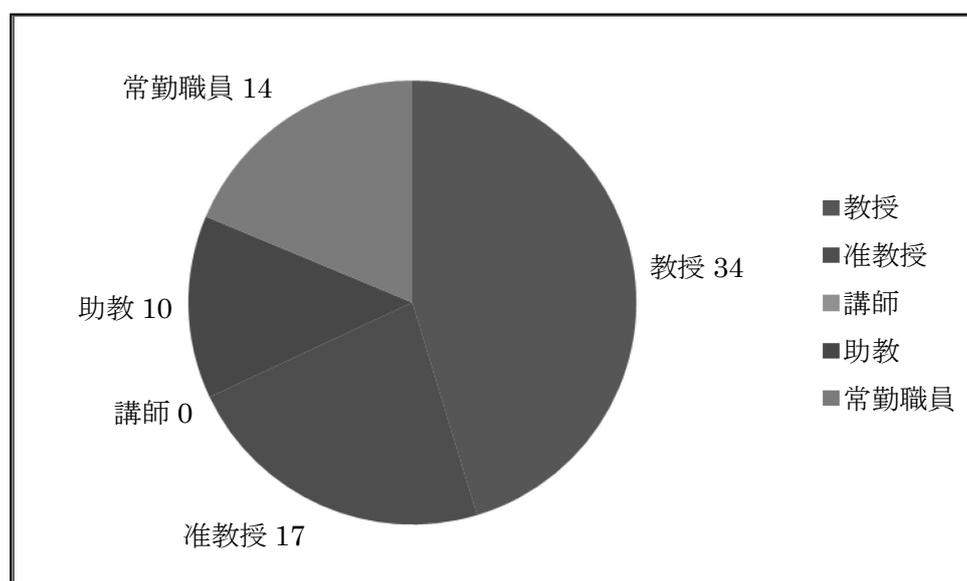


図1-4-1 教職員採用枠（全75人）の内訳
（平成23（2011）年4月1日現在）

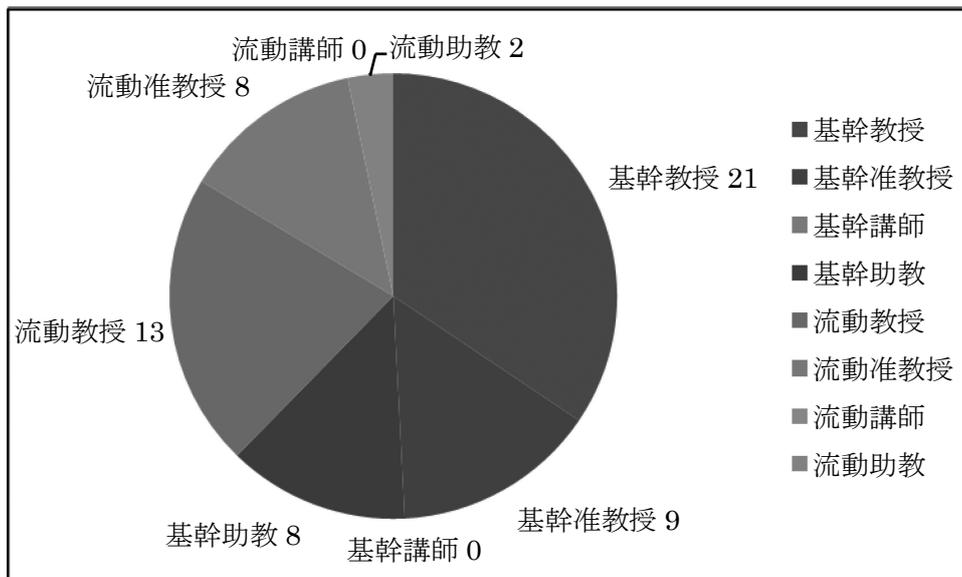


図 1-4-2 常勤教員採用枠（61 人）の内訳

1.5 財務

平成 23 年度予算および決算に基づき、情報学環の財務構造を説明する。対象は、部局の研究教育に直接関係する運営費交付金と外部資金（科学研究費補助金等）とし、常勤教職員の人件費及び部局の管理が直接及ばない授業料及び入学検定料については特に言及しない。

具体的な数字を見る前に、情報学環財務の特徴である流動教員に関する資金の取り扱いについて説明しておく。

運営費交付金の配賦にあたっては、流動教員分も情報学環の予算として計上されるが、執行は原則として流動元の部局で行うこととなっている（支出委任）。

流動教員に係る外部資金についても、受け入れは情報学環で行っているが、その全額を流動元部局に振り替えてから執行している。これは直接経費についても間接経費についても原則として同じである。

すなわち、運営費交付金の配賦額、あるいは外部資金の受入額のうち、ある程度の割合については流動元部局において執行されている。この仕組みを前提とした上で、以下では具体的な数字を見ていくこととする。

平成 23 年度の収入総額は 881 百万円だった。比率としては、運営費交付金¹が約 26% に対して外部資金が約 74% となっており、前年度と比すとやや外部資金の比率が上がった。これは外部資金の受入額の増加が主な要因である。

運営費交付金の使途内訳を見ると²表 1-5-1 のとおりとなる。前述した流動教員分の資金 71,743 千円

¹ 本項では、運営費交付金のうち特別経費（大学防災情報システム：13,150 千円および知識コンテンツ：25,000 千円）については外数として扱っており、収入総額等には含んでいない。

² 本段落では、部局長裁量経費（約 14 百万円）については、外数として扱い、割合の算出の際には分母及び分子のいずれにも含まれない。

が全体の3割強を占めている。したがって、運営費交付金のうち情報学環の裁量が及ぶのは残りおよそ7割の165,958千円となっていたが、情報学環暫定建物の取り壊しに伴う移転経費などが発生したため、平成23年度の支出は収入額を超過した191,709千円となった。不足分は本部への預託金から補填している。

その1億9千万円強のうち、5割強のおよそ107,000千円が、消耗品等一般経費や非常勤職員人件費といった事務管理経費となる。残りの5割弱(約84,000千円)が直接の教育研究活動に充てられることになる。ここでもやはり移転経費等の影響で事務管理経費の比率が若干上がっている。

表 1-5-1 平成23年度実績(運営費交付金)

経費区分	執行額 (単位:千円)	備考
光熱水料	1,885	*執行実績(18,553千円)のうち 16,668千円は間接経費より支出
通信運搬費	2,505	
建物保守料	2,409	
業務委託料	9,692	
非常勤職員人件費(事務)	20,998	*執行実績(25,624千円)のうち 4,626千円は間接経費より支出
非常勤職員人件費(教育研究)	15,869	
旅費交通費	1,362	
事務/教育研究一般用経費	52,578	*暫定建物取り壊しに伴う移転経 費含む
教員研究費	29,741	
各種委員会等経費	54,670	*内訳は別表(表1-5-2)に掲載
小計	191,709	
流動教員分	71,743	
総計	263,452	
部局長裁量経費	8,310	

表 1-5-2 平成 23 年度各種委員会等経費執行実績内訳

委員会名	執行額 (単位:千円)	備考
施設整備委員会	112	
情報ネットワーク委員会	1,024	
情報セキュリティ委員会		
業績評価委員会	2,130	
企画広報委員会	4,007	
図書・出版委員会	10,792	
国際活動委員会	2,029	
社会情報研究資料センター運営委員会	12,208	
教務委員会	4,552	
学生・留学生委員会	2,246	
入試実施委員会	4,051	
教育部委員会	2,451	
総合防災情報センター	7,178	
福武ホール管理運営委員会	1,890	
合計	54,670	

外部資金の収入内訳は表 1-5-3 のとおりである。ここに計上しているのは外部資金関係間接経費（情報学環分）を除いて直接教育研究に充当される資金である。外部資金のうち大学本部及び流動元部局の間接経費となる金額については計上していない。

表 1-5-3 平成 23 年度外部資金の収入内訳

(単位:千円)

区分	総額	うち流動元 執行分	学環収入分
寄付講座	27,000		27,000
寄附金	85,963	12,281	73,682
科学研究費補助金	126,197	61,473	64,724
厚生労働科学研究費補助金	12,500	12,500	0
その他補助金	22,171	972	21,199
受託研究費	422,020	97,115	324,905
共同研究費	128,436	30,126	98,310
間接経費(部局分)	34,017		34,017
外部資金合計	858,304	214,467	643,837

大学運営費交付金は毎年度削減されており、情報学環への配賦額においても例外ではない。表 1-5-1 にあるように、光熱水料や非常勤職員人件費といった事務部門の経常経費にも外部資金の間接経費が充てられているのが現状である。

かような状況においては、外部資金獲得の重要性は高まりこそすれ下がることはない。しかしながら、現在の社会情勢を鑑みるに、企業等がこれからも現在と同等の水準の研究資金を大学に投入し続けると考えることは難しい。外部資金への依存度が高まっている一方で、それをあてにできない現状もある。

この厳しい財務状況を受けて、平成 24 年度においては教員個人研究費および各委員会経費の一律 25%削減が決定された。これによって単年度の財政均衡は保てる見込みであるが、今後も運営費交付金の削減は続き、さらなる経費削減が必要となることが見込まれる。

1.6 運営

1.6.1 情報学環教授会

大学院情報学環教授会が研究組織としての情報学環の意思決定機関である。教員が帰属するのは情報学環であり、情報学環教授会は基幹教員と流動教員によって構成され、両者の間に権利と義務において相違はない。教授会は月に 1 度開催され、重要事項を審議し決定する。人事に関しては人事教授会が開催される。

部局長たる情報学環長は教授会における選挙によって選任され、総長によって任命される。被選挙権

は教授にあり、選挙権は講師以上にあるが、基幹教員と流動教員は同等の権利を持つ。学環長の任期は旧情報学環と旧社会情報研究所の統合後の最初の学環長は2年、その後の、つまり2006年4月からの学環長は3年となっている。再任はない。

学環長が副学環長を指名する。学環長が主宰する総務委員会が、教授会と教授会の間で諸案件や方針について協議し、教授会にかける案件の準備をする。また、総務委員会が決定し、教授会に報告すると定められた事項もある。総務委員会は学環長、副学環長、両学圏長、重要委員会の委員長、5コース長、学環長補佐などによって構成され、ほぼ月に1度開催される。これが実質的な執行部である。

1.6.2 学府委員会

教育組織としての大学院学際情報学府の決定機関は、学府委員会である。そこで教務関係、入試関係、学生の身分の異動などの重要事項が審議され決定される。学府委員会の構成メンバーは学府の教育に関わる教員であり、情報学環の教員のほか兼担教員がこれに加わる。学府のもとに学際情報学専攻の専攻長が置かれており、学環長が指名する。専攻長は教務委員会と入試実施委員会を組織する。

学府は社会情報学コース、文化・人間情報学コース、先端表現情報学コース、総合分析情報学コース、アジア情報社会コースに分かれて入試を行い、合格した学生はそれぞれのコースの所属となるが、それぞれのコースの運営に責任を持つ、コース会議および運営委員会が置かれている。各コース長が責任者を務め、適宜開催される。

1.6.2.1 社会情報学コース

社会情報学コース運営委員会は、学生がより深く社会情報学を学習し、質の高い論文を執筆できる環境を整備することを目的とする。具体的には、教務委員会、入試実施委員会、他のコースと協力をしながら、主に以下の(1)~(12)の業務を担当した。2011年度は、特に、(a)修士・博士課程の適切な人材の選抜方法についての継続審議、(b)博士論文の指導プロセスならびに審査の更なる充実、(c)修士課程入試問題の開示方法の見直しを行なった。このほか、社会情報学コース志望および所属の学生たちのためによりよき指導を提供できるよう、教育環境整備に取り組んだ。

(1)ガイダンス、研究構想発表会、社会情報学コース新入生歓迎会(4月) / (2)外国人研究生審査(5・11月) / (3)入試説明会(6月) / (4)修士中間発表会(7月) / (5)修士入学試験(8月) / (6)博士コロキウム(11月) / (7)次年度の開講科目、非常勤講師、RA・TA、共通入門科目(学際情報学概論)の計画・決定(1月) / (8)修士論文審査(2月) / (9)博士入学試験(2月) / (10)優秀学生論文の決定(3月) / (11)博士論文に関する審査委員会、審査結果の審議(随時) / (12)学生の休学、退学、復学の審議(随時)

1.6.2.2 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、社会科学系の社会情報学コースと自然科学系の先端表現情報学コース、総合分析情報学コースとをつなぐ中間の位置にあり、文理の融合を進めながら、新しい学際的な情報学の創造に正面から取り組んでいる。このコースを担当している教員には、基礎情報学、進化学、生態心

理学、科学技術コミュニケーション、知覚情報論、記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学、アーカイブ論、メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、フェミニズム、科学思想史、人的資源管理論などの諸領域の専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指導、いくつかの教育上のプロジェクトの実施に当たっている。このコースの教育は、①生命・身体・環境、②文化・表象・映像、③メディア表現・学習・リテラシー、④アーカイブ・歴史情報という、理論的なものから実践的なものまでの4つの大きな柱を軸にしつつ、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいる。教員の専門分野、また学生の研究テーマも多岐に渡るため、基礎的な研究方法や学術リテラシーを涵養するために、コースの選択必修科目である文化・人間情報学基礎（4単位）と文化・人間情報学研究法（2単位）にはさまざまな工夫を凝らしており、上記の4つの柱に応じた基礎力増強のトレーニングとフィールドワーク型のグループ実習、量的・質的研究法の訓練、社会情報学コースとの合同科目などが用意されている。

1.6.2.3 先端表現情報学コース

先端表現情報学コースは、教員23名（学環基幹1名、流動9名、兼任・課程担当12名、兼任・授業担当2名）が担当しており、毎年修士（定員19名）と博士（定員8名）の学生を受け入れて教育している。

コースは、先端表現情報学コース運営委員会（コース会議）のもとに、コース長、教務担当、入試担当がおかれ、他のコースと協力しながら運営されている。

このコースの特徴は、学環の基幹教員のみならず、関連部局（情報理工学系研究科、工学系研究科、総合文化研究科、生産技術研究所、情報基盤センターなど）からの多くの流動教員、兼任教員、さらには授業担当・併任・客員教員の協力によって運営されていることである。これによって、多様な背景と目的を持つ学生の教育が可能になっている。一方で関係教員の負担が課題となっている。また、多様な背景をもつ学生をより受け入れやすくするための、入試内容の改善にも取り組んできた。この2011年に大きく入試を変更し、ある程度の形にたどりついている。また、博士課程の入試についても、これまで冬のみであった試験時期を、夏と冬の2回に増やすなどの取り組みも進めた。

今後の課題としては、(1)幅広い部局からの教員の協力により成り立っているコース運営方法の改善、(2)学際性を維持しながら、専門を深めることのできるさらなる教育カリキュラムの検討、などが挙げられよう。

1.6.2.4 総合分析情報学コース

総合分析情報学コースは、平成18年4月に設立されたコースである。本コースでは、主にコンピュータサイエンスやコンピュータネットワークの基礎知識を基に、IoT（Internet of things）やM2M（Machine-to-Machine）技術を活用して大量のセンサー情報の取得、観測衛星からマクロなデジタル情報の取得、新世代型のコンピュータネットワークを利用した必要な場所や機器への通信、ビッグデータ技術による大量データの保存・解析、それらの解析結果を人間に伝えるための高度なHuman-Computer Interface、更に実社会においてそれらのデータを有効に活用する分析情報学の学際

的な専門教育を実施している。

分析情報学が有効に適用できる分野は多岐にわたり、医学、薬学、農学、水産学、環境学、資源学、社会学、考古学といった学問分野をはじめ、災害支援や遭難救助、社会安全保障、国土や社会基盤の管理保全といった国レベルの施策、更には情報セキュリティポリシーの策定やインターネット等のサイバー空間の管理といった分野へも及ぶ。こうした現実社会に深く関わる技術課題とともにそれを支える社会制度までにも興味を持ち、膨大な情報を活用して確固たる決断を下すことが可能な人材並びに、分析情報学及び計算機科学の研究者を育成することを目標としている。

1.6.2.5 アジア情報社会コース

アジア情報社会コース International Master's/Doctoral Degree Program: Information, Technology, and Society in Asia (ITASIA) は、大学院情報学環と東洋文化研究所の協力に基づき、2008年4月に発足した、大学院学際情報学府の5番目のコースである。留学生、日本人を問わず、アジアや世界の舞台上で専門的職業人として活躍することを志す学生を対象に、情報通信技術の発達に大きな影響を受けている現代アジアの社会と国際関係に対する分析力と洞察力を養う大学院教育を目指し、2007年度から準備が進められてきた。

本コースの最大の特徴は、すべての教育を英語で行い、学生に日本語能力を求めないことにある。入学時期は10月に一本化し、入学者の選抜も他コースのように筆記試験ではなく、TOEFL・GREのスコア、推薦書、研究計画書やこれまでの業績などを含む書類選考に基づいて行い、さらに学内外の支援により上位合格者に与える奨学金枠を用意することで、これまで英語圏に進学していたアジアの優秀な学生に対して、日本の東大で学ぶことを現実的な選択肢として提示した。

修士課程は、グローバル化するアジアにおける変容する政治的、経済的、社会的現実を把握できるよう、アジアの歴史と国際関係、メディア研究、社会調査方法論、情報技術という文理にまたがる4分野の必修基礎科目を軸に関連科目を提供するとともに、修士論文完成に向けた段階的の行事と個別指導を通じて学生を訓練し、それぞれの専門分野で適切な判断や提言を行える修了生を送り出すことを目指している。

博士課程は、アジア研究および情報学の研究における高水準の研究者・専門家の養成を目的としており、文理にわたる広範な知識とともに、政治学、経済学、メディア研究その他の社会科学における先端的な研究に必要な調査研究法と理論的分析能力を修得する機会を提供している。

発足して4年目に当たる2011年度は、修士課程の第2期生7名が9月27日(火)に卒業した。そのうち2名は博士課程に進学したものの、それ以外は日本国内での就職や、母国で就職したケースが多い。また、本コースの第一期生である Patrick Galbraith 君が、2012年3月に博士学位取得を認められ、博士号取得第一号となった。

2011年10月4日(火)には修士課程11名、博士課程5名が入学し、同日にコースガイダンスを実施した。これで修士課程には22名、博士課程には13名の学生が、それぞれ在籍していることになる。修士課程学生については、もう少し多くの合格者を出していたものの、奨学金を供与できなかった学生の中から、合格辞退者が出た。もっとも応募者は着実に増加しており、そのクオリティーも高くなって

きている。2010 年度から北京大学国際関係学院からの受入れ事業を開始したが、今回も北京大学からの応募学生はいなかった。

2011 年度入学時での全学生 35 名の国籍別構成は、以下の通りである（台湾は独立してカウント）。

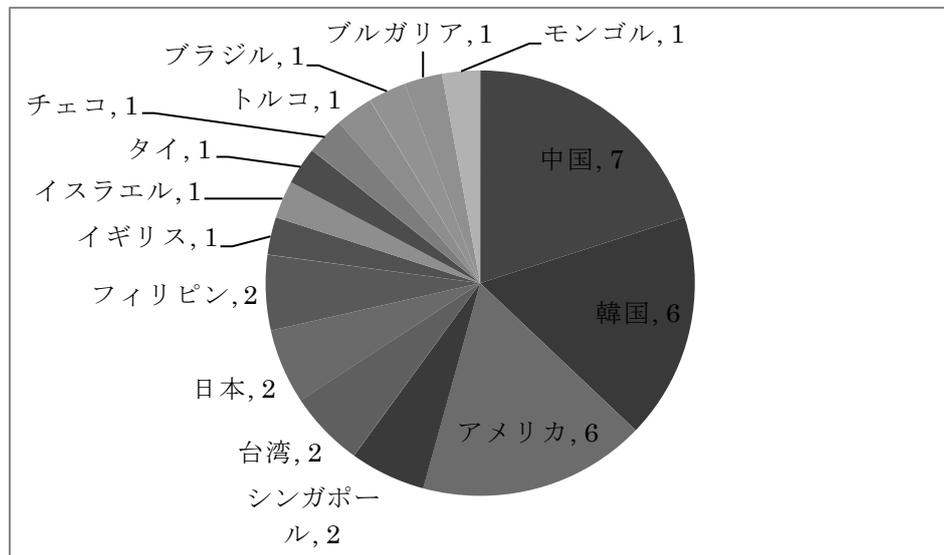


図 1-6-2-5-1 在籍学生の国籍別構成：2011 年 10 月（修士課程、博士後期課程含む）

2011 年 10 月 3 日（月）には修士 2 年生 11 名が修士構想発表会を実施、同時に博士コロキウムとして博士課程学生 8 名が研究報告を行った。

また、2012 年 2 月 13 日（月）と 14 日（火）、21 日（火）に、修士論文中間発表を実施した。日程が分散したのは、もっぱら教員（特に副指導教員）の側の事情による。

学生による自治組織（Student Body Government）が成立し、各種活動を活発化させていったことも特筆すべきだろう。特に、キャリアパネルの実施が定例化し、2010 年 11 月 19 日の第 1 回に次いで 2011 年 2012 年 1 月 19 日に 2 回目の会合が開かれた。学生主導で講師からテーマまで選定されたが、こうしたキャリアパネルの実施・運営は、今後のコースの発展を考える上でも大きな意義をもつものであった。

学務関係のカレンダーもほぼ固まる一方で、学務上の新しい試みも行った。昨年、「1 年での修了要件の確定」を行ったが、今年度は、半年卒業を延長し、「2.5 年での修了」を可能にする規定の修正も行った。他コースが 3 月卒業であることから、それに合わせた卒業も可能にしたのだが、現時点ではまだ「1.5 年修了ルール」は確定していない。

各教員主導のプロジェクトへの参加もさることながら、大航海プログラムを利用した個人での研究発表や、ソウル大学や中央研究院との共同ワークショップで研究発表を行うケースも増えてきた。2011 年度の大航海プログラム利用者は 3 名だったが、そのうち 2 名が本コースの学生で、学生の海外での研究活動が活発化している現状は、「タフな東大生」を育成するミッションに叶っており、心強い。

1.6.3 教務委員会

教務委員会は、大学院学際情報学府の教育運営の中核をなしている。大学院学際情報学府では、情報学環に属している基幹・流動の教員に加え、学内兼任教員、授業担当教員、客員及び非常勤講師などから成る教員スタッフが学生指導に当たっている。その数は、平成 23 年度現在で、基幹教員 30 (教授 21、准教授 9)、流動教員 21 (教授 13、准教授 8)、兼任・課程担当教員 32 (教授 22、准教授 9、講師 1)、兼任・授業担当教員 15 (教授 10、准教授 5)、客員教員 2 (教授 1、准教授 1)、非常勤講師 19、総計 119 名となっており、修士課程 1 学年約 90 名、博士課程 1 学年約 40 名、学府全体で約 370 人の大学院生を教育するにも十分な教師陣を備えている。教務委員会では、これらの多数の教員に協力をしていただきながら、カリキュラムの運営と改善、授業時間割の編成と講師の手配などの基本的な業務の他に、修士論文審査と博士論文審査制度の見直し、奨学金や総長賞候補者選定手続きの改定、研究生制度の再検討など、教育に関する制度設計業務も行っている。平成 23 年度は 22 年度に引き続き、新入生ガイダンスにおいて情報倫理だけでなく研究倫理についての指導も導入した。

1.6.4 情報学環戦略企画室

情報学環戦略企画室は、2004 年度に設置された、大学院情報学環の長期的な戦略を検討する将来計画委員会を発展させ、2009 年度から設置された。2011 年度は、概算要求案の作成、ポスト再配分問題の検討、情報学環規則の見直し・学則改正問題（「学環長・学府長の任期」の再選規定）、「専攻長」規定の改正）についても検討した。

1.6.5 入試・カリキュラム制度検討委員会

入試制度、カリキュラム制度にかかわる問題を、学環・学府の組織運営体制の根幹にまで立ち戻って再点検し、必要があれば改善・見直しを提案する検討委員会として 2008 年度に設置された。関連する常設委員会との協議やヒアリング、拡大検討会議をおこない、(1)組織運営上の一般的問題点、(2)教育体制上の一般的問題点、(3)研究体制上の一般的問題点について議論を重ねている。

「入試・カリキュラム制度検討委員会」

委員長 暦本純一

委員 佐倉統 中野公彦 林香里 水越伸 山内祐平

事務 学務係

今年度は、昨年度に策定した研究倫理、アカデミックマナー資料(Web サイト)

日本語：<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/graduate.php?id=1259>

英語：<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/en/graduate.php?id=1272>

を利用して、情報学環の新入生の導入教育として、研究倫理に関する講義を実施した（講義担当 佐倉、水越、暦本）。受講者アンケートによればこの講義は好評であり「研究倫理に関する基本的な心構えや

論文発表に関しての注意事項などがよく理解できた」といった感想が多く得られた。今後、この講義は導入教育としてカリキュラムに定着させていく予定である。

1.6.6 施設整備委員会

施設整備委員会の最大のミッションは現在の情報学環がおかれている最低必要面積が確保されていないという認識のもと、教育研究に必要な施設を確保することにある。これまで、護国寺にある東大病院分院跡地に学環プロジェクト共同ルーム、第二本部棟の3階のフロアの一部を確保した上に、更に、平成20年3月には福武ホールが竣工し、これらのスペースを有効に使って研究教育が実施できるようになった。そして平成22年には、大和ハウス工業様からの寄附による暫定アネックスの建て替えが決まった。平成23年度には施設整備委員会内に新棟建設に関するWGを構築し、学内調整や暫定アネックス及び第二本部棟からの研究室の移設作業等を行なった。夏には、暫定アネックスの取り壊しが行なわれ、平成26年3月竣工に向けた作業が進められている。施設整備委員会としては、当面はこの新棟の建設に関わる作業を実施するとともに、建設中に不足する教育研究環境の手当や整備などに注力しつつ、今後も教育・研究に必要な施設を確保できるように引き続き尽力する。

1.6.7 福武ホール管理運営委員会

福武ホール運営委員会の最大のミッションは、2008年3月に竣工した情報学環・福武ホールを有効活用し、教育研究活動を支援することである。2011年度、当該ホール地下2Fのラーニングシアターとラーニングスタジオを利用して開催されたシンポジウムやワークショップは計194件であり、情報学環内部のみならず外部に対しても、開かれた学びの施設となっている。特にラーニングスタジオ、1F会議室、1F学環コモンズは、情報学環教員・学生に対して、授業、ミーティング、授業外学習の場として活用されている。また、当該ホール1Fに併設されているUT Cafeにおいては、様々な領域で活躍している本学の教員をゲストとして招き、毎月開催するイベントである「UTalk (ユートーク)」を継続的に実施してきた。毎回の定員は15名であるが、情報学環の教員・学生のみならず、他大学の教員や学生、企業人など多様な参加者が多数集まり、定刻を過ぎても議論が続く盛況ぶりを見せている。情報学環・福武ホールが今後も学内外に開かれた学習空間となるよう、引き続き努力する。

表 1-6-7-1 2011年度UTalk実施テーマ一覧

実施月	タイトル	ゲスト所属	ゲスト氏名
2011・4	学問をかつこいいものに！ (震災の影響により2011年3月分を開催)	本部広報室	南崎梓
5	田んぼから見える自然と人	農学生命科学研究所	富田晋介
6	どう処理する？震災がれき	工学系研究科	北垣亮馬
7	アートの営み⇄研究の営み	教育学研究科	横地早和子
8	宇宙をひもとく「超ひも理論」	数物連携宇宙研究機構	杉本茂樹

9	何故、ウナギの卵は 2000 年間見つからなかったのか	大気海洋研究所	塚本勝巳
10	デスモスチルスの骨	医学系研究科	犬塚則久
11	科学技術とその使い方	新領域創成科学研究所	小貫元治
12	たかが“紙”、されど“紙” —紙が語る歴史と未来	農学生命科学研究所	江前敏晴
2012・1	生物が記録する科学 —ウミガメ、マンボウ、オオミズナギドリ	大気海洋研究所	佐藤克文
2	車載カメラで都市を視る	生産技術研究所	小野晋太郎
3	一同に会する楽しさと危うさ —公会堂の歴史を読む	教育学研究科	新藤浩伸

1.6.8 情報セキュリティ委員会

2006年3月に東京大学情報セキュリティ委員会が、東京大学保有情報資産のセキュリティを確保することを目的として「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの基本方針」とともに定めた「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの対策基準」は、部局情報セキュリティ責任者（部局長もしくは部局長を補佐する役職に相当する職務の者）を委員長とする部局情報セキュリティ委員会の設置を求めていた。これらの全学方針に基づいて2006年9月に各部局に依頼のあった情報セキュリティ調査への対応を機に、学環長を部局情報セキュリティ責任者・委員長として情報学環情報セキュリティ委員会が組織され、10月から事実上活動を開始して部局調査のとりまとめを行うとともに、11月の教授会で承認され正式に発足した。

2007年12月20日の部局への説明会とその後の意見聴取を経て、2008年4月9日、全学の最高情報セキュリティ責任者（CISO）名で、「東京大学情報セキュリティ・ポリシー実施手順の作成について（依頼）」が発出され、情報学環情報セキュリティ委員会は、情報学環情報ネットワーク委員長でもある原田委員を実務担当として、要請された部局規則等を整備する作業に当たることとなった。

その後、2010年には情報ネットワーク管理、情報セキュリティ管理、倫理審査を管轄する諸委員会の再編の可能性が課題として浮上してきており、山本隆一教授のもとで検討が開始され、具体的な諸委員会の改組について2011年の継続的に検討が行われた。

1.6.9 情報ネットワーク委員会

2000年の情報学環発足以来、所属教職員ならびに学際情報学府学生に対して、部局内LAN、学内LANであるUTnet、さらにはインターネットへの接続環境を提供し、また部局としての電子メール・サーバ、WWWサーバ等を運営することなどを中心とする、情報ネットワークに関わるサービス提供と管理が要請されてきた。しかし、これを専門に担当する委員会は当初は存在せず、部局ウェブページのコンテンツ管理等も含め、「HP・ネットワーク担当」の数名の助教授および助手が任に当たっていた。2002年6月になって、情報学環の広報及び情報システム等に関する事項の審議のため、「広報・情報委員会」が

設置された。さらに、2004年4月の社会情報研究所との組織合併に際して機能分化が図られ、部局ウェブページのコンテンツ管理に当たる「企画広報委員会ホームページ担当」とともに本委員会が設置された。本委員会は、2002年11月に設置された情報倫理審査会が行う調査・審査等や、学生・留学生委員会その他が管理する個別端末、さらに2006年に設置された情報セキュリティ委員会の担当範囲等をも除き、インフラ等、部局の情報ネットワークに関して残る部分を、関係委員会等と協力しつつ、全般的に担当してきた。

具体的には、2005年度以降、情報ネットワーク基盤の維持やセキュリティ事案への対応などの日常的管理実務を着実に行うとともに、情報ネットワーク運営管理体制の明確化・強化、基幹ネットワークの更新・整備、サーバ室の環境改善、基幹サーバの更新、諸規則の整備、iii-PKI(Public Key Infrastructure)に基づく安全な通信・情報共有のための基盤形成およびVPN・会議資料オンライン閲覧システムの構築・運用などを順次進めてきた。

内規に従い、基幹的情報ネットワーク管理の実務(セキュリティ事案対応にあたるCERT業務を含む)は、情報ネットワーク基幹実務担当者(2011年央時点で准教授2名、助教2名)が担ってきたが、2008年度末に情報セキュリティ委員会主導で全学の情報セキュリティ・ポリシーの実施手順に相当する諸内規等が成立したことなどを受け、日常業務の諸局面で情報セキュリティをより一層考慮した運用を進める必要が生じた。ただ、この点について委員会内部で十分意思統一ができない事態が生じ、日常業務にも支障が出たことから、情報関係諸委員会の整理・再編も視野に入れた、当委員会についての見直しが始まるとともに、情報セキュリティ委員会の下で情報ネットワーク基幹実務担当者が必要な作業を正当に行えるようにする措置がとられた。2011年度末には、CERT等の関係体制を(規則上部局情報セキュリティ委員長である)部局CISO(最高情報セキュリティ責任者)の下に再編することを求める正式な要請も全学CISOからなされた。多くのウェブその他のサーバが多様な主体の下で運用されているという状況の下で、CERT対応が必要な事案が情報ネットワーク基幹実務担当者の管理外において毎年発生していることも考慮しつつ、CISO・情報セキュリティ委員会の主流化という方向性に沿った新体制を確立することが必要となっている。

1.6.10 情報倫理審査会

情報倫理審査会は、東京大学の情報倫理委員会が定める情報倫理規則にもとづき、主査と委員3名において、情報倫理の遵守のための審査をおこなっている。2003年度の新情報学環の発足以来、構成員への連絡通知のためのMLをつうじてネットワーク利用者への注意喚起などをおこなってきた。2011年度は一件、著作権のある動画ファイルを違法にダウンロードした案件が生じた。調査の結果、故意か、あるいはPCを他人が操作したかは不明であったが、学生の所持する特定のPCでファイル交換ソフトを用いたダウンロードが行われたことがほぼ確定できた。当該学生が意図的にダウンロードしたかどうかは不明であったが、少なくとも学内で使用するPCの管理としては不適切であったため、注意処分が相当と学環長に報告し、注意処分が行われた。またその経過を東京大学の情報倫理委員会に報告した。同時に情報学環・学祭情報学府構成員へのMLをつうじた注意喚起をおこなった。

1.6.11 業績評価委員会

業績評価委員会は、情報学環・学府の研究・教育活動に対して行われる、学内外の様々な評価に関連する業務を遂行することが任務である。

1.6.12 ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会

ヒトを対象とした実験および調査研究に関する倫理審査委員会では、情報学環の教員や学生がこれらの実験・調査をおこなう際に、事前に倫理審査をおこなうものであり、平成 21 年度に設置された。情報学環は教員・学生とも研究領域が多様であるため、どのような倫理審査が適しているのか、まだ手探りの段階であるが、学祭組織での研究倫理のあり方を確立することを目標に活動している。平成 23 年度は 1 件の申請があり、倫理審査をおこなった。

1.6.13 企画広報委員会

本委員会は、情報学環・学際情報学府の活動や行事（大学院入試説明会、シンポジウム、ワークショップ、教員研修会など）を企画・運営すること、および両組織の情報を、ニューズレター、ホームページ、メール等で、学内外に案内するなどの広報活動を行うために設置されている。2011 年度は、東日本大震災をふまえ、学環・学府になにができるか、なにをすべきか、というテーマを一つのモチーフとし、「post311@gakkan」という共通テーマを設け、いくつかの研究会やシンポジウムを開催、あるいは共催した。その他、学環・学府内の多くのメーリングリストへの配信管理や、福武ホールや工学部 2 号館 9 階などの施設の利用管理なども行なった。

1.6.14 図書・出版委員会

2007 年度から図書委員会と出版編集委員会が統合されて、図書・出版委員会となった。

1. 図書室関係

情報学環図書室は、新聞研究所、社会情報研究所以来のマス・メディア、ジャーナリズム研究の資料に加えて、2004 年度の情報学環との統合以降は、文系・理系を問わず、情報の学際的な研究に関する資料を幅広く収集し、利用に供している。

2011 年度は「図書購入方針」（2007 年 6 月 図書出版委員会承認）にもとづいて、①見計らいによる推薦、②基幹教員による推薦、③授業用図書の推薦、の 3 方式で図書を購入した。見計らい図書選定については、選定リストの改善によって選定参加教員が文系・理系双方で大幅に増えて、各分野の基本図書が選定されるなど機能し始めている。

教務委員会の要請に基づき、図書・出版委員会で審議し、図書室内に「授業参考図書 (Reserved Books for Courses)」コーナーを新設した。同コーナーには、学際情報学府の授業を担当する教員の授業に必須の図書を配架し、学生の利用に供している。

表 1-6-14-1 2011 年度図書受入冊数

	購入	寄贈	計
和書	260	89	349
洋書	251	39	290
計	511	128	639

表 1-6-14-2 貸出冊数の年度推移

年度	2009	2010	2011
図書	5,765	5,290	5,085
雑誌	747	730	750
計	6,512	6,020	5,835

2. 出版関係

(4. 6 出版活動を参照されたい)

1. 6. 15 国際活動委員会

国際活動委員会は、情報学環への外国人研究員等の受け入れを審議し許可してきた。最近の受け入れ総数を見ると、平成 17 年度 13 名、平成 18 年度 15 名、平成 19 年度 15 名、平成 20 年度 14 名、平成 21 年度 27 名、平成 22 年度 36 名と着実に増加傾向にあったものの、平成 23 年度は 25 名と減少した。これは、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の影響だと考えられる。震災の影響が落ち着いた来年度以降は、情報学環の多様な研究背景を生かし、引き続きさまざまな教員を受け入れていくことが課題であろう。

また、一昨年度末に日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」が採択されたことを受けて、本年度も『『アジア・グローバルゼーション・スタディーズ』若手研究者育成プログラム』を推進した。同プログラムは、プログラム運営委員会の審査を受けた学生および若手研究者の国際活動を支援してきた。本年度はこのプログラムによって、短期派遣として、助教等 4 名、大学院生 17 名（国際協働プロジェクト 16 名、個人プロジェクト 5 名）、長期派遣者（若手 3 名）を国際的研究シーンに送り出した。要件を満たした派遣学生には単位も認定している。

1. 6. 16 産学連携委員会

産学連携委員会は、情報学環・学際情報学府における研究・教育活動を、産業界との連携を通して社会還元をすることを目的として設置されている。2011 年度の産学連携委員会の活動は、職務発明特許やそれに類する著作権等の知財に関する規定の策定に関して、東京大学産学連携委員会を通して参加をしている。また、東京大学産学連携協議会に参加し産業界との交流も行っている。学環・学府において、寄付講座・社会連携講座・受託研究などを通じて産業界と連携するケースが増加している。連携する上で生じた様々な課題に対応する。

1. 6. 17 知的財産室

知的財産室では、情報学環・学際情報学府の教職員が発明したり、著作物を作成した際の届け出を受け付ける。ここで、それらの発明や著作物が、職務上のものであるか、そうでないかを、届け出の内容から判断する。

1.6.18 利益相反アドバイザー

現在、東京大学の教職員は、東京大学が定める規定の範囲内で、様々な立場を学外において持つことが可能である。例えば、学会の役員や政府委員、他大学の非常勤講師、産学連携のための民間企業の兼職などがある。こうした立場に立って、様々な活動を行うと、東京大学の構成員としての利害と、学外の立場における利害がぶつかる場合がある。そのようなケースを利益相反と呼ぶが、利益相反アドバイザーは、情報学環内において、利益相反が心配されるときに相談を受け、本部事務とも連絡を取りながら、利益相反に関する対応をアドバイスする役割を担っている。今後、産学連携が進む上で、起こることが予想される利益相反の問題に対して適切に対応していきたい。

1.6.19 ハラスメント予防担当者

ハラスメント予防担当者は、アカデミック・ハラスメントあるいはセクシャル・ハラスメントなどの問題に対応するために設置され、引き続き活動を行っている。ハラスメントに関するパンフレット等を配布し、ハラスメント予防について教員および学生への周知を行っている。また、ハラスメントに関する相談に対して、ハラスメント相談所や男女共同参画室と連携を取り合いながら、具体的な相談を受けた場合に対応し、相談体制を整えている。

1.6.20 社会情報研究資料センター

社会情報研究資料センターは、新聞資料を中心に、各種メディア情報資料を研究のために収集、整理し、それらの資料を学内外の研究者に提供することを目的としている。現在、本センターの所蔵資料は製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。

本センターの沿革は、1964 年に当時の新聞研究所に開室された「プレスセンター」が 1967 年、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992 年 4 月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称された。その後、2004 年 4 月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合にともなって、「社会情報研究資料センター」と改称した。センター運営委員会は、この社会情報研究資料センターの運営にあたっており、2007 年度から 2011 年度にかけては新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」を推進した。

なお、本センターの現在の年間利用者数は 2,000 人を越えており、2011 度における月別利用者数は、下記の通りである。

表 1-6-20-1 社会情報研究資料センター月別利用者数 (2011 年度)

(開室日数)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学内	97	150	178	115	94	124	103	128	92	93	67	116	1,357
学外	105	60	80	69	94	64	67	62	60	42	31	57	791
不明	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7
合計	202	215	258	184	188	188	170	190	152	135	98	175	2,155

1.6.20.1 情報学環メディア・コンテンツ研究機構

情報学環メディア・コンテンツ研究機構は、2009年9月、情報学環におけるメディア・コンテンツ分野の研究開発や教育推進、産・官・学の連携の発展、国際的な人材養成の展開のために設置されたネットワーク型の機構である。組織としては、情報学環附属研究施設の社会情報研究資料センターの下に置かれている。

情報学環は、「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」(2004年度～2008年度)や「コンテンツ創造教育研究コア」(2005年度～2009年度)をはじめとして、メディア・コンテンツ分野での研究教育に取り組んできた。本機構は、それらのメディア・コンテンツ研究をアカデミックに発展・深化させ、教育を根付かせ、国際的な研究協働と人材育成を支援するための体制の確立を目指している。産・官・学を結ぶ「知のトライアングル」の構造化、研究・教育・国際連携のための戦略的組織である。

本機構は、研究教育の軸として、デジタル・テクノロジーを共通の基盤に、1) クリエーション、2) プロデュース、3) アーカイブ、4) アナリシス、5) リテラシーの5つの柱を立て、それを円環のプロセスで連結し組織化することをめざしている。

2011年度からは、特別経費「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」(2011年度～2015年度)の概算要求が認められ、「知識コンテンツ基盤拡充に向けた横断型教育モデルの国際展開」プログラムが開始された。これにもとづいて、2012年度からは大学院横断教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」が情報学環を世話部局として開始されることになった。

また2011年10月にフランスで行われた「東大フォーラム2011」では、「現代日本のメディア文化:カタストロフとメディア」のテーマで、リヨン市 Villa Gillet において国際シンポジウムを主催し、情報学環のメディア・コンテンツ研究を紹介し世界の研究者・実作者と活発な国際討議を行った。

1.6.21 総合防災情報研究センター運営委員会

総合防災情報研究センターは、情報学環附属のセンターであるが、地震研究所、生産技術研究所と連携して運営されており、その具体的仕組みとして、平成19年10月12日付け大学院情報学環教授会決定の「情報学環総合防災情報研究センター運営委員会規則」に基づき情報学環総合防災情報研究センター運営委員会がその任に当たる。本センター運営委員会は3部局長および各部局から選出された委員各1名の合計6名から構成される。運営委員会委員のうち、部局選出委員は、2011年4月1日現在で以下に示した3名である。

大学院情報学環	橋元良明教授
地震研究所	瀨瀬一起教授
生産技術研究所	古関潤一教授

2011年度は2回の運営委員会を開催した。いずれも、下記の通り、2012年度に時限を迎える基幹教授のポスト確保を目指した「平成25年度 教員採用可能数再配分」への申請に関する審議であった。

【総合防災情報研究センター運営委員会の記録】

第1回 総合防災情報研究センター運営委員会(持ち回り)

日時 2011年11月

議題 再配分申請に関する基本方針

第2回 総合防災情報研究センター運営委員会(持ち回り)

日時 2011年12月

議題 再配分申請書案について

1.6.22 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」(平成16～20年度)の研究成果を引き継ぎ、総合分析情報学コースの教育と連携して、ユビキタスコンピューティング、ネットワーキングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うことを目的として、平成21年4月1日に設立された。現在7名の東京大学情報学環の教員がユビキタス情報社会基盤研究センターの教員を兼務している。

1.6.23 現代韓国研究センター

現代韓国研究センターは、グローバル化する東アジア地域のなかでダイナミックに変化している朝鮮半島及び現代韓国の諸相を学際的に研究し、その成果を世界に向けて発信する国際的拠点を目指して2010年設立された。本センターは、東アジア地域の国際的協力と地域主義的連携を展望しつつ、日本と韓半島の相互協働とパートナーシップの多面的な展開の可能性を探求する必要性から、初年度の研究テーマを「東アジア共同体と日韓パートナーシップ」と設定し、情報学環内で現代韓国の政治や情報、文化を中心とする学術交流と共同研究のプログラムを策定・実施するとともに、東京大学内の現代韓半島研究に携わる諸組織・機関をネットワーク化し、研究者や大学院生の活発な相互連携を図り、韓国研究の水準の向上とその普及を目指している。さらに2011年には、駒場キャンパスに現代韓国研究センター駒場支所を開設し、駒場と本郷の現代韓国と関わる研究教育の連携を図っている。

1.6.24 駒場カリキュラム連携運営委員会

駒場カリキュラム連携運営委員会は、総合文化研究科・教養学部における、大学学部前期、学部後期の教育と情報学環・学際情報学府の教育に関する連携を協議し、連携に関わる授業科目を円滑に運営する目的で平成20年度から設置された。設置以来、教養学部前期課程で情報学環教員が担当する科目に関する調整と、同後期課程新学科への協力体制構築を主な案件として活動してきたが、前者についてはルーチンが確立し、後者も設立が決まって必要な手続きが完了したため、平成23年度は定例委員会は開催しなかった。

1.6.25 学生・留学生委員会

学生・留学生委員会では、大学院生全般を対象としたサービスに関して、学際情報学府に在籍する大学院生（留学生を含む）の福利厚生に関する以下の業務を担当してきた。

- (1) 大学院生の勉強・研究用スペースの整備、維持
- (2) 大学院生用備品の購入、管理
- (3) 大学院生と教職員スタッフとのコミュニケーションの維持
- (4) 大学院生向け情報の提供
- (5) 大学院生奨学金および研究支援経費関係

これらのうち、(1)については、本郷キャンパス情報学環本部棟4階に加えて、福武ホール学環コモンズにおいて勉強する環境を用意している。工学部2号館9階に大学院生室を設け、共用の机を配置して提供していたが、情報学環アネックスの立て替え工事に伴う学環スペースの減少に対応するため、やむなく当該院生室を閉鎖した。

(2)については適宜学生の希望を募り、必要と認められた場合には、共通予算で備品購入をおこなっている。

(3)については、年に2〜3回、院生向けの連絡会を開催し、情報の相互流通をはかるとともに、年度はじめの新入生歓迎会、留学生旅行（本年度は川越歴史地区散策）、年度末の謝恩会を開催している（新入生歓迎会は在校生が、謝恩会は当該年度の修了生が企画実施）。

(4)については、教務関係の情報は上記(3)のルートのほか、適宜掲示板、学務係メールニュースでの情報配信をおこなっている。また、大学院生向けの奨学金・就職・住宅などの情報を、学務係横のスペースで閲覧できるようにしている。

(5)については、各種奨学金の付与に関して希望者を募り、適宜順位付けをして申請している。

留学生を対象としたサービスの現状に関しては、留学生専用の窓口となる留学生支援室を通じて積極的な留学生支援を行っている。ITASIAコースも充実し、留学生が増加しており、今後も支援の強化を行う予定としている。

次に課題についてであるが、大学院生全般を対象としたサービスに関しては、学際情報学府全体として院生スペースが減少し、特に夜間の使用に関して院生から不満を聞いている。現状スペースの増加は対応が困難であるが、院生との対話を深め、今後は既存施設の改善等を通じて解決を図りたい。

留学生を対象としたサービスは留学生支援室が軌道に乗りかなり改善はされたが、留学生が飛躍的に増加しており、きめ細やかな留学生の要望の把握と必要な対策を迅速に実施することが求められている。また留学生と日本人学生との交流も不十分で、改善を目指したい。このためには学生・留学生委員会自体の強化も検討されるべきであろう。

1.6.26 教育部委員会

情報学環教育部は、情報やメディアやコミュニケーションについて学びたい人々のために、情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。修業年限2年。大学2年生以上であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験することができる。1949年（昭和24年）に新聞研

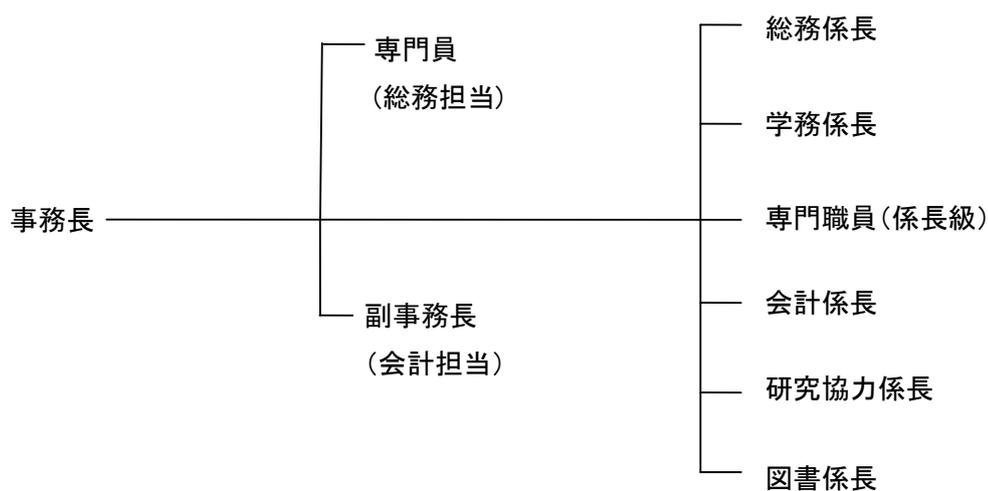
研究所教育部として設置され、2004年度（平成16年度）には社会情報研究所（元新聞研究所）との組織統合によって情報学環に引き継がれ、60年を越える歴史を有している。

2011年度にはここ数年にわたって継続的に検討をしてきた入試改革、カリキュラム改革などをおこなった。それに基づいて2012年度入試をおこなった。すなわち、入試問題や資格要件を再検討し、定員を一学年50名程度から30名程度としぼった。同時に授業内容を講義からゼミや制作、実験など実践的な活動をおこなうものまで多様化させ、より手厚い教育ができる体制を敷いた。

研究生たちは「ジャーナリズム、マスメディアをめぐる実践知」「情報コミュニケーション（ICT）技術、産業をめぐる実践知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる文系知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる理系知」をめぐる、きわめてユニークな教育を受けつつ、大変活発に、自主的な学習活動を展開している。

1.7 事務組織

図 1-7-1 事務部組織図（平成23(2011)年4月1日現在）



事務長	副事務長	専門員	専門職員	係長	主任	係員	計
1	1	1	1	5	4	1	14

2 教育活動

2.1 概況

学際情報学府の教育は、情報学についての文理相互浸透の学際的カリキュラムとネットワーク型の教員編成による教育指導体制に最大の特色がある。学際情報学という分野が、すでに体系化された学問の修得と継承というよりも、従来の学問体系の組み換えと新しい学問の創生というところに目標を据え、そのような教育を実施しようと考えているからである。

学際性の学問論とネットワーク型の組織を引き継ぎつつ、2004年4月の組織統合にあたって、3コース制が導入された。これは、修士課程学生定員70名という規模に適合するためと、ディシプリンの基礎をもった学際性への教育効果のためと、2つの理由から導入された構成であった。現在は、2006年4月に総合分析情報学コース、2008年4月（学生受入れは同年10月）にアジア情報社会コースが設立され、5コース（修士課程学生定員100名）となっている。

このコース制は設立当初からの学際性の目標と矛盾するものではない。むしろ高水準の学際性を備えた人材を育成するために必要な措置であった。入り口で基礎学力のある優秀な学生を採用するためにコースごとの入試を行い、出口で学力の品質管理をするためにコースごとの修了試験を行う。しかし、入試における面接でも、修了試験の口述試験でも、学際的な教員構成での審査体勢がとられているし、また入学後の学生はミニマムな選択必修科目のほかは全コースに開かれている多数の自由選択科目群から自分の研究計画と関心に合った科目を選んで、自分の学習メニューを組み上げることが可能となっている。

コースはあくまで学府学生が帰属するより小さな枠組みであり、研究科の専攻のようにそこに決して教員が帰属しているわけではない。教員はあくまで学環に帰属しているのであって、コースとの関わりはどのコースの学生を主として指導するかという点である。コース制は、学生が自らの学問的なアイデンティティを構築しつつ、同時に学際性へと越境していくための、バランスのよい舞台を提供しようとしているのである。

2.2 教育カリキュラム

学際情報学府の授業科目群は、(1) コース共通必修科目、(2) コース別選択必修科目、(3) コース共通選択科目、(4) コース横断科目の3つの科目群から構成されている。

第1のコース共通必修科目は、それぞれの学生の指導教員による個別研究指導のほか、学際情報学府の大学院生が、専門分野の視点や立場の違いを越えて、今日の情報学の様々なアプローチについての基礎知識を身につけてもらう「学際情報学概論」が主軸である。この科目には、情報学環のほぼすべての基幹・流動教員が関与し、学生はe-learningシステムでの受講も可能な仕組みになっている。同時に、学際情報学府院生には、修士1年ではWeb発表会における修士1年間の研究の成果発表が、修士2年では修士論文中間発表会での発表が、また博士課程では毎年の博士課程コロキウムでの発表が、大学院での必修カリキュラムの一部として課せられている。

第2のコース別選択必修科目は、修士課程の大学院カリキュラムとして設けられている科目群で、そ

それぞれのコースにおいて専門的な研究能力のトレーニングをしていくためのものである。この科目群は、「基礎」の4単位と「研究法」の2単位の6単位から成り、「基礎」は主として、各専門分野の基礎的方法論についてのトレーニング、「研究法」は、そのようにして習得した専門的方法論を生かした実習（調査、制作、実験、政策立案など）が分野に応じたやり方で実施されている。それぞれのコースの院生にとって、一般的に最もエネルギーを割かなくてはならない科目群であり、コースごとの特徴が最も明瞭に示されるカリキュラム編成になっている。

第3の共通選択科目群と第4のコース横断科目は、学府を担当しているそれぞれの教員が開講する大学院授業科目であり、形式としては一般的な大学院の授業科目と変わらない。但し、学際情報学府の共通選択科目の大きな特徴は、いずれも「情報」や「メディア」を中心的な対象としながらも、情報科学からジャーナリズム論までの幅広い専門家が集まっていることによる横断性にある。すなわち、ここでの共通選択科目には、自己組織情報、アジア情報政策、異文化コミュニケーション、学習環境デザイン、情報行動、映像文化、メディア表現、情報記号、情報倫理、自然言語処理、情報法、ジャーナリズム、ヒューマンインタフェース、数理言語、ユビキタスコンピューティング、知覚情報、ネットワーク経済、歴史情報、シミュレーションシステム、情報造形、視覚情報処理、医療福祉情報、身体情報認知、情報データベースなど、きわめて多様な分野が含まれている。これらの科目は、学際情報学府のカリキュラム編成においては、①情報・言語・行動系科目、②社会・制度系科目、③メディア・文化系科目、④表現・リテラシー系科目、⑤数理・システム系科目の5つの領域に分けられている。コース横断科目は、コースの専門性を越境して、より広く学際性を身に付けるための科目である。

2.3 カリキュラム支援体制

大学院学際情報学府では、上記のカリキュラムを大学院教育の基軸に据えながら、以下のような教育上の支援体制を組織し、運営している。

2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置

学際情報学府では、指導教員の個別研究指導に加え、副指導教員による側面からの研究指導という複眼的な指導体制を整えている。情報に関する研究は、専門的であると同時に学際的な性格をもつため、既存の単一の学問分野の知識だけでは適切に対応できないことが多い。学際情報学府では、既存分野の専門的な知識や方法を十分に身につけつつ、それらを複眼的に結びつけて新しい情報研究に挑む若手研究者を効果的に育てるために、従来の指導教員による指導だけでなく、副指導教員を加えた指導体制を採用している。この体制は、これまでもそれぞれの院生の視野を広くし、より柔軟な学問的展開を可能にする点で、有益な効果を挙げてきた。

2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成

学際情報学府の大学院生は、修士1年及び博士2年の段階で、自分の研究計画書を作成して学府に提出する。このうち修士1年の段階での研究計画書は、修士論文に向けての対象設定、おおよその研究視角を示す概要的なものであり、提出された計画書は、修士1年生全員がお互いの研究テーマについての

認識を共有するための冊子にまとめられる。博士 2 年での研究計画書は、その学生が博士論文を執筆していくための第一歩となる。

2.3.3 修士課程研究構想発表会

研究構想発表は、学際情報学府修士 2 年生が新年度の最初におこなう教育行事である。修士 1 年生の間に進めてきた学習や研究の成果をまとめ、約 1 年後に提出する修士論文の構想や進捗状況について発表する。この発表は、学際情報学府に所属する教員と学生に対して行われるもので、各自が研究の内容・計画をポスター発表（バザール）形式で行う。1 日を数セッションに分けて行われ、教員や在学生の他、発表者も自分の発表のないセッションでは聞き役に回り、コメントシートを提出する。

発表者は、このような中間総括と相互評価のプロセスを経ることで、修士論文に向けた残り 1 年間の研究をより一層充実させるための手がかりを得ることとなる。また、学際情報学府の新生もオンライン発表を閲覧し、オフライン発表会の聞き役となることで、学府における研究の内容や修士論文に向けたプロセスについて具体的なイメージをつかむことができる。

2.3.4 修士論文中間発表会

学際情報学府では、多くの修士 2 年の学生が修士論文執筆に本格的に取り組む 7 月上旬に修士論文中間発表会を開催している。この発表会では、その年度に修士論文を提出するすべての学生が自分の研究の進捗状況を発表しなければならないことになっており、指導教員や福指導教員だけでなく、関連分野の教員や他の学府の大学院生が発表会に参加する。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90 名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、中間発表会全体を組織する。この発表会には、学府の院生は誰でも参加することができるので、修士 1 年の院生たちにとっては、先輩たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.5 博士課程コロキウム

学際情報学府では、博士課程に在籍している学生を対象に、毎年 11 月上旬に博士課程コロキウムを開催している。このコロキウムでは、博士課程 3 年までに在籍しているすべての学生が、博士論文執筆に向けての研究の進捗状況を発表しなければならない。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90 名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、博士課程コロキウム全体を組織する。このコロキウムには、学府の院生は誰でも参加することができるので、博士課程の学生たちにとっては、他の学生たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.6 E-learning 授業 (iii online)

2.3.6.1 iii online の目標

iii online は 2002 年 4 月に始まった学際情報学府の e ラーニングサイトである。iii online は、学部・研究科レベルでは東京大学初の e ラーニングサービスである。

e ラーニングを開始した最大の理由が、社会人大学院生の学習機会の確保である。

学際情報学府は独立大学院であるために、多種多様な学生が集まっている。2003 年度までは、実践

情報学コースという社会人学生をターゲットとしたコースが設けられており（現在は、社会人特別選抜枠に変更）、マスコミ関係者やシステムエンジニアなど、学生の 2 割程度が社会人という状況であった。学際情報学府に入学する社会人は、銀行や製造業につとめている一般的な社会人に比べ、比較的時間に自由がきく代わりに、忙しくなる時期とそうでない時期が交互にやってくる。たとえば、広告代理店に勤めている場合、コマーシャルの撮影などで 1 ヶ月間は仕事が超過密スケジュールで入るが、企画段階ではそれほど時間に制約がないという状態である。

このような状況では、講義に毎回出席することは難しくなる。iii online が始まる前は、出席しなければ自動的に欠席になり、全く講義の情報が手に入らない状態であった。2 回、3 回と欠席が続けば、当然講義の理解に影響が現れてくるので、教育水準の確保上、大きな問題となっていた。

通常社会人向けの大学院では授業を夜間に開講することによって、この問題を解決している。しかし、フルタイムの学生は昼間に授業が開講されることを望んでおり、学際情報学府で授業を夜間に持つてくることは、非現実的であった。

2.3.6.2 iii online の概要

iii online はこのような問題を解決するために、ビデオのストリーミングと掲示板を組み合わせたサービスを提供している。ビデオのアイコンを押すと、およそ 15 分×6 つにカットされた授業の映像を見ることができる。ストリーミングは FlashVideo 形式 500kbps エンコーディングで行っている。FlashVideo 形式を選んだのは、利用者として Windows ユーザー、Mac ユーザー、Linux ユーザーが混在しているからであり、エンコーディングレートは、ブロードバンドで十分スピードがでない場合でも対応できるという観点から設定してある。

15 分にカットしたのは、90 分の映像を一気に見るのは大変だからである。利用者アンケートからも、朝 30 分、会社の休憩時間に 30 分、夜帰ってから 30 分見ると行ったような分割視聴が日常的に行われていることが明らかになっている。

ビデオは、パワーポイント連動型ではなく、カメラで撮影したものをそのまま流している。理由はパワーポイントを使う授業スタイルを教員に押しつけるのは良くないと判断したからである。OHP を使う人もいれば、ホワイトボードの方がインタラクティブにできるという教員もいる。そういう多様な授業スタイルを認めなければ、e ラーニングを導入すると、かえって授業がやりにくくなるということになりかねない。日常的に e ラーニングを展開する場合には、「e ラーニングだから」といった制約条件を減らすことが重要である。

データのアイコンを押すと、授業の資料を見ることができる。資料はすべて PDF ファイル形式にしてある。これも前述の通りユーザー側が多様な環境にいるためである。

アンケート調査では、実際に利用するときには、この PDF ファイルを印刷し、それをノートとして使いながら授業を聞いている。



図 2-3-6-2-1 : iii online の画面

表 2-3-6-2-1 : iii online で閲覧可能な授業の一覧

配信年	講義名	授業者
2002	自然言語処理論	辻井潤一
	コミュニケーション・システム	原島博
	メディア表現論	水越伸
	情報政策論	浜田純一
	学際情報学概論	オムニバス
2003	情報リテラシー論	山内祐平
	情報記号論	石田英敬
	情報進化論	佐倉統
	シミュレーション・システム	荒川忠一
2004	学際情報学概論	オムニバス
	文化・人間情報学基礎	水越伸・山内祐平
	医療福祉情報学	山本隆一
	社会情報システム	松浦幹太
2005	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 II	田中秀幸
	学際理数情報学概論 VI	鈴木高宏
2006	学際情報学概論	オムニバス

	身体行動情報論	深代千之
	能動情報論	奈良高明
2007	学際情報学概論	オムニバス
	学習環境デザイン論	山内祐平
	歴史情報論	本郷和人
2008	学際情報学概論	オムニバス
	学際理数情報学特論 IX	大島まり
	文化・人間情報学特論 V	前田幸男
2009	学際情報学概論	オムニバス
	組織学習システム論 II	中原淳
	科学技術コミュニケーション論	鈴木高宏・大島まり 佐倉統 ・丹羽美之
2010	学際情報学概論	オムニバス
	総合分析情報学特論 XI	堀 里子
	ネットワーク経済論 (2010)	田中 秀幸
2011	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 (2011)	田中 秀幸
	歴史情報論	本郷 和人

2.4 学際情報学府への進学

2000年度に設立されて以来、2003年度まで、大学院学際情報学府は毎年、修士課程約50人、博士課程約20人の大学院生を受け入れてきた。2004年度の社会情報研究所との合併により、それまで人文社会系研究科社会情報学専門分野の定員であった修士課程14人、博士課程7人が統合され、2006年度からは総合分析情報学コース、2008年度からはアジア情報社会コースが新設されたため、学際情報学府の入学定員はさらに拡大し、現在では修士課程定員が100人、博士課程定員が44人となっている（詳しくは巻末資料参照）。

その結果、学際情報学府に在籍する大学院生数は、2000年度の修士52人（修士）から出発して、2011年度が371人（修士198人、博士173人）へと、10年強で7倍以上に増加した。これは学際情報学府の教育研究が順調に発展していることを象徴しているが、反面、短期間に急増したため、サポートスタッフの不足、教員と事務員の業務負担増加などの問題点も生じている。大学院生数は、教育学研究科、経済学研究科、薬学系研究科などとほぼ同じ規模となっている。

また、本学際情報学府の大学院生の構成についてみると、(1) 東京大学以外の他大学出身者の割合が高いこと、(2) 実践的キャリアを持つ人々や第一線で活動している社会人の割合が高いこと、(3) 外国人学生の割合が相対的に高いこと、(4) 入学者の男女比も、全体の30～50%程度が女性とほぼ均衡がとれていることなど、きわめてハイブリッドな特徴がみられる。これらの特徴は、本学府が学生の構成という面からみても東京大学のなかできわめて新しい可能性をもった大学院組織であることを示して

いる。

本学府への志願者についてみると、社会情報研究所との合併後の最近 5 年間では、2006 年度入学試験が志願者 225 人（受け入れ予定人員 90 人、2.5 倍）、07 年度入学試験が 148 人（同 90 人、1.64 倍）、08 年度入学試験が 230 人（同 105 人、2.19 倍）、09 年度入学試験が 238 人（同 105 人、2.27 倍）、10 年度入学試験が 259 人（入学定員 100 人、2.59 倍）、11 年度入学試験が 264 人（同 100 人、2.64 倍）の志願者が応募している。しかも合併後では、本大学院への志願者が増加傾向にあり、今日、大学院重点化のなかで大学院生数の枠が急速に広がったために大学院入試への競争倍率が低下してきている全般的な傾向からすれば、顕著に異なる人気の高さを保っている。

2.5 修士論文及び博士論文の執筆

学際情報学府の修了者数は、修士修了者では、2001 年度が 38 人、02 年度が 40 人、03 年度が 51 人、04 年度が 57 人、05 年度が 62 人、06 年度が 59 人、07 年度が 61 人、08 年度が 71 人、09 年度 82 人と徐々に増え、10 年度は 84 人、11 年度は 83 人の修士修了者を輩出している。

また、博士課程の修了者についてみるならば、学際情報学府では、設立されたのが 2000 年度なので、最初の入学者が博士 3 年に達する 2004 年度に初めて 4 人の博士号取得者を輩出することになった。05 年度は 1 名だったが、06 年度は 7 人、07 年度は 3 人（他に論文博士 1 人）、08 年度は 13 人（他に論文博士 1 人）、09 年度は 8 人、10 年度は 3 人、11 年度は 11 人の博士号取得者を輩出するに至っている。

大学院学際情報学府では、新しい学生が修士課程に入学した段階から、入学ガイダンスでの丁寧な指導、M2 の先輩たちによる研究構想発表会への参加、主指導・副指導教員体制、修士課程研究計画書の提出、基礎演習および研究法授業、研究構想発表会の実施、修士論文中間発表会というように、修士論文完成に至る個々の段階で学生の研究をサポートしていく体制が完備している。また、博士課程進学後も、博士課程研究計画書や博士課程コロキウムの毎年の実施、主指導・副指導による指導というように修士論文、博士論文の執筆をサポートする体制を整えている。このような体制のなかで、これまで多様な分野の専門的な修士論文、博士論文が書かれてきており、その一例は、別表のようなりストに示される。

（別表）

2011 年度修士論文タイトル

- ・裁判員制度と報道－市民がかかわる公正な裁判の実現
- ・情報化時代における文学に関する物語論的・情報社会論的考察
- ・構造化理論から見る近代的専門知の受容過程－中国で社会学の成立における「社会調査」をめぐる－
- ・釜山に映る日本の影：釜山の中心地の展開に関する地理・歴史研究
- ・外交政策とメディア－自衛隊イラク派遣を中心に
- ・アドホック組織による地域防災力向上についての研究－重要伝統的建造物群保存地区を事例として－

- ・ 新聞社とキャンペーン報道－中国新聞社 暴走族追放キャンペーンを事例に－
- ・ SNS におけるブリッジの機能と役割の考察
- ・ 日本と台湾における音楽配信サービスの比較と展望
- ・ ソーシャルビジネスによる国際協力活動－共通価値の創出における社会的価値および経済的価値の考察－
- ・ 広告媒体としてのテレビ番組の新しい形態に関する研究～テレビ局と企業のタイアップスタイルの変化を中心に
- ・ テレビ報道の「構成要素間の関連づけ」機能に関する内容分析－「詳細性」と「論争性」のフレームに焦点を当てて－
- ・ 日本の映画館における女性割引の歴史変遷
- ・ 総合雑誌から見る戦後平和思想の変遷
- ・ 新興国における開発アプローチの考察－マレーシアのテレセンターの事例を中心として－
- ・ 広告と企業価値に関する定量的実証分析
- ・ ネット利用が子どものコミュニケーション行動、心理傾向に及ぼす影響－中学生へのパネル調査によるインターネット・パラドクスの再検証－
- ・ 地域包括ケアシステムの構築に向けた県型保健所の新たな役割の可能性－鹿児島県始良保健所の取り組みの実践と意義－
- ・ 情報の多階層化についての制度的考察
- ・ 日本のテレビ広告にみる家庭と性別－自動車 CM を中心に－
- ・ 地域における芸術創造の実践に関する一考察
- ・ 商業空間を読む倉俣史朗の仕事を通して
- ・ ジェスチャー、マルチタッチ・インターフェイスの機能と作用－動作と行動の模倣を越えるデザイン－
- ・ メディア融合状況下におけるリテラシーの効用と諸問題～ユーザーセントリックな視座からの情報学的考察～
- ・ インドにおけるヒンドゥー・ムスリム間暴動の構造分析
- ・ Evaluation of a Web-based Reading Support Interface for JSL students from non-kanji backgrounds (和訳) 日本語の文章読解を支援するウェブインターフェースの評価－非漢字圏日本語学習者のために－
- ・ 研究・教育資源の蓄積、活用に特化したメタデータスキーマモデルの提案
- ・ 政策革新としての「脳科学」の制度化－理化学研究所脳科学総合研究センターを中心に
- ・ アートプロジェクトの研究－現代社会における文化実践の諸相－
- ・ 科学体験デジタルゲームの開発研究
- ・ AR による公共的コミュニケーションの可能性－広島における地域コミュニティ構築を事例として－
- ・ 被買収企業における従業員の態度変容と規定要因に関する研究～クリティカル・インジデントに着

目して～

- ・ 社会に流通する科学言説に対する科学者のふるまいの分析
- ・ 欧州研究評議会（ERC）の形成過程の分析
- ・ 1950年代アメリカのヴィジョンローバート・フランクとジャック・ケルアックのまなざしー
- ・ デジタル英語教材利用時における親子間での学業的援助要請に関する研究
- ・ 風力発電導入問題を題材としたコミュニケーションツール“HAKOJIMA”の研究開発
- ・ イメージの展開に着目した児童の造形活動プロセスの検討
- ・ F.Varela の理論的変遷とエナクティブアプローチの可能性について
- ・ ジャニーズ・ファン活動による中国「80後」女性のアイデンティティ構築に関する社会学的考察
- ・ 地域コミュニティとインターネットの双空間における在日中国留学生ネットワークの内向性研究ー東京都太田記念館と「新浪微博」を例に
- ・ リアルタイムメディアによるライブ体験の共有に関する研究ーTwitter で“つながる”お笑いライブオーディエンスを対象として
- ・ NHK クリエイティブライブラリーユーザーの映像制作活動と付随する学習に関する調査研究
- ・ 心理的協調に着目したインタラクティブ演奏デバイスの開発研究
- ・ 在日ブラジル人児童を対象としたデジタル日本語教材の開発
- ・ アニメーションの神話的時間ー宮崎アニメにおける否定の原理と境界性ー
- ・ 戦後日本とアニメーション～「社会的」なるアニメの位相
- ・ 音で記憶する戦争～1990年代以降のラジオドキュメンタリーから
- ・ 人間の視野特性を考慮した学習に基づく視覚的顕著性モデル
- ・ 粒子ベースシミュレーションを用いた沸騰のアニメーション生成
- ・ 医用画像からの3次元形状モデリングと形状パラメータ化に関する研究
- ・ リール式伸縮アクチュエータの提案と3次元形状表現システムへの応用
- ・ 空間ライフログに関する研究
- ・ ソーシャルメディアを用いた風邪薬販売量の予測に関する研究
- ・ HPSG Passing of Croatian Enclitics (和訳) 主辞駆動句構造文法によつてのクロアチア語の前接語の構文解析
- ・ モバイル機器のための硬さ制御可能な変形入力インタフェース
- ・ マルチスケールシミュレーションによる微細な流体運動の表現
- ・ 空間の記録と重畳による展示支援の研究
- ・ 人による手助けも含む能動的触覚刺激探索を用いた赤ちゃんロボットの運動獲得
- ・ MR Sound Systemー実空間形状を考慮した複合現実感システムの為の実時間音場生成系
- ・ 筋骨格2脚ロボットによるダイナミック運動間遷移の実現
- ・ 運動視差を伴う直感的なマルチタッチインタラクションに関する研究
- ・ 操作方法の違いが記憶及び身体感覚に与える影響
- ・ 可視光通信プロジェクタの通信路における結像光学系の研究ー位置情報を埋め込んだ映像の空中像

提示とプロジェクタ投影ー

- ・低次特徴量に基づく食事画像からのカロリー推定
- ・包摂アーキテクチャを用いた群ロボット制御におけるエージェント間の調停に関する研究
- ・スキルの高いドライバの運転特徴抽出に関する研究
- ・ウェアラブルセンサによる運動姿勢改善に関する研究
- ・省エネルギーのための環境利用条件記述手法の設計とその実現
- ・立体顔ディスプレイを用いたテレプレゼンスシステムに関する研究
- ・ビデオ共有サービスの重複トラフィック解析と削減のための In-Network キャッシュの検討
- ・ソーシャルメディアを活用した障害者の移動支援に関する研究
- ・ペタスケール大規模シミュレーションに向けた地震波動場の自動可視化
- ・居住者に対するエネルギー消費状況の可視化と省エネルギー行動提示の有効性検証～10戸の長期詳細エネルギー消費データの分析～
- ・ANALYSIS AND CLASSIFICATION OF PROTEIN LIGAND BINDING SITES USING OCTREE (和訳) Octree を用いたタンパク質ーリガンド結合部位の解析と比較
- ・モバイル状況での Augmented Reality インターフェースに関する研究
- ・観光時の歩行者ナビゲーションにおける目的地への案内情報提示方法に関する研究
- ・編集距離に基づくインネットワーク・スパム検知手法
- ・高次コンテキストを利用した携帯端末の低消費電力化手法
- ・飛翔型撮影システムによる自由視点撮像に関する研究
- ・CloudRack: An Infrastructure for Virtual Network Live Migration (和訳) CloudRack: 仮想ネットワークトポロジーのライブマイグレーション基盤
- ・自由視点テレプレゼンスシステムに関する研究
- ・複合型マップを用いたマップマッチング測位手法

2.6 学際情報学府からの就職・進学動向

修士課程修了者のうち、博士課程進学者は全修了者の 35～40%程度である。したがって、修士課程を修了した者の 6 割以上が就職することになる。一般に、理系では修士修了後に就職をするケースが多く、文系では博士課程に進学するケースが多いが、文理相互浸透の大学院組織である学際情報学府は、ちょうどその中間的な割合を示しているといえる。修士修了者の就職先は別表の通りであり（別表 修士修了者の進路状況）、シンクタンク、マスコミ、情報通信およびコンピュータ関連企業、出版社など知識集約型の企業への就職が多数を占めているところが特徴的である。

2.7 学際情報学府以外の教育活動

大学院情報学環では、大学院教育組織である学際情報学府と密接に連携しながら、教育部、ベネッセ先端教育技術学講座、「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座でも教育活動を行っている。

2.7.1 教育部

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、2年間にわたって情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。講義は、各自が所属する学部や大学院の授業などと両立できるように、おおむね夕刻（14：45分以降）から夜間にかけて開講されている。学部、研究科という「タテ糸」で成り立つ東京大学のなかに、情報というキーワードをめぐる教育研究を「ヨコ糸」で縫い合わせてできた情報学環。教育部は、その情報学環という斬新な組織の特性を活かした、魅力的な教育研究活動の場となっている。

情報学環教育部では、毎年、前年度後期に入学試験をおこない、一学年約50名の教育部研究生を選抜している。大学2年生以上（4月以降大学2年生になる見込みの人を含む）であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験をすることができる。

情報学環教育部の歴史は古く、その起源は、1929年（昭和4年）の文学部新聞研究室にまでさかのぼる。小さな組織だった新聞研究室は、戦後まもない1949年（昭和24年）に、文系の学際的研究組織である新聞研究所へと発展した。新聞研究所は、その名のとおり、新聞をはじめとするマスメディアが巻き起こす社会情報現象やコミュニケーション変容を体系的に研究することを目的として設立されたが、同時に、マスメディアで働く記者などの実務家を育成することも目的としていた。

1992年（平成4年）、新聞研究所は社会情報研究所として改組され、マスメディアに限定しない、情報に関わるあらゆる社会現象の研究を総合的に進めていくことになった。2004年（平成16年）には、大学院情報学環と合併し、今日まで情報学の伝統を脈々と引き継ぎながら、文理融合の最先端の研究を推進し、また教育活動にも力を注いでいる。

参考として平成23年度開講科目を以下に示す。

（夏学期）

	4限 14：45～16：15	5限 16：30～18:00	6限 18:15～19：45
月			総合分析情報学基礎 D （安心・安全な社会の実現に向けて）
火	社会情報学基礎 I X （映像ジャーナリズム実習）		
水			実践メディア産業論 II （広告）
木	実践情報社論 III （今、日本の映画を探る）	文化・人間情報学基礎 VI （文京メディア・ビオトープ）	先端表現情学基礎 E （先進モビリティ都市設計 演習～安全・安心・ 快適な先進社会基盤構築 のために～）
金	実践情報社会論 I （デジタル時代の著作権と オープン化）		実践メディア産業論 VIII （新聞）

(冬学期)

	4限 14:45~16:15	5限 16:30~18:00	6限 18:15~19:45
月	社会情報学基礎Ⅷ (インターネットと政治)		先端表現情報学基礎D (先進モビリティ論・移動 はこれから何を変えるの か?)
火	文化・人間情報学基礎Ⅶ		文化・人間情報学基礎Ⅷ (アートの作り方)
水			実践メディア産業論Ⅰ (放送)
木	社会情報学基礎Ⅶ (情報行動論的アプローチ の多様性)		
金			実践メディア産業論Ⅸ (出版)

なお、2007年から2011年までの教育部志願者数、受験者数、合格者数についてはⅡ.資料を参照していただきたい。

2.7.2 学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」

学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」は、東京大学横断型教育プログラムのひとつである。東京大学学部横断型教育プログラムは、狭い専門知識だけでなく、新たな学問的課題に果敢に挑戦し、幅広い分野を横断していく柔軟な思考力を備えた「知的にタフな東大生」を育成するために開設された学際的・分野融合的な教育プログラムである。学部や大学院の枠組みを超えて実施されている。現在開講されている横断型教育プログラムのなかでも、本教育プログラム「メディアコンテンツ」は、メディア上に流通するコンテンツの創造に関わる基礎教育と人材養成を目的として、最新のネットワークビジネスの動向などを踏まえた教育を行っている。「技術・創造」「文化・社会」「人間・心理」「総合」の分野からメディアコンテンツに関連する基礎科目を開講している。本教育プログラムは、東京大学の学部後期課程(3~4年生)を履修対象としているが、大学院生の履修も可能で必修科目や選択科目の区別はなく、各自の目的にあわせて履修できる。開講されている科目の中から、合計12単位以上を修得した学生に「プログラム修了証」が交付される。

2.7.3 ベネッセ先端教育技術学講座(寄付講座)

ベネッセ先端教育技術学講座では、教育活動として以下の2点に力を入れている。

- ・学際情報学府の教育活動との有機的連携

ベネッセ先端教育技術学講座（BEAT）で行われている研究プロジェクトおよび社会還元的教育活動（公開講座、メールマガジン発行、Web サイト運用）に対する学際情報学府の大学院生の参加を奨励し、研究プロジェクトおよび社会還元的教育活動がそのままプロジェクト学習の基盤になるような工夫をしている。その中で特に研究プロジェクトに関心を持った学生については、研究プロジェクトの中で修士研究を行うなどの配慮をすることにより、先端教育技術に関する教育活動の拠点になっている。

- ・公開講座による社会還元的教育活動

一般社会に対して、先端教育技術に関する知見やノウハウの教育活動を行うため、3ヶ月に1回のペースで公開研究会 BEAT セミナーを開催している。昨年度開催された公開研究会は、以下の通りである。

第1回：ソーシャルメディアによって変わる学びのかたち（2011年6月4日）

第2回：楽しさと学びを融合するシナリオデザイン（2011年9月3日）

第3回：デジタル読解力を育てる教育（2011年12月17日）

第4回：ソーシャルラーニングとこれからの人財育成（2012年3月24日）

2011年度はのべ700名を超える参加者が公開研究会に参加している。この中には、学生・大学教員に加え、教材開発を行っている社会人も数多く含まれており、デジタル時代の学習コンテンツ・システムに関する最新の知見を伝える機能を果たしている。

2.7.4 「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座

「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座は平成21年4月1日に開設され、現在、首都高速道路株式会社、東京地下鉄株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、株式会社日立製作所と東京大学大学院学際情報学府総合分析情報学コースを中核として運営されている。また、ユビキタス情報社会基盤研究センターも協力している。本講座は、情報技術を活用した施設管理等に関するマネジメントを高度化するとともに、新たな情報基盤を活用した新たなビジネスを創出し、インフラ・イノベーションの実現を目指す。また、こうした目的を達成するため、シーズとニーズ、技術と運用、理論と実践といった様々な知識や経験を結合し、新しい価値を生み出す実践的な研究プラットフォームの確立を目指す。設立された平成21年度より、毎年4月に研究成果を発表するシンポジウムを開催している。

3. 研究活動

3.1 概況

研究組織としての情報学環は、異領域の出会いの場である。同じ学問領域の研究者が集まり、その集積性によってその学問領域の体系化を図り、またそれまで解決できなかった問題に突破口を開こうとする目標の立て方とやり方が存在する。しかし、情報学環は違う目標をもっており、違うアプローチを採っている。情報学環は学際情報学という新しい学問を創出するという目標をもっており、異なった学問領域の研究者に出会いの場を提供し、異種交配と相互越境というやり方によって、それを達成しようとしている。そのような研究組織は規模においてそれほど大きいものである必要はないが、しかし特有の研究組織論が必要とされる。

3.1.1 文理の相互作用と連携

伝統的に日本の大学においては、学問研究は文系と理系に大きく分けられてきたし、現在もそれが生きている。新しい分野、とりわけ学際情報学にとっては、その区分けを乗り越えて、文理連携、文理越境、文理相互浸透が必要であり、それなくして発展の展望はない。情報学環は最初からそのような文理連携の研究組織論に基づいて設立されたものである。しかも、その文理の比重がどちらかに大きく偏ることなく、バランスを取っているのが大きな特色である。

現在、情報学環では大小合わせてさまざまな文理連携型の研究プロジェクトが実施されている。政府予算に基づく大型の研究プロジェクトとして、これまでのコンテンツ関連のプロジェクトに続いて、平成23年からは、特別経費「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」（2011年度～2015年度）プログラムが発足することが決まっている。情報学環のスタッフ体勢は、文理連携の大型研究プロジェクトを自前でカバーしていくことができる。

文理連携は、組織の財政上、情報学環ならではの効用とメリットを発揮することに結びつく。国立大学に対する現在の財政政策の仕組みでは、文系の資金獲得には限界があり、困難が伴う。理系が必要とするような大きな額ではないにも関わらず、文系が運営費交付金や競争的資金を新たに得るのは容易なことではない。しかし、文理連携の研究計画のもとに競争的資金が獲得できることによって、結果的に文系の研究分野へ資金が流れ、これまで経済的な理由からできなかった研究活動を展開できるようになるのである。これは、文理連携で情報学を構築していくという組織論が、財務上も有益な影響を生み出していることを物語っている。こうした研究資金状況の改善によって、文系は文系の側から文理連携の企てを積極的に展開していくことが可能になるのである。

3.1.2 流動教員制度

情報学環独特の仕組みとして、流動教員制度がある。これは設立当初、学内の情報関連教員を糾合し、ネットワーク組織型に新しい大学院を創設するため、学内関連部局の協力を得て作り出されたものである。これにより、情報学環に所属する教員には、基幹教員と流動教員の2種類が存在する。

基幹教員は、情報学環に固有のポスト、すなわち基幹教員枠（部局の「採用可能数」として割り当てられているポスト）で採用されている教員である。その教員室のスペースも学環によって手当てされて

いる。それに対して、流動教員は、流動元の部局から情報学環へ時限で振替られている流動教員枠を使って、流動元の部局よりやはり時限で配置換えになって情報学環に所属している教員である。その教員スペースは現状では情報学環として手当ですることができず、流動元部局のスペースをそのまま使用している。

この流動教員制度により、情報学環の研究組織は研究者の循環と入れ替わりの仕組みを内蔵しており、もって研究活動に常にイノベーションの条件を保障しようとしているのである。流動教員の立場からすれば、情報学環に流動教員として参加することによって、元部局とは異なった学際的な教育研究環境に入ることが可能であり、また研究所が元部局の教員にとっては大学院教育に通常の義務と権利で加わる機会が得られることとなる。こうした条件が研究者同士に新たな刺激を生み出すとともに、従来の枠を脱する糧となると見込まれている。こうした組織論による利得は、現在、大小さまざまな研究プロジェクトの活動に見て取ることができる。

3.2 大型研究プロジェクト（1,000万円以上規模）

各教員が研究代表者となって行う研究プロジェクトでも、以下（事業規模1千万円以上）に示すとおり、大型研究プロジェクトを積極的に展開している。（すべての外部資金による研究の状況は、IV. 外部資金獲得状況を参照のこと）

<科学研究費補助金>

基盤研究(A)「ライフログ情報処理基盤の構築：取得、処理、共有へ向けて」（研究代表者 相澤 清晴）

基盤研究(A)「デジタル茶室の花鳥風月的な時空間創出技術」（研究代表者 河口 洋一郎）

基盤研究(A)「歴史情報学に基づく明治期社会モデルの研究－写真資料を用いた華族社会構造の解析－」（研究代表者 馬場 章）

基盤研究(A)「東アジアにおける地域協力枠組み発展の政治過程」（研究代表者 田中 明彦）

基盤研究(A)「視聴覚を利用した見まね学習によるアクティブな動的動作生成に関する研究」（研究代表者 池内 克史）

基盤研究(A)「法令・人事から見た近世政策決定システムの研究」（研究代表者 山本 博文）

基盤研究(B)「大規模分散環境を用いた P2P ネットワーク流通ファイル制御システムの研究」（研究代表者 中尾 彰宏）

基盤研究(B)「自己調整学習を支援する協調フィルタリングを用いた英語学習環境の構築と評価」

(研究代表者 山内 祐平)

基盤研究(B)「脳神経科学と社会の相互作用——事例研究と枠組み構築——」(研究代表者 佐倉 統)

基盤研究(B)「メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について：8カ国国際比較研究」
(研究代表者 林 香里)

基盤研究(B)「「中国」と向き合って：日韓台対中進出企業の現地化プロセスに関する比較社会学的研究」
(研究代表者 園田 茂人)

基盤研究(B)「立体顔情報表示による遠隔実在感の創出」(研究代表者 暦本 純一)

基盤研究(B)「記録映画アーカイブに見る戦後日本イメージの形成と変容」(研究代表者 丹羽 美之)

基盤研究(B)「テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパー・アーカイブの制作」
(研究代表者 石田 英敬)

基盤研究(B)「西欧教会ならびにオペラ劇場の動学的音場解析とその比較」(研究代表者 伊東 乾)

<その他外部資金関係>

総務省 戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)「市民の交通行動変容を促進する持続可能な生活交通情報フィードバックシステムの研究開発」(研究代表者 池内 克史)

総務省 戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)「キャッシュ指向ネットワークアーキテクチャ(CONA;Cache-Oriented Network-Architecture)の研究開発」(研究代表者 中尾 彰宏)

総務省「最先端グリーンクラウド基盤構築に向けた研究開発」(研究代表者 中尾 彰宏)

総務省「広域災害対応型クラウド基盤構築に向けた研究開発」(研究代表者 中尾 彰宏)

国土交通省「水害時の状況に応じた避難及び避難情報提供に関する調査研究」
(研究代表者 田中 淳)

国土交通省 近畿地方整備局 国営飛鳥歴史公園事務所「甘樫丘地区における歴史的体験施設整備に関する研究開発」(研究代表者 池内 克史)

文部科学省 科学技術試験研究費「連動性を考慮した強震動・津波予測及び地震・津波被害予測研究」
(研究代表者 古村 孝志)

文部科学省 科学技術試験研究費「日本の特長を活かした BMI の統合的研究開発」
(研究代表者 横井 浩史)

(独) 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術」(研究代表者 河口 洋一郎)

(独) 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「自動チューニング機構を有するアプリケーション開発・実行環境」(研究代表者 古村 孝志)

(独) 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「メディアを活用した市民芸術に関する俯瞰的理論と実践プログラムの研究・開発」(研究代表者 水越 伸)

(独) 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「食、健康に関わるライフログ取得とコミュニティ創成」(研究代表者 相澤 清晴)

(独) 新エネルギー・産業技術総合開発機構 エネルギーITS 推進事業「協調走行(自動運転)に向けた研究開発」(研究代表者 池内 克史)

(独) 情報通信研究機構「革新的三次元映像技術による超臨場感コミュニケーション技術の研究開発」
(研究代表者 相澤 清晴)

(独) 情報通信研究機構「新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発」
(研究代表者 中尾 彰宏)

大学共同利用機関法人情報・システム研究機構「超巨大データベース時代に向けた最高速データベースエンジンの開発と当該エンジンを核とする戦略的社会サービスの実証・評価」(研究代表者 須藤 修)

(独) 海洋研究開発機構「地震の予測精度の高度化に関する研究」(研究代表者 古村 孝志)

3.3 付属センターの役割

3.3.1 社会情報研究資料センター

大学院情報学環附属社会情報研究資料センターは、1964年1月、当時の新聞研究所内に開室された「プレスセンター」が1967年6月、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称されたものである。2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称し、今日に至っている。

本センターは、新聞資料を中心とした各種メディア情報資料を収集・整理し、学内外の研究者の利用に供することで、社会情報学に関する研究の発展に寄与している。現在、本センターの収蔵資料は製本済原紙約20,000冊、縮刷版約8,000冊、マイクロフィルム約45,000リールに達している。これらの新聞資料は情報学環書庫のほかに、駒場キャンパス内の旧宇宙航空研究所跡地などに別置されている。

センターの閲覧室には、利用者のために各種データベース閲覧用PC3台とマイクロフィルムのデジタルデータ変換機能をもつマイクロリーダーを設置して利用者の便宜を図ると共に、従来のマイクロリーダーも継続利用して需要に答えている。また、本センターの定期刊行物として「社会情報研究資料センターニュース」を刊行している。

また、2007年度から2011年度まで東京大学新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化計画」として、(1)整理保存機能の高度化、(2)利活用機能の高度化、(3)教育研究機能の高度化、(4)情報化アーカイブ機能全般の高度化に重点を置き、事業に着手した。その結果、デジタル化スタジオの整備、収蔵庫の整備、展示室を改築し閲覧室としての公開、『坪井家関連資料目録』・『小野秀雄関係資料目録』の2冊の目録発行、『文化資源のデジタル化に関するハンドブック』および『新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」事業報告書』の発行を行った。

3.3.2 総合防災情報研究センター

総合防災情報研究センターは、2008年4月1日に、東京大学の大学院情報学環、地震研究所、生産技術研究所の連携により、情報の概念を核とした文理融合型の総合的な防災研究機関として設立された。4年目を迎えた2011年には、研究面では、東日本大震災への対応とともに、最終年度を迎えたプロジェクトの最終成果の取りまとめにあたった。教育面では、情報学府コース横断型科目である災害情報論を講義主体型から受講者が主体的に参加する実習型に変えたとともに、学部前期課程学生向けに全学自由研究ゼミナールを開講した。組織運営面では、6月に外部中間評価委員会を開催し、これまでの3年間の研究教育活動の評価と4年目・5年目に向けた提言を得た。また、2012年度に時限を迎える基幹教授のポストを確保に向けて「平成25年度 教員採用可能数再配分」に3ポスト増で要求を出した。さらに、博士課程リーディングプログラム 複合領域・安全安心に申請し、工学研究科と連携をとりつつ進めることになっている。

以下、2011年度の主な活動をミッション毎に示す。

3.3.2.1 災害情報の生産－伝達－受容過程の解明

「水害時の状況に応じた避難及び避難情報提供に関する研究」（国土交通省国土技術政策総合研究所受託研究）では、長期堪水時の生活支障を明らかにするために、水害被害を受けたオーストラリア・ブリスベン住民調査および東日本大震災でライフライン等の機能低下による生活支障を受けた仙台市民調査を行った。また、情報伝達面に関して、東日本大震災で注目されたデジタル・サイネージの震災当日の放映実態と今後の課題について、ならびに一般市民の災害情報の認知構造について研究を行った。さらに、より臨場感を持った体験が可能になると予想される3次元体験システム開発とその評価を行った。

また、最終年度を迎える「JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力 インドネシアにおける地震火山の総合防災策」で、これまでの調査結果およびジャワ島東部の東ジャワ州ならびに Kediri 県と Blitar 県の防災担当者と意見交換を踏まえて、警報伝達プロセスの具体的な改善策を提言した。また、スマトラ等シナブン火山に隣接する2つの県で、火山に近い村と遠い村をそれぞれ1つずつ選び、男女を分けて8回、合計51名のグループ・インタビュー調査を実施した。

このほか、台風12号に際して香川県で配信された防災メールおよびエリアメールの実態調査や東日本大震災後における緊急地震速報への住民意識、CIDIR 定期調査の第3回などを実施した。

3.3.2.2 首都直下地震災害の全体像の把握

災害時における首都圏固有の課題を抽出するとともに、危惧されている首都直下地震時の課題を分析するために、東日本大震災時の学生行動調査や前述した仙台市民生活支障調査など基礎的調査を実施するとともに、災害経済研究会の発足に向けた準備を行った。

3.3.2.3 大学 SCM モデルの開発

概算要求「災害緊急情報を活用した大学防災情報システムの開発」では、緊急地震速報等の学内配信を実際に行うとともに、駒場や柏キャンパスにおける建物強震観測の建築構造研究との連携や継続結果の携帯配信の試行システムを開始した。

また、東日本大震災時の大学の災害対応実態を明らかにするために、国公立大学並びに私立大学の東日本大震災時の対応を調査した。

また、引き続き、大学本部の防災訓練の企画・運営に当たった。2011年度の訓練では、工学系等との合同訓練を実施するとともに、バリアフリー支援室や国際本部との連携も図った。訓練の目的として、初動被害報告様式、各部局の避難先案を検討し、訓練後の評価に基づく初動アクション・プランの作成を訓練WGで策定した。

なお、これらの成果を一大学にとどめず広く社会還元するために、私学連盟関東ブロックで調査結果の報告を行った。

3.3.2.4 防災制度の設計と運用に関する研究

ミッション2と関連づけて、東京大学の防災研究者の連携強化を目的とする「東京大学防災研究者ネットワーク」の基礎資料として東京大学防災研究者データベース（UT-DiResDB）の基本設計と初期デ

ータベースの構築を開始した。

3.3.2.5 災害情報教育の実施とプログラム開発

昨年に引き続き、情報学環各コース横断型の教育プログラムである「災害情報論」を開講した。講義主体型から東日本大震災におけるメディアの評価を実証的に行う実習型に変えた。各自の問題意識に基づく仮説を実証的に検証するグループワークを行った。

また、学部前期課程学生向けに全学自由研究ゼミナールを開講した。

いずれの科目も、震災直後であったこともあり多くの受講生が履修したが、災害情報論については実習型への変更も有効だったと考えている。

また、2011年度は「首都直下：東日本大震災から見直す」と題して、首都圏で発生した事象や各社が復旧活動を行う上で情報交換が必要となる内容について発見的な意見交換を行った。

3.3.3 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、ユビキタスコンピューティング、ネットワーキングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うという目的を達成するため、以下のような研究を実施している。

(1) ユビキタス情報基盤技術の研究

これまでの COE プログラムで確立した、ユビキタスコンピューティング分野の基盤技術である、ユビキタス ID 技術や T-Engine/T-Kernel、eTRON を用いた、インターネットの次の新世代の情報インフラを確立する。具体的には、「国際ユビキタス ID センター」を世界各地に立ち上げ、本研究センターがこれらの連携の中核となる。

(2) ユビキタス情報社会研究

ユビキタス情報インフラの普及とともに、社会がどのように変化するかということ、実証的に研究し、かつそのために必要な新しい社会システムや制度、法律、ビジネスモデルを考案し、積極的に提案していく。

ユビキタスコンピューティング技術は、ICT 分野において、我が国がリーダーシップをとって普及を進めている技術である。本センターにおける研究を推進することによって、情報科学、情報社会学等の、学術的な分野の成果を輩出することはもちろん、更にそれを社会基盤として実社会に普及させ、顕在化している様々な社会問題を解決することが期待される。

3.3.4 現代韓国研究センター

現代韓国研究センターは、東アジア地域の国際的協力と地域主義的連携を展望しつつ、日本と韓半島の相互協働とパートナーシップの多面的な展開の可能性を探求する必要性から、2010年度の研究テーマ「東アジア共同体と日韓パートナーシップ」に引き続き、2011年度の研究テーマを「現代韓国文化のアジア的還流と地域アイデンティティの可能性」と設定し、情報学環内で現代韓国の政治や情報、文化を中心とする学術交流と共同研究のプログラムを策定・実施するとともに、東京大学内の現代韓半島

研究に携わる諸組織・機関をネットワーク化し、研究者や大学院生の活発な相互連携を図り、韓国研究の水準の向上とその普及を目指した。2011年度開催された学術行事は、以下の通りである。

- (1) 2011年10月12日(水)、駒場支所開所式及び記念シンポジウム
- (2) 2011年10月21日(金)、国際会議「共生協力の日韓関係：日韓市民社会・文化の交流の観点から」
- (3) 2011年11月14日(月)、支所主催講演会「六者会合と南北朝鮮関係」
- (4) 2011年11月18日(金)、第一回研究会
- (5) 2011年12月2日(金)、東京大学韓国朝鮮関連研究者懇談会
- (6) 2012年1月10日(火)、支所主催講演会「ポスト金正日体制の北朝鮮をめぐって」
- (7) 2012年1月26日(木)、第二回研究会
- (8) 2012年2月16日(木)、支所主催研究会「冷戦期日朝関係の形成」
- (9) 2012年3月17日(土)、国際シンポジウム「現代韓国文化のアジア的還流と地域アイデンティティの可能性」
- (10) 2011年9月28日(水) / 10月14日(金) / 11月17日(木) / 12月21日(水)、大学院生ワークショップ

4 社会との交流

情報学環教員は、以下に述べるとおり、国際的委員会や政府委員会委員、産学協同等を通じて社会との交流を進めながら、社会への貢献を積極的に行っている。

4.1 国際的委員会

情報学環教員は、IEEE、ACM等の国際学会が開催する会議の運営委員等を通じて、国際的な研究の推進に貢献をしている。

五十嵐 健夫	Eurographics SBIM Program Committee
五十嵐 健夫	ACM SIGGRAPH Program Committee
五十嵐 健夫	Shape Modeling International, SMI Program Committee
五十嵐 健夫	Eurographics Program Committee
池内 克史	International Journal of Computer Vision, Springer 編集委員長
池内 克史	2011 IEEE Fellow Committee, Fellow
池内 克史	ACPR2011 the first Asian Conference on Pattern Recognition 組織委員長
池内 克史	MVA2011 委員
石崎 雅人	InterSpeech 2011, Reviewer
大石 岳史	The First Joint 3DIM/3DPVT Conference 3D Imaging - Modeling - Processing - Visualization - Transmission (3DIMPVT 2011), Program Committee

大石 岳史 America Frontier of Engineering (JAFOE 2011), Session Co-Organizer, Massive Data Management Session Japan

大島 まり The Journal of Visualization (JOV) , Editorial Advisory Board

大島 まり International Journal for Numerical Methods in Biomedical Engineering, Editorial Board

上條 俊介 ITS 世界会議 国際プログラム委員

河口 洋一郎 ASIAGRAPH2011, General Chair

河口 洋一郎 ASIAGRAPH, Founding Chair

河口 洋一郎 特定非営利活動法人日本バーチャルリアリティ学会 評議員

木宮 正史 社会科学院 (韓国) 客員研究員

木宮 正史 韓国ソウル大学統一平和研究院 編集委員

木宮 正史 日韓有識者間政策対話 日本側代表世話人

越塚 登 IoT 2012 Conference Program Committee

越塚 登 ITU-T SG16 H.IDscheme: ID schemes for multimedia information access triggered by tag-based identification, Co-Editor

越塚 登 ITU-T SG16 H.IRP: ID resolution protocols for multimedia information access triggered by tag-based identification, Co-editor

越塚 登 日中韓会合 Networked-ID WG, Chair

須藤 修 International CIO Academy, Vice Chair

須藤 修 Living Labs Global Award 2011(USA), The Jury Member

須藤 修 Heidelberg Club International (HCI) organized by the Mayor of Heidelberg City (Germany), Member

園田 茂人 日本学術会議 アジア学術会議分科会委員長

田中 秀幸 Journal of Socio-Informatics 編集委員

田中 秀幸 日本経済政策学会国際会議 企画委員会委員

中尾 彰宏 IEEE SUNSET TPC

中尾 彰宏 ACM CoNEXT TPC

中尾 彰宏 IEEE ITC TPC

中尾 彰宏 IEEE ICC NGNI/FutureNet IV TPC

中尾 彰宏 IEEE ICNP TPC

中尾 彰宏 CFI TPC

山口 いつ子 The University of Edinburgh, Advisory Board Member of "SCRIPT-ed" Journal The AHRB Research Centre for Studies in Intellectual Property and Technology Law

山田 育徳 Computers Environment and Urban Systems, Editorial board member

山田 育徳 International Regional Science Review, Editorial board member

暦本 純一 Augmented Human 2011, General Chair

4.2 政府・自治体委員会

情報学環教員は、政府・自治体委員会の委員等としても活躍し、情報通信などにかかわる政策立案等に参画することで、社会に貢献している（政府委員会委員数 62 件、地方自治体委員会委員数 8 件）。

<政府>

池内 克史	総務省独立法人評価委員会 情報通信・宇宙開発分科会情報通信研究機構部会 専門委員
池内 克史	文部科学省 科学技術政策研究所 科学技術動向研究センター 専門調査員
石川 雄章	国土交通省 観光庁 東北観光博 IT 統括マネジメントチームアドバイザー
石川 雄章	総務省 情報通信審議会情報通信政策部会 ICT 利活用戦略WG委員
大島 まり	経済産業省 産業構造審議会 臨時委員
大島 まり	独立行政法人 科学技術振興機構 国際科学技術コンテスト支援事業推進委員会 委員
大島 まり	文部科学省 科学技術・学術審議会 核融合研究作業部会 委員
大島 まり	独立行政法人 科学技術振興機構 サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト推進評価委員会 委員
大島 まり	独立行政法人 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業 領域アドバイザー
大島 まり	内閣府 原子力安全委員会原子炉安全専門審査会 審査委員
大島 まり	国土交通省 交通政策審議会 委員
大島 まり	文部科学省 科学技術・学術審議会 臨時委員
大島 まり	国土交通省 交通政策審議会技術分科会 委員
大島 まり	文部科学省 科学技術振興調整費審査部会 委員
大島 まり	独立行政法人 国立科学博物館 重要科学技術史資料登録委員会 委員
大島 まり	経済産業省 産業構造審議会 臨時委員
大島 まり	人事院 人事院総裁賞 選考委員会 委員
大島 まり	経済産業省 総合資源エネルギー調査会 臨時委員
大島 まり	文部科学省 新学術領域研究専門委員会 委員
大島 まり	国土交通省 社会資本整備審議会 臨時委員
大島 まり	独立行政法人 科学技術振興機構 「科学の甲子園推進事業委員会」委員長
大原 美保	内閣府 東日本大震災における災害応急対策に関する検討会委員
越塚 登	総務省 デジタルコンテンツ創富力の強化に向けた懇談会・委員
越塚 登	国土交通省 モビリティサポート有識者委員会・委員
越塚 登	国土交通省 国土地理院 場所情報コードの利用技術に関する共同研究・推進委員会・委員
坂村 健	文部科学省 平成 23 年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰審査委員 科学技術省審査委員会委員

坂村 健 文部科学省 科学技術政策研究所 客員研究官

坂村 健 国土交通省 交通政策審議会 臨時委員

坂村 健 国土交通省 ICT を活用した歩行者の移動支援に関する勉強会委員(座長)

佐倉 統 経済産業省資源エネルギー庁 原子力広聴・広報アドバイザー・ボード委員

須藤 修 内閣官房 「情報セキュリティ政策会議技術戦略専門委員会」 委員

須藤 修 内閣官房 「社会保障・税に関する共通番号」名称選考助言者

須藤 修 内閣府消費者委員会 「個人情報保護専門調査会」 委員

須藤 修 総務省 情報通信審議会 委員

須藤 修 総務省 情報通信審議会 「情報通信政策部会」 部長

須藤 修 総務省 情報通信審議会 「情報通信技術分科会」 委員

須藤 修 総務省 「予算執行監視チーム」 外部有識者

須藤 修 総務省 「自治体クラウド推進本部」有識者懇談会 座長

須藤 修 総務省 「自治体クラウドの円滑なデータ移行等に関する研究会」 座長

須藤 修 総務省 「災害に強い電子自治体に関する研究会」 座長

須藤 修 総務省 「災害に強い電子自治体に関する研究会 ICT 利活用ワーキンググループ」 座長

須藤 修 総務省 「地方公共団体における番号制度の活用に関する研究会」 座長

須藤 修 総務省 「ICT を活用した街づくりとグローバル展開に関する懇談会」 構成員

須藤 修 総務省 情報通信政策研究所「情報通信政策レビュー」 編集委員

須藤 修 総務省 「官民連携事業評価委員会」 委員

須藤 修 総務省 「緑の分権改革推進会議」 構成員

須藤 修 総務省 「緑の分権改革推進会議」ICT 分科会 座長

須藤 修 総務省 「地域 ICT 利活用モデル構築事業評価会」 委員

須藤 修 総務省 「地域情報化評価会」 構成員

須藤 修 総務省 「地球温暖化対応 ICT イノベーション推進事業」 専門評価委員

須藤 修 文部科学省 「先導的情報セキュリティ人材育成推進委員会」 委員

須藤 修 厚生労働省 「最適化計画策定評価委員会」 委員

竹内 文乃 環境省 微小粒子状物質等疫学調査実施班 (肺機能発達への影響調査グループ)

田中 秀幸 総務省 無線 LAN ビジネス研究会構成員

橋元 良明 総務省 情報通信白書編集委員

馬場 章 経済産業省 平成 23 年度コンテンツ産業強化対策支援事業 審査委員

目黒 公郎 総務省 地域情報化アドバイザー

目黒 公郎 内閣府 社会還元プロジェクト「きめ細かい災害情報を国民一人ひとりに届けるとともに災害対応に役立つ情報通信システムの構築」タスクフォース

山口 いつ子 総務省 情報通信政策研究所 情報通信法学研究会構成員

山田 育穂 総務省統計局 平成 25 年住宅・土地統計調査に関する研究会 構成員

山本 隆一 厚生労働省 レセプトデータ等の提供に関する有識者会議座長
山本 隆一 厚生労働省 保健医療標準化会議構成員

<自治体>

大島 まり 横浜市教育委員会 横浜市立サイエンスフロンティア高校 科学技術顧問
大島 まり 群馬県教育委員会 運営指導委員
大原 美保 東京消防庁 大規模災害時における災害時要援護者の被害軽減方策に関する調査研究委員会委員
坂村 健 高知県高岡郡梶原町 「梶原町環境モデル都市推進協議会」アドバイザー
須藤 修 福島県 IT 推進アドバイザー
須藤 修 高知県 「電子自治体推進協議会」 顧問
須藤 修 甲府市 「甲府 PMO 委員会」 副委員長
水越 伸 文京区 文京区アカデミー推進計画策定協議会委員

4.3 学協会活動

情報学環教員は、国内外の関係学会の活動に積極的に参加しており、会長や副会長など、学会の要職等を通じて学協会活動に貢献している。

池内 克史 特定非営利活動法人 ITS Japan 理事
池内 克史 独立行政法人産業技術総合研究所 研究ユニット評価委員会委員
池内 克史 日本学術振興会 国際企画委員会委員
池内 克史 日本学術振興会 「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」 審査評価部会専門員
池内 克史 平成 23 年度子供科学力養成塾事業 事業推進委員
池内 克史 財団法人生産技術研究奨励会 評議委員
池内 克史 日本 VR 学会デジタルミュージアム研究委員会 研究委員
池内 克史 第 17 回画像センシングシンポジウム 委員
石井 健太郎 2011 年度人工知能学会全国大会(第 25 回) プログラム委員
石井 健太郎 2012 年度人工知能学会全国大会(第 26 回) プログラム委員
石川 雄章 特定非営利活動法人ピーアイ・フォーラム 理事
石川 雄章 ジャパンクラウドコンソーシアム 幹事
石川 雄章 ASP・SaaS 普及促進協議会 社会資本分野のデータガバナンス指針検討委員会 主査
石崎 雅人 国際標準化規格委員会 (TC37/SC4) 国内対策委員
石崎 雅人 自然言語処理研究会 運営委員情報処理学会
石崎 雅人 人工知能学会 言語音声理解と対話処理研究会 主査
石崎 雅人 社会言語科学会研究大会発表賞選考委員

石崎 雅人	日本認知科学会 運営委員
植田 一博	日本認知科学会 第28回大会 プログラム委員
植田 一博	日本認知科学会 常任運営委員
大島 まり	日本放送協会 NHK「サイエンスZERO」コメンテーター
大島 まり	社団法人発明協会 全日本学生児童発明くふう展 審査委員
大島 まり	財団法人日本宇宙フォーラム 顧問
大島 まり	日本応用数理学会 評議委員
大島 まり	日本計算工学会 評議員
大島 まり	社団法人可視化情報学会 第22期・23期社員
大島 まり	社団法人日本機械学会 関東支部第18期 商議員
大島 まり	社団法人日本機械学会 第89期 評議員
大島 まり	社団法人日本機械学会 フェロー
大島 まり	日本バイオレオロジー学会 理事
大島 まり	日本生体医工学会 代議員
大原 美保	日本自然災害学会平成23年度学術講演会／第31回土木学会地震工学研究発表会 実行委員
大原 美保	土木学会東日本大震災報告書編纂委員会 編纂委員会幹事
加藤 綾子	日本ポピュラー音楽学会(JASPM) 研究活動委員会 関東地区委員
加藤 綾子	情報文化学会(JICS) 大会実行委員会 委員
加藤 綾子	社会・経済システム学会(JASESS) 第30回大会6-B分科会X「経済システム分析2」討論者
上條 俊介	(独)科学技術振興機構 JST 産学連携展開部 研究成果最適展開プログラム(A-STEP) FS ステージ 探索タイプ 専門委員
上條 俊介	電子情報通信学会 ITS 研究専門委員会 専門委員
上條 俊介	(独)国際協力機構(JICA) トルコ国イスタンブール市歴史地区交通需要管理プロジェクト国内支援委員会 委員
上條 俊介	(社)日本道路協会 日本道路会議 論文・企画委員会 専門技術グループ、計画・環境・安全・情報部門委員
上條 俊介	社団法人交通工学研究会 首都高速道路における交通安全対策検討会 委員
上條 俊介	社団法人 土木学会 技術推進機構 実践的 ITS 研究委員会 委員
上條 俊介	独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) Reviewer
河口 洋一郎	一般財団法人デジタルコンテンツ協会 理事
河口 洋一郎	一般社団法人デジタルコンテンツ協会 デジタルコンテンツ EXPO 運営委員会委員
河口 洋一郎	CG-ARTS 協会 評議員
河口 洋一郎	財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団 評議員
木宮 正史	アジア政経学会 編集委員

木宮 正史 現代韓国朝鮮学会 副会長
木宮 正史 アジア政経学会 評議員
越塚 登 T-Engine フォーラム 学術教育 WG・主査
越塚 登 T-Engine フォーラム uID システム WG・主査
越塚 登 独立行政法人 情報処理推進機構 (IPA) オープンソフトウェア利用促進事業・審議委員
越塚 登 独立行政法人 情報処理推進機構 (IPA) 未踏事業・プロジェクトマネージャー
越塚 登 公益財団法人 佐藤陽国際奨学財団 選考委員
越塚 登 第 14 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 セッションオーガナイザ・座長
坂村 健 財団法人国土技術研究センター 研究顧問
坂村 健 財団法人河川情報センター 非常勤理事
坂村 健 社団法人日本プロジェクト産業協議会(JAPIC) アドバイザー
坂村 健 財団法人ひょうご情報教育機構 ダブルディグリー・プログラムアドバイザー
坂村 健 財団法人情報科学国際交流財団 評議員
佐倉 統 科学基礎論学会 評議委員
佐倉 統 日本生命倫理学会 編集委員会委員
佐倉 統 日本子ども学会 理事
須藤 修 国立情報学研究所 客員教授
須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」 推進委員
須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」 幹事
須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」アセスメントワーキンググループ 主査
須藤 修 独立行政法人産業総合研究所社会知能技術研究ラボ 評価委員
須藤 修 財団法人自治体衛星通信機構理事会 評議員
須藤 修 独立行政法人情報処理推進機構「文字情報基盤推進委員会」 委員長
須藤 修 独立行政法人情報処理推進機構「文字情報基盤実証実験審査委員会」 委員
須藤 修 財団法人国際 IT 財団 評議員
須藤 修 社団法人日本情報システム・ユーザ協会「イノベーション経営カレッジ委員会」 委員
須藤 修 一般社団法人セコム科学技術振興財団 評議員
須藤 修 第 10 回「ドコモ・モバイル・サイエンス賞」 審査委員
須藤 修 全国地域情報化推進協議会「技術専門委員会」 アドバイザー
須藤 修 タイムビジネス協議会 顧問
須藤 修 Open ID ファウンデーション・ジャパン アドバイザー
須藤 修 Open Government Cloud コンソーシアム 代表幹事
須藤 修 一般社団法人「日本 IC カード利用促進協議会」 会長

須藤 修 グローバルクラウド基盤連携技術フォーラム 会員
 須藤 修 独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター「高度情報社会の脆弱性の解明と解決」追跡 評価委員
 須藤 修 財団法人国際 IT 財団 評議員
 須藤 修 わたしたち生活者のための共通番号推進協議会 幹事
 須藤 修 日本アカデメイア 幹事
 須藤 修 NPO「高度 IT 人材育成アカデミー」副理事長 副理事長
 須藤 修 NPO「市民が主役の地域情報化推進協議会」 理事長
 須藤 修 日本学術会議 連携会員
 須藤 修 日本学術会議「情報学委員会安全安心社会と情報技術分科会」 委員
 須藤 修 日本学術会議「経済学委員会人口変動と経済分科会」 委員
 須藤 修 日本学術会議「社会学委員会・法学委員会・政治学委員会・経済学委員会・経営学委員会合同国民目線による統計調査・意識調査の方向性検討分科会」 委員
 須藤 修 情報文化学会 会長
 須藤 修 情報文化学会 第 19 回全国大会 実行委員長
 須藤 修 情報文化学会 第 17 回情報文化学会賞選考委員会 委員
 須藤 修 情報処理学会編集委員会 幹事
 須藤 修 日本社会情報学会 (JASI) 副会長
 須藤 修 日本社会情報学会 (JASI) 学術委員会 委員
 須藤 修 情報社会学会 理事
 須藤 修 第 18 回社会情報システム学シンポジウム プログラム委員
 園田 茂人 アジア政経学会 編集担当理事
 園田 茂人 日本学術振興会「博士課程リーディングプログラム」委員会 書面レビュー委員
 鷹野 澄 日本地震学会 代議員
 鷹野 澄 日本災害情報学会 広報委員会副委員長
 高橋 薫 アカデミック・ジャパニーズ・グループ (日本語教育学会 SIG) 幹事
 高橋 薫 日本言語文化学会 運営委員
 田中 秀幸 特定非営利法人横断型基幹科学技術研究団体連合 理事
 田中 秀幸 日本社会情報学会合同研究大会合同企画委員会 委員
 田中 秀幸 日本社会情報学会 理事
 田中 秀幸 日本経済政策学会全国大会 大会企画委員会委員
 田中 秀幸 社会・経済システム学会 理事
 田中 秀幸 社会・経済システム学会全国大会 実行委員長
 田中 秀幸 日本経済政策学会 評議員
 田中 秀幸 一般社団法人社会情報学会 理事
 中尾 彰宏 電子情報通信学会 CQ 研究会 専門委員

中尾 彰宏	電子情報通信学会 NS 研究会 専門委員
中尾 彰宏	電子情報通信学会 NV 研究会 専門委員
中野 公彦	日本機械学会機械力学計測制御部門 幹事
中野 公彦	高安全度交通システム専門委員会 幹事
中野 公彦	日本機械学会交通物流部門第三技術委員会 幹事
南後 由和	日本都市社会学会 企画委員
西垣 通	生命誌研究館 評価委員
西垣 通	朝日文化財団 評議員
西垣 通	本田財団 理事
西垣 通	パリ日本文化会館 運営審議会委員
西垣 通	情報メディア学会 会長
西垣 通	情報文化学会 理事
丹羽 美之	公益財団法人放送文化基金 放送文化基金賞専門委員
丹羽 美之	特定非営利活動法人放送批評懇談会 理事
丹羽 美之	財団法人民間放送教育協会 評議委員
丹羽 美之	財団法人日本科学技術振興財団 科学技術映像祭審査委員
丹羽 美之	社団法人日本民間放送連盟 日本民間放送連盟賞番組部門中央審査委員
丹羽 美之	日本マス・コミュニケーション学会 放送部会委員
丹羽 美之	日本マス・コミュニケーション学会 編集委員会委員
橋元 良明	日本社会情報学会 理事
橋元 良明	日本子ども学会 理事
橋元 良明	日本マス・コミュニケーション学会 学会誌編集委員
橋元 良明	社会言語科学学会 監事
馬場 章	財団法人科学技術融合振興財団 科学技術の融合を促進させる研究課題に対する助成事業と、その成果の普及啓発事業 理事
目黒 公郎	財団法人震災予防協会 評議委員
目黒 公郎	社団法人日本港湾協会 「第 8 回港湾 BCP による協働体制構築に関する委員会」 委員
目黒 公郎	独立行政法人 科学技術振興機構 特任フェロー
目黒 公郎	独立行政法人 科学技術振興機構 J-RAPID 推進委員
目黒 公郎	社団法人 日本港湾協会 第 9 回港湾 BCP による協働体制構築に関する委員会委員
目黒 公郎	日本学術会議 連携会員
目黒 公郎	日本自然災害学会 理事
目黒 公郎	日本自然災害学会 学会賞審査委員
目黒 公郎	公益社団法人 土木学会 調査研究部門 地震工学委員会 突発災害時における避難誘導に関する調査研究小委員会委員
山本 隆一	(財) 医療情報システム開発センター 理事

山本 隆一 国立保健医療科学院 地域の医療情報化に貢献し得る人材育成体制整備専門家会議委員

4.4 他組織役職

情報学環教員は、公益団体や他大学の役員・委員などとして、積極的に社会貢献を行っている。

池内 克史 マイクロソフトリサーチアジア 技術アドバイザー
池内 克史 NEXCO 中日本
池内 克史 株式会社アスカラボ 取締役
池内 克史 ハルピン工科大学 名誉教授
池内 克史 国立情報学研究所 連携研究部門 客員教授
石井 健太郎 慶應義塾大学 理工学部 訪問研究員
石井 健太郎 科学技術振興機構 ERATO 五十嵐デザインインタフェースプロジェクト 研究推進委員
河口 洋一郎 九州大学 総長アドバイザー会議委員
越塚 登 横須賀テレコムリサーチパーク YRP ユビキタス・ネットワークング研究所副所長
坂村 健 東京大学 空間情報科学研究センター 非常勤講師
坂村 健 YRP ユビキタスネットワークング研究所 所長
坂村 健 T-Engine フォーラム 会長
佐倉 統 財団法人国際花と緑の博覧会記念協会 助成事業審査会委員
佐倉 統 独立行政法人理化学研究所理化学研究所脳科学総合研究センター 客員主管研究員
佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構「戦略的創造研究推進事業」 領域アドバイザー
佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構 先進的科学館連携推進事業審査委員
佐倉 統 『生物の科学 遺伝』誌 編集委員
佐倉 統 海外向け政策論調発信ウェブ誌『ジャパンエコー・ウェブ』 編集委員
佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構 日本科学未来館企画展示ゾーン等活用事業審査委員会委員
佐倉 統 NHK 「サイエンス ZERO」コメンテーター
佐倉 統 国立大学法人総合研究大学院大学 「生命科学の発展がもたらす社会的課題とその対応策の基盤構築」におけるプロジェクト・メンバー
佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構 日本科学未来館企画展「愛と覚悟の科学技術展」(仮) 基本設計業務提案審査委員会委員
佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構 科学コミュニケーター人材養成事業評価委員
佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構 サイエンスアゴラ賞審査委員
佐倉 統 大学共同利用機関法人自然科学研究機構生理学研究所多次元共同脳科学推進センター 客員教授

園田 茂人	松下幸之助記念財団 国際スカラシップ審査委員会委員
鷹野 澄	IT 強震計研究会 代表
鷹野 澄	IT 強震計コンソーシアム 代表
田中 秀幸	総務省情報通信政策研究所 特別研究員
田中 秀幸	東京工業大学「エージェントベース社会システム科学研究センター (CABSSS)」運営委員会 運営委員会委員
中尾 彰宏	情報通信研究機構 招へい専門員
丹羽 美之	CS テレ朝チャンネル 番組審議会委員
丹羽 美之	株式会社 mmbi 番組審議会委員
藤本 徹	立命館大学アトリサーチセンター 客員研究員
藤本 徹	NPO 法人産学連携推進機構 客員研究員
藤本 徹	日本デジタルゲーム学会 編集委員
藤本 徹	日本デジタルゲーム学会 広報委員
目黒 公郎	放送大学学園 客員教授
目黒 公郎	公益財団法人 阪神・淡路大震災記念協会 人と防災未来センター 客員研究員
目黒 公郎	建築研究コンソーシアム 緊急地震速報利活用方策検討委員会委員
目黒 公郎	株式会社 日本政策投資銀行 DBJ 防災格付アドバイザー
森本 一夫	日本イスラム協会 監事
森本 一夫	日本オリエント学会 編集委員
森本 一夫	日本中東学会 評議員
山口 いつ子	一般社団法人 モバイルコンテンツ審査・運用監視機構 (EMA) 審査・運用監視委員会委員

4.5 セミナー・研究会・公開講座

情報学環・学際情報学府の研究・教育活動の成果を公表するとともに、その環を広げるために、下記に示すようなさまざまな公開の催しを実施した。入試説明会はたんなる入試事項の説明にとどまらないかたちで、過去の学環・学府シンポジウムの成果を引き継ぎつつ、学環・学府の全体像を示す機会となっている。概要説明から、院生紹介、主要プロジェクト紹介、鼎談などとともに、本年度も研究室や研究プロジェクトを紹介する熱帯雨林的な知識交換、共有の場「学環・学府めぐり」なども開催された。

学環の特徴でもあるさまざまなプロジェクトは、公開研究会、シンポジウムなどを通して学際情報学・社会情報学の研究情報を発信している。下記がその一覧（現在稼働しているもの）である。いずれも学際的なチャレンジをしている営みだといえる（学環ホームページ上に公開されたプロジェクトのみで、全てを網羅していないことを申し添えておく）。

【シンポジウム】	
2011. 5. 28 福武ホール ラーニングシアター	【gakkan@post311】シンポジウム「震災から見えてくる表現のありかた：弱い科学と強い科学」 池上高志、池内克史、國吉康夫、宮島達男
2011. 6. 11 福武ホール ラーニングシアター	平成 24 年度東京大学大学院学際情報学府入試説明会 東京大学大学院情報学環 主催 大島まり・森本一夫 石田英敬 学環・学術長, 佐倉統 専攻長 林香里, 相澤清晴, 坂村健
2011. 6. 25 福武ホール ラーニングシアター	情報学環×情報メディア学会共催シンポジウム「ロボットと情報メディアの未来」 坂元 昂 氏（東京未来大学学長／情報メディア学会初代会長） 西垣 通（東京大学） 池内 克史（東京大学） 谷口 忠大（立命館大学） 西 兼志（東京大学）
2011. 7. 16 福武ホール ラーニングシアター	【gakkan@post311】メディア・コンテンツ研究機構×放送人の会共催シンポジウム 映像の中の＜東北＞ 石田英敬（東京大学情報学環長） 今野 勉（放送人の会代表幹事） 藤久ミネ（放送評論家） 桜井 均（元 NHK プロデューサー）
2011. 7. 18 福武ホール ラーニングシアター	【gakkan@post311】東京大学大学院情報学環現代韓国研究センター主催国際シンポジウム、「東アジア安全共同体を目指して—エネルギー・リスク・ガバナンス—」 石田英敬（東京大学大学院情報学環長） 姜尚中（東京大学現代韓国研究センター長） 木宮正史（東京大学教授） 和田春樹（東京大学名誉教授） 菅谷昭（長野県松本市長） 李源根（韓国国会立法調査処調査官） Mikhail Vladimirovich Malko（ペラルーシ科学アカデミー・電力工学研究所主任研究員）

<p>2011. 9. 10 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>Network Virtualization Symposium 2011 宮部博史 (NICT) 中尾彰宏 (東京大学/ITRC/NICT) 青山友紀 (慶應大学/NICT) Chip Elliott (GENI Project office) Max Ott (NICTA) Rick McGeer (HPLab) Andy Bavier (Princeton University) Robert Ricci (University of Utah) 下條真司 (NICT/大阪大学) 高橋紀之 (NTT) 西原基夫 (NEC), 長谷川亨 (KDDI 研究所) Chip Elliott (GENI Project office), Ivan Seskar (Rutgers University) 長谷川亨 (KDDI 研究所)</p>
<p>2011. 9. 11 大阪市立大学杉本 キャンパス学術情 報総合センター10 階</p>	<p>日米法学会総会 シンポジウム「ユビキタス時代の情報法における基 底的価値とエンフォースメント」 日米法学会総会 主催 市川正人 (立命館大学), 川岸令和 (早稲田大学), 鈴木秀美 (大阪 大学), 長谷部恭男 (東京大学), 山川洋一郎 (古賀総合法律事務所), 山口 いつ子 (東京大学)</p>

<p>2011. 10. 2 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>医療コミュニケーションシンポジウム 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 協賛 東京大学大学院情報学環 主催 今井 健 東京大学医学系研究科 倉金理沙(*1)、西崎香苗(*1)、池上仁志(*1)、上平拓弥(*2)、西崎博光(*2)、関口芳廣(*2)、楠見孝(*3)、三浦麻子(*4)、小倉加奈代(*5)、小倉加奈代(*5) (*1) 貢川整形外科病院 (*2) 山梨大学大学院医学工学総合研究部 (*3) 京都大学大学院教育学研究科、(*4) 関西学院大学文学部、(*5) 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 山本 隆一 東京大学大学院情報学環／医学部附属病院 藤崎 和彦 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター 大谷 尚 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 酒井 郁子 千葉大学大学院看護学研究科 宇城 令 自治医科大学看護学部 堀 里子 東京大学大学院情報学環／薬学系研究科 田中 牧郎 国立国語研究所 野呂 幾久子 東京慈恵会医科大学 中村 千賀子 東京医科歯科大学 本村 和久 沖縄県立中部病院 石崎 雅人 東京大学大学院情報学環 三浦純一 福島県須賀川市公立岩瀬病院</p>
<p>2011. 10. 12 駒場 I キャンパス (大学院総合文化研究科) アドミニ 棟 3F 学際交流ホ ール</p>	<p>現代韓国研究センター駒場支所 開設記念講演会・シンポジウム 東京大学大学院・情報学環・現代韓国研究センター 主催 田中明彦 東京大学副学長 石田英敬 東京大学大学院情報学環長 長谷川壽一 東京大学大学院総合文化研究科長 李京秀 在日本国大韓民国大使館政務担当公使 生越直樹 (言語情報科学専攻教授・言語情報科学専攻長) 岩本通弥 (超域文化科学専攻 教授) 月脚達彦 (言語情報科学専攻 准教授) 外村大 (地域文化研究専攻 准教授) 三ツ井崇 (言語情報科学専攻 准教授) 朴祥美 (PEAK: Programs in English at Komaba 特任准教授)</p>

<p>2011. 10. 21 駐日韓国大使館 (四ツ谷三丁目) 2F・ハンマダンホール</p>	<p>国際シンポジウム「共生協力の日韓関係」 東京大学大学院情報学環現代韓国研究センター、駐日韓国大使館 主催 申珪秀 (シン・カクス) 駐日本国大韓民国特命全権大使 木宮正史 東京大学現代韓国研究センター副センター長・駒場支所長 和田春樹 (東京大学名誉教授) 園田茂人 (東京大学) 権容爽 (一橋大学) 清水敏行 (札幌学院大学) 梁起豪 (ヤン・ギホ / 聖公会大学) 天児慧 (早稲田大学) 陳昌洙 (チン・チャンス / 世宗研究所) 平岩俊司 (関西学院大学) 徳永久志 (民主党・衆議院議員) 李京秀 (イ・キョンス / 駐日韓国大使館公使)</p>
<p>2011. 10. 22 [インターネット ライブ中継ウェブ サイト] http://polemictweet.com/</p>	<p>【gakkan@post311】インターネット中継：東大フォーラム 2011「知の 際」情報学環イベント「日本のメディア文化 カタストロフィとメディア」 石田英敬、ベルナール・スティグレール、藤幡正樹、ロバン・ルヌッチ、吉見俊哉</p>
<p>2011. 11. 11 UDX GALLERY NEXT (JR秋葉原駅前)</p>	<p>民放連メディアリテラシー・シンポジウム ～視聴者との新しい関係のために～ 主催 日本民間放送連盟 放送基準審議会 協力 東京大学大学院情報学環水越伸研究室マス&コミュニケーションプロジェクト 水越 伸 氏 (東大大学院情報学環教授/民放連メディアリテラシー実践プロジェクトチーム副主査) 大河原 聡 氏 (文化放送総務局長/2010年度プロジェクト実施担当者) 山田 眞嗣 氏 (民放連番組部) 倉田 治夫 氏 (テレビ信州専務取締役) 鈴木裕美子 氏 (テレビ朝日お客さまフロント部長) 見城 武秀 氏 (成蹊大学文学部教授/民放連メディアリテラシー活動推進部会有識者委員) 境 真理子 氏 (桃山学院大学教授)</p>

<p>2011. 11. 26 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター高度アーカイブ化事業 共同研究会+記念シンポジウム 「研究者資料のアーカイブズ-知の遺産 その継承に向けて-」 東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター/メディアコンテンツ研究機構 共催 アート・ドキュメンテーション学会/日本図書館情報学会（五十音順） 後援 国立大学図書館協会/日本アーカイブズ学会（五十音順） 谷本宗生（東京大学） 柄内文彦（金沢工業大学） 油井正一資料を中心に 本間友（慶應義塾大学） 玉井建也・福重旨乃 他（東京大学他） 要真理子（大阪大学） 北岡タマ子 他（お茶の水女子大学他） 平石直昭（東京大学/帝京大学） 植村幸生（東京藝術大学） 山下俊介・五島敏芳（京都大学） 研谷紀夫（東京大学） 大和裕幸（東京大学） 吉見俊哉（東京大学）</p>
<p>2011. 11. 29 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>「デジタル化時代における知識基盤の構築と人文学の役割 —— デジタル・ヒューマニティーズを手がかりとして——」 東京大学大学院情報学環 メディア・コンテンツ研究機構 東京大学文学部 次世代人文学開発センター 主催 下田正弘（東京大学大学院人文社会系研究科・教授） 長尾真（国立国会図書館長） A. Charles Muller（東京大学文学部次世代人文学開発センター・特任教授） 武田英明（国立情報学研究所・教授） 江上敏哲（国際日本文化研究センター図書館） James Currall（グラスゴー大学文学部人文学高度技術情報研究所・上級リサーチフェロー） Michael Moss（グラスゴー大学文学部人文学高度技術情報研究所・教授） John Unsworth（イリノイ大学大学院図書館情報学研究科長） 吉見俊哉（東京大学大学院情報学環・教授）</p>

<p>2011. 12. 10 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>「シンポジウム：Idols and Celebrity in Japanese Media Culture」 Jason G. Karlin, University of Tokyo W. David Marx, Neojaponisme Alexandra Hambleton, University of Tokyo Igor Prussa, University of Tokyo Lucy Glasspool, Nagoya University Nagaike Kazumi, Oita National University Daniel Black, Monash University</p>
<p>2012. 3. 4 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>シンポジウム『占領する眼・占領する声—C I E / U S I S映画とV O Aラジオ』 東京大学大学院情報学環/吉見俊哉研究室主催 吉見俊哉（東京大学情報学環）</p>
<p>2012. 3. 12 東京大学本郷キャンパス 山上会館 2F 大会議室</p>	<p>「東京大のITU-T アカデミックメンバー加盟調印記念ITU-T事務局長マルコム・ジョンソン氏による講演会」 東京大学大学院情報学環・東京大学大学院情報理工学系研究科主催</p>
<p>2012. 3. 16 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>CREST「食に関わるライフログ共有技術基盤」シンポジウム 相澤清晴（東京大学・情報学環）、廣瀬通孝（東京大学・情報理工） 小川誠（foo.log株式会社）、橋本真幸（KDDI研究所）、佐々木敏（東京大学・医学系）</p>
<p>2012. 3. 17 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>国際シンポジウム 現代韓国文化のアジア的還流と地域アイデンティティの可能性 東京大学大学院情報学環・現代韓国研究センター主催 李京秀（駐日本国大韓民国大使館公使） 石田英敬（東京大学大学院情報学環長） 姜尚中（東京大学現代韓国研究センター長） 金泳徳（韓国コンテンツ振興院日本事務所長） 鄭鎬碩（東京大学大学院情報学環特任助教） 園田茂人（東京大学大学院情報学環教授） 佐藤忠男（日本映画大学学長、映画評論家） 李章洙（ロゴスフィルム代表理事、ドラマ演出・制作者） 車勝宰（韓国東国大学校映像大学院長、映画製作者協会会長、映画製作者） テッサ・モーリス-スズキ（オーストラリア国立大学） 李鳳宇（映画製作者、東京大学大学院非常勤講師）</p>

【セミナー・講演会】	
2011. 5. 14 福武ホール ラーニングシアター	報学環研究集会<gakkan@post311> 石田英敬（東京大学大学院情報学環長） 田中淳（東京大学大学院情報学環教授／総合防災情報研究センター所長） 池内克史（東京大学大学院情報学環教授／同生産技術研究所 兼担教授） 水越伸（東京大学大学院情報学環教授）
2011. 5. 14 福武ホール ラーニングスタジオ	MELL Platz 第25回公開研究会 情報学環&メディア・エキスプリモ 主催 佐倉統（東京大学大学院情報学環教授／佐倉研究室） 林香里（東京大学大学院情報学環教授／メディア研究のつどい） 中原淳（東京大学大学総合教育研究センター准教授／NAKAHARA-LAB. NET） 水越伸（東京大学大学院情報学環教授／MELL Platz） 村田麻里子（関西大学社会学部准教授／MELL Platz）
2011. 5. 21 福武ホール ラーニングスタジオ	研究会「『ニコニコ動画』は政治ニュースをどう変えたか」 林香里研究室「メディア研究のつどい」／日本マス・コミュニケーション学会 メディア倫理法制研究部会 共催 亀松太郎（株式会社ドワンゴ ニコニコ事業本部企画開発部 ニコニコニュース編集長） 奥村信幸（立命館大学）
2011. 5. 25 工学部2号館 9階92B教室	林香里研究室「メディア研究のつどい」研究会「書評という営為」 植田康夫（『週刊読書人』編集参与、上智大学名誉教授） 福 博充（東京大学大学院学際情報学府博士課程）
2011. 6. 3 工学部2号館 9F 92B	林香里研究室「メディア研究のつどい」研究会「大震災下のネット報道：被災地の新聞社が取り組んだこと」 佐藤和文（河北新報社メディア局長） 畑仲哲雄（東京大学大学院学際情報学府博士課程）

<p>2011. 6. 19 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>記録映画アーカイブ・プロジェクト 第6回ワークショップ「長編記録映画『夢と憂鬱—吉野馨治と岩波映画』完成上映会」 東京大学大学院情報学環（記録映画アーカイブプロジェクト）主催丹羽美之（東京大学情報学環） 桂俊太郎（「夢と憂鬱」監督） 村山英世（記録映画保存センター） 吉見俊哉（東京大学） 中村秀之（立教大学） 筒井武文（東京藝術大学） 鳥羽耕史（早稲田大学）</p>
<p>2011. 6. 26 北仲スクール(横浜文化創造都市スクール)</p>	<p>MELL Platz 第27回公開研究会 メル・プラッツ事務局 主催 宮田雅子（札幌大谷短期大学/MELL Platz） 水島久光（東海大学/MELL Platz、北仲スクール）</p>
<p>2011. 7. 23 福武ホール ラーニングスタジオ</p>	<p>「メディア×ジャーナリズム研究会<ケアのジャーナリズム>をめぐって」 情報学環メディア・コンテンツ研究機構×林香里研究室「メディア研究のつどい」主催 林香里（情報学環） 桜井均（元NHKプロデューサー、情報学環特任教授） 西兼志（情報学環）</p>
<p>2011. 7. 24 文京シビックセンター 地下2階区民ひろば</p>	<p>「あいうえお画文」授賞式&トーク～写真で投稿！まちの思い出つむぎプロジェクト～ 文京区・東京大学連携事業「文の京・大いなる学び」メディア・エクスプリモ（JST、CREST）主催 田畑めぐみ（TCNキャスター） 水越伸・阿部純・鳥海希世子（東京大学大学院情報学環）</p>
<p>2011. 10. 1 多摩美術大学 八王子キャンパス レクチャーホールC他</p>	<p>メディア・エクスプリモ最終シンポジウム メディア・エクスプリモ・多摩美術大学 情報デザイン学科（共催） 須永剛司（多摩美術大学） 西村拓一（産業技術総合研究所） 堀浩一（東京大学） 水越伸（東京大学） 廣瀬 通孝（東京大学） 境 真理子（桃山学院大学）</p>

<p>2011. 10. 30 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>【gakkan@post311】記録映画 アーカイブプロジェクト 第7回ワークショップ「原子力発電と安全神話—原発 PR 映画を見る」 東京大学大学院情報学環（記録映画アーカイブプロジェクト）主催 丹羽美之（東京大学情報学環） 羽田澄子（映画監督） 藤本陽一（早稲田大学名誉教授） 吉見俊哉（東京大学）</p>
<p>2011. 11. 18 東京大学大学院情報学環 6階会議室</p>	<p>東京大学大学院情報学環現代韓国研究センター2011年度第一回研究会「現代韓国文化のアジア的還流と地域的アイデンティティの可能性」 東京大学大学院情報学環現代韓国研究センター主催 姜尚中（現代韓国研究センター長・東京大学大学院情報学環） 木宮正史（東京大学大学院情報学環） 黄盛彬（ファンソンビン；立教大学） 李鳳宇（リボンウ；映画プロデューサー、東京大学大学院情報学環非常勤講師） 林香里（東京大学大学院情報学環）</p>
<p>2011. 12. 10 東北大学大学院情報科学研究科2階大講義室(青葉山キャンパス)</p>	<p>MELL Platz 第31回公開研究会 メル・プラッツ事務局 主催 甲斐賢治（せんだいメディアテーク） Kenji Kai (Sendai Mediatheque) マーティン・ファクラー（ニューヨーク・タイムズ） Martin Fackler (New York Times) 水越伸（東京大学/MELL Platz） Shin Mizukoshi (Univ. of Tokyo /MELL Platz) 坂田邦子（東北大学/MELL Platz/語りと記憶のプロジェクト） 鳥海希世子（東京大学/MELL Platz）</p>
<p>2012. 1. 27 工学部2号館 9F 92B</p>	<p>TV アーカイブ・プロジェクト 第1回 「みんなでテレビを見る会」 TV アーカイブ・プロジェクト（東京大学情報学環丹羽美之研究室）/ 川崎市市民ミュージアム 主催</p>
<p>2012. 1. 28 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>MELL Platz 第32回公開研究会 メル・プラッツ事務局 主催 中橋雄（D-project 副会長/武蔵大学） 砂川浩慶（メディア総研所長/立教大学） 村田麻里子（メルプラッツ・オーガナイザー/関西大学）</p>

2012. 2. 22 福武ホール ラーニングスタジオ	林香里研究室「メディア研究のつどい」研究会「台湾メディアの歴史と現在」 林 怡夔（リン・イーシェン） 仙台大学 准教授
2012. 2. 24 工学部 2号館 9F 92B	TV アーカイブ・プロジェクト 第2回 「みんなでテレビを見る会」 TV アーカイブ・プロジェクト（東京大学情報学環丹羽美之研究室）主催
2012. 3. 7 福武ホール ラーニングスタジオ	論点抽出ワークショップ～ブレイン・マシン・インターフェイスはどこへ向かうのか？～ 東京大学大学院情報学環 佐倉研究室（文科省脳科学推進戦略プロジェクト課題 A）主催
2012. 3. 10 東京大学弥生講堂 一条ホール	MELL EXPO（メル・エキスポ）2012 開催 メル・プラッツ事務局 主催 東京大学大学院情報学環・Media Exprimio（メディア・エクスプリモ）=JST CREST 研究「情報デザインによる市民芸術創出プラットフォームの構築」共催
2012. 3. 23 工学部 2号館 9F 92B	TV アーカイブ・プロジェクト 第3回 「みんなでテレビを見る会」 TV アーカイブ・プロジェクト（東京大学情報学環丹羽美之研究室）主催

【プロジェクト関連】	
「制作展」	
2011. 12. 02-07 工学部 2号館 福武ホール	東京大学第13回制作展 “Re: ” 【iii Exhibition 13 “Re: ”】 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 主催
「BEAT」ベネッセ先端教育技術学講座〔公開研究会〕	
2011. 6. 4 福武ホール ラーニングシアター	第1回： ソーシャルメディアによって変わる学びのかたち
2011. 9. 3 福武ホール ラーニングシアター	第2回： 楽しさと学びを融合するシナリオデザイン
2011. 12. 17 福武ホール ラーニングシアター	第3回： デジタル読解力を育てる情報教育

2012. 3. 24 福武ホール ラーニングシアター	第4回： ソーシャルラーニングとこれからの人財育成
-----------------------------------	------------------------------

4.6 出版活動

2004年の社会情報研究所との統合後は、社会情報研究所で出されていた定期刊行物と情報学環・学際情報学府の定期刊行物を統合し、新たな出版体制を整備しつつある。その中心となるのは、以下の5つの刊行物である。

- (1)研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』（年2回刊）
- (2)調査実験紀要『同情報学研究・調査研究編』（年1回刊）
- (3)英文紀要（オンライン論文サイト"iii Online Research Journal"への移行を検討中）
- (4)年報『東京大学大学院情報学環年報』（年1回刊）
- (5)ニューズレター『学環学府』

これらはいずれも、情報学環にとって基幹的な出版活動であり、相互に役割を分担しながら有機的に結びついている。

表 4-6-1 情報学研究/同調査研究編の発行状況

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	
74号	2008年3月
75号	2008年8月
76号	2009年3月
77号	2009年8月
78号	2010年3月
79号	2010年11月
80号	2011年3月
81号	2011年10月
82号	2012年3月
情報学研究・調査研究編	
25号	2009年3月
26号	2010年3月
27号	2011年3月
28号	2012年3月

4.6.1 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』

『情報学環紀要 情報学研究』は、2004年の情報学環と社会情報研究所との統合により、旧社会情報研究所の『社会情報研究所紀要』を改称したものである。

同紀要は、1952年に『新聞研究所紀要』として創刊されて以来、新聞学、世論研究、マス・コミュニケーション論、ジャーナリズム、メディア史、マス・メディアの制度と受容、社会的コミュニケーションの諸過程、災害や地域情報化などの政策課題、高度情報化や新しいメディア接触と情報行動などを理論的、実証的に扱う多くの論考を掲載し、半世紀以上にわたって国内外の専門研究者や学生に多くの影響を及ぼしてきた。

社会情報研究所と情報学環との統合に際し、このような歴史と定評のある研究誌としての紀要の学問的な伝統と蓄積を、情報学環での教育研究基盤のうえでさらに発展させたいと考えた。このような視点から、『情報学環紀要 情報学研究』を、これまでの伝統を維持しつつも、理工学系において発展してきた情報学の基礎理論や応用分野の研究と融合した新しい研究成果が共に公刊されていく場として位置づけた。

そのために、本紀要は、巻頭エッセイの「思考の環」、巻末の「フィールド・レビュー」をはじめ、情報学環教員の研究論文や学際情報学府博士課程院生の査読論文（博士課程在籍者の投稿論文は、外部査読者を含む複数の審査員による審査の上、掲載を許可している）などさまざまなセクションから複層的に構成されている。大学院情報学環において育まれる研究の創造的成果の主要な発表媒体として、また新たな学問的視座や調査研究の発表の場として、本紀要は内外から高い評価を得ている。

4.6.2 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』

『情報学環紀要情報学研究・調査研究編』は、1992年から刊行されてきた『社会情報研究所調査研究紀要』を継承するものである。

『社会情報研究所調査研究紀要』は、同研究所におけるさまざまな社会調査、情報行動や災害情報、インターネットなどに関わる多くの調査の成果が発表されていく主要な媒体であった。これらの社会調査は、関係する研究者や学会、自治体などで高く評価されているものが多く、そのデータの価値が高く評価されていた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環と社会情報研究所との統合後は、これまで主要な柱をなしてきた情報行動や災害行動の調査の成果に加え、情報工学や情報科学との融合分野での実験の成果、文理相互浸透分野でのフィールドワーク、情報教育分野での実験、デジタル・アーカイブに関する諸実践、デザイン表現論などの調査や実験、実践の成果が多分野にわたって発表される媒体となっている。

2012年3月に刊行されたNo.28には、「被災地住民の震災時情報行動と通信不安 - 仙台・盛岡訪問留置調査 -」「東日本大震災における首都圏住民の震災時の情報活動」「Twitter利用を中心とする震災時の情報活動と通信不安 - 関東 Twitter利用ウェブ調査」「中学生パネル調査に基づくネット依存の因果的分析」「指揮者・大野和士氏インタビュー - 内的必然性から響きあう音楽 -」の5本の論文が掲載された。

4.6.3 『英文紀要』

『情報学環英文紀要』は、前記の『社会情報研究所紀要』が発展していく中で研究の国際化、グロー

バル化に対応して独立したものであった。『英文紀要』は、基本的には研究者の個人研究論文とともに、社会情報研究所で開催された国際的なシンポジウムなどの記録を収録していた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環・社会情報研究所の統合後は、情報、メディア、コミュニケーションをめぐるより広い学問分野の知見が掲載できるように体裁をあらため、和文紀要の一部に英語論文を掲載するとともに、英語のウェブサイトに英語論文および和文論文の英訳を掲載している。

4.7 定期刊行物・ホームページ

4.7.1 定期刊行物

情報学環・学際情報学府では、日々の活動を学内外の方々に広く知ってもらうため、ニューズレター『学環学府』を発行している。『学環学府』は、情報学環教職員や学生だけでなく、学内他部局や本部役員をはじめ、学環にゆかりのある学外教員、そのほか広報用として入試説明会、ホームカミングデー、学環来訪者などに随時配布している。内容は、教員へのインタビュー、研究室の活動報告、イベント予定、研究成果、受賞報告、展示会、各教員の書籍刊行情報など。2002年冬号から始まり、2011年度末までに通算36回発行した。デザイン性を高めた紙面は、情報学環・学際情報学府の特徴をよく表現しており、各方面から好評を得ている。例年、年4回発行しているが、本年は震災の影響を受け、3回の刊行となった。表紙は、前年のシルバー一色の硬派な意匠から一新、明るい未来への願いを込めて、様々な色の柔らかなグラデーションを展開した。毎号、色彩によって希望を象徴するデザインは、多くの読者から好評を得た。

4.7.2 ホームページ

情報学環・学際情報学府は、これまでも教育・研究活動を広く国内外に周知すべく、ホームページを開設し情報発信を行ってきたが、平成22年、情報学環設立10周年を迎えるにあたって、このホームページの全面リニューアルを行った (<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>)。

このリニューアルには、学環・学府の教員全員、全授業の紹介ページを新たに作成するなど、コンテンツを大幅に拡充するとともに、ページ構成やデザインも抜本的に改善するものであった。これによって、「学環」「学府」という有機的で複雑な組織の活動の全貌や相互の関係が、学環・学府の活動に関心をもつ一般の人や将来の学府受験生など、学環・学府の外部の人にも明快に把握できるようになった。また、「学環・学府公式パンフレット」と統一的なデザインを採用することで、学環・学府のヴィジュアル・アイデンティティの確立を担っているものでもある。

とくに、新ホームページのトップページは、最近のイベントの様態を記録した動画を配信すると同時に、教員の写真がフロー表示されるなど、ヴィジュアル的に学環・学府をアピールできるようデザインされている。

サイト全体は、教員情報を軸にして構築されており、教員のプロフィールページから、担当する授業、参加しているプロジェクト、登壇したイベント、講演の動画など、関係するすべてのページに相互リンクされている。こうしたカテゴリ横断的な情報の関連付けによって、閲覧者がみずからの関心に応じ

て、回遊的にページを読み進めていけることを大きな特徴としている。さらに、マルチエンタランス型のホームページとして、検索エンジンを通して訪れた閲覧者には、「すべてのページがトップページ」として機能するよう設計されている。

また、グローバルナビゲーションは、研究組織としての学環と、教育組織としての学府を明確に区別しながら、修士課程・博士課程や教育部研究生制度の入試に関する「受験情報」や、『紀要』や『ニューズレター』、『年報』など学環が発行する「紀要・出版物」といった基本情報をはじめとした各情報に、容易にアクセスできるようになっている。「イベント」ページでは、イベントの概要やプログラムといった基本的な情報はもちろんのこと、関連するイベントや教員も表示されるようになっており、サイト内での回遊を促すようデザインされている。また、「コース」ページでは、各コースの基本的な理念を掲げると同時に、受講できる授業や担当教員、関連する施設・研究センターやイベントも表示されるようになっている。

このように、新ホームページは、それぞれの教員がそれぞれの分野の代表者として、異分野との結びつきの「環（リング）」となり、さらに、学問と社会の連携の「環（リング）」たろうとする情報学環・学際情報学府の理念を具現化すべくデザインされている。

4.8 国際交流

2011 年度の情報学環の国際交流事業は、当初は震災の影響が心配されたが、結果的に年度後半以降はきわめて活発で多彩な活動が展開された。以下、その経緯を時系列で記載する。

10 月 12 日に、現代韓国研究センター駒場支所がスタートし、木宮正史副センター長が支所長に就任した。今後は駒場キャンパスでも東アジア地域の政治・文化に関するセミナーを定期的に開催し、本郷キャンパスと共同体制で東アジア地域の研究者、および東アジア地域研究の世界の研究者の活発な交流拠点となることを目標にしている。同センターは、12 月に東京大学韓国朝鮮関連研究者懇談会の開催、また「現代韓国文化のアジア的還流と地域アイデンティティの可能性」というテーマのもと、研究会（平成 23 年 11 月 18 日、平成 24 年 1 月 26 日）と国際シンポジウム（平成 24 年 3 月 17 日）を開催した。このほか、韓国の大学や韓国政府関係者の交流事業や共催学術行事を定期的に実施している。

つぎに、情報学環は、石田英敬学環長が実行委員長となって、情報学環のスタッフや学生が東大フォーラム 2011 の開催に尽力した。このフォーラムは、「知の際（きわ）」を統一テーマとして、フランスのパリ（10 月 17 日）およびリヨン（10 月 19 日）にて開催。コレージュ・ド・フランス、CNRS：フランス国立科学研究センター、リヨン市、リヨン大学連合（リヨン大学、ENS Lyon：リヨン高等師範学校、INSA：国立応用科学院リヨン校ほか）をはじめとする約 20 の提携組織の協賛を得て、東京大学の最先端の研究成果を発表した。この後、さらに、メディアコンテンツ研究機構・デジタル・ヒューマニティーズ・コアの活動として、10 月 22 日にリヨンの Villa Gillet にて、フランス・ポンピドゥーセンターとの共催で国際シンポジウム「日本のメディア文化：カタストロフィとメディア」を開催。さらに、リヨン ENS（高等師範学校）で情報学環を含む院生による学生企画も行われた。100 名の参加のほか、上記セッションはインターネットでストリーミング中継された。

11 月 10 日、11 日には、毎年恒例のソウル大・東大交流シンポジウムが東京大学山中寮内藤セミナー

ハウスで開催された。今年度は“The New Landscape of Global Network in East Asia-Social Network, Media/Popular Culture, and Journalism”というテーマの下、日・韓・米・フィンランドの4カ国から総勢 31 人の研究者が参加し、幅広いテーマにわたる発表及び討論が行われた。情報学環からは石田学環長、吉見教授、林教授、カーリン准教授、松前助教、金助教の教員 6 人と院生 10 人が参加した。ソウル大からはユン・スクミン教授、カン・ミョング教授、ヤン・スンモク教授、イ・ジュンウン教授ほか、1名のポスドク生と8名の学生が参加した。

また、情報学環は、国際連合の下部組織である国際電気通信連合の電気通信標準化部門（ITU-T、本部：スイス ジュネーブ）のアカデミック・メンバーとしての加盟を実現させた。3月12日にはこれを記念して、情報理工学系研究科と共同で ITU-T 事務局長マルコム・ジョンソン氏を招き、山上会館において記念講演会を開催した。これによって、今後、東京大学は、ITU-T のアカデミック・メンバーとして、電気通信分野の標準化に貢献することとなった。

このほか、情報学環は、平成 23 年度、3 月に韓国ソウル大、ならびにオーストラリア・アデレード大と大学間国際交流覚書を更新した。

以上のような大学間国際交流協定に基づく研究交流活動や教育行事に加えて、学環の教員それぞれは、積極的に海外で研究調査活動を行ったり、学会やシンポジウムを企画したり参加したりしている。また、海外からの研究者を招聘して共同研究に取り組み、多彩なシンポジウムを主催している。今後とも、組織としても、また教員個人としても、多様な国々の多様な研究機関やその他の社会における交流を深めることが課題である。

II. 資料

1 沿革

(旧社会情報研究所)

- 1929年 東京帝国大学文学部新聞研究室
- 1949年 東京大学新聞研究所
- 1992年 東京大学社会情報研究所に改組
- 東京大学大学院情報学環・学際情報学府と組織統合

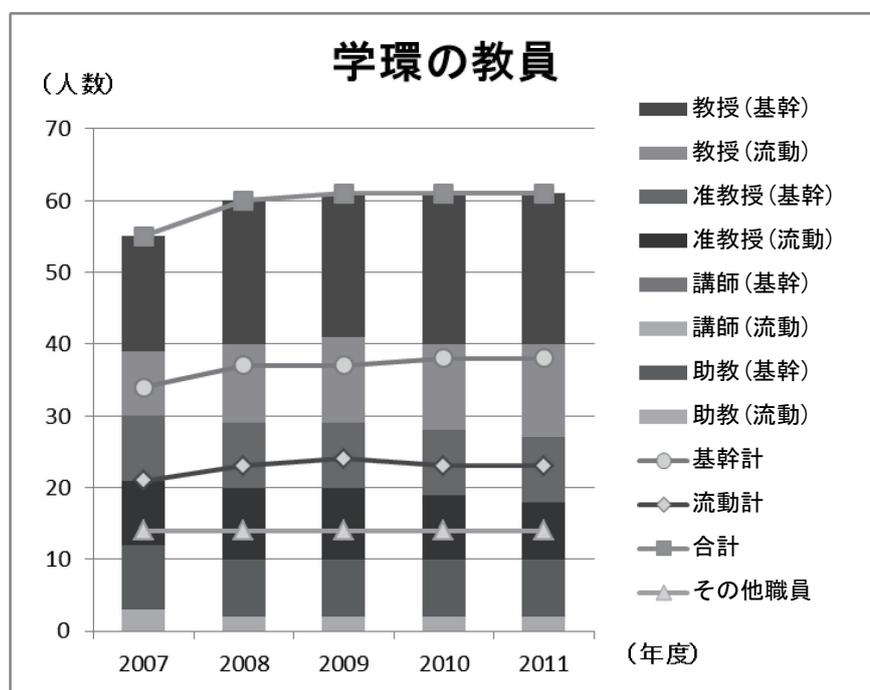
(大学院情報学環)

- 2000年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府
- 2004年 東京大学社会情報研究所と組織統合
文化・人間情報学コース、社会情報学コース、学際理数情報学コース設置
社会情報研究資料センター設置
- 2006年 総合分析情報学コース設置
- 2008年 アジア情報社会コース設置
総合防災情報研究センター設置
- 2009年 学際理数情報学コースが先端表現情報学コースへ変更
ユビキタス情報社会基盤研究センター設置
- 2010年 現代韓国研究センター設置

2 学環の教員（定員）

・情報学環(平成16年4月 社会情報研究所と合併)

年度	教授		准教授 (助教授)		講師		助教 (助手)		計		その 他の 職員	
	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動		
2007	16	9	9	9	0	0	9	3	34	21	55	14
2008	20	11	9	10	0	0	8	2	37	23	60	14
2009	20	12	9	10	0	0	8	2	37	24	61	14
2010	21	12	9	9	0	0	8	2	38	23	61	14
2011	21	13	9	8	0	0	8	2	38	23	61	14



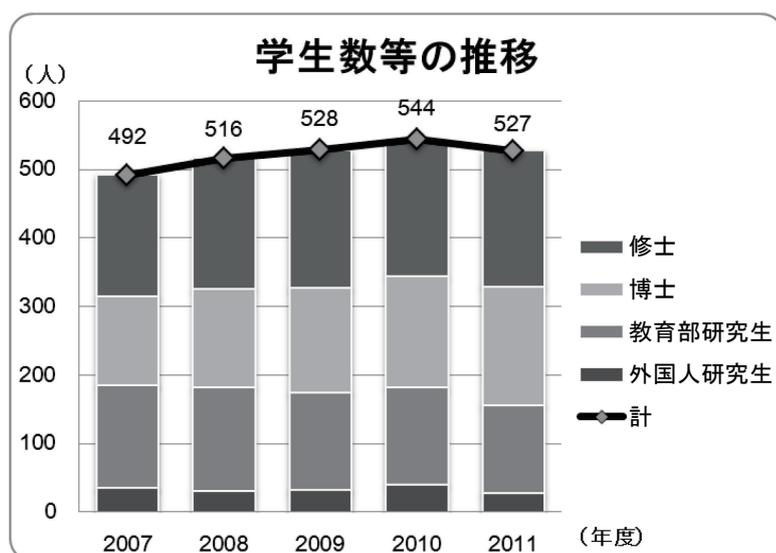
客員教員の状況

年度	職	氏名	担当授業	本務先
平成 18	客員教授	佐藤 哲	文化・人間情報学特論Ⅷ	長野大学産業社会学部
	客員助教授	魏 晶玄	文化・人間情報学特論Ⅸ	ソウル(社)コンテンツ経営研究所
平成 19	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	奈良 高明		電気通信大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	大場 光太郎		産業技術総合研究所
	客員准教授	下畑 光夫	総合分析情報学特論Ⅸ	沖電気
	客員准教授	荒牧 浩二		(株)日立製作所中央研究所
平成 20	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所

	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論IV	凸版印刷総合研究所
平成 21	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論IV	凸版印刷総合研究所
平成 22	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法 I	東海大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論IV	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学
平成 23	客員教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学
	客員教授	Roberson James	Information, Technology, and Society in Asia801	東京女子館大学
	客員教授	Paterson Robert Dunsmore	〃	国際基督教大学
	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法 I	東海大学
	客員教授	遠藤 知巳	メディア社会学	日本女子大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論IV	凸版印刷総合研究所

3 学府の学生数

	2007	2008	2009	2010	2011
修士	177	191	202	201	198
博士	130	144	152	161	173
教育部研究生	150	151	142	142	129
外国人研究生	35	30	32	40	27
計	492	516	528	544	527



4 教育部

教育部入学試験

平成 19(2007)年度から平成 23(2011)年度入学志願者数・受験者数・合格者数

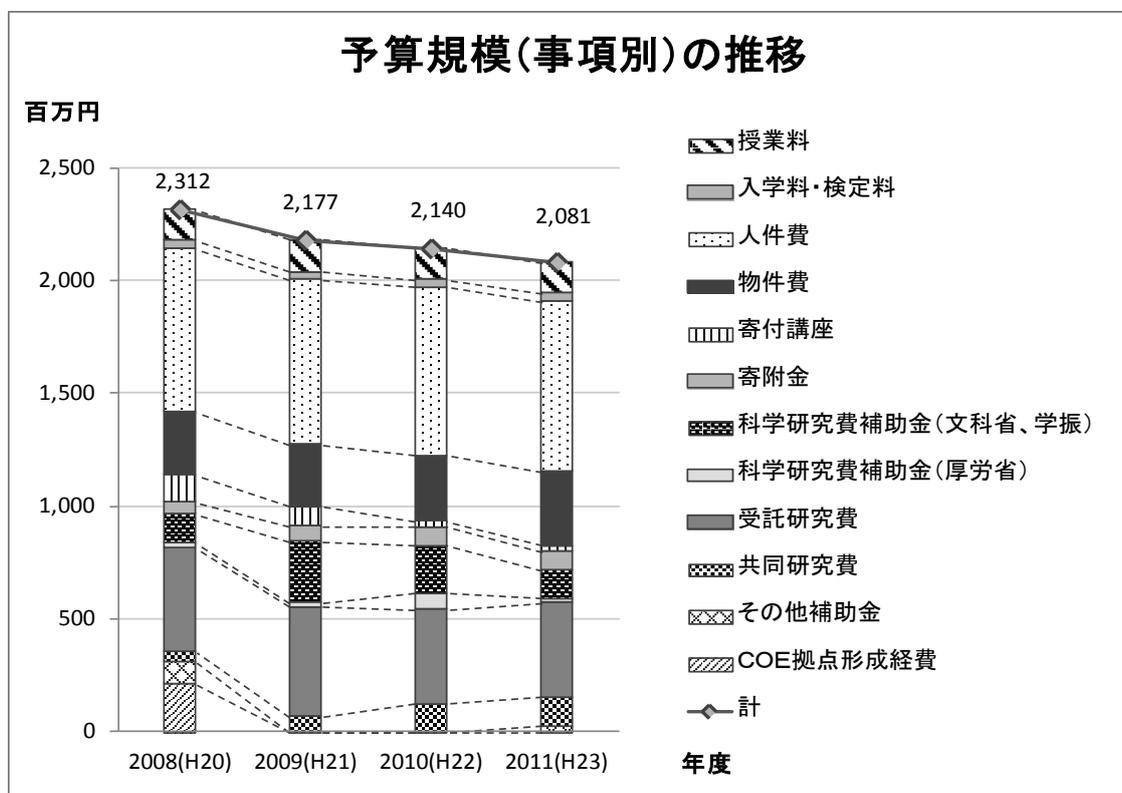
年度	受入 予定 人員	日本人/ 外国人	志願者			受験者			合格者		
			本 学	他 大 学	計	本 学	他 大 学	計	本 学	他 大 学	計
平成 19(2007) 年度	約 50	日本人	74	36	110	72	35	107	34	16	50
		外国人	1	1	2	1	1	2	1	1	2
		計	75	37	112	73	36	109	35	17	52
平成 20(2008) 年度	約 50	日本人	55	45	100	54	44	98	40	17	57
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	0	0
		計	55	46	101	54	45	99	40	17	57
平成 21(2009) 年度	約 50	日本人	69	50	119	67	49	116	42	9	51
		外国人	0	2	2	0	2	2	0	0	0
		計	69	52	121	67	51	118	42	9	51
平成 22(2010) 年度	約 50	日本人	99	47	146	95	45	140	37	10	47
		外国人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		計	99	47	146	95	45	140	37	10	47
平成 23(2011) 年度	約 50	日本人	121	53	174	112	51	163	32	10	42
		外国人	5	2	7	5	2	7	0	0	0
		計	126	55	181	117	53	170	32	10	42

5 予算

・情報学環

	2008(H20)		2009(H21)		2010(H22)		2011(H23)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料	-	133,786,450	-	138,515,946	-	138,116,530	-	138,088,930
入学科・検定料	-	37,380,400	-	36,296,200	-	33,850,600	-	37,398,800
人件費	-	722,395,394	-	729,703,012	-	744,968,962	-	753,689,804
物件費*	-	282,180,320	-	277,805,902	-	290,523,101	-	327,577,436
寄付講座	4	118,600,000	3	84,000,000	1	27,000,000	1	27,000,000
寄附金	48	53,304,328	30	70,204,659	39	82,902,448	40	85,963,505
科学研究費補助金** (文部科学省、学振)	29	132,484,000	40	271,080,000	69	211,625,326	58	126,197,516
科学研究費補助金 (厚生労働省)	5	17,700,000	5	17,200,000	6	72,400,000	3	12,500,000
受託研究費	20	461,522,898	27	486,887,690	34	417,707,413	27	422,020,319
共同研究費	23	44,918,683	41	64,951,858	40	122,371,987	38	128,436,336
その他補助金	-	-	-	-	-	-	5	22,171,066
科学技術振興調整費	1	99,499,548	-	-	-	-	-	-
COE拠点形成経費	1	208,890,000	-	-	-	-	-	-

*追加配分及び前年度からの目的積立金分を含む
** 特別研究員奨励費は除く



6 土地・建物面積

・建物

建物名	建築年度	面積（延面積・㎡）
情報学環本館	S27	472
	S29	26
	S33	360
	S58	4,171
	計	5,029
工学部 2 号館	*H18	*500
目白台西 1 号館	*H18	*492
目白台西 2 号館	*H18	*545
第 2 本部棟	*H18	42
福武ホール	H19	**3,241
法学部総合研究棟 （弥生キャンパス）	*H23	92
駒場Ⅱ 5 6 号館	*H23	404

*使用開始年度・使用㎡数

**福武ホール面積については全学共用スペース分を除く

7 入試定数と受入数

	修士		博士	
	入学定員	受入予定人員	入学定員	受入予定人員
平成 19 (2007)	85	90	36	38
平成 20 (2008)	100	105	44	46
平成 21 (2009)	100	105	44	46
平成 22 (2010)	100	100	44	44
平成 23 (2011)	100	100	44	44

8 年度別入試データ詳細

修士

	2007	2008	2009	2010	2011
志願者	148	230	238	259	264
合格者	79	97	104	97	105
入学者	73	93	88	89	85

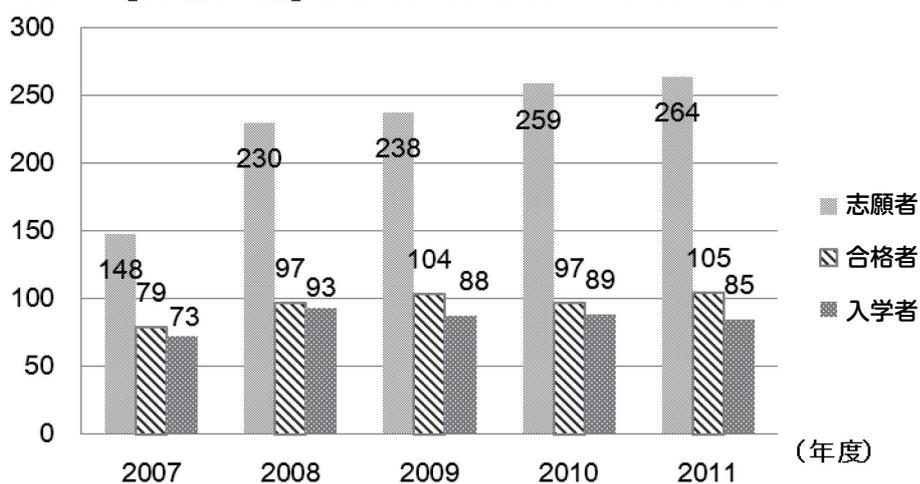
博士

	2007	2008	2009	2010	2011
志願者	58	64	65	70	69
合格者	36	37	38	41	40
入学者	36	35	36	39	39

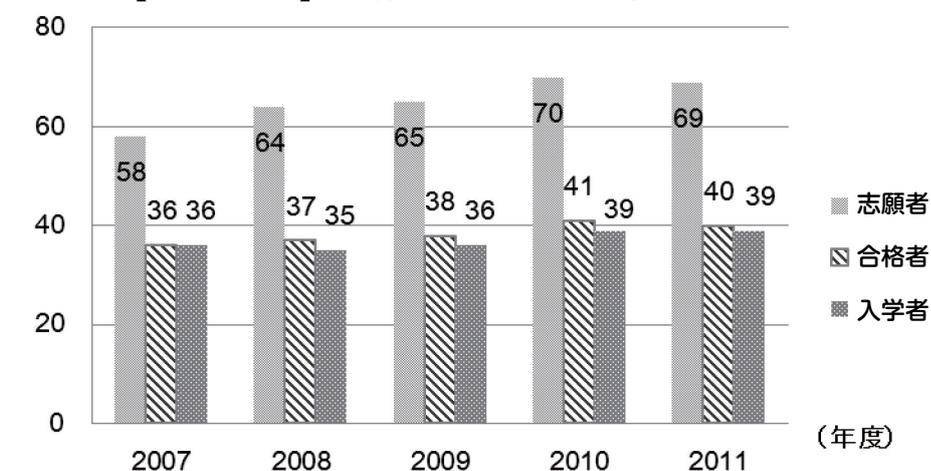
志願倍率（志願者／入学定員）

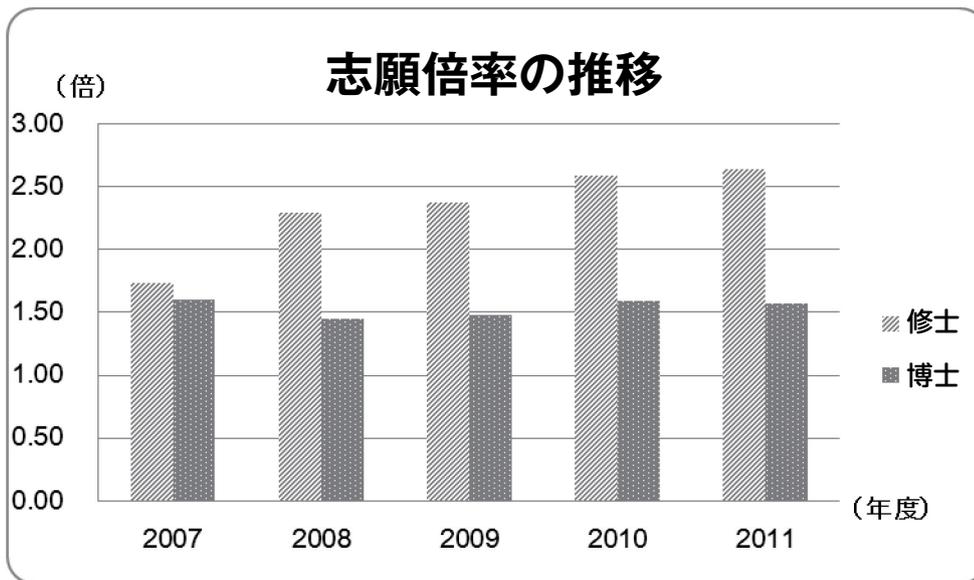
	2007	2008	2009	2010	2011
修士	1.74	2.30	2.38	2.59	2.64
博士	1.61	1.45	1.48	1.59	1.57

（人） **【修士課程】志願者・合格者・入学者の推移**



（人） **【博士課程】志願者・合格者・入学者の推移**





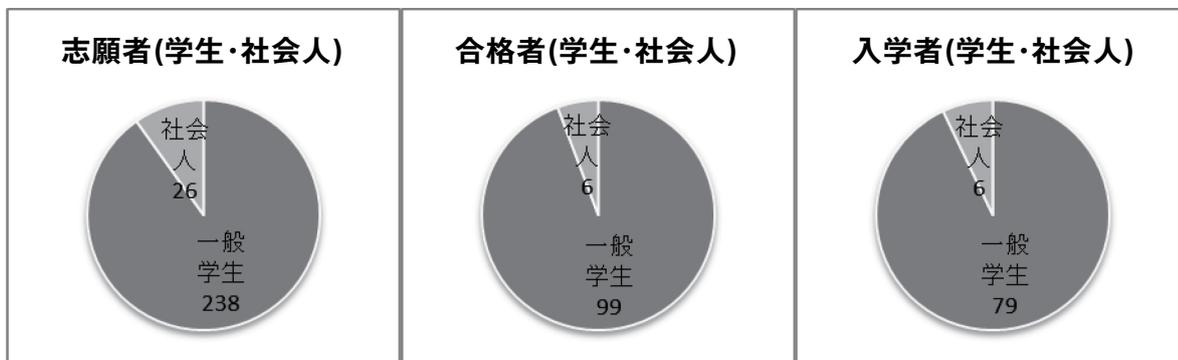
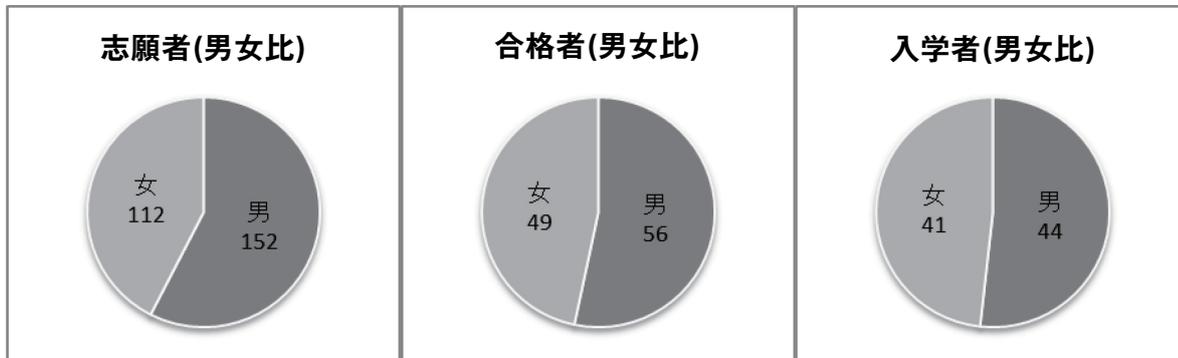
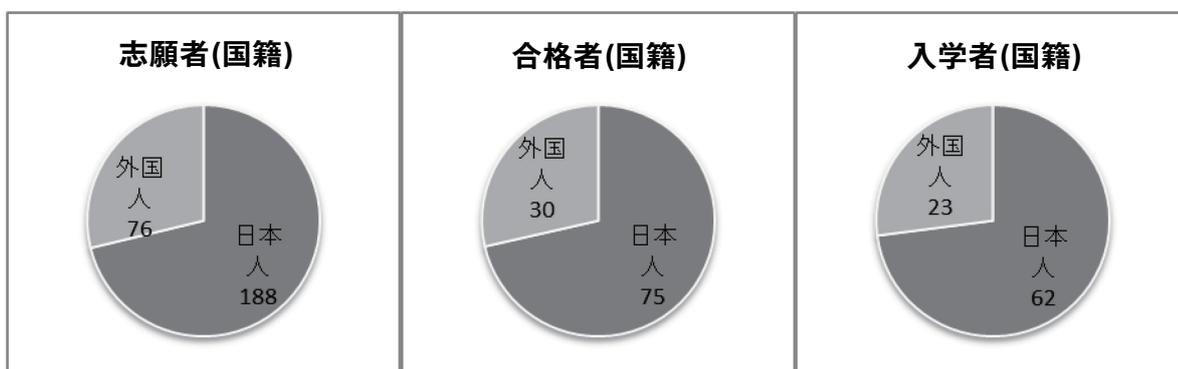
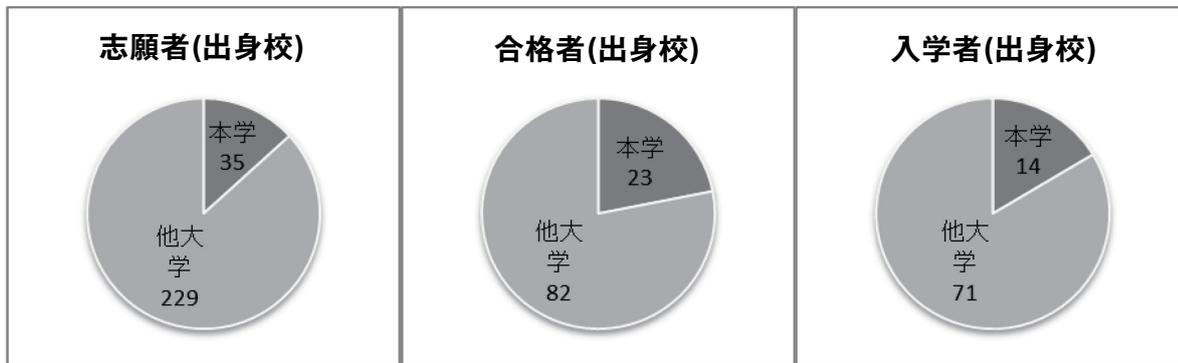
2011 年度修士入学試験詳細

志願者		合格者		入学者	
本学	35	本学	23	本学	14
他大学	229	他大学	82	他大学	71
264		105		85	

志願者		合格者		入学者	
日本人	188	日本人	75	日本人	62
外国人	76	外国人	30	外国人	23
264		105		85	

志願者		合格者		入学者	
男	152	男	56	男	44
女	112	女	49	女	41
264		105		85	

志願者		合格者		入学者	
一般学生	238	一般学生	99	一般学生	79
社会人	26	社会人	6	社会人	6
264		105		85	



2011 年度博士入学試験詳細

志願者

本学府	34
他大学院	35
69	

合格者

本学府	23
他大学院	17
40	

入学者

本学府	23
他大学院	16
39	

志願者

日本人	41
外国人	28
69	

合格者

日本人	25
外国人	15
40	

入学者

日本人	25
外国人	14
39	

志願者

男	41
女	28
69	

合格者

男	26
女	14
40	

入学者

男	26
女	13
39	

志願者

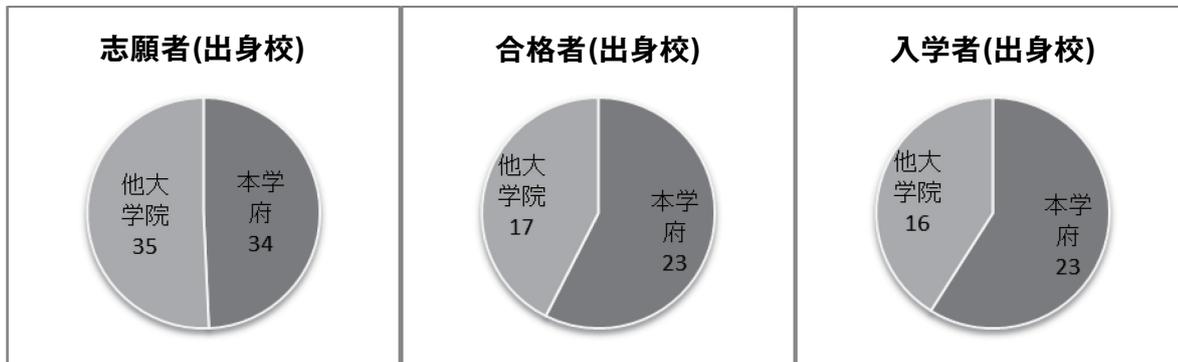
一般学生	53
社会人	16
69	

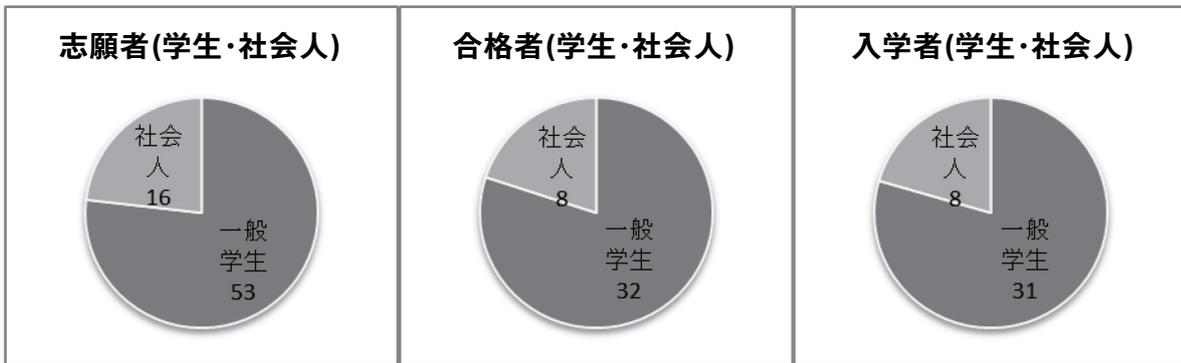
合格者

一般学生	32
社会人	8
40	

入学者

一般学生	31
社会人	8
39	



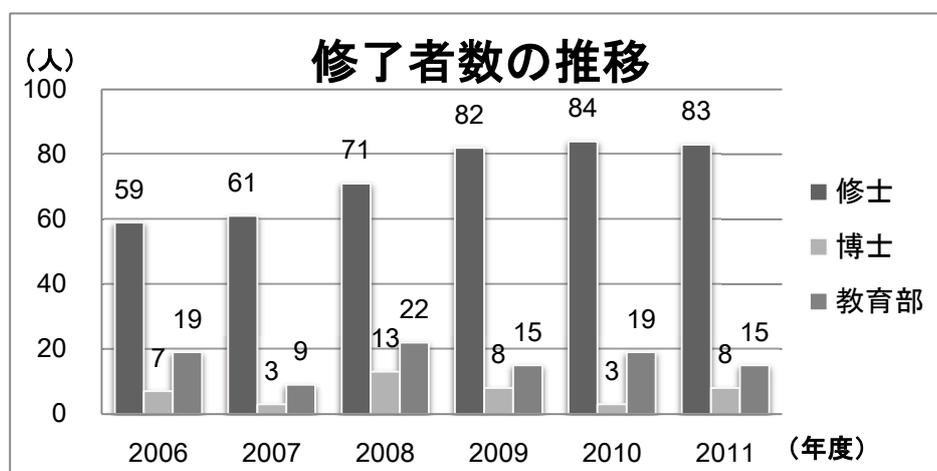


9 修了者数の推移

平成 18 (2006) 年度から平成 23 (2011) 年度修了者数 (教育部研究生)

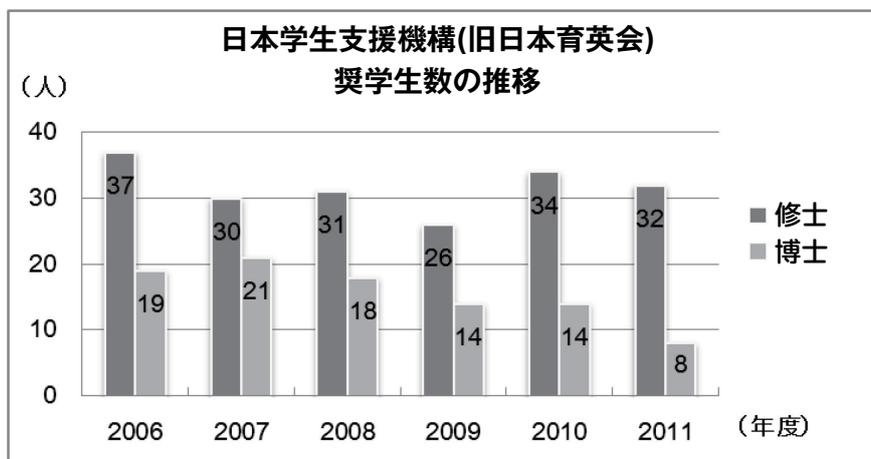
年度		修了者		
		本学	他大学	計
平成 18 (2006) 年度	日本人	8	10	18
	外国人	0	1	1
	計	8	11	19
平成 19 (2007) 年度	日本人	3	6	9
	外国人	0	0	0
	計	3	6	9
平成 20 (2008) 年度	日本人	17	5	22
	外国人	0	0	0
	計	17	5	22
平成 21 (2009) 年度	日本人	9	6	15
	外国人	0	0	0
	計	9	6	15
平成 22 (2010) 年度	日本人	11	8	19
	外国人	0	0	0
	計	11	8	19
平成 23 (2011) 年度	日本人	7	7	14
	外国人	1	0	1
	計	8	7	15

	2006	2007	2008	2009	2010	2011
修士	59	61	71	82	84	83
博士	7	3	13	8	3	8
教育部	19	9	22	15	19	15



10 学生支援機構（旧育英会）奨学生数

	第一種		第二種		合計	
	修士	博士	修士	博士	修士	博士
2006	21	18	16	1	37	19
2007	20	15	10	6	30	21
2008	21	15	10	3	31	18
2009	20	13	6	1	26	14
2010	24	11	10	3	34	14
2011	25	7	7	1	32	8

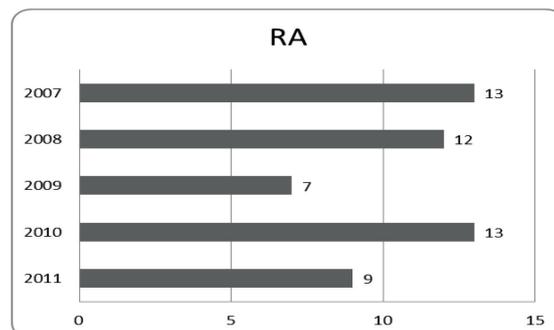


11 日本学術振興会特別研究員数

	DC 1	DC 2	合計
2006	4	2	6
2007	1	10	11
2008	5	8	13
2009	5	12	17
2010	6	9	15
2011	4	4	8

12 リサーチアシスタント数

年度	RA
2007	13
2008	12
2009	7
2010	13
2011	9

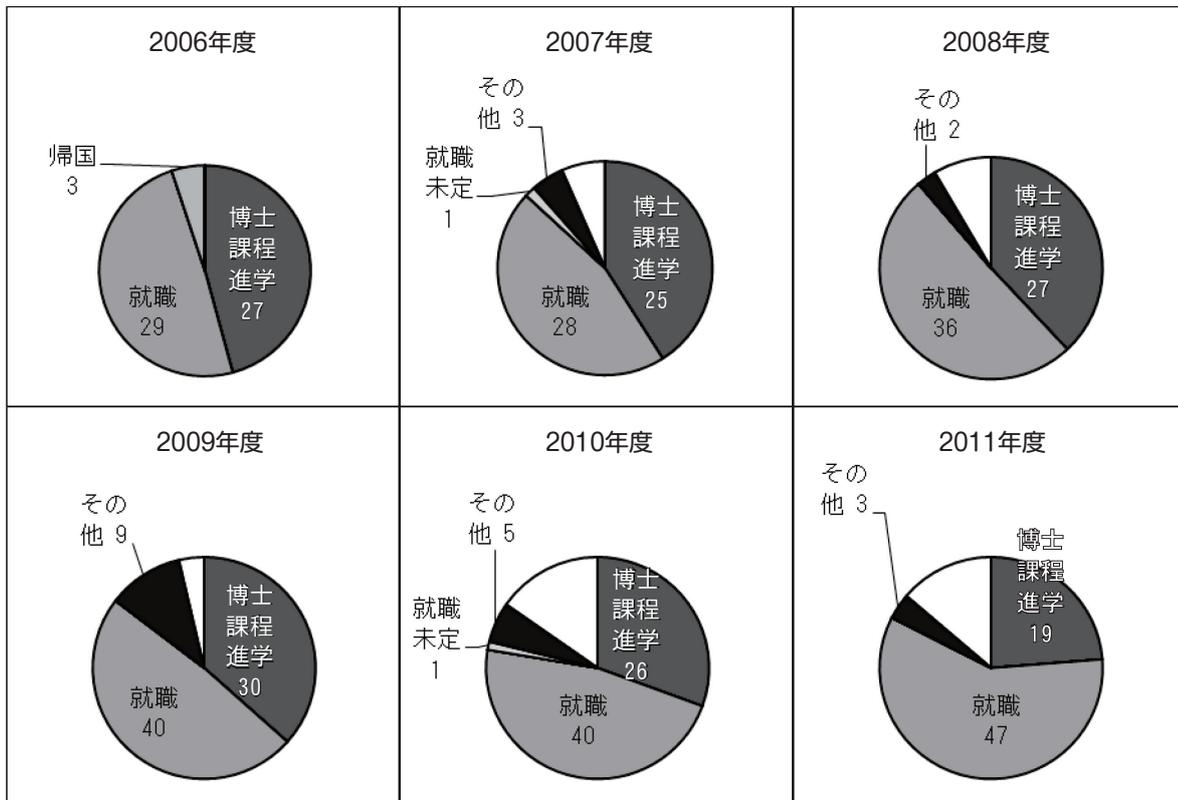


13 就職状況

学際情報学府修士課程修了者 進路状況資料 (2006年度～2011年度)

区分		2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
博士課程進学	学際情報学府	25	22	25	27	24	19
	学内他研究科		2	1	1	1	2
	学外	2	1	1	2	1	1
海外留学							
就職		29	28	36	40	40	47
大学院研究生	学際情報学府						
	学内他研究科						
帰国(外国人留学生)		3					
就職未定			1			1	
その他			3	2	9	5	3
不明			4	6	3	13	11
合計		59	61	71	82	※85	83

※ 2010年度 「博士課程進学」と同時に「就職」した者1名を、それぞれの項目に計上(重複計上)している。



<就職先一覧>

2006 年度	2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度
(株)電通 2	(株)野村総合研究所 3	(株)日本アイ・ビー・エム 3	(株)電通 4	(株)電通 3	エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ株式会社 3
(株)リクルート 2	(株)三菱東京UFJ銀行 2	(株)マイクロソフト 2	(株)NTTデータ 3	(株)楽天 3	株式会社SONY 3
倉敷市立短期大学 1	(株)日本電信電話 1	(株)IBMビジネスコンサルティングサービス 1	(株)ソニー 2	(株)ゴールドマン・サックス証券 2	株式会社エヌ・ティ・ティ・アイドコモ 2
(株)フロム・ソフトウェア 1	(株)リードエグジビション ジャパン 1	(株)NECエンジニアリング 1	東京大学 2	(株)凸版印刷 2	アクセンチュア株式会社 2
(株)コスモスペース 1	(株)IBMビジネスコンサルティングサービス 1	(株)NTTソフトウェア 1	(株)任天堂 2	Cisco Systems G.K. 1	株式会社電通 2
(株)日本アイ・ビー・エム・サービス 1	(株)ツアイト・フォト 1	(株)NTT 東日本 1	(株)Buffer Renaiss 1	Deloitte Touche Tohmatsu CPA Ltd. Dalian Branch 1	株式会社日本アイ・ビーエム 2
(株)アイ・ビー・エム・システムズ・エンジニアリング 1	(株)JM 1	(株)アクセンチュア・テクノロジー・ソリューションズ 1	(株)NTTソフトウェア 1	(株)朝日新聞社 1	グリー株式会社 2
(株)モルガン・スタンレー証券 1	(株)中日新聞社 1	(株)ソフトバンク 1	(株)Sight Entertainment Japan 1	(株)セガ 1	株式会社テレビ朝日 1
(株)沖電気工業 1	(株)思文閣 1	(株)テレビ朝日 1	(株)シリコンスタジオ 1	(株)ソニー・コンピュータエンタテインメント 1	有限会社リブレスク 1
(株)凸版印刷 1	(株)いまじん 1	(株)日本技芸 1	(株)りそな銀行 1	(株)テムジン 1	株式会社生活の友社 1

(株)インフォバーン	1	(株)松下電器産業	1	(株)ベネッセコーポレーション	1	(株)楽天	1	(株)メディア・ゲートジャパン	1	JFE スチール株式会社	1
(株)プラップジャパン	1	(株)ソニー	1	(株)ミキハウス	1	(株)ACCESS	1	(株)ソネットエンタテインメント	1	株式会社博報堂	1
(株)ヒューマンルネッサンス研究所	1	(株)日立システムズ	1	(株)モリサワ	1	(株)NTTドコモ	1	(株)東京センチュリーリース	1	株式会社ニトリ	1
(株)野村総合研究所	1	(株)ゲーグール	1	(株)リサ・パートナーズ	1	(株)アクセント	1	東京大学	1	朝日新聞社	1
(株)セイコーインスツル	1	(株)ソネットエンタテインメント	1	(株)ソラン	1	(株)サイバーエージェント	1	新潟県警察(行政)	1	面白法人カヤック	1
(株)日本総合研究所	1	(株)三菱総合研究所	1	(株)大和証券 SMBC	1	(株)シオン	1	(株)日刊工業新聞社	1	三三株式会社	1
(株)日本電信電話	1	(株)内田洋行	1	台湾銀行	1	(株)シグマクシス	1	(株)日興コーポリアル証券	1	Havok 株式会社	1
(株)ゴールドマン・サックス証券	1	(株)任天堂	1	立川市役所	1	(株)スクウェア・エニックス	1	(株)日産自動車	1	任天堂株式会社	1
(株)名古屋鉄道	1	(株)富士通	1	(株)テックファーム	1	(株)チャイナ・コンシエールジュ	1	(株)日本IBMソリューションサービス	1	株式会社ボストンコンサルティンググループ	1
(株)NTTコミュニケーションズ	1	(株)ナブテスコ	1	東京藝術大学教育研究助手	1	(株)日本政策金融公庫	1	(株)日本無線	1	スカパーJ SAT株式会社	1
日本生命保険相互会社	1	(株)d Space Japan	1	徳島文理大学	1	(株)三菱総研 DCS	1	(株)日本ロレアル	1	コーエーテクモホールディングス株式会社	1
(株)アイ・エム・ジェイ	1	(株)TBS テレビ	1	(株)日本航空インターナショナル	1	(株)三菱電機	1	(株)パナソニック	1	東芝ソリューション株式会社	1
(株)ACCESS	1	(株)NTTコミュニケーションズ	1	日本放送協会	1	(株)新日本製鉄	1	(株)パナソニックシステムソリューションズジャパン	1	株式会社三井住友銀行	1

(株)BOSCH	1	(株)トヨタ自動車	1	(株)根本特殊化学	1	(株)直島福武美術館財団	1	(株)パナソニックシステムネットワークス	1	日本放送協会	1
フリープランナー・ライター	1	(株)パスコ	1	(株)ブーズ・アンド・カンパニー	1	(株)日本アイ・ビーエム	1	(株)日立製作所	1	特許庁	1
NPO 法人 日本臨床研究支援ユニット	1			(株)フォスター電機	1	(株)日本テレビ	1	(株)富士通	1	毎日新聞社	1
日本放送協会	1			(株)丸善	1	日本放送協会	1	(株)丸善	1	PR会社	1
				(株)朝日新聞社	1	農林中央金庫	1	(株)三井住友銀行	1	JSR株式会社	1
				(株)かんぼ生命保険	1	(株)博報堂アイスタジオ	1	(株)メルリンチ日本証券	1	google	1
				(株)新潮社	1	(株)富士通	1	(株)郵便局	1	シリコンスタジオ	1
				(株)電通レイザーフィッシュ	1	(株)豊田中央研究所	1	(株)郵便事業	1	株式会社キーエンス	1
				(株)日本経済新聞社	1	(株)野村総合研究所	1	早稲田大学	1	株式会社野村総合研究所	1
				(株)野村総合研究所	1	福山大学	1	警察官(台湾)	1	マッキンゼー・アンド・カンパニー	1
						(株)エリプスガイド	1	企業名不明(海外企業)	1	トヨタ自動車株式会社	1
										ニールセンカンパニー(上海)	1
										株式会社ティーネット	1
										有限会社パークス	1
										プルデンシャル生命株式会社	1

14 研究員（客員）等

情報学環

事項／年度	19	20	21	22	23
受託研究員	0	0	0	0	0
中国政府派遣研究員	0	1	0	1	1
客員研究員	6	7	22	35	28
東京大学特別研究員	5	5	7	11	7
内地研究員	0	0	0	0	0
国際研究員等	10	9	4	4	3
交流研究員	2	2	3	9	11
私学研修員	1	0	0	0	0

15 学会賞など受賞者リスト

- ・池内克史「For significant work in physics-based vision with applications to robot vision and computer graphics」 Significant Researchers Award, IEEE Computer Society International Conference on Computer Vision (ICCV)
- ・玉城絵美「総長賞」東京大学
- ・独立行政法人 科学技術振興機構 五十嵐デザインインタフェースプロジェクト「扇風機 [エアースケッチャー]」グッドデザイン賞 (G マーク), グッドデザイン協会
- ・佐藤朝美「親子 de 物語 (オンラインコミュニティ)」第 5 回キッズデザイン賞 [ソーシャルキッズサポート部門], キッズデザイン協議会
- ・五十嵐 悠紀, 五十嵐 健夫, 鈴木 宏正「あみぐるみのための 3 次元モデリングと製作支援インタフェース」第 15 回論文賞, 日本ソフトウェア科学会
- ・東京大学大学院情報学環記録映画アーカイブ・プロジェクト「長編記録映画『夢と憂鬱—吉野馨治と岩波映画』」平成 23 年度文化庁映画賞・文化記録映画優秀作品賞, 文化庁
- ・東京大学大学院情報学環・学際情報学府「東京 3.11 の記録」プロジェクト「震災シューカツ 3.11—とある就活生の場合」第 31 回「地方の時代」映像祭 2011・奨励賞 (市民・学生・自治体部門), 「地方の時代」映像祭実行委員会
- ・James E. Young, Kentaro Ishii, Takeo Igarashi, and Ehud Sharlin 「Style by Demonstration: Teaching Interactive Movement Style to Robots」 Best Paper Award, The 17th ACM International Conference on Intelligent User Interfaces
- ・Yoshio Ishiguro, Jun Rekimoto 「Peripheral Vision Annotation: Noninterference Information Presentation Method for Mobile Augmented Reality」 AH2011 Best Paper Award
- ・Sunao Hashimoto, Akihiko Ishida, Masahiko Inami, Takeo Igarashi 「TouchMe: An Augmented Reality Based Remote Robot Manipulation」 Best paper honorable mention, The 21st International Conference on Artificial Reality and Telexistence, Proceedings of ICAT2011
- ・Masaki Fukushima, Teruyuki Hasegawa, Toru Hasegawa, Akihiro Nakao 「Minimum Disclosure Routing for Network Virtualization」 第 11 回 NS 研究賞, 電子情報通信学会
- ・藤村嘉一, 高橋俊允, 上條俊介「駅構内における姿勢・位置情報に基づいた行動把握フレームワーク」

優秀論文賞，第10回 ITS シンポジウム(ITS Japan)

- ・ 山口いつ子「情報法の構造—情報の自由・規制・保護」第3回 内川芳美記念 マス・コミュニケーション学会賞，日本マス・コミュニケーション学会
- ・ 竹内文乃「Monte Carlo Sensitivity Analysis for Adjusting Multiple-bias in the longitudinal cardiovascular study」日本計量生物学会 奨励賞
- ・ 佐藤朝美，山内祐平，星野俊樹，星野裕之，中川正男「社会性を育む保育環境デザイナー—ごっこ遊び遊具の提案」第8回こども環境学会 2011年大会優秀ポスター発表賞，こども環境学会
- ・ 市川暢之「情報技術活用による現場作業の支援方策の体系化」平成23年度全国大会第66回年次学術講演会優秀講演者，土木学会

16 論文数

年度	件数	文理融合	学環・学府内協力
1999年度以前	323	1	0
2000年度	645	48	14
2001年度	654	49	18
2002年度	916	98	53
2003年度	949	107	54
2004年度	904	122	83
2005年度	846	232	91
2006年度	982	149	24
2007年度	947	45	17
2008年度	1100	47	6
2009年度	1002	125	22
2010年度	1070	86	24
2011年度	1208	88	12
年度不明	34	0	0

注：業績 DB 入力データに基づく各年度の論文数(著書，分担著書，雑誌論文，国際会議論文，その他の論文，講演発表)

17 特許出願・公開数

年度	出願件数	公開
2000年度	6	0
2001年度	8	2
2002年度	5	5
2003年度	5	4
2004年度	1	2
2005年度	1	3
2006年度	2	1
2007年度	3	1
2008年度	4	2
2009年度	10	5

2010年度	17	6
2011年度	6	8
合計	68	39

18 国際団体役員・委員数

	学術的な団体の役員・委員*1	その他の団体役員・委員等*2
2009年度	16	1
2010年度	18	1
2011年度	13	1

*1 「学会・会議等役職」のうち「国際性有」かつ「学会役員委員」であるもの

*2 「団体役員・委員」のうち国際的なもの

19 政府関係委員会委員数

	2009年度	2010年度	2011年度
内閣官房	6	4	2
内閣府	9	5	4
総務省	19	23	25
経済産業省	8	3	5
文部科学省	7	7	8
厚生労働省	1	2	3
国土交通省	3	8	8
農林水産省	0	0	0
環境省	0	1	1
宮内庁	1	0	0
文化庁	3	0	0
特許庁	0	0	0
人事院	0	1	1
日本学術会議	0	0	0
その他	0	4	5
政府全体	57	58	62

20 地方公共団体関係委員会委員数

	2009年度	2010年度	2011年度
都道府県	6	3	4
市区町村	5	5	4
地方公共団体関係全体	11	8	8

21 ジャーナル編集・会議運営

	学会誌等編集査読*1	学術大会等運営*2
件数	12	18
うち国際的なもの	8	9

注：国内外の学会活動(学術誌編集委員，会議運営委員など) 注：2011年度のみ

*1 「学会・会議等役職」のうち「ジャーナル編集査読」であるもの

*2 「学会・会議等役職」のうち「大会組織運営」であるもの

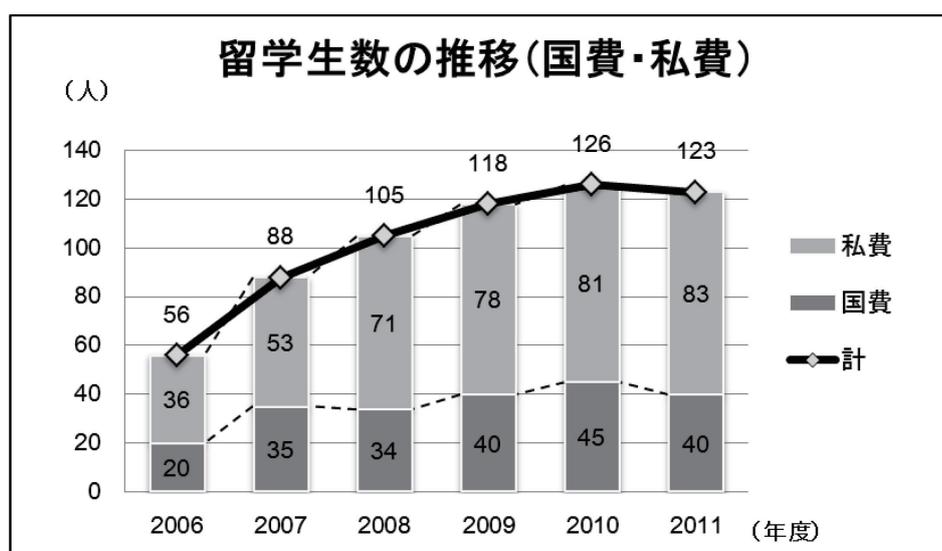
22 定期刊行物一覧

- ・『情報学研究 調査研究編』No.28 (2012年3月)
- ・『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 No.81 (2011年10月), No.82 (2012年3月)
- ・ニューズレター『学環学府』No.33 (2011年6月)、No.34 (2011年11月)、No.35 (2012年2月)

23 留学生数の推移

各年度5月1日現在

年度	修士		博士		外国人 研究生等		教育部 研究生	合計		総計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	私費	国費	私費	
2006	5	12	7	9	8	14	1	20	36	56
2007	12	16	8	13	15	23	1	35	53	88
2008	13	27	7	18	14	24	2	34	71	105
2009	15	33	13	19	12	24	2	40	78	118
2010	15	25	17	24	13	31	1	45	81	126
2011	10	30	22	29	8	23	1	40	83	123



24 留学生国籍別一覧(2011年5月1日現在)

国又は地域	国費	私費	計
アジア			
パキスタン	1		1
バングラデシュ	1		1
タイ	2	1	3
マレーシア	1		1
シンガポール		2	2
インドネシア		2	2
フィリピン		1	1
韓国	9	16	25
モンゴル		1	1
中国	7	40	47
台湾		9	9
小計	21	72	93
中近東			
イラン	1		1
トルコ	1	1	2
小計	2	1	3
アフリカ			
チュニジア	2		2
コンゴ民主共和国		1	1
小計	2	1	3
オセアニア			
オーストラリア	1	1	2
小計	1	1	2
北米			
アメリカ合衆国	2	4	6
小計	2	4	6
中南米			
ブラジル	4		4
小計	4	0	4
ヨーロッパ			
イギリス	1		1
ドイツ		2	2
フランス		1	1
スペイン	1		1
ギリシャ	1		1
チェコ	1		1
ロシア	2		2
エストニア	1		1
クロアチア	1		1
小計	8	3	11
合計	40	82	122

Ⅲ. 個人業績編

平成 24 (2012) 年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人の研究テーマおよび 2011 年度の研究業績を、各自が入力したデータベースの内容に基づき、収録しています。教員の配列は、当時の肩書きに基づいた以下のカテゴリーの順、また同一カテゴリー内では氏名の 50 音順となっています。

1. 教授
2. 准教授
3. 講師
4. 助教
5. 客員准教授
6. 特任准教授
7. 特任講師
8. 特任助教
9. 特任研究員

相澤 清晴・教授

研究テーマ(主たるもの)

ライフログ

3次元映像

研究業績(2011年度)

分担著書

Toshihiko Yamasaki and Kiyoharu Aizawa: "Modeling and Simulation in Engineering", REFINEMENT OF VISUAL HULLS FOR HUMAN PERFORMANCE CAPTURE 編, InTech Open Access Publisher, 2011年.

相澤清晴 分担執筆:「科学技術・研究開発の国際比較 2011年版」, 科学技術振興機構 編, 研究開発戦略センター, 2011年.

雑誌論文

Ren´e M A Teixeira, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Affective Determination of Video Clips by Low Level Audiovisual Features", Multimedia Tools and Applications, Springer, DOI 10.1007/s11042-010-0702-0, 2011年. 【査読有】

Ovgu Ozturk, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Real-time tracking of multiple humans and visualization of their future footsteps in public indoor environments", Multimedia Tools and Applications, Special Issue on Intelligent Interactive Multimedia Systems and Services, Springer, DOI 10.1007/s11042-010-0691-z, 2011年. 【査読有】

Gamhewage Chaminda de Silva, Kiyoharu Aizawa, Makoto Ogawa, Yohei Sato: "FoodLog: Using Computer Vision and Social Networking to Support Dietary Assessment", The Journal of the Federation of Societies for Experimental Biology, 2011年. 【査読有】

杉山春樹, 森川茶民, 相澤清晴:「極値点情報と GrabCut による食事画像領域分割」, 映像情報メディア学会誌, 2011年. 【査読有】

Ji-Ho Cho, Kwan H. Lee, Kiyoharu Aizawa: "Enhancement of Depth Maps with Alpha Channel Estimation for 3D Video", IEEE Journal of Selected Topics in Signal Processing, 2011年. 【査読有】

相澤清晴, 小川誠:「マルチメディア食事記録と画像処理による食事内容解析」, 情報処理学会誌, Vol.52, No.11, pp.1382-1387, 2011年. 【査読有】

作品

相澤清晴:「食に関わるライフログ共有技術基盤」, 情報環境領域シンポジウム, 2011.

国際会議等

Gamhewage Chaminda de Silva, Kiyoharu Aizawa, Makoto Ogawa, Yohei Sato: "FoodLog: Using Computer Vision and Social Networking to Support Dietary Assessment", Experimental Biology2011(EB2011), 2011. 【査読有】

Chaminda De Silva, Kiyoharu Aizawa, Yuki Arase, Xing Xie: "Capturing, Using and Sharing a Liflog Dataset", Information Access for Personal Media Archives (IAPMA2011), pp.4-7, 2011. 【査読有】

Ji-Ho Cho, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa, Kwan H. Lee: "Depth Video Camera Based Temporal Alpha Matting For Natural 3D Scene Generation", 3DTV Conference (3DTV-CON), 2011. 【査読有】

Tatsuya Miyazaki, Gamehewage C. de Silva, Kiyoharu Aizawa: "Image-based Calorie Content Estimation for Dietary Assessment", ISM11, Workshop on Multimedia for Cooking and Eating Activities, pp.363-368, 2011. 【査読有】

Shuichi AOKI, Katsunori AOKI, Hiroyuki HAMADA, Yasuaki KANATSUGU, Makoto YAMAMOTO, and Kiyoharu AIZAWA: "A New Transport Scheme for Hybrid Delivery of Content over Broadcast and Broadband", IEEE International Symposium on Broadband Multimedia Systems and Broadcasting 2011, 2011. 【査読有】

Gamhewage De Silva, Kiyoharu Aizawa, Yuki Arase and Xing Xie: "Interactive Social, Spatial and Temporal Querying for Multimedia Retrieval", Content-Based Multimedia Indexing (CMBI2011), 2011. 【査読有】

Ji-Ho Cho, Min Ki Park, Kwan H. Lee, Kiyoharu Aizawa: "Automatic Alpha Matting with Adaptive Trimap Generation using Depth Camera", 3DSA(3D Systems and Applications), pp.233-236, 2011. 【査読有】

Kiyoharu Aizawa: "Foodlog: Image retrieval for specific needs (invited)", Student Forum ICME 2011, 2011. 【査読有】

Yusuke Matsui, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Interactive Manga Retargeting, SIGGRAPH poster paper", ACM Student Research Competition 3rd place, 2011. 【査読有】

Weilan Luo, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Marker-less Human Pose Estimation and Surface Reconstruction Using a Segmented Model", IEEE Int. Conf. Image Processing (ICIP2011), No. MP.PB.10, pp.901-904, 2011. 【査読有】

Rajlaxmi Chouhan, Rajib Kumar Jha, Apoorv Chaturvedi, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Robust Watermark Extraction Using SVD-based Dynamic Stochastic Resonance", IEEE Int. Conf. Image Processing (ICIP2011), No.WA.PB.9, pp.901-904, 2011. 【査読有】

Makoto Ogawa, Yohei Sato, Kiyoharu Aizawa: "A Smart Phone Based Calorie Counting System with Food Photo Analysis", Health 2.0, 2011. 【査読有】

S.Kawamura, T.Ohtani, K.Aizawa: "Interactive Museum Guide with Image Based Indoor Localization", IRCAM, 2011. 【査読有】

K. Aizawa: "Life log for specific needs, Next Generation of Virtual Reality, Todai Forum 2011", IRCAM, 2011. 【査読有】

Han-Ping Cheng, Yun-Chung Shen, Ja-Ling Wu, Kiyoharu Aizawa: "High Efficient Distributed Video Coding with Parallelized Design for Cloud Computing", ACM Multimedia, pp.1257-1260, 2011. 【査読有】

Go Irie, Takashi Satou, Akira Kojima, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Image Collection Summarization for Search Result Overviewing on Mobile Devices", ACM Multimedia, International ACM Workshop on Interactive Multimedia on Mobile and Portable Devices (IMMPD), pp.22-26, 2011. 【査読有】

その他論文

相澤清晴:「映像メディアのパーソナル化とソーシャル化」, 三菱電機技報, 2011 年.

相澤清晴, 小川誠:「IT を活用した栄養・食事指導の可能性: FoodLog 写真で簡単食事日記」, 臨床栄養, pp.124-128, 2011 年. 【査読有】

相澤清晴:「展望」, 映像情報メディア学会誌, ポスト地上デジタル放送特集, Vol.65, No.9, pp.1246-1247, 2011 年. 【査読有】

講演・口頭発表

河治寿都, 河村聡一郎, 山崎俊彦, 相澤清晴:「時間変化を考慮した画像に基づく鑑賞者の位置推定—博物館における検討—」, 電子情報通信学会 マルチメディアと仮想環境基礎研究会, 2011.

Chaminda de Silva, Kiyoharu Aizawa, Yuki Arase, Xing Xie:「Pics」, 電子情報通信学会 ライフインテリジェンスとオフィスシステム研究会, 2011.

松濤智明, 山崎俊彦, 相澤清晴:「天井カメラ映像を用いた公共空間の人物属性解析」, 電子情報通信学会, パターン認識とメディア理解研究会, 2011.

青木秀一、浜田浩行、青木勝典、相澤清晴:「ハイブリッド型放送におけるメディアのトランスポート方式」, 情報処理学会 オーディオビジュアル複合情報処理研究会, 2011.

河野一步, 山崎俊彦, 相澤清晴:「衣服ログ:イベントとの連携によるコーディネート支援を目指して」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

谷澤幹也, 山崎俊彦, 相澤清晴:「位置履歴を用いた屋内写真からの施設同定」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

河村聡一郎, 河治寿都, 山崎俊彦, 相澤清晴:「博物館来訪者が撮影した写真に基づく経路推定」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

松井勇佑, 山崎俊彦, 相澤清晴:「二値線画である漫画画像のリターゲティング」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

河治寿都, 河村聡一郎, 山崎俊彦, 相澤清晴:「履歴を考慮した画像に基づく博物館内の鑑賞者の位置同定」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

ビ ウェイ, 山崎俊彦, 相澤清晴:「動き情報を用いた多視点画像から 3D 形状復元手法」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

池畑 諭, 山崎俊彦, 相澤清晴:「信頼度に基づいた重み付きバンドル調整によるワイドベースライン画像の高精度デプスマップ推定」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

丸山悠斗, デシルヴァチャミンダ, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「食事ログにおける各個人の食事時刻と食傾向を利用した食事バランス推定」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

杉山春樹, De Silva Gamhewage Chaminda, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「テクスチャ解析による食事画像の領域分割」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

松濤智明, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「天井カメラ映像による公共空間での複数人物追跡と属性解析」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

関口頌一朗, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「低次特徴量を用いた画像からの人数計測」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

宇野友季子, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「単眼動画画像を用いた大きな姿勢変化を伴う運動の種別判定」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

Chen Fu, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: 「Video2Manga: Create Manga in My Way」, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

Weilan Luo, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: “Marker-less Pose Estimation for Fast Human Motion Clips”, 電子情報通信学会 総合大会, 2011.

相澤清晴: 「FoodLogと画像処理」, 食メディア研究会 第1回研究会「食事科学と食メディア研究の接点」, 2011.

相澤清晴: 「災害と超臨場感」, URCFセミナー「多視点映像技術の勉強会」がんばろう日本! 超臨場感のこの先, 多視点からのアプローチ, 2011.

Zhipeng Wu, Kiyoharu Aizawa: 「Mining Self-Similarity for Near-Duplicate Video Retrieval」, 電子情報通信学会 パターン認識とメディア理解研究会, 2011.

宮崎達也, デシルヴァ, ガムヘワゲチャミンダ, 相澤清晴: 「食事画像からのカロリー推定 - 複数の低次特徴に基づく辞書照合と重回帰分析によるアプローチ-」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2011), 2011.

Zhipeng Wu, Kiyoharu Aizawa: 「Two Geometric Constraints for Bundled Features in Partial-Duplicate Image Retrieval」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2011), 2011.

Zhipeng Wu, Kiyoharu Aizawa: 「Zhipeng Wu, Kiyoharu Aizawa」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2011), 2011.

河村聡一郎, 相澤清晴: 「博物館来館者の疎な位置からの経路推定 - デジタルミュージアムでの鑑賞記録作成に向けて-」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2011), 2011.

杉山 春樹, デシルヴァ ガムヘワゲ チャミンダ, 相澤 清晴: 「極値点情報とGrabCutを利用した食事画像の領域分割」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2011), 2011.

杉山 春樹, デシルヴァ ガムヘワゲ チャミンダ, 相澤 清晴: 「極値点情報とGrabCutを利用した食事画像の領域分割」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2011), 2011.

松井勇佑, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「画に対するリタゲティング」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2011), 2011.

池畑諭、山崎俊彦、相澤清晴:「多視点ステレオのための信頼度に基づく高精度デプスマップの推定と融合」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2011), 2011.

松井勇佑, 山崎俊彦, 相澤清晴:「インタラクティブな漫画のリターゲティング」, 映像情報メディア学会年次大会, 2011.

松井勇佑, 山崎俊彦, 相澤清晴:「インタラクティブな漫画のリターゲティング」, 映像情報メディア学会年次大会, 2011.

河村聡一郎, 山崎俊彦, 相澤清晴:「博物館来館者の疎な位置からの経路推定」, 映像情報メディア学会年次大会, 2011.

杉山春樹・デシルヴァガムヘワゲチャミンダ・相澤清晴:「極値点情報とGrabCutによる食事画像の領域分割」, 映像情報メディア学会年次大会, 2011.

宮崎達也、小川 誠、デシルヴァガムヘワゲチャミンダ、相澤清晴:「辞書画像群を用いた食事画像からのカロリー推定」, 映像情報メディア学会年次大会, 2011.

Weilan Luo, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa:「Surface Estimation Based on Model Segmentation」, 映像情報メディア学会年次大会, 2011.

Zhipeng Wu・相澤清晴:「Appearance-based Friend Recommendation for Social Network Service」, 映像情報メディア学会年次大会, 2011.

松村成朗・関口頌一郎・相澤清晴:「単回帰と重回帰の複合による複数の低次特徴からの画像中の人数予測」, 映像情報メディア学会年次大会, 2011.

青木秀一, 浜田浩行, 青木勝典, 相澤清晴:「コンポーネントを組み合わせ可能なトランスポート方式の多重機能」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, 2011.

河村聡一郎, 相澤清晴:「博物館来訪者による写真を用いた位置・経路推定」, 日本バーチャルリアリティ学会 第16回大会, 2011.

相澤清晴:「パネル討論:デジタルミュージアムの課題」, 日本バーチャルリアリティ学会 第16回大会, 2011.

Weilan Luo, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa :「Markerless Human Motion Extraction And Surface Estimation Based on Model Segmentation」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2011), 2011.

岩館祐一, 相澤清晴, 苗村健, 広田光一, 山崎眞見, 及川道雄, 小池崇文, 片山美和, 久富健介, 池谷健佑, 趙志鎬, 久保友香, 宇都木契:「インテグラル立体コンテンツ生成のための要素技術の開発」, メディア工学, 2011.【招待講演】

相澤清晴, 小川誠:「FoodLogにおけるクラウドとパターン認識(特別講演)」, 電子情報通信学会 パターン認識とメディア理解研究会, 2011.【招待講演】

Rene M A Teixeira, Kiyoharu Aizawa:「Camera Noise Compensation by Coded Aperture」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2011), 2011.

Chamin Morikawa, Kiyoharu Aizawa, Yuki Arase, Xing Xie: 「Interactive Multi-dimensional Queies for Retrieving Social, Spatial and Temporal Multimedia」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2011), 2011.

Ji-Ho Cho, Kiyoharu Aizawa: 「3D Video Aquired by Kinect」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2011), 2011.

青木秀一, 浜田浩行, 青木勝典, 相澤清晴: 「メディアトランスポート方式 ATS における AL-FEC の機能検証」, 映像情報メディア学会冬季大会, 2011.

新聞・報道

相澤清晴: 「健康増進アシストサービス」, 毎日放送「知っとこ!」, 2011.

相澤清晴: 「健康増進アシストサービス」, 日経 MJ「未来を拓く IT 技術」, 2011.

相澤清晴: 「「100 万人のいただきます」TABLE FOR TWO の iPhone アプリ」, インターネットニュース, 2011.

相澤清晴: 「東京大学発 食事写真解析技術を活用したカロリー入力支援・食事管理スマートフォンアプリ『FoodLog Cal』、米国「Health2.0」にて発表！スマートフォンを利用して、食事写真でカロリー管理～」, インターネットニュース, 2011.

相澤清晴: 「進化形 AR サービス最前線」, 小学館 DIME 誌, 2011.

特許

江豪, 佐藤隆, 小島明, 相澤清晴, 山崎俊彦: 「画像処理装置, 画像処理方法及び画像処理プログラム」, 特願 2011-139538, 2011 年 06 月.

相澤清晴, チャンミンダ, 小川誠, 杉山春樹: 「画像処理装置」, 特願 2011-164465, 2011 年 07 月.

五十嵐 健夫・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

分担著書

Takeo Igarashi: “Chapter 8 A Sketching Interfac for Freeform 3D Modeling. Sketch-based interfaces and Modeling”, Joaquim Jorge and Faramarz Samavati 編, Springer, 2011 年.

雑誌論文

Kenshi Takayama, Ryan Schmidt, Karan Singh, Takeo Igarashi, Tamy Boubekeur, Olga Sorkine. GeoBrush: "Interactive Mesh Geometry Cloning", Computer Graphics Forum, 30(2) (proceedings of Eurographics 2011), Vol.30, No.2, 2011 年. 【査読有】

James E. Young, JaYoung Sung, Amy Voids, Ehud Sharlin, Takeo Igarashi, Henrik I. Christensen and Rebecca E. Grinter: "Evaluating Human-Robot Interaction Focusing on the Holistic Interaction Experience", International Journal of Social Robotics, Volume 3, Number 1, Vol.3, No.1, pp.53-67, 2011 年. 【査読有】

梅谷信行、高山健志、三谷純、五十嵐健夫: 「実時間固有値解析による対話的な鉄琴のデザイン」, 情報処理学会論文誌、インタラクシヨンの基盤技術、デザインおよび応用, Vol.52, No.4, pp.1599-1607, 2011 年. 【査読有】

加藤 淳, 坂本 大介, 稲見 昌彦, 五十嵐 健夫: 「Andy: 俯瞰カメラとマーカを用いた移動ロボットアプリケーション開発用ツールキット」, 情報処理学会論文誌、インタラクシヨンの基盤技術、デザインおよび応用, Vol.52, No.4, pp.1425-1437, 2011 年. 【査読有】

Manfred Lau, Akira Ohgawara, Jun Mitani, Takeo Igarashi: "Converting 3D Furniture Models to Fabricatable Parts and Connectors", ACM Transaction on Graphics (SIGGRAPH 2011), 2011 年. 【査読有】

Nobuyuki Umetani, Danny Kaufman, Takeo Igarashi, Eitan Grinspun: "Nobuyuki Umetani, Danny Kaufman, Takeo Igarashi, Eitan Grinspun", ACM Transaction on Graphics (SIGGRAPH 2011), 30(4), Vol.30, No.4, 2011 年. 【査読有】

Yuki Igarashi and Hiromasa Suzuki: "Cover Geometry Design using Multiple Convex Hulls", Computer-Aided Design, Volume 43, Issue 9, Vol.43, No.9, pp.1154-1162, 2011 年. 【査読有】

Yuki Igarashi: "DECO: A Designing Editor for Rhinestone Decoration", IEEE Computer Graphics and Applications (vol. 31 no. 5), Vol.31, No.5, pp.90-94, 2011 年. 【査読有】

Bo Zhu, Michiaki Iwata, Ryo Haraguchi, Takashi Ashihara, Nobuyuki Umetani, Takeo Igarashi, Kazuo Nakazawa: "Sketch-based Dynamic Illustration of Fluid System", ACM Transactions on Graphics Volume 30, Issue 6, Proceedings of SIGGRAPH Asia 2011, Vol.30, No.6, 2011 年. 【査読有】

国際会議等

Wataru Yoshizaki, Yuta Sugiura, Albert C. Chiou, Sunao Hashimoto, Masahiko Inami, Takeo Igarashi, Yoshiaki Akazawa, Katsuaki Kawauchi, Satoshi Kagami, Masaaki Mochimaru: "An Actuated Physical Puppet as an Input Device for Controlling a Digital Manikin", the ACM CHI Conference on Human Factors in Computing Systems (CHI2011), 2011. 【査読有】

Manfred Lau, Jun Mitani, Takeo Igarashi: "Automatic Learning of Pushing Strategy for Delivery of Irregular-Shaped Objects", The 2011 IEEE International Conference on Robotics and Automation (ICRA 2011), 2011. 【査読有】

Kexi Liu, Daisuke Sakamoto, Masahiko Inami, Takeo Igarashi: "Roboshop: Multi-layered Sketching Interface for Robot Housework Assignment and Management", the ACM CHI Conference on Human Factors in Computing Systems (CHI2011), 2011. 【査読有】

Richard Fung, Sunao Hashimoto, Masahiko Inami, Takeo Igarashi: "An Augmented Reality System for Teaching Sequential Tasks to a Household Robot", 20th IEEE International Symposium on Robot and Human Interactive Communication (Ro-Man 2011), pp.282-287, 2011. 【査読有】

James Everett Young, Youichi Kamiyama, Juliane Reichenbach, Takeo Igarashi, Ehud Sharlin: "How to Walk a Robot: A Dog-Leash Human-Robot Interface", 20th IEEE International Symposium on Robot and Human Interactive Communication (Ro-Man 2011), pp.376-382, 2011. 【査読有】

Jun Mitani, Takeo Igarashi: "Interactive Design of Planar Curved Folding by Reflection", The 19th Pacific Conference on Computer Graphics and Applications (Pacific Graphics 2011), pp.77-81, 2011. 【査読有】

Y. Sugiura, G. Kakehi, A. Withana, C. Lee, D. Sakamoto, M. Sugimoto, M. Inami and T. Igarashi: "Detecting Shape Deformation of Soft Objects Using Directional Photoreflectivity Measurement", the 24th annual ACM symposium on User interface software and technology (UIST 2011), 2011. 【査読有】

Sunao Hashimoto, Akihiko Ishida, Masahiko Inami, Takeo Igarashi: "TouchMe: An Augmented Reality Based Remote Robot Manipulation", The 21st International Conference on Artificial Reality and Telexistence, Proceedings of ICAT2011, 2011. 【査読有】

Yuki Igarashi, Takeo Igarashi and Jun Mitani: "Beady: Interactive Beadwork Design and Construction", ACM SIGGRAPH Asia 2011 Technical Sketch, 2011. 【査読有】

Manfred Lau, Masaki Hirose, Akira Ohgawara, Jun Mitani, Takeo Igarashi: "Situating Modeling: A Shape-Stamping Interface with Tangible Primitives", The 6th International Conference on tangible, embedded and embodied interaction (TEI 2012), 2012. 【査読有】

Amy Wibowo, Daisuke Sakamoto, Jun Mitani, Takeo Igarashi: "DressUp: A 3D Interface for Clothing Design with a Physical Mannequin", The 6th International Conference on tangible, embedded and embodied interaction (TEI 2012), 2012. 【査読有】

James Young, Kentaro Ishii, Takeo Igarashi, Ehud Sharlin: "Style by Demonstration: Teaching Interactive Movement Style to Robots", 2012 International Conference on Intelligent User Interfaces (IUI2012), 2012. 【査読有】

その他論文

橋本直, 石田明彦, 稲見昌彦, 五十嵐健夫: 「TouchMe: CG 重畳表示を用いたロボットの直接操作手法」, 第 144 回ヒューマンコンピュータインタラクション研究会 (HCI144), 2011 年. 【査読有】

杉浦裕太, 箕豪太, ウィタナ アヌーシャ, リーカリスト, 坂本大介, 杉本麻樹, 稲見昌彦, 五十嵐健夫: 「FuwaFuwa: 反射型光センサによる柔軟物体への接触位置および圧力の計測手法の提案とその応用」, エンタテインメントコンピューティング 2011 (EC2011), 口頭発表賞, 2011 年. 【査読有】

三谷 純, 五十嵐 健夫: 「Apparent Layer Operations を活用した結び目と水引のCGモデル構築」, 2011 年 日本図学会秋期大会, pp.145-148, 2011 年. 【査読有】

加藤淳, 坂本大介, 五十嵐健夫: 「Sharedo: To-do リストによる人-ロボット間のタスク共有」, 第 19 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS2011), pp.102-107, 2011 年. 【査読有】

杉浦裕太, リーカリスト, 尾形正泰, 牧野泰才, 坂本大介, 稲見昌彦, 五十嵐健夫: 「PINOKY: ぬいぐるみを駆動するリング型のデバイス」, 第 19 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS2011), pp.13-18, 2011 年. 【査読有】

五十嵐悠紀, 五十嵐健夫, 三谷純: 「インタラクティブなビーズデザインと制作支援」, 第 19 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2011), 2011 年. 【査読有】

渡邊恵太, 佐藤彩夏, 松田聖大, 稲見昌彦, 五十嵐健夫: 「smoon: Web の実体化による行動支援とその試作」, 第 19 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2011), 2011 年. 【査読有】

五十嵐健夫: 「文の構造を明示的に指定・表示することによる異言語間コミュニケーション」, 第 19 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2011), 2011 年. 【査読有】

講演・口頭発表

Takeo Igarashi: 「User Interface for Design」, @KUCA Kyoto City University of Arts ART Gallery, 2011. 【招待講演】

Takeo Igarashi: “Design Everything by Yourself”, ACM International Conference on Intelligent User Interfaces 2012, 2012. 【招待講演】

新聞・報道

五十嵐健夫: 「型紙作成ツール開発 東大 リアルタイムに形状反映」, 日刊工業新聞, 2011.

受賞

独立行政法人 科学技術振興機構 五十嵐デザインインタフェースプロジェクト: グッドデザイン賞 (G マーク)「扇風機 [エアースケッチャー]」, グッドデザイン協会 2011 年, 2011 年.

五十嵐 悠紀, 五十嵐 健夫, 鈴木 宏正: 第 15 回論文賞「あみぐるみのための 3 次元モデリングと製作支援インタフェース」, 日本ソフトウェア科学会, 2011 年.

Sunao Hashimoto, Akihiko Ishida, Masahiko Inami, Takeo Igarashi: Best paper honorable mention「TouchMe: An Augmented Reality Based Remote Robot Manipulation」, The 21st International Conference on Artificial Reality and Telexistence, Proceedings of ICAT2011, 2011 年.

James Young, Kentaro Ishii, Takeo Igarashi, Ehud Sharlin: Best paper award「Style by Demonstration: Teaching Interactive Movement Style to Robots」, 2012 International Conference on Intelligent User Interfaces (IUI2012), 2012 年.

池内 克史・教授

研究テーマ(主たるもの)

文化遺産のデジタル化

世界各地の貴重な文化遺産をレーザ測定システムによって数ミリ精度で計測し、デジタルデータの形で保存するプロジェクトを進めています。これまでに鎌倉高德院の国宝阿弥陀仏像(鎌倉大仏)、奈良東大寺の国宝廬舎那仏坐像(奈良大仏)、タイ・スコタイのアチャナ仏、カンボジア・アンコールトムのパイヨン寺院などをデジタル化してきました。これらのデータは、VR(バーチャルリアリティ)のコンテンツ作成、文化遺産の破損、欠損時には修復のために、また製作当時の状態への仮想的復元といった応用など、幅広い分野での利用が期待されています。

人間行動観察学習ロボット

幼児の学習の大部分は、親の行動を見て真似ることから始まります。我々の研究室では、人間の行動を主に視覚によって観察し、これを理解して同じ行動を再現するロボットプログラムの自動生成を研究テーマとしており、主に「全身運動の獲得」と「手作業の獲得」の2つの課題について研究を進めています。

4次元仮想化都市

都市などの広域にわたる実空間の三次元モデル化を効率的に行うため、実験車両に搭載したカメラやレンジセンサおよび電子地図を利用して、要素技術となる画像・距離画像の処理手法を研究しています。また、実空間の動きを仮想空間に重畳する研究や、車両や車種を自動的に認識・判別する研究を行っています。

研究業績(2011年度)

雑誌論文

小野晋太郎, 阪野貴彦, 佐藤啓宏, 池内克史: 「長大・複雑な道路トンネルの精細な三次元モデリング」, JACIC 情報, Vol. 26, No.3, pp.22-27, 2011 年.

Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "Disparity Map Refinement and 3D Surface Smoothing via Directed Anisotropic Diffusion", Computer Vision and Image Understanding, Vol.115, No.5, pp.611-619, 2011 年. 【査読有】

池内克史: 「文化を守る VR, MR」, JACIC 情報, Vol.26, No.3, pp.1, 2011 年.

大石岳史, 岡本泰英, 佐藤啓宏, 阪野貴彦, 影沢政隆, 池内克史, 角田哲也: 「クラウドミュージアム-奈良・平城宮跡における取組み-」, JACIC 情報, Vol.26, No.3, pp.56-61, 2011 年.

須田義大, 池内克史, 中野公彦, 牧野浩志, 田中伸治, 平沢隆之, 小野晋太郎, 洪性俊: 「ITSにおける道路基盤地図情報の活用」, 月刊誌土木技術資料, Vol.153, No.10, 2011 年.

小野晋太郎, 川上玲, 大石岳史, 池内克史: 「ヴェズヴィオ火山罹災遺跡の仮想復元と利活用」, 遺跡学研究, Vol.2, No.8, 2011 年.

Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "Determination of Motion Parameters of a Moving Range Sensor Approximated by Polynomials for Rectification of Distorted 3D Data", Machine Vision and Applications, Vol.22, No.6, pp.889-897, 2011 年. 【査読有】

Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "Estimation of F-Matrix and Image Rectification by Double Quaternion", Information Science, Vol.183, No.1, pp.140-150, 2012 年. 【査読有】

国際会議等

Joon-Young Lee, Boxin Shi, Yasuyuki Matsushita, In-So Kweon, Katsushi Ikeuchi: "Radiometric Calibration by Transform Invariant Low-rank Structure", CVPR2011, 2011. 【査読有】

Rei Kawakami, John Wright, Yu-Wing Tai (KAIST), Yasuyuki Matsushita, Moshe Ben-Ezra (Microsoft Research Asia), Katsushi Ikeuchi: "High-resolution Hyperspectral Imaging via Matrix Factorization", CVPR2011, 2011. 【査読有】

Mostafa Kamali, Atsuhiko Banno, Jean-Charles Bazin, In So Kweon, Katsushi Ikeuchi: "Stabilizing Omnidirectional Videos Using 3D Structure and Spherical Image Warping", MVA2011, 2011. 【査読有】

Min Lu, Mawo Kamakura, Bo Zheng, Jun Takamatsu, Ko Nishino, Katsushi Ikeuchi: "Clustering Bayon Face Towers Using Restored 3D Shape Models", 第 2 回 文化とコンピューティング国際会議 & エキシビジョン, 2011. 【査読有】

その他論文

阪野貴彦, 小野晋太郎, 佐藤啓宏, 薛亮, 池内克史: 「大規模トンネルの高精度 3 次元デジタル化」, サイバースペースと仮想都市研究会, 2011 年. 【査読有】

池内克史: 「e-Heritage とクラウドミュージアム」, 情報技術研究部門第 18 回セミナー, 2011 年.

池内克史: 「人間行動観察ロボット」, 情報技術研究部門第 18 回セミナー, 2011 年.

阪野貴彦, 小野晋太郎, 佐藤啓宏, 薛亮, 池内克史: 「3 次元計測による大規模トンネル内部の高精度デジタルモデル化」, 2011 年春 季大会学術講演会(自動車技術会), 2011 年.

野中伴文, 子安大士, 前川仁, 川崎洋, 小野晋太郎, 池内克史: 「全方位ステレオ視を用いたスキャンマッチングによる 6 自由度 SLAM」, 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2011 年.

池内克史: 「スマートツーリズムと震災」, RC24 ITS に関する研究懇談会, 2011 年. 【査読有】

小林由枝, 川上 玲, 池内克史: 「対数空間における基底関数の線形従属性と推定精度の検証」, MIRU2011, 2011 年.

千代裕介, 阪野貴彦, 大石岳史, 池内克史: 「時間方向への外挿・内挿に基づく前景領域抽出とフレーム補間」, MIRU2011, 2011 年. 【査読有】

池内克史: 「e-Heritage とクラウドミュージアム」, 情報処理学会北陸支部講演会, 2011 年.

Shangbin Shu, Bjoern Rennhak, Yoshihiro Sato, Shunsuke Kudoh, Jun Takamatsu, Katsushi Ikeuchi: "Virtual Link for Manipulation Planning of Two Rope Knots", 第 29 回日本ロボット学会学術講演会 2011, 2011 年. 【査読有】

内藤理, 佐藤啓宏, 工藤俊亮(電気通信大学), 池内克史: 「日本ロボット学会誌と IEEE/T-RO における研究者ネットワークの比較及び日本出身研究者の採るべき研究戦略」, 第 29 回日本ロボット学会学術講演会 2011, 2011 年. 【査読有】

宇野友季子, Salman Valibeik, 工藤俊亮(電通大), 佐藤啓宏, 池内克史: 「階層的キーポーズ分析に基づく距離画像を用いた武道動作の時間軸セグメンテーション」, 第 29 回日本ロボット学会学術講演会 2011, 2011 年. 【査読有】

Bjoern RENNHAK, Takaaki SHIRATORI, Shunsuke KUDOH, Yoshihiro SATO, Katsushi IKEUCHI: "Dance Motion Structure Detection through a Full Body Turning Motions Model for Japanese and Latin Dances", 第 29 回日本ロボット学会学術講演会 2011, 2011 年. 【査読有】

薛亮, 小野晋太郎, 阪野貴彦, 大石岳史, 佐藤啓宏, 池内克史: "車載レンジセンサを用いた長大トンネルの 3 次元モデリング", 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011 年. 【査読有】

小野晋太郎, 大石岳史, 影沢政隆, 池内克史(東京大学), 櫻田健, 岡谷貴之, 出口光一郎(東北大学): "全方位映像による東日本大震災の被災記録と仮想臨場体感システム", 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011 年. 【査読有】

韓亜由美, 小野晋太郎, 佐々木正人, 須田義大, 池内克史(東京大学), 玉木真(株式会社ステューディオ ハン デザイン), 岡部翔太(首都高速道路株式会社): "シークエンスデザイン'オプティカルドット'による走行制御効果の推移", 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011 年. 【査読有】

王志鵬, 影澤政隆, 小野晋太郎, 阪野貴彦, 池内克史: "赤外線カメラを用いたトンネル内の自動走行のための非常灯検知", 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011 年. 【査読有】

池内克史: 「画像処理とロボット」, 自動制御・ロボット分野講演会, 2011 年.

池内克史: 「e-Heritage プロジェクト」, e-Heritage プロジェクト, 2012 年. 【査読有】

池内克史: 「観光 ITS とクラウドコンピューティング」, 社会人のための ITS 専門講座, 2012 年.

池内克史: 「クラウドミュージアム 一乗谷朝倉氏城下町を仮想空間で体験する」, 「わくわくする博物館」創造セミナー, 2012 年.

講演・口頭発表

池内克史: 「e-Heritage とクラウドミュージアム」, 情報技術研究部門第 18 回セミナー, 2011. 【招待講演】

池内克史: 「震災と ITS」, 震災と ITS, 2011. 【招待講演】

池内克史: "For-dimensional Virtual cities and smart tourism", International Symposium on ITS Research 2011 in Taiwan, 2011. 【招待講演】

池内克史: 「スマートツーリズムと震災」, RC24 ITS に関する研究懇談会, 2011.

池内克史: 「e-Heritage とクラウドミュージアム」, 情報処理学会北陸支部講演会, 2011. 【招待講演】

池内克史: "e-Heritage とクラウドミュージアム", 2011 敦煌フォーラム: 文化遺産とデジタル化国際研究会敦煌フォーラム, 2011. 【招待講演】

池内克史: 「For-dimensional Virtual cities and smart tourism」, 2011 Dunhuang Forum: International Conference on Cultural Heritages and Digitization, 2011. 【招待講演】

池内克史: “e-Heritage Projects in Italy, Cambodia, and Japan: Lesson learned”, Digital Documentation 2011, 2011. 【招待講演】

池内克史: “eHeritage”, MSR 20th Anniversary Celebration, 2011. 【招待講演】

池内克史: “ITS for Tourism and Parking”, 18th ITS World Congress 2011, 2011. 【招待講演】

池内克史: 「画像処理とロボット」, 自動制御・ロボット分野講演会, 2011. 【招待講演】

池内克史: “Four dimensional virtual cities for safety, security, and Comfort”, Technology Workshop on Digital Electric Vehicle 2012, 2012. 【招待講演】

池内克史: 「e-Heritage Projects」, 青山学院大学講演会, 2012. 【招待講演】

池内克史: 「観光 ITS とクラウドコンピューティング」, 社会人のための ITS 専門講座, 2012. 【招待講演】

池内克史: 「クラウドミュージアム 一乗谷朝倉氏城下町を仮想空間で体験する」, 「わくわくする博物館」創造セミナー, 2012. 【招待講演】

池内克史: 「e-Heritage とクラウドミュージアム」, 生産技術研究奨励会, 2012. 【招待講演】

池内克史: 「e-Heritage とクラウドミュージアム」, 生産技術研究奨励会 定例評議員会・理事会, 2012. 【招待講演】

池内克史: “e-Heritage Projects in Italy, Cambodia, and Japan: Lesson learned”, e-Heritage Projects in Italy, Cambodia, and Japan: Lesson learned, 2012. 【招待講演】

新聞・報道

池内克史: 「3次元デジタルアーカイブ」, 日本バーチャルリアリティ学会誌, 2011.

池内克史: 「夢の交通システム 柏を舞台に進む研究 No.1 「快適移動」へモデルづくり」, 千葉日報, 2011.

池内克史: 「夢の交通システム 柏を舞台に進む研究 No.7 仮想都市でモデル化」, 千葉日報, 2011.

池内克史: 「縄文から現在「体験」 三内丸山デジタル復元」, 朝日新聞(青森), 2011.

池内克史: 「縄文の世界 CG で体感 三内丸山遺跡で県教委が体験会」, デーリー東北, 2011.

池内克史: 「仮想現実で遺跡体感 東大がシステム 来月、明日香村で実証」, 日刊工業新聞(朝刊)24面, 2011.

池内克史: 「車窓から大化の改新目撃 東大など、CGを活用 原風景に「飛鳥京」合成」, 日経産業新聞(朝刊)10面, 2011.

池内克史: 「大化の改新 飛鳥で目撃 CG再現 東大が来月実験」, 朝日新聞(大阪)(朝刊)37面, 2011.

池内克史: 「屋外文化財をバーチャル体験 凸版印刷が新システム」, 化学工業日報(朝刊)5面, 2011.

池内克史: 「古墳など疑似体験 凸版、専用メガネで鑑賞」, 日経産業新聞, 2011.

池内克史:「あなたも大化の改新の目撃者に 東大、CG で仮想世界体験を」, 共同通信, 2011.

池内克史:「「大化の改新」目撃者に! ? 東大など仮想システム 車窓から飛鳥時代の風景」, 日経新聞, 2011.

池内克史:「謎のバスツアー」, フジテレビ「とくダネ!」, 2011.

池内克史:「蘇る! 縄文遺跡のデジタル復元体験会」, NPO 法人 縄文ファイル, 2011.

池内克史:「公道における車両搭載型複合現実感システムの実証実験」, 生研ニュース, 2011.

池内克史:「歴史をCGで再現 大化の改新の目撃者に」, 朝日小学生新聞, 2011.

池内克史:「受験スペシャル いまさら人に聞けない間違いやすい問題 鎌倉大仏 CG 使用」, 日本テレビ「世界一受けたい授業」, 2012.

受賞

池内克史: Significant Researchers Award「For significant work in physics-based vision with applications to robot vision and computer graphics」, IEEE Computer Society International Conference on Computer Vision(ICCV), 2011 年.

池上 高志・教授

研究テーマ(主たるもの)

人工生命

人工システム(センサーネットワークや、コンピュータプログラム、ロボット)を用いて、自律的な振る舞いや複雑なダイナミクスを研究する。

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

Horibe Naoto, Hanczyc M.Martin, and Takashi Ikegami: "Mode Switching and Collective Behavior in Chemical Oil Droplets", Entropy, Vol.13, pp.709-719, 2011 年. 【査読有】

Eric Silverman, and Takashi Ikegami: "Robustness in Artificial Life", Journal of Bio-Inspired Computing, Vol.3, pp.179-186, 2011 年. 【査読有】

Ryoko Uno, Davide Marocco, Stefano Nolfi, Takashi Ikegami: "Emergence of Proto-sentences in Artificial Communicating Systems", IEEE Autonomous Mental Development, Vol.3, pp.146-153, 2011 年. 【査読有】

Keisuke Suzuki and Takashi Ikegami: "Adaptability and Homeostasis in the Game of Life interacting with the evolved Cellular Automata.", J.Natural Computing Research, Vol.1, No.3, pp.40-50, 2011 年. 【査読有】

作品

Keiichiro Shibuya/Takashi Ikegami: 「fimachine」, Paranoia _ Lille3000 - LAb, 2011.

国際会議等

Ryoko Uno, Keisuke Suzuki and Takashi Ikegami: "An interactive wall game as an evolution of proto language", ECAL11, 2011. 【査読有】

Eiko Matsuda, Julien Hubert and Takashi Ikegami: "A Robotic Approach to Understand the Role of Vicarious Trial-and-Error in a T-Maze Task", ECAL11, 2011. 【査読有】

Yuki Sato, Hiroyuki Iizuka and Takashi Ikegami: "An Experimental and Computational Approach to the Dynamic Body Boundary Problem", ECAL11, 2011. 【査読有】

Tom Froese, Nathaniel Virgo, and Takashi Ikegami: "Life as a process of open-ended becoming: Analysis of a minimal model", ECAL11, 2011. 【査読有】

講演・口頭発表

Takashi Ikegami: "Mind Time Machine", Computer Vision. New Zealand, 2011. 【招待講演】

Takashi Ikegami: "A Design for Living Technology: Exploring Autonomy and Sustainability in Artificial Life Systems in the Real World", ICMC2011, 2011. 【招待講演】

池上高志: 「こころを理解する新たなフレームワークとしての Web」, 京都大学国際 Forum「新たな知の統合に向けて」, 2011. 【招待講演】【一般向け】

石崎 雅人・教授

研究テーマ(主たるもの)

専門家社会におけるコミュニケーション・デザイン

専門家社会において、より良い意思決定を行うためのコミュニケーションのあり方について研究をすすめている。専門家と非専門家を対立させる見方で常に問題となってきたのが paternalism (温情的庇護主義)であった。この問題に対して、理論的には、専門家、非専門家それぞれが参加して意思決定をすることが望ましいが、現実には paternalism の問題を解消するものとして提案とされるのは、consumerism (消費者／非専門家至上主義)であった。consumerism が paternalism の問題点を解消できる面があることは否定できないが、それは、専門家に対して専門の能力を超えた要求に結びつくことがあり、専門家の能力を十全に活用できない問題があった。本研究では、医療、介護、司法など分野における専門家と非専門家の共同意思決定のあり方について、コミュニケーション・デザインの問題としてアプローチする。

医療コミュニケーションにおける共同意思決定

ケア学において、ケアする側とケアされる側がどのような関係にあるべきかという問題は、より良いケアを考える上で中心的課題である。本研究は、理想的な関係とされる共同意思決定に焦点をあて、ケアコミュニケーションの中の医師と患者のコミュニケーションを対象として、その実態の解明を行う。具体的には、共同意思決定の概念、共同意思決定への医師・患者の意識、共同意思決定コミュニケーション過程の具体的なあり方、情報環境等の要因の共同意思決定過程への影響を明らかにすることにより、ケア学、医療コミュニケーション研究へ実証的な観点からの貢献を行うことを目的とする。

介護コミュニケーションにおける多主体協働

介護とは、高齢者が「生きる」ことを支援する活動であり、家族とともに、多くの専門家がかかわる。介護職員（訪問介護員（ホームヘルパー）を含む）、介護支援専門員（ケアマネジャー）、生活相談員・支援相談員、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）、看護職員、医師、弁護士や司法書士まで関係し得る。このような専門分化は、介護の問題を整理して検討することを可能にする利点がある反面、関係者が多すぎることは単に1対1のコミュニケーションだけを考えればよいのではなく、問題に関係する当事者への配慮や調整を必要とするという意味でコミュニケーションを難しくする。たとえば、高齢者本人と家族の希望が異なる場合、介護支援専門員は、両者の希望を調整しなければいけない。また、高齢者本人と良い関係をつくっている介護職員は、本人の希望が医療の観点からは望ましいものでない場合、本人と医療者の間で悩むことになる。本研究では、介護コミュニケーション研修に紛争解決の手法として発展してきたメディエーションの考え方にもとに、介護に関する多主体間のより良いコミュニケーションのあり方について検討する。

研究業績(2011年度)

分担著書

石崎・飯田:「談話と計算」, 松本 編, 朝倉書店, 2011年.

雑誌論文

辛・石崎他:「医療面接場面の謝罪表現に対する医師と患者の評価の比較」, 第29回社会言語科学会研究大会, pp.92-95, 2011年. 【査読有】

片桐・石崎・高梨他:「保健指導対話を対象とした相互信頼感形成過程の分析」, 人工知能学会資料, Vol.SIG-SLUD-B103, pp.89-94, 2011年.

田中・山口・石崎他:「介護コミュニケーション研修へのメディエーションの応用」, 人工知能学会資料, Vol.SIG-SLUD-B103, pp.43-48, 2011年.

国際会議等

Katagiri, Y., Takanashi, K., Ishizaki, M. et al.: "Concern Alignment in Consensus Building Conversations", The 15th Edition of Workshop on the Semantics and Pragmatics of Dialogue, pp.208-209, 2011. 【査読有】

講演・口頭発表

Ishizaki, M.: "Examining the functions of sequences for the medical decision making processes in physician-patient communication: a corpus-based study", The 6th International Symposium on Politeness: Corpus Approaches, 2011.

石崎:「学び続ける組織のための情報共有を考える」, 全国自治体病院協議会福島県支部看護部長部会研修会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

石崎:「医療コミュニケーションのための専門家の経験知共有」, 医療コミュニケーションシンポジウム, 2011.

石崎:「介護コミュニケーションを考えるーディスコミュニケーションからの出発ー」, 介護コミュニケーション・ワークショップ, 2011. 【一般向け】

石崎:「コミュニケーションの基盤ー言語と脈絡ー」, 虹が丘ケアリハビリセンター コミュニケーション研修, 2012. 【一般向け】

新聞・報道

石崎:「情報発信力で風評に挑む」, 日経流通新聞, 2012.

石田 英敬・教授

研究テーマ(主たるもの)

記号論・情報記号論の研究

記号論を情報学研究に活用する研究

言語態の研究

社会や文化の単位としての言語活動の研究

現代文学、現代思想の研究

近代ヨーロッパ文学および現代思想の研究

研究業績(2011 年度)

分担著書

Hidetaka Ishida: “Katô Shûichi ou penser la diversité culturelle”, Jean-François Sabouret 編, CNRS Editions, 2012 年.

Hidetaka Ishida: “L’ Archipel des séismes”, Corinne Quentin et Cécile Sakai 編, Picquier Poche, 2012 年.

雑誌論文

Hidetaka Ishida: “Vent d’ Ouest”, L’ Herne « Foucault », pp.232-236, 2011 年.

その他論文

Hidetaka Ishida: “ L’ espoir d’ un nouveau souffle ”, Le Monde diplomatique, 新聞 web 記事, 2011 年. 【一般向け】

石田英敬: 「大震災は人々の心を変えますか: 「絆」 尊ぶ伝統呼び覚ます」, 『北海道新聞』, 新聞インタビュー, 2011 年. 【一般向け】

石田英敬: 「3・11 以後: 『リスク社会』 の自覚を」, 『北海道新聞』, 新聞コラム, 2011 年. 【一般向け】

石田英敬: 「マスコミ硬直化、ネット育てた」, 『朝日新聞』, 新聞インタビュー, 2011 年. 【一般向け】

石田英敬: 「破局化する世界: しなやかな思考が必要」, 『北海道新聞』, 新聞コラム, 2011 年. 【一般向け】

石田英敬: 「危うい劇場型政治への回帰 - 真価問われるメディア」, 『北海道新聞』, 新聞コラム, 2012 年. 【査読有】 【一般向け】

講演・口頭発表

Hidetaka Ishida: “ « Session plénière à Lyon - Imaginer le futur » ”, Todai Forum 2011, 2011. 【招待講演】

Hidetaka Ishida: “ « Culture des média dans le Japon contemporain: Catastrophe et Média » ”, à la Villa Gillet , 2011. 【招待講演】

Hidetaka Ishida: “ « Session plénière à Paris - Concevoir le futur » ”, Todai Forum 2011, 2011. 【招待講演】

Hidetaka Ishida: “ « Catastrophe and Media » ”, SNU-Tidai Symposium 2011, 2011. 【招待講演】

Hidetaka Ishida: “ « Catastrophe et media: le temps des catastrophes et la question de la confiance » ”, conference ENMI 2011 “ TECHNOLOGIE et CONFIANCE ”, 2011. 【招待講演】

新聞・報道

石田英敬: 「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター, 2011.

植田 一博・教授

研究テーマ(主たるもの)

需要側イノベーションの分析(Demand-side Innovation)

既存のイノベーション研究では供給側に焦点があたりがちであるが、実際には、新しい製品・技術やその新しい使い方が消費者により発見され、普及伝播する過程で、消費者自身によってその意味や価値が再解釈・再定義されて、結果的には予想を超えた大ヒットに至る場合がある。我々はこのような現象の事例検証と、この現象を可能にする個人の認知メカニズムや社会的な構造を、実験やインタビュー等により明らかにしつつある。

日本の伝統芸能における身体性と表現の認知科学的分析

文楽とは、言語情報を用いずに3人の人形遣いがイキを合わせて、人工物でしかない文楽人形をあたかも人が動作しているかのように操作する日本独自の伝統芸能である。この文楽人形の動作解析とそれを演じる人形遣いの動作・生理計測を通じて、人形の動きのいかなる要素によって我々は人形に人間らしさを感じているのか、人形を複数人間が言語情報なしで巧みに操るための協調メカニズムとは何かを科学的に分析している。文楽以外にも、能・狂言の動きの意味を運動力学的、認知科学的に探っている。

生物らしさの知覚に関する研究

我々は生物と非生物を見分けられると考えられている。このような生物らしさの知覚は、生物と非生物とを見分ける能力であるにも関わらず、実物の生物を用いては検討されてきていない。そこで当研究室では、生物らしさの知覚に関する脳内過程を明らかにするために、実際の生物とロボットを用いて脳波による事象関連電位を計測した。その結果、生物らしさの知覚には、対象を主観的に生物と見なす過程と対象の生物的特徴を知覚する過程の二つの独立な過程が含まれていることが示唆されている。

研究業績(2011年度)

分担著書

Hiroshi Tamura, Tamami Sugasaki, Kazuhiro Ueda: "Media in the Ubiquitous Era: Ambient, Social and Gaming Media", Artur Lugmayr, Helja Franssila, Pertti Näränen, Olli Sotamaa, Jukka Vanhala, Zhiwen Yu 編, IGI Global, 2011年。

雑誌論文

Yong Xu, Yoshimasa Ohmoto, Kazuhiro Ueda, Takanori Komatsu, Takeshi Okadome, Koji Kamei, Shogo Okada, Yasuyuki Sumi, Toyooki Nishida: "Active Adaptation in Human-Agent Collaborative Interaction", Journal of Intelligent Information Systems, Vol.37, No.1, pp.23-38, 2011年。【査読有】

Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda: "Opponent colours induced by rotating discs", Perception, Vol.40, No.8, pp.1012-1014, 2011年。【査読有】

Kotaro Miwa, Kazuhiro Ueda: "A Dynamic Volume-Return Relation and Investors' Positive Feedback Trading", International Review of Finance, Vol.11, No.3, pp.325-351, 2011年。【査読有】

Kohsuke Takahashi, Haruaki Fukuda, Hanako Ikeda, Hirokazu Doi, Katsumi Watanabe, Kazuhiro Ueda, Kazuyuki Shinohara: "Roles of the Upper and Lower Body in Direction Discrimination of Point-light Walkers", Journal of Vision, Vol.11, No.14: 8, pp.1-13, 2011年。【査読有】

大本 義正, 戸田 泰史, 植田 一博, 西田 豊明: 「議論への参加態度と非言語情報に基づくファシリテーションの分析」, 情報処理学会論文誌, Vol.52, No.12, pp.3659-3670, 2011年。【査読有】

岡田 猛, 中谷内 一也, 田中 淳, 平川 秀幸, 植田 一博, 橋田 浩一: 「シンポジウム: 科学技術社会のリスクに対処するために認知科学ができること」, 認知科学, Vol.18, No.4, pp.624-634, 2011年。【一般向け】

Yong Xu, Yoshimasa Ohmoto, Kazuhiro Ueda, Takanori Komatsu, Takeshi Okadome, Koji Kamei, Yasuyuki Sumi, Toyooki Nishida: "Formation Conditions of Mutual Adaptation in Human-Agent Collaborative Interaction", Applied Intelligence, Vol.36, No.1, pp.208-228, 2012年。【査読有】

植田 一博:「文楽人形遣いの阿吽の呼吸—認知心理学と認知科学の視点から—」, 心理学ワールド, Vol.56, pp.25-26, 2012 年.

Kohsuke Takahashi, Haruaki Fukuda, Katsumi Watanabe, Kazuhiro Ueda: "Scintillating lustre induced by radial fins", *i-Perception*, Vol.3, No.2, pp.101-103, 2012 年. 【査読有】

Shinsuke Yoshioka, Kazuhiro Ueda, Toshio Morita, Yui Morita, Senshi Fukashiro: "Kinetic features of sliding walk in Nogaku", *Journal of Trainology*, Vol.1, No.1, pp.10-13, 2012 年. 【査読有】

国際会議等

Sachiko Kiyokawa, Kazuhiro Ueda: "Effects of source attribution of observed actions on insight problem solving", *European Conference on Cognitive Science 2011*, 2011. 【査読有】

Hiromitsu Miyata, Shigeru Watanabe, Yasuyo Minagawa-Kawai, Kazuhiro Ueda, Toyofumi Sasaki: "Cognitive achievement of meditative "pure consciousness": sentence comprehension by a Japanese speed-reading expert", *The 15th Annual Meeting of Association for the Scientific Study of Consciousness*, 2011. 【査読有】

Kotaro Miwa, Kazuhiro Ueda: "Analysts long-term earnings growth forecasts and past firm growth", *2011 Asian Finance Association Annual Conference*, 2011. 【査読有】

Kotaro Miwa, Kazuhiro Ueda: "Analysts long-term earnings growth forecasts and past firm growth", *The 19th Annual Conference on Pacific Basin Finance Economics, Accounting, and Management*, 2011. 【査読有】

Ikuya Nomura, Yasushi Onuki, Kazuyuki Samejima, Yuichi Washida, Kazuhiro Ueda, Hiroyuki Okada, Takashi Omori: "The effect of risk attitude on product choices", *The 33th Annual Conference of the Cognitive Science Society*, pp.740, 2011. 【査読有】

Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda: "Top-down and Bottom-up Process of Animacy Perception: An ERP study", *The 33th Annual Conference of the Cognitive Science Society*, pp.3452, 2011. 【査読有】

Kazuhiro Ueda, Yuichi Washida: "What is more influential in idea generation for innovation: information or individual adoption category?", *The 33th Annual Conference of the Cognitive Science Society*, pp.3499, 2011. 【査読有】

Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda: "Contrast sensitivity function during perception of Benham-Fechner colour", *34th European Conference on Visual Perception*, 2011. 【査読有】

Haruaki Fukuda, Takeharu Seno, Kazuhiro Ueda: "Two novel illusions accompanied with self-motion", *Asiagraph 2011*, Vol.5, No.1, pp.53-56, 2011. 【査読有】

Hiromitsu Miyata, Shigeru Watanabe, Yasuyo Minagawa-Kawai, Kazuhiro Ueda, Toyofumi Sasaki: "Individual differences in reading speed and cortical activation while reading Japanese novels: Simultaneous recording of NIRS and Tobii Eye Tracker", *Neuroscience 2011*, 2011. 【査読有】

Yuichi Washida, Hiroki Tanaka, Kazuhiro Ueda: "Mapping of associations between in-store and online purchases: A proposal for a new product recommendation method", *International Marketing Trends Conference 2012*, 2012. 【査読有】

Haruaki Fukuda, Masahiro Shiomi, Kayako Nakagawa, Kazuhiro Ueda: " 'Midas Touch' in Human-Robot Interaction: Evidence from Event-Related Potentials during the Ultimatum Game", 7th ACM/IEEE International Conference on Human-Robot Interaction, pp.131-132, 2012. 【査読有】

講演・口頭発表

植田 一博, 清河 幸子, 鷺田 祐一, 亀田 達也: 「ビジネスの現場における創造性の活用を認知心理学の観点から捉える」, 日本心理学会第 75 回大会, 2011.

阿部 慶賀, 岡田 猛, 堀 浩一, 森田 純哉, 鈴木 宏昭, 植田 一博: 「創造性研究の多面的アプローチ」, 日本心理学会第 75 回大会, 2011.

福田 玄明, 植田 一博: 「実際の生物とロボットを用いた判別課題によるアニメシー知覚の認知メカニズムの検討—事象関連電位を指標として—」, 日本心理学会第 75 回大会, 2011.

宮田 裕光, 渡辺 茂, 皆川 泰代, 植田 一博, 佐々木 豊文: 「短編小説の読みにおける読解成績と眼球運動指標の個人差—速読訓練の効果の検討—」, 日本心理学会第 75 回大会, 2011.

宮田 裕光, 渡辺 茂, 皆川 泰代, 植田 一博, 佐々木 豊文: 「速読技能の熟達者における小説読解—読書速度・内容理解・眼球運動の関連を通して—」, 第 34 回日本神経科学大会, 2011.

足利 純, 植田 一博, 鷺田 祐一: 「情報収集傾向とアイデアの質の関係に関する研究」, 日本認知科学会第 28 回大会, 2011.

岡田 猛, 鈴木 宏昭, 植田 一博, 中谷内 一也, 田中 淳, 平川 秀幸, 橋田 浩: 「科学技術社会のリスクに対処するために認知科学ができること」, 日本認知科学会第 28 回大会, 2011. 【招待講演】

青野 直也, 森田 寿郎, 植田 一博: 「2 リンク機構による生物学的運動の解析」, HAI シンポジウム 2011, 2011.

福田 玄明, 植田 一博: 「生物らしさの知覚に伴う脳活動—実際の生物とロボットを用いて—」, HAI シンポジウム 2011, 2011.

山田 歩, 福田 玄明, 鮫島 和行, 清河 幸子, 南條 貴紀, 植田 一博, 野場 重都, 鰐川 彰: 「テイスティング方法がコーラの選好に与える影響」, 行動経済学会第 5 回大会, 2011.

新聞・報道

植田一博: 「極める！(テーマ:読書を科学！速読の達人をめざす)」, NHK 教育テレビ, 2011.

大島 まり・教授

研究テーマ(主たるもの)

医用画像に基づく血管循環系のマルチスケール・マルチフィジックス解析

本研究は血管病変の発症、進行に関わる流体力学的な要因を数値解析により解明することを目的としている。実際の生体内を再現したモデルや境界条件を採用するために、ここではCTやMRIなどの医用画像から抽出した血管形状モデルを用い、末梢血管網など循環系全体の影響を考慮した境界条件を導出・適用した大規模血流解析システムを構築している。さらに血流および血管壁内での物質輸送・透過モデルを取り入れ、悪玉コレステロールなどの病変に関わる物質の血管壁内への蓄積についても予測を行っている。

血流と血管壁の相互作用を考慮した連成解析と in vitro モデルを用いた可視化計測

本研究では脳動脈瘤の発生・成長のメカニズムの解明を目的とし、血流によって変形する血管壁の力学応答メカニズムを考慮した数値解析を行うとともに、in vitro モデル実験による結果と比較することで評価を行っている。医用画像から再構築した脳動脈瘤モデルを対象として、数値解析では血管壁を超弾性体とした流体構造連成解析を行い、実験では速度3成分のデータを得られるステレオPIVという計測手法を用い、内部の流動構造と血管壁の挙動、およびそれらの相互作用を評価している。

共焦点 Micro PIV による微小流路内混相流の可視化計測

微小血管を流れる赤血球やマイクロ分析チップのような微小流体デバイスの内部の混相流を可視化計測するツールとして、共焦点マイクロPIVシステムを開発している。本手法は、流れの中にトレーサ粒子と呼ばれる微小な蛍光ビーズを混濁させ、共焦点スキャナ・特殊な蛍光顕微鏡・高感度高速度カメラを用いて流れを撮影し、得られた画像をPIV解析処理を用いて速度分布を求める。共焦点マイクロPIVを用いることで、マイクロサイズの微小領域における3次元的な流れの様子を定量的に知ることができる。

研究業績(2011年度)

分担著書

大島まり:「生物流体力学 3 心臓血管系における流れ, 8 生物流体力学の今後の展望」, 谷下一夫、山口隆美編, 朝倉書店, 2011年。

雑誌論文

Ryo Torii, Marie Oshima: 「An Integrated Geometric Modelling Framework for Patient-Specific Computational Haemodynamic Study on Wide-Ranged Vascular Network」, Computer Methods in Biomechanics and Biomedical Engineering, Vol.First Article, pp.1-11, 2011年。【査読有】

大島まり:「計算流体力学による血流計算とその応用」, 医学のあゆみ, Vol.238, No.3, pp.251-255, 2011年。【査読有】

Masamichi Oishi, Haruyuki Kinoshita, Teruo Fujii, Marie Oshima: 「Simultaneous Measurement of Internal and Surrounding Flows of a Moving Droplet Using Multicolour Confocal Micro-Particle Image Velocimetry (micro-PIV)」, Measurement Science and Technology, Vol.22, No.10, pp.1-18, 2011年。【査読有】

Xiao-Bin Li, Feng-Chen Li, Juan-Cheng Yang, Haruyuki Kinoshita, Masamichi Oishi, Marie Oshima: 「Study on the Mechanism of Droplet Formation in T-junction Microchannel」, Chemical Engineering Science, Vol.69, pp.340-351, 2011年。【査読有】

Masamichi Oishi, Koji Utsubo, Haruyuki Kinoshita, Teruo Fujii and Marie Oshima: 「Continuous and Simultaneous Measurement of the Tank-Treading Motion of Red Blood Cells and Surrounding Flow Using Translational Confocal Micro-Particle Image Velocimetry (Micro-PIV) with Sub-Micron Resolution」, Measurement Science and Technology, Vol.23, No.3, pp.1-18, 2011 年. 【査読有】

Akter Hossain, Nobuyuki Oshima, Yuji Nakamura, Marie Oshima: 「Numerical Simulation of Flame Dynamics Associated with Negative Velocity Induced by Deformed Flame Shape」, Combustion Theory and Modelling, Vol.DOI:10/1080/13647830.2012.661467, 2011 年. 【査読有】

Marie Oshima, Ryo Torii, Shigefumi Tokuda, Shigeki Yamada, Akio Koizumi: 「Patient-Specific Modeling and Multi-Scale Blood Simulation for Computational Hemodynamic Study on the Human Cerebrovascular System」, Current Pharmaceutical Biotechnology, Vol.PMID:22335478, 2011 年. 【査読有】

国際会議等

Masamichi Oishi, Koji Utsubo, Haruyuki Kinoshita, Teruo Fujii, Marie Oshima: “Simultaneous Measurement of Tank-Treading Motion of Red Blood Cell and Surrounding Flow using Target-Tracking Confocal Micro-PIV”, The 11th Asian Symposium on Visualization (ASV11), 2011. 【査読有】

Kenichi Shibasaki, Taisuke Maruyama, Marie Oshima: “Coupled Simulation of Starved EHL and Liquid Film Flow on Ball-on-Disc with Experimental Validation”, 38th Leeds-Lyon Symposium on Tribology, 2011. 【査読有】

M. Oishi, K. Utsubo, H. Kinoshita, T. Fujii and M. Oshima: “Investigation of Flow-induced Dynamic Motion of Red Blood Cells using Target Tracking Confocal Micro-PIV System”, The 15th International Conference on Miniaturized Systems for Chemistry and Life Sciences (MicroTAS2011), 2011. 【査読有】

Xiao-Bin Li, Feng-Chen Li, Juan-Cheng Yang, Haruyuki Kinoshita, Masamichi Oishi, Yi-Min Huang, Bao-Cheng Jiang, Marie Oshima: “Droplet Dynamics Under Low Interfacial Tension in a T-junction Microchannel”, International Conference on Chemical Engineering (CEN2011) of 2011 World Congress on Engineering and Technology (CET), 2011. 【査読有】

Kenichi Shibasaki, Taisuke Maruyama, Marie Oshima: “Effects of Grid Type and Resolution on Coupled Simulation of Starved EHL and Liquid Film Flow”, International Tribology Conference Hiroshima 2011, 2011. 【査読有】

Marie Oshima, Masamichi Oishi: “Visualization and Measurement of Multi-phase Flow in The Microfluidic Devices Using Confocal Micro-PIV”, 2011 Korea-Japan Joint Seminar on Measurements for Multi-scales and Multi-physics, pp.37-46, 2011. 【査読有】

Hossain A., Oshima N., Nakamura Y., Oshima M.: “The Influence of Deformed Flame-shape Driven Strong Negative Velocity on Flame Dynamics”, International Symposium on Ecotopia Science, 2011, 2011. 【査読有】

その他論文

Milan Toma, Absei Krdey, Shu Takagi, Marie Oshima: 「Strongly Coupled Fluid-Structure Interaction Cardiovascular Analysis with the Effect of Peripheral Network」, 生産研究, 63 巻, 3 号, pp.9-14, 2011 年. 【査読有】

講演・口頭発表

柴崎健一, 丸山泰右, 大島まり: 「ボールオンディスクにおける枯渇 EHL とマクロ流れの連成解析および実験的検証」, トライボロジー会議 2011, 2011.

片桐賢吾, 山本創太, 大島まり: 「脳動脈瘤血流解析における計算格子依存性の検証」, 日本流体力学会年会 2011, 2011.

片桐賢吾, 大島まり, 山本創太: 「患者固体別血管形状を用いた頸動脈の血流と物質輸送に関する数値解析」, 日本機械学会 2011 年度年次大会, 2011.

前田郁, 梁夫友, 高木周, 大島まり: 「マルチスケール血流解析のための脳循環モデルの構築」, 日本機械学会第 22 回バイオフィロンティア講演会, 2011.

川越至桜, 大島まり: 「最先端研究を取り入れたジュニア科学者育成プログラム—大学における中高生の科学技術教育—」, 平成 23 年度日本理科教育学会 関東支部大会, 2011.

Fuyou Liang, Takashi Maeda, Marie Oshima, Hao Liu, Shu Takagi: 「血流のマルチスケールモデリング及び臨床データの導入」, 第 61 回理論応用力学講演会, 2011.

大島まり: 「脳動脈瘤治療における血流シミュレーションの果たす役割と今後の展開」, 東北ブレインアタック 2011 講演会, 2011. 【招待講演】

大島まり: 「見えないものを見えるようにする —シミュレーションと in vitro 実験—」, 三菱ガス化学株式会社講演会, 2011. 【招待講演】

大島まり: 「脳動脈瘤の診断・治療のための血流解析」, 第 5 回杉田記念フォーラム, 2011. 【招待講演】

大島まり: 「バイオを工学する —広がる工学のすそ野—」, 広島大学附属中等高等学校 SSH 特別講義, 2011. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「探求活動の進め方」, 日比谷高等学校スーパーサイエンスハイスクール特別講義, 2011. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「循環器系のマルチスケールシミュレーションと可視化計測」, 目指せ! 理系マドモワゼル!! 理系女子力 up セミナー, 2011. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「血液の流れを探る —広がる医工連携研究のすそ野—」, 教育講演会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「科学技術で輝こう!!」, 女子中高生のための関西科学塾 2012 特別講演, 2011. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「アウトリーチ活動の評価について」, 第 4 回科学コミュニケーション研究会年次大会, 2011. 【招待講演】

大島まり: 「スーパーコンピュータ京 医療分野への応用」, シスメックス株式会社 2011 年度下期マーケティング会議, 2011. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「脳循環における血流シミュレーションの果たす役割」, 第 23 回日本脳循環代謝学会総会イブニングセミナー, 2011. 【招待講演】

大島まり:「科学技術で輝こう!!」,平成23年度静岡県立磐田南高等学校SSH記念講演会,2011.【招待講演】【一般向け】

大島まり:「バイオを工学する」,横浜サイエンスフロンティア高等学校サタデーサイエンス,2011.【招待講演】【一般向け】

大島まり:「流体分野におけるCAEの最近の動向と今後の展望」,第20期非線形CAE勉強会第20回記念シンポジウム,2011.【招待講演】

大島まり:「脳動脈瘤における流体力学シミュレーションと今後の展開」,第27回日本脳神経血管内治療学会学術総会教育講演,2011.【招待講演】

大島まり:「バイオを工学する」,東京学芸大学附属国際中等教育学校における模擬授業,2011.【招待講演】【一般向け】

大石正道,大島まり:「多波長共焦点マイクロPIVによるマイクロデバイス内流れの可視化計測」,第4回マイクロ・ナノ多機能デバイス研究ネットワークシンポジウム,2011.【招待講演】

川越至桜,大島まり:「超新星ニュートリノで探る星の最後の姿—私たちの起源?—」,スーパーサイエンスハイスクール自然科学講演会,2011.【招待講演】【一般向け】

川越至桜,大島まり:「結果のまとめ方」,日比谷高等学校スーパーサイエンスハイスクール特別講義,2011.【招待講演】【一般向け】

川越至桜,大島まり:「超新星ニュートリノで探る星の最後の姿—私たちの起源—」,先端的生命医科学平成23年度講演会,2011.【招待講演】【一般向け】

大石正道,大島まり:「多波長共焦点マイクロPIVによるバイオ・マイクロ混相流の可視化計測」,RC246熱流体計測・解析手法の標準化・応用の推進に関する研究分科会,2011.

Milan Toma, Absei Krdey, Shu Takagi, Marie Oshima: "Multi-scale Strongly Coupled Fluid-Structure Interaction Analysis with the Effect of Peripheral Network", 第3回バイオスーパーコンピューティングシンポジウム,2011.

金森 修・教授

研究テーマ(主たるもの)

フランスの現代哲学

フランスの20世紀哲学の研究。具体的にはベルクソン、バシュラール、カンギレム、フォーコー、ドゥルーズなど。

生政治・生権力論

現代の生命科学とフランスの現代哲学との交叉地点で生じる問題群を扱う。主にフォーコー、アガンベンらの研究を参考にしながら、現代の生政治・生権力のありようをみる

研究業績(2011 年度)

著書

金森 修他 編:「VOL 5 エピステモロジー特集号」, 以文社, 2011 年.

分担著書

金森 修 編:「昭和前期の科学思想史」, 金森 修編 編, 勁草書房, 2011 年.

河口 洋一郎・教授

研究テーマ(主たるもの)

CG によるメカニック造形研究

生き物のように反応するメカニックな立体造形ロボット技術ならびに新伝統芸能を演出しロボティックに凹凸する映像ディスプレイの造形研究

情感的なジェモーション(Gemotion)によるインタラクション研究

伝統芸能との融合によるパフォーマンスアーツとして、人にインタラクティブに反応する情感的な CG 映像空間の創出、および生き物のように映像に凹凸反応するジェモーション・ディスプレイの研究

自己増殖する複雑系のグロースモデル(Growth Model)による超高精細 CG 映像研究

スーパーハイビジョン(8K×4K)による超高精細の CG 生物・物理シミュレーションによる映像生成研究

研究業績(2011 年度)

作品

河口 洋一郎:「Shelly(宙貝)」, 東大五月祭、東大小石川博物館展示、東京デザイナーズウィーク展示、TV 東京「Tokyo Award」、他多数, 2011.

河口 洋一郎:「“Bucco”(宙蝶)Balloon」, ASIAGRAPH2011, 東京デザイナーズウィーク展示、ASIAGRAPH 2012 Forum inTokyo, 他多数, 2011.

河口 洋一郎:「Scissors Ficco/缺宙魚」, 東大小石川博物館展示, 2011.

河口 洋一郎:「Eggy boy ライバル」, ASIAGRAPH2011, 2011.

河口 洋一郎:「Bird(宙鳥)」, 京都 CG 着物展, 2011.

河口 洋一郎: 「Growth／グロースモデル」, 情報文化学会、映像学会、ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, 2011.

河口 洋一郎: 「Robotic Creatrues “Jecco”」, SIGGRAPH2012 Aty Gallery Entry, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, 2011.

河口 洋一郎: 「Gemotion Cellular Display」, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, 2011.

河口 洋一郎: 「CG 着物「黄金に輝く宙魚」」, 京都 CG 着物展「河口洋一郎の宇宙」, 2011.

河口 洋一郎: 「CG 着物「灼熱の赤い宙貝」」, 京都 CG 着物展「河口洋一郎の宇宙」, 2011.

河口 洋一郎: 「CG 着物「鋼鉄宙蝶」」, 京都 CG 着物展「河口洋一郎の宇宙」, 2011.

河口 洋一郎: 「CG 着物「生命の黄色い極大スープ」」, 京都 CG 着物展「河口洋一郎の宇宙」, 2011.

河口 洋一郎: 「CG 着物「柔らかそうな宙蝶」」, 京都 CG 着物展「河口洋一郎の宇宙」, 2011.

河口 洋一郎: 「CG 着物「ドリルマンボウの頭部」」, 京都 CG 着物展「河口洋一郎の宇宙」, 2011.

国際会議等

Yoichiro Kawaguchi: “The Creation for New Traditional Art Space –The Exhibition of CG Kimono at Museum of dyeing”, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, Vol.6, No.1 2012, pp.3-8, 2012. 【査読有】

Kinyo Kou, Yoichiro Kawaguchi: “Gait Generation for Quadruped Artificial Life”, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, Vol.6, No.1, pp.29-34, 2012. 【査読有】

Yosuke Kusumi, Yoichi Ochiai, Yoichiro Kawaguchi: “Automatic Measuring of Bug’s Migration Channel and Simulation for Real World Interaction”, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, Vol.6, No.1, pp.39-40, 2012. 【査読有】

Ami Ogura, Yoichiro Kawaguchi: “A New Method of Exhibition with Not-White-Box Space --- Valuation and Examination of BIOMECHANICA”, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, Vol.6, No.1, pp.41-44, 2012. 【査読有】

Masanori Shinkawa, Yoichiro Kawaguchi: “Real-time Simulation of Gastropod’s Locomotion”, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, Vol.6, No.1, pp.45-48, 2012. 【査読有】

Shintaro Dannno, Yoichiro Kawaguchi: “A Real-time Application of Structural Colors in Mobile Devices”, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, Vol.6, No.1, pp.49-50, 2012. 【査読有】

Hiroki Sato, Yoichiro Kawaguchi: “The Motion of Fluid near the Boundary using Surface Tension”, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, Vol.6, No.No.1, pp.69-72, 2012. 【査読有】

Mayu Matsuo, Yoichiro Kawaguchi: “Proposal of the light interface by using the model of self-directive emission of light”, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, Vol.6, No.1, pp.73-74, 2012. 【査読有】

講演・口頭発表

河口 洋一郎:「生命造形の宇宙へ」, 情報処理学会放送コンピューティング(BCC)研究グループ, 2011. 【招待講演】

河口洋一郎, 木村重信(染・清流館館長), 原久子(大阪電気通信大学総合情報学部教授):「河口洋一郎の宇宙サイエンス or アート」, 河口洋一郎 CG 着物展鼎談, 2011. 【一般向け】

河口洋一郎, 和田秀樹氏(評論家, 精神科医), 須藤修氏(社会情報学, 東京大学教授):「鼎談「アジアの文化知」」, ASIAGRAPH 2012 Forum in Tokyo, 2011. 【招待講演】

Y.Nakagawa, S.Yonekura and Y.Kawaguchi:「Super Thin 3D Form Display for Multimodal User Experiences using Vertically Deformation of Leaf Spring and SMA」, International Symposium on VR innovation (ISVRI) 2011, 2011.

Y. Kawaguchi: “Biologically Inspired Art, Futur en Seine”, Conférence et workshops sur le Futur de la musique et de l’image, 2011. 【招待講演】

H.Sato and Y.Kawaguchi: “Bubbling in Liquids”, International Association for development of the Information Society (IADIS) Multi Conference on Computer Science and Information Systems (MCCSIS) 2011, 2011.

Y. Kawaguchi: 「The observation of Japanese powdered green tea ceremony in zero gravity –as the social and cultural experiment at International Space Station」, ASIAGRAPH in Tokyo 2011, 2011. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: 「Beyond the White Cube –Artwork Exhibition with the natural Exhibits of the University Museum Koishikawa Annex, The University of Tokyo」, ASIAGRAPH in Tokyo 2011, 2011. 【招待講演】

河口 洋一郎:「進化するロボティック生命体」, 九州大学創立百周年記念・九州大学総合研究博物館特別展示記念講演, 2011. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎:「未来の宇宙生命体へ」, 九州大学創立百周年記念・九州大学総合研究博物館特別展示記念講演, 2011. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎:「宇宙抹茶実験」, DIGITAL CONTENTS EXPO 2011, 2011. 【招待講演】

河口洋一郎, 宮廻正明(東京藝術大学教授:「対談」, 情報文化学会創立20周年記念前夜祭, 2011. 【招待講演】

河口洋一郎, 富田勲(作曲編曲家):「古川聡宇宙飛行士・匠賞受賞記念トークセッション「音宇宙～無限に広がる音のチカラ」」, DIGITAL CONTENTS EXPO 2011, 2011. 【招待講演】

河口洋一郎, 山本正記(大妻女子大学):「ショー「CG 着物 collection」」, DIGITAL CONTENTS EXPO 2011, 2011. 【招待講演】

河口洋一郎, 秋元康(作詞家):「創(つむぎ)賞受賞記念トークセッション「巨大コンテンツ市場に挑む秋元康の戦略」」, DIGITAL CONTENTS EXPO 2011, 2011. 【招待講演】

C. Kawakita and Y. Kawaguchi: “The Creation of New Japanese Traditional Art and Analysis –Japanese Traditional Glass arts “SATSUMA-KIRIKO” + Ultra High Definition Image Format “8K””, ASIAGRAPH in Tokyo 2011, 2011.

K. Nagasawa and Y.Kawaguchi: "Detail Surface Representation of Fluid using Marker Level Set Method", ASIAGRAPH in Tokyo 2011, 2011.

S. Goto and Y.Kawaguchi: "Boiling Animation by SPH Method and Curl Noise", ASIAGRAPH in Tokyo 2011, 2011.

S. Danno and Y. Kawaguchi: "Real-time depth of field considering transmission and reflection", ASIAGRAPH in Tokyo 2011, 2011.

河口 洋一郎: 「超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術」, 第5回領域シンポジウム, 2011.

Yoichiro Kawaguchi: "'Asia⇔Space'(From Asia to Space, and From Space to Asia)", 南台湾国際動態藝術大展, 2011. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎, 米林雄一(彫刻家、東京藝術大学名誉教授): 「対談「宇宙造形の未来」」, 情報文化学会/芸術情報研究会・日本映像学会デジタルメディア研究会(報告会), 2012. 【招待講演】

Yoichiro Kawaguchi: "Wisdom of Asia", India, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎: 「キャラクター的生命造形の未来」, エンジン01, 鳥取, 2012. 【招待講演】【一般向け】

Y.Kawaguchi: "Creation of Artistic Gemotional Creatures", JST Workshop, 2012. 【招待講演】

新聞・報道

河口 洋一郎: 「「分らないものが一番いい」——秋元康氏のAKB48プロデュース術」, Business Media, 2011.

河口 洋一郎: 「ぷらナビ+」, KKB 鹿児島放送, 2011.

河口 洋一郎: 「Tokyo Award「夜塾」, 漫画家: 浦沢直樹氏との対談」, テレビ東京, 2011.

河口 洋一郎: 「秋元康氏「熱気と一生懸命さに勝機」ヒットの秘密語る」, 産経ウェブニュース, 2011.

河口 洋一郎: 「「Tokyo Award」, 東京デザイナーズウィークにおける展示紹介」, テレビ東京, 2011.

河口 洋一郎: 「さあ行こう未来宇宙へ—河口洋一郎・立体造形バイオマシン—」, 南日本新聞, 2012.

姜 尚中・教授

研究テーマ(主たるもの)

東北アジアにおけるコリアンネットワークの形成

東北アジアにはこの地域を覆った植民地支配と戦争、さらに内戦と冷戦構造のために、数百万人に及ぶコリアン系マイノリティが散在し、言語、文化、社会、経済、アイデンティティなどの違いがありながらも、コリアンネットワークと

も言える越境的(トランスナショナル)な移動、連鎖、交流の歴史が続いてきた。本研究は、このようなコリアンネットワークの形成とその歴史を辿りつつ、それが分断された朝鮮半島の平和的な共存と統一にどのような影響を与えることになるのか、その展望を明らかにすることにある。

東北アジア共同体形成の可能性とその展望

グローバル化の進展とともに、世界の多極化が進み、地域統合や地域主義の動きが顕著になりつつあるが、本研究では、このようなリージョナリズムの可能性と展望を、東北アジア地域に即して明らかにしようとするものである。具体的には、地政学的に東北アジア地域の中心に位置する朝鮮半島の共存と統一の問題を視野に、この地域の冷戦構造の終結と冷戦以後の地域秩序の構築がどのようにしたら可能になるのか、その条件と展望を地域主義の構想を通じて明らかにすることにある。

近代日本の国民意識の形成とアジア認識

東アジアにおいて早熟的に国民国家の形成に成功し、日清戦争、日露戦争を通じて近隣アジア諸国との支配・従属関係を築いていくことになる近代日本は、その過程を通じて「日本型オリエンタリズム」ともいべき特異なアジア認識、アジア・イメージを形成していくことになった。本研究は、そのような近代日本のアジア認識の理念型的な構造とその歴史を、学問的な言説や論説、ジャーナリズムなどを素材に浮き彫りしようとするものである。

研究業績(2011 年度)

木宮 正史・教授

研究テーマ(主たるもの)

朝鮮半島をめぐる国際政治の展開

第二次世界大戦以後の、朝鮮半島をめぐる国際政治の歴史的展開を、日本、韓国、米国などの外交文書、一次史料を手掛かりに実証的に解明することを目的とする。特に、現在は、1970 年代、米中和解や日中国交正常化など東アジア冷戦体制が変容するのに対して、南北朝鮮がどのような対応を選択したのかを、南北朝鮮のパワー・バランスの変容に対応した南北朝鮮の政策選択の「対称関係の中の対照性」という観点から解明する。

現代韓国政治の展開

現代韓国は、1987 年まで、基本的には権威主義体制が持続してきたが、その後、民主化運動の高揚によって民主主義体制へ移行し、さらに、選挙による与野党政権交代を 2 度にわたり達成するなど、民主主義体制の堅固化を達成した。そうした現代韓国政治の展開を帰結させた政治力学を、冷戦体制への対応、経済開発戦略の選択、民主化運動とそれへの対応という観点から、抽出し、そうした政治力学が民主化後、どのように持続し、また、どのように変容しているのかを解明する。

日韓・日朝関係の展開

日本外交における韓国、朝鮮半島の位置づけがどのように変化したのか、また、韓国外交における日本の位置づけがどのように変化したのか、日本と朝鮮半島との関係をめぐる歴史的展開を、外交文書などの一次史料に基づいて

解明する。さらに、そうした作業に基づいて、どのような日韓関係を日韓がともに選択しうるのか、また、するべきであるのか、日韓関係をめぐる政策構想、未来構想についても考察する。

研究業績(2011 年度)

分担著書

Kimiya, Tadashi: "Reassessing the Park Chung Hee Era, 1961-1979: Development, Political Thought, Democracy, and Cultural Influence", Hyung-a Kim and Clark W. Sorensen 編, Center for Korean Studies Publication, The University of Washington Press, 2011 年.

기미야다다시(木宮正史): "박정희 시대 한일관계의 재조명(朴正熙時代 韓日關係の再照明)", 국민대학교 일본학연구소(国民大学校日本学研究所) 編, 선인(先人), 2011 年.

木宮正史: 「岩波講座 東アジア近現代通史 8 ベトナム戦争の時代 1960～1975 年」, 中野聡 編, 岩波書店, 2011 年.

木宮正史: 「歴史としての日韓国交正常化 I (東アジア冷戦編)・II (脱植民地化編)」, 李鍾元・木宮正史・浅野豊美 編, 法政大学出版社, 2011 年.

雑誌論文

기미야다다시(木宮正史): "일본의 평화연구와 한반도: 평화연구와 한반도의 점점 모색(日本の平和研究と朝鮮半島: 平和研究と朝鮮半島の接点模索)", 통일과 평화(統一と平和), Vol.3, No.1, pp.3-26, 2011 年. 【査読有】

木宮正史: 「朴正熙政權の対共産圏外交: 1970 年代を中心に」, 現代韓国朝鮮研究, No.11, pp.4-16, 2011 年.

国際会議等

木宮正史: "日本の韓国研究の展開と現状: 新たな可能性の模索", 韓国国民大学日本学研究所主催『韓国の日本研究・日本の韓国研究 現状と新たな模索』, 日本語 pp.1-13. 韓国語 pp.15-28., 2011.

기미야다다시(木宮正史): "일본의 평화연구와 한반도(日本の平和研究と朝鮮半島)", 서울대학교 통일평화연구원 창립 5주년 기념 학술회의 및 평화인문학 연구단(HK)출범기념식 통일을 바라보며 평화를 생각한다(ソウル大学統一平和研究院創立 5 周年記念学術會議および平和人文学研究団(HK)出帆記念式 統一を見据え平和を考える), pp.30-39., 2011.

木宮正史: "朝鮮半島統一に対する日本の立場と役割: 日韓の協力の焦点を当てて", 韓国統一研究院主催 第4回日韓政策フォーラム, pp.1-7., 2011.

Kimiya, Tadashi: "South Korea-Japan Relations in the "East Asia" and Its Political Implications in Accommodating with G2 Order and Solving the nuclear problem in the Korean Peninsula", Common prosperity in the 21st Century, North-East Asia, 21C 동북아 평화변영전략 한 중 일 국제회의, pp.165-182., 2011.

その他論文

木宮正史: 「1970 年代南北朝鮮外交競争における韓国外交とその現在的含意」, 日本国際政治学会部会3『東アジアのパワーシフトと朝鮮半島』, 2011 年.

講演・口頭発表

木宮正史: 「日本の韓国研究の展開と現状: 新たな可能性の模索」, 韓国国民大学日本学研究所主催『韓国の日本研究・日本の韓国研究 現状と新たな模索』, 2011. 【招待講演】

Kimiya Tadashi: "South Korea-Japan Relations in the "East Asia" and Its Political Implications in Accomodating with G2 Order and Solving the nuclear problem in the Korean Peninsula", Common prosperity in the 21st Century, North-East Asia, 21C 동북아 평화번영전략 한 중 일 국제회의, 2011. 【招待講演】

木宮正史: 「朝鮮半島統一に対する日本の立場と役割: 日韓の協力に焦点を当てて」, 韓国統一研究院主催 第4回日韓政策フォーラム, 2011. 【招待講演】

기미야다다시(木宮正史): "일본의 평화연구와 한반도 (日本の平和研究と朝鮮半島)", 서울대학교 통일평화연구원 창립 5주년 기념 학술회의 및 평화인문학 연구단(HK)출범기념식 통일을 바라보며 평화를 생각한다(ソウル大学統一平和研究院創立 5周年記念学術會議および平和人文学研究団(HK)出帆記念式 統一を見据え平和を考える), 2011. 【招待講演】

木宮正史: 「[大畑裕嗣『現代韓国の市民社会論と社会運動』成文堂、2011年]合評会」, 社会運動研究会定例研究会, 2011. 【招待講演】

木宮正史: 「1970年代南北朝鮮外交競争における韓国外交とその現在的含意」, 日本国際政治学会部会3東アジアのパワーシフトと朝鮮半島, 2011.

木宮正史: "日韓関係の構造と展望: 日本から見た韓国への期待", 平成23年度大韓民国政府研修職員への講演, 2011. 【招待講演】【一般向け】

木宮正史: 「韓国の政治外交と日韓関係」, 人事院第6回行政研修: 韓国中央公務員研究院派遣コース講演, 2011. 【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

木宮正史: 「한국정부가 입장 가장 난처 일본 전문가들 분석(韓国政府が立場が最も難しい 日本専門家の分析)」, 京郷新聞(韓国), 2011.

木宮正史: 「論説空間 ポスト金正日体制の行方と朝鮮半島 「同床異夢」でも 6者協議の枠組み生かす」, 東京大学新聞, 2012.

木宮正史: 「日 무책임 정치에 무당파 68%... 위기 단숨에 해결할 지도자 열망(日本の無責任政治に無党派 68% 危機一気に解決し得る指導者を熱望)」, 朝鮮日報(韓国), 2012.

越塚 登・教授

研究テーマ(主たるもの)

Ubiquitous Computing

Ubiquitous Computing は、生活空間の様々なところに埋め込まれたコンピュータが、現実世界の状況を認識し、認識した情報に基づき協調動作等を行いながら、人間生活をサポートする情報技術である。21 世紀になり、Post-Internet、Post-Personal Computing の、Leading Concept として世界的に注目を集めている。Ubiquitous Computing は、様々な研究領域の成果を総合的に組み合わせて初めて構築することができる高度な情報技術である。これらの要素技術には、RFID (Radio Frequency Identification)、Sensor Network、Smart Card、Secure Computing、Embedded Realtime System、Context-aware Computing、Augmented Reality/Mixed Reality、Wireless Communication 等があるが、これらのテーマに関して研究を進めている。

Embedded Realtime Systems

Embedded Realtime System は、様々な「モノ」や「場所」に組み込むコンピュータのための基盤技術である。技術的には、実世界の動きに追従するリアルタイム性や、コンパクトな実装、高い信頼性などが求められる。また、現在では、我が国を代表する様々な電子機器製品を支える技術にもなっており、当研究室で坂村教授とともに生み出した TRON や、その最新版である T-Kernel は、両方を合わせると、我が国の組み込みリアルタイム OS のシェアの約半数程度を占めると考えられている。当研究室では主に、Kernel や OS を主とした、基盤ソフトウェアの研究を行っている。これらの研究成果や、標準カーネルである T-Kernel、より小型のワンチップマイコン向けの μ T-Kernel、ファイルシステムなどの高水準ミドルウェアを備えた T-Kernel Standard Extension、マルチコア向けの MP T-Kernel などの研究開発を行い、これらの成果は、T-Engine フォーラムから、オープンソースとして、世界中に配布され利用されている。

研究業績(2011 年度)

分担著書

越塚登: 「ucode が識別する機能としての場所」(三角点……時流を読む: 巻頭言、月刊測量、2012 年 2 月号、pp. 8 ~9), 社団法人日本測量協会 編, 社団法人日本測量協会, 2012 年.

雑誌論文

Kenichi MIZUGAKI, Tatsuo NAKAGAWA, Ryosuke FUJIWARA, Shinsuke KOBAYASHI, Noboru KOSHIZUKA, Ken SAKAMURA: 「UWB-IR Wireless Accurate Location System for Sensor Network」, IEICE TRANSACTIONS on Communications, Vol.E94-B, No.5, pp.1432-1437, 2012 年. 【査読有】

Yap Lee Fueng, Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, M. F. F. Khan, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "SUCAS: smart-card-based secure user-centric attestation framework for location-based services", International Journal of Information Privacy, Security and Integrity, Vol.1, No.2/3, pp.160~183, 2012 年. 【査読有】

国際会議等

Mohamed Kharrat, Yuki Wakuda, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Evaluation of Weight Factor Mode and EEMD Performance on Measuring Heart Rate Activity", Internatrional Conference on Biomedical Engineering (ICoBE), pp.466~469, 2011. 【査読有】

Yap Lee Fueng, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "User-generated content for location-based services: A review", Annals of Information Systems Series special issue on Virtual Communities, Social Networks and Collaboration, 2011. 【査読有】

Shinsuke Kobayashi, Yukihiro Shigesada, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Interoperable Spatial Information System Architecture Based on Ubiquitous ID Infrastructure", 4th IEEE International Workshop on Service Science and Systems (SSS 2011), pp.435-440, 2011. 【査読有】

その他論文

峯岸康司、新堂克徳、越塚登、坂村健:「組み込みカーネル拡張 TK-SLP における省電力化戦略」, 電子情報通信学会 2012 年総合大会, 2012 年.

越塚登、新堂克徳、峯岸康司、坂村健:「PD 向きの省電力型 GUI ツールキット:TK-SLP/GUI」, 電子情報通信学会 2012 年総合大会, 2012 年.

新堂克徳、峯岸康司、越塚登、坂村健:「スマートメーター機能を提供する RTOS 拡張機能:TK-SLP/SMP」, 電子情報通信学会 2012 年総合大会, 2012 年.

越塚登:「情報通信技術の動向と展望:“Open”, “Smart”, “Standard”」, JR East Technical review, Winter 2012, No. 38, pp. 2~23, JR 東日本 第 18R&D シンポジウム基調講演, 2012 年.

別所正博, 中尾彰宏, 越塚登, 坂村健:「場所情報サービスのためのデータキャッシュ機構に関する分析」, 2012 年 電子情報通信学会 総合大会, 2012 年.

越塚登:「ユビキタス情報社会と医療、医薬品、健康」, シンポジウム②IT・ユビキタス情報社会と医薬品情報, 第 14 回日本医薬品情報学会総会・学術大会記念誌, 第 14 回日本医薬品情報学会総会・学術大会実行委員会発行, 2012 年.

講演・口頭発表

越塚登:「組み込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム 講習会「TRON/T-Kernel 入門」, 2011. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: "Ubiquitous ID Architecture: Standard Architecture for Internet of Things", 第二回 日中ユビキタス・ネットワーク技術協力会議, 2011. 【招待講演】

越塚登:「中級者向けの RTOS を使ったリアルタイムシステム開発手法入門」, T-Engine フォーラム講習会「組み込みリアルタイムプログラミング(ITRON 中級編)」, 2011. 【招待講演】

越塚登:「組み込みリアルタイム OS 概要とμITRON4.0 の基本機能の解説」, T-Engine フォーラム講習会「組み込みリアルタイムプログラミング(ITRON 初級編)」, 2011. 【招待講演】

越塚登:「ユビキタス情報社会と医療、医薬品、健康」, 第 14 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 2011. 【招待講演】

越塚登, 秋山美紀, 山本隆一, 飯原なおみ:「パネルセッション:IT・ユビキタス社会と医薬品情報」, 第 14 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 2011.

越塚登:「リアルタイム OS 概要と T-Kernel の基本機能解説」, T-Engine フォーラム講習会「組み込みリアルタイムプログラミング(T-Kernel 初級編)」, 2011. 【招待講演】

越塚登:「組み込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム 講習会「組み込みリアルタイムシステム入門と μ T-Kernel 入門」, 2011. 【招待講演】

越塚登:「uID 基礎セミナー」, T-Engine フォーラム uID 講習会, 2011. 【招待講演】

越塚登:「リアルタイム OS 概要と μ T-Kernel の基本機能解説」, T-Engine フォーラム 講習会「組み込みリアルタイムプログラミング (μ T-Kernel 初級編)」, 2011. 【招待講演】

越塚登:「すぐに始められる、ucode を用いたトレーサビリティシステム(実習篇)」, 食品トレーサビリティ公開講座 (2011 年度東京会場)食品トレーサビリティの原理と ucode を使った実践, 2011. 【招待講演】

越塚登:「ユビキタス ID 技術の相互運用性に関する研究開発」, CEATEC Japan 2011, ICT イノベーションフォーラム 2011, SCOPE 成果発表会, 2011.

越塚登:「組み込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム 講習会「TRON/T-Kernel 入門」, 2011. 【招待講演】

越塚登:「情報通信技術の動向と展望—Open, Smart, Standard—」, JR 東日本 第 18 回 R&D Symposium 基調講演「ICT を活用した将来の鉄道」, 2011. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「ユビキタス技術を使った町おこし」, にいがた市民大学講座「にぎわいのある新潟の『まちなか』を目指して」, 2011. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「中級者向けの RTOS を使ったリアルタイムシステム開発手法入門」, T-Engine フォーラム 講習会「組み込みリアルタイムプログラミング(ITRON 中級編)」, 2011. 【招待講演】

越塚登:「情報科学・工学からみたスマートシティ関連技術の現状と問題点」, ワークショップ・アジア向けスマートシティ, 2011. 【招待講演】

越塚登:「ユビキタスとグリーンテクノロジー」, TRONSHOW 2012, 2011. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「デジタルヘルス」, TRONSHOW 2012, 日経 BP 特別セッション, 2011. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「モノと情報をつなぐユビキタス」, TRONSHOW 2012, 2011. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「組み込みリアルタイム OS 概要と μ ITRON4.0 の基本機能の解説」, T-Engine フォーラム 講習会「組み込みリアルタイムプログラミング(ITRON 初級編)」, 2011. 【招待講演】

越塚登:「組み込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム 講習会「組み込みリアルタイムシステム入門と T-Kernel 2.0 入門」, 2012. 【招待講演】

越塚登:「リアルタイム OS 概要と μ T-Kernel の基本機能解説」, T-Engine フォーラム 講習会「組み込みリアルタイムプログラミング (μ T-Kernel 初級編)」, 2012. 【招待講演】

新聞・報道

越塚登:「ICT 活用の将来展望:JR 東日本が R&D シンポジウム」, 交通新聞、交通新聞社、2011 年 11 月 25 日(金) p. 1, 2011.

越塚登、三谷慶一郎、下松龍他、中川剛志、川崎淳司、荒井稔:「第 18 回 R&D シンポジウム・パネルディスカッション「ICT を活用した将来の鉄道システムを考える」」, JR East Technical review, Winter 2012, No. 38, pp. 38~72, 2012.

越塚登:「情報通信技術の動向と展望:“Open”、“Smart”、“Standard”」, 創(つくる)—研究開発ニュース、JR 東日本旅客鉄道株式会社、Vol. 21, 2012.

越塚登:「第 18 回 R&D シンポジウム「ICT を活用した将来の鉄道」」, JR ひがし, 第 26 巻、第 2 号, 2012 年 2 月, JR 東日本旅客鉄道株式会社、pp. 6~9, 2012.

越塚登:「モノと情報をつなぐユビキタス, 特集 TRONSHOW 2012」, TRONWARE Vol. 133, 2012 年 2 月号, pp. 32~33, 2012.

越塚登:「ユビキタスとグリーンテクノロジー, 特集 TRONSHOW 2012」, TRONWARE Vol. 133, 2012 年 2 月号, pp. 34~35, 2012.

越塚登:「日経 BP 特別セッション:デジタルヘルスが開く日本の未来社会, 特集 TRONSHOW 2012」, TRONWARE Vol. 133, 2012 年 2 月号, pp. 26~27, 2012.

坂村 健・教授

研究テーマ(主たるもの)

TRON (The Real-time Operating system Nucleus)

リアルタイムオペレーティングシステム(RTOS)はコンピュータ組込システム構築の際に最も中核となる基本ソフトウェアである。本研究では、RTOS の基礎研究であるリアルタイムスケジューラのアルゴリズムやアーキテクチャ設計など、基礎分野の研究から、RTOS の開発環境、応用システムまで幅広く研究をすすめている。1980 年から 20 年以上にわたり進めているライフワーク的な研究となっており、TRON は現在、携帯電話や車のエンジン制御、デジタルカメラ、電子辞書、レーザープリンタなど多くの機器で使われている。基本哲学はオープンアーキテクチャで、誰でもフリーでソースコードまで含み利用できる。2010 年 6 月に 7 年かけて地球に帰還した宇宙航空研究開発機構(JAXA)の小惑星探査機「はやぶさ」の制御にも TRON が使われている。

Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法を 1980 年初頭に提唱し、研究を進めてきた。これは、現在ではユビキタスコンピューティングや IoT(Internet of Things)と呼ばれている分野である。研究室では、Context-aware Computing や超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行っている。最近では、uID アーキテクチャの研究に力を入れており、すでに火災報知器等長期にわたりメンテナンスを要する製品のトレーサビリティシステムなどに、数百万の u コードが使われている。

Digital Museum

高度なデジタル技術を博物館や美術館に活用することで、新しいミュージアムの確立を提唱し「デジタルミュージアム」と名づけた。デジタル技術を駆使した、資料の収集、保存、修復、展示などの研究を行い、その成果をいかして構築した情報システムや展示システムは、1990年代初めに提唱され、以後多くの研究に影響を与えた。この研究では複数のユーザが同時に共有できる三次元仮想空間システム:MMUD(Multi-Media Multi-User Dungeon)の研究開発やユビキタスコンピューティング技術に基づくユビキタスマジューリアム等があり、東京都の東京ユビキタス計画銀座・浜離宮や都庁の空間情報システム・東京ミッドタウンユビキタスアートツアー等で実システムとして運用されている。漢字のような大規模文字セットを使用する国において技術的な限界による文化制限を行わないですむ多言語コンピュータの研究も進め、その成果をふまえて17万字以上の文字を扱えるシステムの構築にも成功している。

研究業績(2011年度)

著書

坂村健:「不完全な時代 科学と感情の間で」, 角川書店, 2011年。

雑誌論文

Kenichi Mizugaki, Tatsuo Nakagawa, Ryosuke Fujiwara, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "UWB-IR Wireless Accurate Location System for Sensor Network", IEICE TRANSACTIONS on Communications, Vol.E94-B, No.5, pp.1432-1437, 2011年。【査読有】

Lee Fueng Yap, Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "SUCAS: smart-card-based secure user-centric attestation framework for location-based services", Int. J. Information Privacy, Security and Integrity, Vol.1, No.2/3, pp.160-183, 2012年。【査読有】

国際会議等

M. Kharrat, Y. Wakuda, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Near Drowning Detection System Based on Swimmer's Physiological Information Analysis", World Conference on Drowning Prevention (WCDP), 2011。【査読有】

Shinsuke Kobayashi, Yukihiro Shigesada, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Interoperable Spatial Information System Architecture Based on Ubiquitous ID Infrastructure", The 4th IEEE International Workshop on Service Science and Systems (SSS 2011), pp.435-440, 2011。【査読有】

M. Kharrat, Y. Wakuda, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Evaluation of Weight Factor Mode and EEMD Performance on Measuring Heart Rate Activity in the Presence of Cardiac Arrhythmia", International Conference on Biomedical Engineering (ICoBE 2012), pp.466-469, 2012。【査読有】

M Fahim Ferdous Khan, and Ken Sakamura: "Context-Aware Access control for Clinical Information Systems", The 8th International Conference on Innovations in Information Technology (Innovations 2012), 2012。【査読有】

その他論文

坂村健:「宇宙を旅し世界に羽ばたくTRON」, SEMI News, Vol.27, No.2, p.18, 2011年。

Ken Sakamura: "Has the Big Earthquake Changed the Japanese Vision of the Future Ubiquitous Computing Applications?", ARTEMIS, No.10, pp.28-32, 2011 年.

坂村健: 「震災復興とユビキタス」, JICE REPORT, No.20, pp.1-14, 2011 年.

峯岸康史, 新堂克徳, 越塚登, 坂村健: 「組込みカーネル拡張 TK-SLP における省電力化戦略」, 2012 年電子情報通信学会 総合大会, 2012 年.

越塚登, 新堂克徳, 峯岸康史, 坂村健: 「EPD 向きの省電力型 GUI ツールキット:TK-SLP /GUI」, 2012 年電子情報通信学会 総合大会, 2012 年.

新堂克徳, 峯岸康史, 越塚登, 坂村健: 「スマートメーター機能を提供する RTOS 拡張機能:TK-SLP/SMP」, 2012 年電子情報通信学会 総合大会, 2012 年.

別所正博, 中尾彰宏, 越塚登, 坂村健: 「場所情報サービスのためのデータキャッシュ機構に関する分析」, 2012 年電子情報通信学会 総合大会, 2012 年.

講演・口頭発表

坂村健: 「ヘルスケア・アプライアンス「ユビキタスコピューティングとヘルスケア」」, 第 2 回 T-Engine フォーラムシンポジウム, 2011 年 4 月 19 日, 2011. 【基調講演】

坂村健: 「トロンの子の親が語る、組込みの未来 組込み開発 2.0」, 組込みシステム開発技術展, 2011 年 5 月 11 日, 2011. 【招待講演】

坂村健: 「T-Kernel2.0 公開記念特別講演」, T-Engine フォーラム, 2011 年 5 月 17 日, 2011. 【招待講演】

Ken Sakamura: "Invited Talk", International ICT Expo, 2011 年 6 月 2 日, 2011. 【招待講演】

坂村健: 「ユビキタス ID アーキテクチャとユビキタス場所情報基盤」, GIS コミュニティフォーラム, 2011 年 6 月 3 日, 2011. 【基調講演】

Ken Sakamura: "Invited Talk", 第 2 回中日物連網技術フォーラム, 2011 年 6 月 7 日, 2011. 【招待講演】

坂村健: 「RFID は、今どうなっているのか」, 第 3 回 T-Engine フォーラムシンポジウム, 2011 年 6 月 21 日, 2011. 【基調講演】

坂村健: 「IT 技術で支える障害者への災害支援」, TRON イネーブルウェアシンポジウム, 2011 年 7 月 2 日, 2011. 【基調講演】

坂村健: 「震災復興とユビキタス」, 国土技術センター第 25 回技術研究発表会, 2011 年 7 月 13 日, 2011. 【招待講演】

坂村健: 「さまざまな情報媒体とユビキタス」, 京都大学 食と農のマネジメント・セミナー, 2011 年 7 月 27 日, 2011. 【招待講演】

坂村健: 「災害に強い環境配慮都市としての「スマートシティ」を考えるにあたって」, 日本建築学会大会(関東), 2011 年 8 月 24 日, 2011. 【基調講演】

坂村健: 「認知症へのテクノロジー支援」, 脳の世紀シンポジウム, 2011 年 9 月 7 日, 2011.

坂村健:「ユビキタス社会実現のためのリアルタイム OS T-Kernel2.0」, FTF Japan 2011, 2011 年 9 月 13 日, 2011. 【招待講演】

坂村健:「食品トレーサビリティの原理と ucode を使った実践ー今すぐに始められる、ucode を使った食品トレーサビリティ」, 食品トレーサビリティ公開講座, 2011 年 9 月 29 日, 2011.

Ken Sakamura: “Advanced Platform for the Next Generation Smart Systems – TRON Project”, EPoSS Annual Forum, 2011 年 10 月 6 日, 2011. 【基調講演】

坂村健:「FA イノベーション T-Kernel 2.0」, FA イノベーション T-Kernel 2.0, 2011 年 10 月 18 日, 2011. 【基調講演】

坂村健:「これからの日本とユビキタス」, あおもり ICT クラウドフェスタ, 2011 年 10 月 22 日, 2011. 【基調講演】

Ken Sakamura: “Keynote Speech”, ITEA & ARTEMIS Co-summit 2011, 2011 年 10 月 25 日, 2011. 【基調講演】

Ken Sakamura: “A global overview from a global leader”, SMART-IOT Conference, 2011 年 11 月 1 日, 2011. 【基調講演】

坂村健:「第 4 世代移動通信環境における組込みシステム技術」, Embedded Technology 2011, 2011 年 11 月 17 日, 2011.

Ken Sakamura: “Invited Talk”, Beijing Annual Conference of Mobile Internet Industry, 2011 年 11 月 22 日, 2011. 【招待講演】

坂村健:「これからの日本を支える技術と制度」, 第 55 回 WIN 定例講演会 第 10 回人間情報学会講演会, 2011 年 3 月 14 日, 2012. 【基調講演】

新聞・報道

坂村健:「時代の風: サマータイム制は論外, 2011 年 4 月 17 日」, 毎日新聞, 2011.

坂村健:「時代の風: 原発事故と生肉食中毒, 2011 年 5 月 22 日」, 毎日新聞, 2011.

坂村健:「時代の風: 天秤の時代, 2011 年 6 月 26 日」, 毎日新聞, 2011.

坂村健:「時代の風: 科学と「新時代の信仰」, 2011 年 7 月 31 日」, 毎日新聞, 2011.

坂村健:「時代の風: 認知症と情報通信技術, 2011 年 9 月 4 日」, 毎日新聞, 2011.

坂村健:「PRIME NEWS 「ユビキタスの第一人者 坂村健東大教授に問う 科学技術と人間の共存」, 2011 年 9 月 29 日」, BS フジ, 2011.

坂村健:「時代の風: 「正しい独裁者」の死, 2011 年 10 月 9 日」, 毎日新聞, 2011.

坂村健:「論点スペシャル: 「和製ジョブズ」出るか - 法律も雇用も変えよう, 2011 年 10 月 29 日」, 読売新聞, 2011.

坂村健:「時代の風: 共同体維持の知恵, 2011 年 11 月 13 日」, 毎日新聞, 2011.

坂村健:「報道ステーション「スマホで銀ブラ「東京ユビキタス計画」」, 2011 年 12 月 13 日」, テレビ朝日, 2011.

坂村健:「時代の風:「1969」の成功, 2011年12月18日」, 毎日新聞, 2011.

坂村健:「時代の風:「初音ミク」と「ステマ」 2012年1月29日」, 毎日新聞, 2012.

坂村健:「時代の風: プライバシー意識の変化 2012年3月4日」, 毎日新聞, 2012.

佐倉 統・教授

研究テーマ(主たるもの)

科学技術コミュニケーション

科学技術の専門家と非専門家間のコミュニケーションを、円滑化、活性化するための方法論や制度策定および科学的・文明論的な理論枠組みの構築。

脳神経倫理(ニューロエシックス)

脳神経科学の倫理的、社会的、哲学的諸問題を考察し、教育現場や社会とのコミュニケーションなどにおける実際の問題の解決をめざす。

進化生物学史、動物行動学史

とくに日本における進化生物学、動物行動学の歴史を、諸外国の事例と比較しつつ、特徴を抽出する。

研究業績(2011年度)

著書

佐倉統(文)・木野鳥乎(絵):「わたしたちはどこから来てどこへ行くのか? ——科学が語る人間の意味——」, 〈中公文庫〉東京:中央公論新社, 2011年.

佐倉統:「科学の横道——サイエンス・マインドを探る12の対話——」, 〈中公新書〉東京:中央公論新社, 2011年.

佐倉統(著)葉亞璇(訳):“達爾文演化論入門(圖解版)”, 台湾:晨星出版有限公司, 2011年.

雑誌論文

佐倉統:「「便利」は人間を不幸にするのですか?(1)飽和する便利さ」, 考える人, Vol.36, pp.118-125, 2011年.【査読有】【一般向け】

内田麻理香・長神風二・佐倉統:「サイエンスコミュニケーションのプロセスを可視化するイベントの設計〜「対決!サイエンス大喜利」の実践事例〜」, 科学技術コミュニケーション, Vol.9, pp.82-92, 2011年.【査読有】

佐倉統:「脳神経科学と社会」, 遺伝, Vol.65, No.4, pp.61-64, 2011年.

佐倉統: 「「便利」は人間を不幸にするのですか? (2)3.11 大震災から[その 1]」, 考える人, Vol.37, pp.196-203, 2011 年. 【一般向け】

佐倉統: 「梅棹忠夫と 3.11——私たちは科学技術とどう向き合っていくのか——」, 中央公論, Vol.126, No.8, pp.24-41, 2011 年. 【一般向け】

Sakura O.: "Umesao Tadao and 3/11.", JAPAN ECHO WEB, Vol.7, 2011 年. 【一般向け】

佐倉統: 「「便利」は人間を不幸にするのですか? (3)3.11 大震災から[その 2]」, 考える人, Vol.38, pp.198-207, 2011 年. 【一般向け】

山野井貴浩・佐倉統・鈴木一臣・武村政春: 「高校生物 II の授業が進化の理解に及ぼす影響—現行の学習指導要領に基づく進化教育の課題を探る—」, 生物教育, Vol.52, No.1/2, pp.28-37, 2011 年. 【査読有】

佐倉統: 「「便利」は人間を不幸にするのですか? (4)「便利」は共同体を崩壊させるのでしょうか?」, 考える人, Vol.39, pp.188-195, 2011 年. 【一般向け】

Yamanoi, T., Suzuki, K., Takemura, M. & Sakura, O.: "Improved "Origami Bird" Protocol Enhances Japanese Students' Understanding of Evolution by Natural Selection: a Novel Approach Linking DNA Alteration to Phenotype Change", Evolution: Education and Outreach, Vol.Online First™ 10 March 2012, 2011 年. 【査読有】

佐倉統: 「科学技術との付き合い方」, チャイルド・サイエンス, Vol.8, pp.2-4, 2011 年.

佐倉統: 「脳神経科学と社会と倫理」, 映像情報メディア学会誌, Vol.65, No.7, pp.923-929, 2011 年.

国際会議等

Mizushima, N., Sakura, O.: "Project-based approach to identify the ethical, legal and social implications; a model for national project of Brain Machine Interface development. [Poster Presentation]", Neuro2011, 2011. 【査読有】

その他論文

佐倉統・原島博: 「多様な真実を見極め選択する時代」, 「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」領域報告書『文化を目指す創造型科学技術研究とその進め方——研究者との対話——』, 2011 年.

吉峰俊樹・川人光男・里宇明元・佐倉統: 「【座談会】BMI が、医療の新領域を拓いていく—多分野連携で育てる日本発の革新技術」, 週刊医学界新聞, 2959: 4-7, 2011 年.

講演・口頭発表

佐倉統(司会): 「三大災害と科学コミュニケーションの問題 地震・津波・原子力発電所事故」, 第6回東京大学科学技術インタープリター養成部門公開シンポジウム, 2011. 【一般向け】

佐倉統: 「脳科学の倫理～社会の中の脳科学～」, エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所主催応用脳科学アカデミーベーシックコース「応用脳科学の基礎」第 1 回, 2011. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統・安藤寿康・藤井直敬: 「社会脳——脳神経科学からみる社会——」, 八重洲ブックセンター主催生物の科学遺伝特集「社会脳」発売記念フォーラム, 2011. 【一般向け】

佐倉統:「社会の中の知のあり方——専門性と学際性——」, YNU 学術ディスコース第 4 回, 2011. 【招待講演】

田中沙織・大竹文雄・佐倉統(登壇者):「文部科学省「脳科学研究戦略推進プログラム」主催「経済学×脳科学 質問から読み解く『あなたの好み』?」」, サイエンスアゴラ 2011, 2011. 【一般向け】

佐倉統:「科学技術リテラシーについて」, 物流経営戦略セミナー2011 緊急特別企画「東日本大震災から考える!」, 2011. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「脳科学の倫理～社会の中の脳科学～」, シリウスインスティテュート主催セミナー, 2011. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「いろいろな学問から考える」, 北海道大学大学院水産科学研究院水産・海洋コーディネーター養成事務局主催「新水産・海洋都市はこだてを支える人材養成」オープン講義「水産・海洋都市を考える」, 2011. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「ヤング・エグゼクティブ・セミナー」, 日本アスペン研究所, 2011. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「総合的な学習の時間」, 東京都立日比谷高等学校, 2011. 【招待講演】【一般向け】

小長谷有紀・佐倉統(出演者):「梅棹忠夫が見た『人類の未来』を考える」, 新宿ロフトプラスワン, 2011. 【招待講演】【一般向け】

ユキ・アリマサ・伊藤隆介・南直哉・谷古宇尚・佐倉統・村岡武司(パネリスト):「シンポジウム「海の街函館を考えよう」」, 北海道大学大学院水産科学研究院水産・海洋コーディネーター養成事務局主催「新水産・海洋都市はこだてを支える人材養成」, 2011. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:“BMI の倫理指針策定に向けて / Toward making a regulation of BMI”, 第 34 回日本神経科学大会 (Neuroscience 2011), 2011.

佐藤 博樹・教授

研究テーマ(主たるもの)

ワークライフバランス

人材活用の多元化と働き方の変化

人材ビジネスの社会的機能

研究業績(2011 年度)

著書

佐藤博樹, 藤村博之, 八代充史:「新しい人事労務管理」, 有斐閣アルマ, 2011 年.

佐藤博樹, 佐藤厚:「仕事の社会学:変貌する働き方」, 有斐閣アルマ, 2012 年.

分担著書

佐藤博樹:「企業の人材活用の変化と非典型雇用」, 宮本みち子, 小杉礼子 編, 二極化する若者と自立支援, 明石書店, 2011 年.

雑誌論文

佐藤博樹:「第 3 次男女共同参画基本計画の特徴と課題:女性の活躍の場の拡大のために」, ジュリスト, No.1424, pp.8-14, 2011 年.

佐藤博樹:「市場環境や労働市場の構造変化と労働政策の課題」, 社会政策, Vol.3, No.1, pp.55-66, 2011 年.

佐藤博樹:「有期契の直用人材や派遣社員など外部人材の活用拡大と人事管理・労働政策の課題」, 年金と経済, Vol.30, No.2, pp.3-9, 2011 年.

その他論文

佐藤博樹:「就業形態の多様化が医療保険制度に与える影響等に関する調査研究 報告書」, 健康保険組合連合会, pp.1-78+資料, 2011 年.

佐藤博樹:「小規模多機能型居宅介護実態調査結果報告書」, 財団法人介護労働安定センター, pp.1-101+資料, 2011 年.

講演・口頭発表

佐藤博樹:「企業のワークライフバランス」, 日本物理学会第 67 回年次大会, 2012. 【招待講演】

須藤 修・教授

研究テーマ(主たるもの)

ICTの発展とそれに伴う経済システムの変容に関する研究

北アメリカ、EU、アジア諸国、日本という 21 世グローバルシステムに大きな影響力を行使する地域経済システム (Regional Economic System) の動向を比較検討しながら、ICTの発展とそれぞれの経済構造との相互作用的な関係について、またICTの発展と経済活動のグローバル化との相互作用的な関係に関して研究を行い、ネットワークを基盤にした知識創造型社会経済システムを構想する。

センサーネットワークを用いた予防医療システムに関する研究

産・官・学の連携を促しながら、センサーネットワーク、高度データ分析、グリッド・コンピューティングを組み合わせた ICT 基盤を用いて、糖尿病を中心とした生活習慣病の予防に関する実証実験を推進し、その実験と連動させて、産・

官・学・民の共創を活性化するセンサーネットワーク基盤地域コミュニティの形成とそのガバナンスに関する制度構想の研究を進めたいと考えている。そして、電子行政および医療情報基盤について、社会基盤としての ICT プラットフォームに関する政策科学的研究を推進する。

地球環境問題と持続可能な発展に関する研究

深刻化している地球環境破壊について検討するとともに、IT及びバイオテックの動向とネットワークを基盤にした経済活動の動向を関連させながら、環境保全型(循環型)の持続可能な地域経済発展、特にスマートシティについて研究を行う。

研究業績(2011 年度)

分担著書

須藤修:「文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成 22 年度成果報告書・情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」, 喜連川優 編, 国立情報研究所, 2011 年.

雑誌論文

須藤修、後藤玲子:「電子政府のパラダイム進化とクラウドコンピューティング」, 電子情報通信学会誌, 第 94 号, pp.359-363, 2011 年. 【査読有】

Yumiko Kinoshita, Reiko Gotoh, Osamu Sudoh: 「Preliminary Report on A Challenge to Compute Real-time Consumer Price Index in the Framework of Cyber Physical System (CPS) Using Large-scale Online Household Record Data (in 『2011 年日本社会情報学会 (JASI&JSIS) 合同研究大会研究発表論文集』」, 日本社会情報学会[JASI&JSIS], pp.261-264, 2011 年.

国際会議等

Osamu Sudoh: “The Scenarios of The Future World and Asia”, Asiagraph2012 Proceedings, Vol.6. No.1, pp.17-18, 2012.

その他論文

須藤修:「自治体クラウドが変える地域経営」, 日経グローバル, (日本経済新聞社)第 176 号(2011 年 7 月)pp.54-55, 2011 年.

廣川聡美・須藤修・篠原俊博・磯部悦男:「マイナンバーで変わる社会—地域資源の連携が招く新たな行政サービス」, LASDEC, (財団法人地方自治情報センター)第 42 巻第 3 号(2012 年 3 月)pp.5-12, 2012 年. 【査読有】

須藤修:「織細かつ大胆に」, 土屋光秋行政&情報システム連載集, 社団法人行政情報システム研究所, 2012 年 3 月)pp.79-80, 2012 年. 【査読有】

講演・口頭発表

須藤修:「サービスイノベーションと ICT ビジネスのこれから」, NEC ラーニング主催『NEC サービスアカデミー』(NEC 本社講堂, 2011 年 4 月 22 日), 2011. 【基調講演】【招待講演】

須藤修:「電子行政の今後－NPOは何をなすべきか」, NPO 関西情報化維新協議会主催『KIIC 記念講演会』(2011年5月11日), 2011. 【招待講演】

田中直毅・遠藤紘一・古賀伸明・森外志廣・峰崎直樹・須藤修:「社会保障・税に関わる番号制度」, 政府番号制度創設推進本部主催『番号制度シンポジウム in 東京』(日本学術会議講堂、2011年5月29日), 2011.

須藤修:「災害時における共通番号の活用について」, 日本マイクロソフト主催『第11回電子自治体戦略会議』(日本マイクロソフト本社、2011年6月2日), 2011. 【基調講演】【招待講演】

須藤修:「クラウドコンピューティングを基盤とした社会像と教育へのインパクト」, New Education Expo 実行委員会主催『16th New Education Expo2011』(東京ファッションタウン、2011年6月2日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「医療を支えるセンサーネット」, 国立情報学研究所主催『平成23年度市民講座』(学術総合センター、2011年6月2日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「自治体クラウドが変える地域経営」, 日本経済新聞社主催『日経グローバルセミナー』(日本経済新聞社、2011年6月15日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「ICT・クラウドと電子行政」, 日本ICカード利用促進協議会主催『日本ICカード利用促進協議会講演会』(プラットフォームスクエア、2011年6月23日), 2011. 【基調講演】

須藤修:「クラウドコンピューティングと社会システムの刷新」, 日本経済新聞社主催『世界 ICT カンファレンス 2011』(日経ホール、2011年7月1日), 2011. 【基調講演】【招待講演】

須藤修:「クラウドコンピューティングと地域社会ガバナンスのこれから」, 株式会社インフォマティクス主催、地理情報システム学会共催『空間情報シンポジウム 2011』(東京カンファレンスセンター品川、2011年7月7日), 2011. 【基調講演】【招待講演】

須藤修、井ノ口宗成、今井建彦、近藤晃司、中西悦子:「自治体クラウドの将来展望」, 社団法人経営協会主催『自治体総合フェア 2011』(東京ビッグサイト、2011年7月13日), 2011.

須藤修:「クラウドコンピューティングと地域社会ガバナンスのこれから」, 株式会社インフォマティクス主催、地理情報システム学会共催『空間情報シンポジウム 2011』(ナディアパークデザインホール、2011年7月14日), 2011. 【基調講演】【招待講演】

須藤修:「クラウドと地域社会のガバナンス」, 電子自治体推進パートナーズ主催『自治体クラウド講座』(内田洋行東京・大阪ユビキタス協創広場 CANVAS、2011年7月19日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「クラウドコンピューティングと地域情報システム」, 北日本コンピュータ主催『北日本コンピュータ講演会』(大宮ソニックシティビル、2011年7月29日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「自治体の ICT 戦略」, 総務省自治大学校『第3部課程新時代・地域経営コース第4部』(総務省自治大学校、2011年8月3日), 2011.

須藤修:「電子行政の今後」, 両備システム主催『両備クラウドフェア 2011』(岡山コンベンションセンター、2011年8月5日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「電子共通番号制度実現を目指して」, 関西生産性本部主催『関西生産性本部運営幹部会』(リーガロイヤルホテル、2011年9月1日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「クラウドコンピューティングと社会変動」, 日本計画行政学会第 34 回全国大会(中央大学後楽園キャンパス 5 号館、2011 年 9 月 11 日), 2011. 【基調講演】【招待講演】

須藤修:「電子行政サービスの構築と今後の展望」, 市町村アカデミー主催『電子自治体の推進と地域における情報政策』(市町村アカデミー、2011 年 9 月 13 日), 2011. 【招待講演】

峰崎直樹、篠田昭、國定勇人、池田弘、平井邦彦、須藤修、北川正恭:「被災地とともに共通番号の活用を考える」, 共通番号推進協議会主催『共通番号推進協議会・新潟シンポジウム』(新潟市民プラザ、2011 年 9 月 29 日), 2011.

須藤修:「番号制度と自治体の在り方」, 日本マイクロソフト主催『第 12 回電子自治体戦略会議』(日本マイクロソフト本社、2011 年 10 月 5 日), 2011. 【基調講演】【招待講演】

須藤修:「情報文化学会の将来展望」, 情報文化学会第 19 回全国大会(東京大学山上会館、2011 年 10 月 8 日), 2011. 【基調講演】

須藤修:「海外及び日本のクラウド最新動向」, 社団法人日本画像情報マネジメント協会主催『e ドキュメントフォーラム 2011』(東京ビッグサイト、2011 年 10 月 12 日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「全体総括」, 総務省・北海道主催『緑の分権改革全国市町村長サミット in 北海道』(札幌グランドホテル、2011 年 10 月 17 日), 2011.

須藤修:「ICT 戦略とライフィノベーション」, 東京大学高齢社会総合研究機構主催『HIP セミナー』(東京大学列品館大会議室、2011 年 10 月 20 日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「行政の電子化への道のり」, 独立行政法人情報処理振興機構主催『IPA Forum 2011』(明治記念館、2011 年 10 月 27 日), 2011. 【招待講演】

岡田良太郎、須藤修、大山水帆、恩田貴史、平林元明、浦上哲朗、平本健二、田代秀一:「行政の電子化と文字情報基盤」, 独立行政法人情報処理振興機構主催『IPA Forum 2011』(明治記念館、2011 年 10 月 27 日), 2011.

須藤修:「クラウドコンピューティングと社会・経済システムのイノベーション」, 社会・経済システム学会第 30 回大会(東京大学山上会館、2011 年 10 月 29 日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「Big Dataと番号制度」, 政府番号制度創設推進本部主催『番号制度シンポジウム in 三重』(三重県教育文化会館、2011 年 11 月 19 日), 2011. 【招待講演】

古川元久、須藤修、雲井純、上杉英明、石坂俊雄、向井治紀、山本藤雄:「社会保障・税に関わる番号制度」, 政府番号制度創設推進本部主催『番号制度シンポジウム in 三重』(三重県教育文化会館、2011 年 11 月 19 日), 2011.

須藤修:「電子行政と番号制度」, 財団法人地方自治情報センター主催『住基カード利活用促進セミナー』(サンルートプラザ名古屋、2011 年 11 月 22 日), 2011. 【招待講演】

須藤修:「クラウドコンピューティングと情報連携」, 総務省北陸総合通信局、北陸情報通信協議会主催『電子行政と ICT セミナー』(金沢エクセルホテル東急、2011 年 12 月 1 日), 2011. 【基調講演】【招待講演】

須藤修、濱島秀夫、木下としゆき、廉宋淳、齋藤豊、井上孝:「北陸の電子行政の明日を目指して」, 総務省北陸総合通信局、北陸情報通信協議会主催『電子行政と ICT セミナー』(金沢エクセルホテル東急、2011 年 12 月 1 日), 2011.

Osamu Sudoh: "Innovation of Governance", Public Service Summit 2011, Oslo, Dec. 11th, 2011.

須藤修:「アセスメントワーキング活動報告」, 新世代ネットワーク推進フォーラム主催『新世代ネットワーク推進フォーラム総会』(銀座フェニックスプラザ、2011年12月21日), 2011.

須藤修:「クラウドと情報連携—電子自治体の進化に向けて」, 電子自治体推進パートナーズ主催『自治体クラウド講座』(内田洋行東京・大阪ユビキタス協創広場 CANVAS、2011年12月22日), 2011. 【招待講演】

諸橋昭夫、須藤修、堀部正男、伊藤元規、廉宋淳:「自治体クラウドの推進と番号制度」, 電子自治体推進パートナーズ主催『自治体クラウド講座』(内田洋行東京・大阪ユビキタス協創広場 CANVAS、2011年12月22日), 2011.

須藤修:「国民IDで何がかわるか、何をえられるか」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『国際シンポジウム Beyond the info-pllosion』(東京大学安田講堂、2012年1月17日), 2012.

須藤修:「税と社会保障の一体改革—番号制度と自治体の在り方」, 日本マイクロソフト株式会社主催『電子自治体戦略会議』(大阪マイクロソフト支店、2012年1月25日), 2012. 【基調講演】【招待講演】

須藤修:「番号制度と自治体の在り方—ICTと地域社会の共創」, 日本マイクロソフト株式会社主催『電子自治体戦略会議』(日本マイクロソフト本社、2012年2月8日), 2012. 【基調講演】【招待講演】

須藤修:「ICTを活用した街づくり—情報連携とBig Data分析を基礎にした新たな地域社会の創造」, 総務省『ICTを活用した街づくりとグローバル展開に関する懇談会』(総務省、2012年2月21日), 2012.

須藤修、森雅志、富田哲郎、松木晴雄、利根川一:「<スマート><コンパクト>で創るコミュニティの価値—街づくりにおける情報化とインフラと再生可能エネルギー」, 日本経済新聞主催『第1回スマートイノベーション戦略会議』(東京ビッグサイト、2012年3月8日), 2012.

須藤修:「ソーシャルイノベーションとICTによる復興」, 福島県主催『3.11 福島復興の誓い 2012 in あいづ』(福島県立会津大学講堂、2012年3月11日), 2012.

足立祥代、阿部知明、榎並利博、須藤修、高井崇志、奈良俊哉、山田肇:「マイナンバーの活用はどのような未来を拓くか」, 特定非営利活動法人情報通信政策フォーラム電子行政研究会主催『マイナンバーの活用はどのような未来を拓くか』(ホテルルポール麹町、2012年3月12日), 2012.

河口洋一郎、和田秀樹、須藤修:「アジアの文化知」, Asiagraph2012(東京大学工学部2号館、2012年3月13日), 2012.

新聞・報道

須藤修:「クラウドコンピューティングと社会システムの刷新」, 『日本経済新聞』2011年7月27日付け朝刊, 2011.

Osamu Sudoh:「Osamu Sudoh」, Marquis Who's Who in the world 2012 (29th edition, Nov.2011), 2011.

須藤修:「番号制度は国際競争においても必須」, 『伊勢新聞』2011年12月10日付け朝刊, 2011.

須藤修、森雅志、富田哲郎、松木晴雄、利根川一:「<スマート><コンパクト>で創るコミュニティの価値—街づくりにおける情報化とインフラと再生可能エネルギー」, 『日本経済新聞』2012年3月25日付け朝刊, 2011.

園田 茂人・教授

研究テーマ(主たるもの)

変動するアジアの比較社会学

アジア、とりわけ中国系社会を対象に、アジア・バロメーターや中国四都市調査のデータを用い、その変化の諸層をひかくの視野から実証的に研究している。最近は、特に新中間層の台頭を視野に、その社会・文化的特徴や政治的な特徴から、どのようにアジアの変化をもたらすかについて考察を深めている。

日系企業のアジア進出への社会学的アプローチ

1991年から、日系企業のアジア進出をテーマに、社会学的調査を積み重ねている。2006年から07年にかけて、15年前に調査した日系企業(台湾、中国、タイ、マレーシア、インドネシア)を訪問し、その時系列的变化を追いかけて、2005年にはインドの日系企業調査を実施し、現地従業員の日系企業評価の比較を試みている。2009年からは、2001年に調査した中国の日系、韓国系、台湾系企業を対象に時系列調査を実施する計画をたてている。

研究業績(2011年度)

著書

園田茂人編:「勃興する東アジアの中産階級:アジア比較社会研究のフロンティア I」, 勁草書房, 2011年.

園田茂人・加茂具樹訳(ステファン・ハルパー):「北京コンセンサス:中国流が世界を動かす?」, 岩波書店, 2011年.

高原明生・大橋英夫・園田茂人・茅原郁生・明日香壽川・柴田明夫監修:「中国の10年後:65のリスクと可能性」, 講談社, 2011年.

分担著書

園田茂人:「中国経済の成長持続性:促進要因と抑制要因の分析」, 渡辺利夫+21世紀政策研究所 編, 勁草書房, 2011年.

雑誌論文

園田茂人:「全球(グローバル)化という中国的(ローカルな)経験」, 学術の動向, Vol.16, No.4, pp.19-27, 2011年.

園田茂人:「アジア・バロメーター:その意欲的な調査がめざしてきたもの」, 社会と調査, No.6, pp.96, 2011年.【一般向け】

園田茂人:“中国城市中“階級意識”社会的出現:基於天津市跨時分析(1997~2008)”, 中国研究, No.11/12, pp.143-151, 2011年.【査読有】

園田茂人:「世論調査にみる日中相互イメージ」, 外交, No.10, pp.50-53, 2011年.【一般向け】

末廣昭・園田茂人:「日本社会のガラパゴス化を考える」, 学術の動向, Vol.17, No.2, pp.60-65, 2011 年.

園田茂人:「『不平等国家 中国』、その後」, アジア時報, No.9 月, pp.36-71, 2011 年. 【一般向け】

園田茂人:「『アジア比較研究のフロンティア』事始め」, 明日の東洋学, No.26, pp.2-4, 2011 年. 【査読有】

国際会議等

園田茂人:“台日企業大陸投資聯盟之心理基礎—以江蘇、上海台日企業於 2001-2011 之 歷時分析”,「台日商策略聯盟與拓展大陸内需市場:經驗、案例與實務」研討會, 2011. 【査読有】

園田茂人:“流動性的增加是否会影響社会穩定?: 依拠天津市民的調查数据而開展的考察”, 中国社会学会 2011 年大会, 2011. 【査読有】

Shigeto Sonoda: “Chair: Panel 251 “Understanding Asian Societies through AsiaBarometer: Challenges of Comparative Quantitative Analyses”, 77th Annual Meeting of Association for Asian Studies, 2011. 【査読有】

園田茂人:“城郷遷移影響社會穩定? —中國的個案研究—”, 淡江「全球未來」人文系列演講, 2011. 【査読有】

Shigeto Sonoda: “Utilizing Different Social Capital in Different Social Settings: Comparative Analysis of Localization Process of Japanese, Korean, and Taiwanese Multinationals in mainland China, 2001-2010”, 中國、臺灣與東亞社會資本研究系列演講活動(4), 2011.

Shigeto Sonoda: “Emerging Socio-cultural Approaches to Asian Regional Integration Research”, 2nd Meeting on Asian Sociology: “Divergence and Convergence of Asian Sociologies: Theoretical and Empirical Perspectives”, 2011.

講演・口頭発表

園田茂人:「アジア・エリート大学生の『夢』: グローバル時代の留学と就労」, スルガ銀行 d-labo, 2011.

園田茂人:「国際社会学の観点からみたアジアビジネス展開の課題とその対応」, 組込みシステム産業振興機構第 9 回ビジネス交流サロン, 2011. 【招待講演】

園田茂人:「市民社会の台頭は何をもたらしたか?」, 日仏会館春秋講座「中国における市民社会の台頭」, 2011. 【招待講演】【一般向け】

園田茂人:「中国の都市中間層: その台頭がもたらす変化を読み解く」, 華人教授会第 8 回国際シンポジウム「中産階級の発展と中国社会のゆくえ」, 2011. 【招待講演】

園田茂人: “比較の視点から見た対中企業進出: 日系・韓国系・台湾系企業における駐在員の特性変化にみる諸特徴”, 第二回 JSPS 中国同窓会大会・シンポジウム「地域の発展と先端技術」, 2011. 【招待講演】

鷹野 澄・教授

研究テーマ(主たるもの)

IT を活用し情報で人の命と暮らしを守るという研究

地震災害など大規模災害に対して、情報通信技術 (IT) を活用して情報を適切に提供して、人々の命と暮らしを守る
ことについて研究します。

建物や大型構造物の構造物ヘルスマonitoringの研究

建物や大型構造物の劣化などの健康診断(ヘルスマonitoring)のために、IT 強震計などのセンサーを活用して技
術開発や応用の研究を進めています。

緊急地震速報などの即時的地震情報システムに関する研究

気象庁の緊急地震速報を活用するためには、利用者側でどのような対策をしたらいいのか、そのハード面での対策
の研究からソフト面での取り組みなどについて研究します。

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

鷹野澄:「緊急地震速報・津波警報-防災情報はどこまで伝わったか」, 情報処理, Vol.52, No.9, pp.1086-1087, 2011 年.
【査読有】

鷹野澄:「緊急地震速報の現状と減災への活用の課題」, 安全工学, Vol.50, No.6, pp.488-494, 2011 年.

講演・口頭発表

Takano, K. and T. Ito: "Introduction of building vibration observation data of metropolitan area due to the 2011 off the
Pacific coast of Tohoku Earthquake: an Approach of the IT Kyoshin Seismometer for Buildings", AGU Fall Meeting
2011, 2011.

志田龍太郎・鷹野澄・伊藤貴盛:「IT 強震計による常時微動観測と構造物ヘルスマonitoringの可能性」, 日本地震
学会2011秋季大会, 2011.

鷹野澄・鶴岡弘・ト部卓・中川茂樹・三浦哲:「東北地方太平洋沖地震直後の地震観測網と調査研究活動」,
ADVNET2011 シンポジウム・電子情報通信学会 IA 研究会共済, 2011.

鷹野澄・粟田祐介:「ボーリング地震計データによるオンサイト地震警報システムの検討—緊急地震速報の弱点を
補い直下型地震に備えるには—」, 日本地球惑星科学連合2011年大会, 2011.

鷹野澄:「緊急地震速報その仕組みを知り防災に生かすには」, 東京大学「安全の日」安全講演会, 2011. 【招待講
演】【一般向け】

鷹野澄:「情報で地震災害軽減を目指すためには—その現状と課題—」, 核融合エネルギーフォーラム 社会と核融
合クラスター Web 広報サブクラスター平成 23 年度第 1 回会合「核融合研究の社会への情報発信のための検討会」,
2011. 【招待講演】

鷹野澄・伊藤貴盛:「IT 強震計でみた 3.11 の東大キャンパスの建物の揺れ」, 日本地震学会2011秋季大会,
2011.

鷹野澄:「情報で地震災害軽減を目指すには —地震災害軽減のための地震観測ネットワークの現状と課題—」, 情報処理学会第4回インターネットと運用技術シンポジウム(IOTS2011), 2011. 【招待講演】

新聞・報道

鷹野澄(取材):「建物の弱点 IT で診断」, 日本経済新聞, 2011.

田中 明彦・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

田中 明彦:「-ジョセフ・ナイ教授を囲んで- アジアを考える日米」, アステイオン, 2011 年.

田中 明彦:「日韓 経済協力の新展開」, 日韓 経済協力の新展開, 2011 年.

新聞・報道

田中 明彦:「第17回「アジアの未来」 日本経済新聞」, 日本経済新聞, 2011.

田中 淳・教授

研究テーマ(主たるもの)

災害情報論

災害による被害を軽減するために求められる災害情報の要件を、住民や市町村等利用者側の意志決定過程に関する実証研究の知見に基づき、実証的・理論的に解明し、具体的な提言に結び付けている。災害期の警報や避難勧告等、復旧・復興期の生活再建情報、事前の防災意識向上や防災教育など、各段階での課題を対象とする。

災害弱者対策

阪神・淡路大震災で高齢者や障害者に被害が大きかったことやハリケーン・カトリーナにおける人種や所得によって被害が異なったように、災害による影響は社会集団によって差違が生じる。この際は、地震や火山噴火、あるいは爆発と行った外力による被害の程度に留まらず、避難のしやすさや生活再建の円滑さなど長期的な側面を持つ。災害の過程で生じる社会格差の視座から、研究を進めている。

集合行動論

20世紀初頭に誕生した集合行動論は、パニックや都市暴動、社会運動など多様な創発的社会行動を理論的に分析してきた。ある意味、災害の社会学的研究もまたその流れをくんでいる。日常の制度や組織、役割など社会秩序が、災害により修正を余儀なくされるためである。災害研究の理論的バックグラウンドとして、集合行動論ならびにその批判的研究として登場した集合行為論の研究を行っている。

研究業績(2011年度)

分担著書

田中 淳:「マイノリティへの情報保障」, ひょうご震災記念21世紀研究機構災害対策全書編集企画委員会 編, ぎょうせい, 2011年.

雑誌論文

大原美保・目黒公郎・田中淳:「東日本大震災前後での緊急地震速報に対する住民意識の比較分析」, 災害情報, No.No.10, pp.113-118, 2012年.【査読有】

国際会議等

Atshushi Tanaka: "Tsunami Disaster", Learning From Japan 4th Symposium 2012: Urban Society's Vulnerability, Disaster Mitigation and Preparedness in Indonesia and Japan, 2012.

講演・口頭発表

田中 淳:「東日本大震災にみる災害情報」, 日本社会情報学会, 2011.【招待講演】

田中 淳:「特別講演「大学における災害対策について」」, 第27回大学等環境安全協議会技術分科会, 2011.【招待講演】

田中 淳:「東日本大震災:防災計画の論点」, 社団法人日本私立大学連盟金曜会, 2012.【招待講演】【一般向け】

Atsushi Tanaka:「From Japanese to Portuguese」, 日本・ポルトガル防災セミナー, 2012.【招待講演】【一般向け】

田中 秀幸・教授

研究テーマ(主たるもの)

産業技術のイノベーション・システムに関する研究

技術的限界に直面した産業においては、それを乗り越えるために不確実性の高い技術の方向性を明らかにするような焦点化が求められる。市場メカニズムは、そのような焦点化の機能が全般的に弱いために、従来は、国家のイニシアティブによって、企業の境界を越えたイノベーションの取り組みが進められてきた。しかしながら、近年、最先端

の技術限界を突破するためには、必ずしもドメスティックな企業間協力だけでは対応が困難になってきており、それに伴い、国家でもなければ企業でもない非営利の中間組織がグローバルに展開することで、新たなイノベーション・モデル形成する例が生まれつつある。以上のような問題意識の下、産業技術のイノベーションにおける、市場、国家、企業、そして中間組織の機能などについての研究を進めている。

情報セキュリティの経済的相互依存関係に関する分析

情報システムのネットワーク化の進展によって、情報セキュリティは相互依存性が高まっている。相互依存的な環境下では、ある主体の情報セキュリティ水準は自らの管理努力だけではなく、ネットワークで接続された相手方のセキュリティ・マネジメントの影響も受けるようになる。こうした相互依存性は、外部効果を通じて市場の失敗をもたらすことになり、何らかの制度的な手当が必要となる。このような情報セキュリティを巡る組織の境界の変容に対して、いかなるインセンティブ設計があり得るのかなどについての研究を進めている。

地域情報化に関する研究

現在進められている電子自治体の取り組みは、行政内部の業務プロセスを抜本的に変えるのみならず、従来、行政の外側にあった主体との関係にも大きな変化をもたらす。具体的には、地域住民、地域企業やNPOとの相互関係を深めることで、新たな地域づくりが実現しつつある。電子自治体を契機として展開する地域情報化の中で、行政の境界がどのように変容し、いかなる制度が求められるかなどについての研究を行っている。

研究業績(2011年度)

雑誌論文

田中秀幸, 井出智明, 榊原理恵, 佐藤訓, 馬渡一浩: 「広告と企業価値に関する業種別研究」, 社会・経済システム, No.32, pp.55-59, 2011年. 【査読有】

田中秀幸: 「サービス特性が差異をもたらすソーシャルグラフのつくり方」, 宣伝会議, No.826, pp.30-33, 2011年. 【査読有】【一般向け】

Takagi, Soichiro, Hideyuki Tanaka, and Shigeto Sonoda: "Foreign Direct Investment in Service Sector and National Culture", 経済政策ジャーナル, Vol.8, No.2, pp.83-86, 2011年. 【査読有】

田中秀幸, 庄司昌彦, 河井孝仁, 佐藤雄一: 「参加を実感できるまちづくり: オープンな情報共有と地域ガバナンス」, 日本社会情報学会誌, Vol.23, No.2, pp.53-64., 2012年.

国際会議等

Takagi, Soichiro and Hideyuki Tanaka: "Globalization of Information Services and Industrial Structure of Japanese Economy", the 10th International Conference of Japan Economic Policy Association, 2011.

Jenjarrussakul, Bongkot, Hideyuki Tanaka and Kanta Matsuura: "Impact on Information Security from the Great East Japan Earthquake on March 11, 2011", the 8th Forum on "Financial Information Systems and Cybersecurity: A Public Policy Perspective, 2012.

その他論文

田中秀幸: 「東日本大震災と日本経済」, CIDIR Newsletter, no.13, p.2, 2011年.

西尾明将,田中秀幸:「雑誌『ぴあ』を通じた映画館女性割引の調査研究」,日本社会情報学会(JASI&JSIS)合同研究大会研究発表論文集, pp.137-140, 2011年.

渡部春佳,田中秀幸:「市民自治」の観点からみた公設文化施設研究」,日本社会情報学会(JASI&JSIS)合同研究大会研究発表論文集, pp.133-136, 2011年.

講演・口頭発表

田中秀幸:「災害と情報セキュリティ:経済的側面から」,第22回ISSスクエア水平ワークショップ,2011.【招待講演】
【一般向け】

Takagi, Soichiro and Hideyuki Tanaka: "Offshore Outsourcing of Information Services and Employment in Japan", 第68回日本経済政策学会全国大会, 2011.

堀江真弘,佐藤訓,井出智明,田中秀幸:「広告・ブランド価値と企業価値に関する定量的実証分析」,第68回日本経済政策学会全国大会, 2011.

Takagi, Soichiro and Hideyuki Tanaka: "Offshore Outsourcing of IT-services and its Effect on the Productivity of Japanese Economy", 社会経済システム学会第30回大会, 2011.

堀江真弘,佐藤訓,井出智明,田中秀幸:「広告,ブランド価値及び企業価値に関する定量的実証分析」,社会経済システム学会第30回大会, 2011.

田中秀幸:「地域SNSの特徴とこれからの地域社会」,第9回地域SNS全国フォーラム, 2011.【招待講演】
【一般向け】

西垣 通・教授

研究テーマ(主たるもの)

基礎情報学

生命情報から社会情報、機械情報にわたる情報学の基礎的な検討。マトウラーナ／ヴァレラのオートポイエーシス論、ホフマイヤーの生命記号論、ルーマンの理論社会学、グレイザーズフェルドのラディカル構成主義、シュミットの文学システム論などを批判的に摂取しつつ、情報メディア思想を理論的に検討する。これは、文理融合の学際的研究分野「ネオ・サイバネティクス」の一環をなす。

インターネット社会論

基礎情報学の応用として、21世紀インターネット社会における諸問題(企業組織、オンライン共同体、情報倫理、サイバースペース心理、集合知など)を理論的かつ実践的に検討する。

研究業績(2011年度)

著書

西垣通:「生命と機械をつなぐ知」, 高陵社, 2012 年.

分担著書

西垣通:「和製ロボット考(『ロボットは友だちになれるか』)」, フレデリック・カプラン(西兼志訳) 編, NTT出版, 2011 年.

雑誌論文

西垣通:「今なぜ「基礎情報学」なのか」, 人間会議, No.25, pp.230-235, 2011 年. 【一般向け】

西垣通:「シミュレーションという知」, 学術の動向, Vol.17, No.2, pp.17-19, 2012 年.

西垣通:「サイバネティクスへの誤解をとく」, 環境会議, No.37, pp.228-233, 2012 年. 【一般向け】

その他論文

西垣通:「スローネットから考える、ひと・まち・暮らし」, CITY&LIFE, 2011 年. 【一般向け】

西垣通:「ネット集合知を鍛え上げよ」, 中央公論, 2011 年. 【一般向け】

西垣通:「ファストITからスローITへ」, KAERURYOKU, 2011 年. 【一般向け】

西垣通:「誰とでもつながる」ことの代償」, 中央公論, 2012 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

西垣通:「ロボットは友だちになれるか」, 第 10 回情報メディア学会研究大会, 2011.

西垣通:「意識と自己の情報学」, 認知症高齢者のトータルケア, 2011. 【招待講演】

西垣通:「ITと英語と日本語」, 文系教科研究会(国語), 2011. 【招待講演】

西垣通:「情報メディアと記述の視点」, 日本英文学会関西支部第 6 回大会, 2011. 【招待講演】

西垣通:「普遍論理と生命コミュニケーション」, ダイアログ研究会, 2012. 【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

西垣通:「震災とネットの役割」, 日本経済新聞, 2011.

西垣通:「ITホワイト・ボックス「災害発生! その時」」, NHK教育テレビ, 2011.

西垣通:「視点論点「ジョブズ氏と米国西海岸文化」」, NHK教育テレビ, 2011.

西垣通:「論点「コンピュータ依存社会」」, 読売新聞, 2012.

橋元 良明・教授

研究テーマ(主たるもの)

情報行動に関する社会心理学的分析

メディア利用やコミュニケーション行動などが、社会変化に伴ってどのような変容を遂げているのか、そうした情報行動のパターンを規定する要因は何か、等について社会心理学的観点から実証的に分析している

メディアの効果、とくに青少年に及ぼす影響の研究

テレビやインターネットなどが社会生活や世論形成過程、青少年の精神的発達に及ぼす影響、携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールが対人関係、家族関係に及ぼす影響などを調査等の実証的手法で分析している。

言語的コミュニケーションの了解・伝達過程、変容に関する研究

言語的コミュニケーションに関し、おもに語用論的視点から了解・伝達構造を研究している。また、日本人の言語行動が、社会システムの変化とどのようにかかわっているか、あるいはマスメディアや新しいメディア・ツールの普及によってどのような影響をこうむっているのかに関する研究をおこなっている。

研究業績(2011 年度)

著書

橋元良明(編著):「日本人の情報行動 2010」, 東京大学出版会, 2011 年.

雑誌論文

山本太郎・橋元良明他:「Twitter 利用を中心と知る震災時の情報行動と通信不安—関東 Twitter 利用者ウェブ調査」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編, No.28, pp.115-160, 2011 年.

関谷直也・橋元良明他:「東日本大震災における首都圏住民の震災時の情報行動」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編, No.28, pp.65-114, 2011 年.

堀川裕介・橋元良明他:「中学生パネル調査に基づくネット依存の因果的分析」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編, No.28, pp.161-202, 2011 年.

橋元良明:「災害時における政府の情報公開—福島原発事故の事例をめぐって」, 都市問題, Vol.102, No.504, pp.10-15, 2011 年.

橋元良明:「テレビとネットのカニバリズムは本当か?—デジタル時代のテレビの観られ方」, 調査情報, No.504, pp.10-16, 2012 年.

橋元良明:「ネオ・デジタルネイティブの中高校生たち」, 英語教育, Vol.60, No.13, pp.28-30, 2012 年.

橋元良明:「便利さと人間関係」, 学燈, 109 巻, 1 号, pp.10-14, 2012 年.

橋元良明他:「被災地住民の震災時情報行動と通信不安—仙台・盛岡訪問留置調査」, 東京大学大学院情報学環
情報学研究 調査研究編, No.28, pp.1-64, 2012 年.

その他論文

橋元良明他:「インターネット利用に際する不安の 9 カ国グループインタビュー」, 報告書, NTT との産学連携共同研
究成果報告書, 2012 年.

橋元良明:「ことばとメディアを追いかけながら」, 社会言語科学, 巻頭言, 2012 年.

講演・口頭発表

橋元良明:「メディア環境の変容とネオ・デジタルネイティブの誕生」, 総務省四国総合通信局講演, 2011. 【招待講
演】【一般向け】

橋元良明:「情報行動、この 15 年の変化」, 情報通信学会講演, 2011. 【招待講演】

橋元良明:「メディア環境の変容」, 吉田秀夫記念財団講演, 2011. 【招待講演】

新聞・報道

橋元良明:「震災報道とデマ(「タイム・ライン」出演)」, TokyoFM, 2011.

橋元良明:「なぜ車中の携帯はいらいらするか」, 日本テレビ『所さんの目がテン』, 2011.

橋元良明:「『メディアと日本人』をめぐるインタビュー」, 北海道新聞, 2011.

橋元良明:「震災とソーシャルメディア」, 日本経済新聞, 2011.

橋元良明:「書評『日本人とメディア』」, 朝日新聞, 2011.

橋元良明他:「デジタルシニアライフ」, 朝日新聞, 2011.

橋元良明:「地デジ化 テレビの可能性が拡大(記事コメント)」, 読売新聞, 2011.

橋元良明:「気軽な書き込み、炎上呼ぶ恐れも(記事コメント)」, 毎日新聞, 2011.

橋元良明:「デジタルシニアプロジェクトの紹介」, TBS テレビ「ビジネス・クリック」, 2011.

橋元良明:「交流サイトやメール 高齢者、ネットでつながる(記事で研究紹介)」, 日本経済新聞, 2011.

橋元良明:「若者のテレビ離れは本当か(記事コメント)」, 読売新聞, 2011.

橋元良明:「若者とテレビ」, TBS テレビ「TBS レビュー」出演, 2011.

橋元良明:「「ニュースの本棚」テレビの現在と未来(著書の紹介)」, 朝日新聞, 2011.

橋元良明他:「災害ダイヤル利用 1 割 震災当日 盛岡・仙台 400 人調査(記事で研究紹介)」, 読売新聞, 2011.

橋元良明:「『ワールドビジネスサテライト』でデジタルシニアプロジェクト成果紹介」, TV 東京, 2012.

林 香里・教授

研究テーマ(主たるもの)

ジャーナリズムの自由主義イデオロギーについて「ケアの倫理」からの批判的検討

ジャーナリズムは 17 世紀より自由主義イデオロギーとともに発展してきた。それはマスメディアというシステムとともに自由市場で拡大することによって、そのイデオロギーを一層先鋭化させてきた。しかし、今日の情報化とグローバル化状況において、自由主義思想も再検討を迫られており、ジャーナリズムにおいても自由主義的発想の対案を考えていかななくてはならない。こうした新しいジャーナリズムの倫理について、とくに自由主義の批判理論である「ケアの倫理」を応用して研究をしている。

各国のジャーナリズム制度ならびに言説の国際的比較分析

欧米や東アジア諸国のジャーナリズム研究者と共同で、ジャーナリズムの制度および言説の比較研究を行っている。

- 1) 日本と韓国における公共放送の役割、イメージ、ニュース番組の比較
- 2) メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について: 8カ国国際比較研究(科学研究費補助金 B)

メディア産業における非正規雇用、フリーランスの労働環境について

近年のネット産業の台頭、ならびに経済環境の悪化による広告収入の減少という二つの波の中で、マスメディア産業はさまざまな側面からコストカットを余儀なくされている。こうした経済環境および技術環境の変動のなかで、各企業は人件費の削減を進めている。激動するマスメディア産業を取り巻く環境においてもっとも弱い立場の非正規雇用者、派遣技能労働者、フリーランスの処遇について実態を調査するとともに、制度的整備の可能性を研究する。

研究業績(2011 年度)

分担著書

Kaori Hayashi: "Questioning Journalism Ethics in the Global Age. How Japanese News Media Report and Support Immigrant Law Revision. In. Blackwell Handbook of Global Communication and Media Ethics. ", R. S. Fortner and P.M. Fackler (ed.) 編, Blackwell, 2011 年.

雑誌論文

Gerd.G.Kopper, Kaori Hayashi: 「ドイツのコミュニケーション研究・メディア研究の歴史と現況」, 『ジャーナリズム & メディア』 日本大学法学部新聞学研究所, 第 4 号, 305-307 頁, 2011 年. 【査読有】

林香里: 「『人々の声が響き合うとき—熟議空間と民主主義』(早川書房、J.S. フィッシュキン著)書評」, よろん 日本世論調査協会報, 第 108 号, pp.48-52, 2011 年.

林香里: 「朝 8 時、これから「ジャーナリズム」の話をしよう」, GALAC, 3 月号, pp.34-37, 2012 年.

国際会議等

Hayashi Kaori, Maeda Yukio: "Does gender matter globally? A comparative survey of 11 nations on political knowledge.", "Media, Political Culture, and Citizenship: An East Asian Symposium", University of Western Sydney, Parramatta Campus, 22 September, 2011.

その他論文

Gender and Communication Network. Kaori Hayashi et.al.: "Chapter for Japan", The IWFM Global Report on the Status of Women in the News Media, 2011 年.

講演・口頭発表

林香里: 「コメンテーター」, 現代韓国研究センター ワークショップ 「現代韓国文化のアジア的還流と地域的アイデンティティーの可能性」, 2011.

Kaori Hayashi: 「Auftaktveranstaltung der Japan-Wochen an deutschen Hochschulen. Teilgenommen als Panelist. "Panel 2. Wissenschaft und Wirtschaft. "+ "Abschlussdiskussion: Die Zukunft der Wissensgesellschaften und die Wissenschaft."」, Hochschulrektorenkonferenz. Wissen schaffen, Wissen nutzen- Perspektiven aus Japan und Deutschland. Universitaet Hamburg, 12 bis 14. April 2011.

Kaori Hayashi: "Media and Archiv in Japan", University of Duisburg-Essen, Seminar, 2011. 【招待講演】

林香里: 「ジャーナリズムの公共性とケアの倫理」, 連続セミナー「グローバル・ジャスティス」第 14 回: 司会 岡野八代 コメンテーター 加藤千洋、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科にて, 2011. 【招待講演】

林香里: 「意見の「多元性」実現と自由競争の狭間で 近年の欧州メディアの動向」, 世界のメディア・新聞 日本記者クラブ講演, 2011. 【招待講演】

林香里: 「「ケアのジャーナリズム」とは何か」, ワークショップ 「メディア×ジャーナリズム研究会<ケアのジャーナリズム>をめぐって」, 2011.

林香里: 「メディアの多様化とジャーナリズムの役割」, 佐倉市国際文化大学, 2011. 【一般向け】

Rhee June Woong, Maeda Yukio, Hayashi Kaori, Lee Misook: "Social Impacts of Public Service Broadcasting News in Japan and Korea", "Media, Political Culture, and Citizenship: An East Asian Symposium", University of Western Sydney, Parramatta Campus, 22 September, 2011.

林香里: 「基調講演 「転換期の日本のマスメディア」」, 「平成 23 年度中国青年メディア関係者代表団第 2 陣」21 世紀東アジア青少年大交流計画(日中 21 世紀交流事業)、2011 年 10 月 19 日 グランドプリンスホテル新高輪 国際館パミールにて, 2011. 【招待講演】

林香里: 「〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズム 「ひととき」が届けるもうひとつの声」 朝日新聞「ひととき」60周年記念シンポジウム「いま、思いを書く」, 基調講演、浜離宮朝日小ホール 2011年10月1日, 2011. 【招待講演】【一般向け】

林香里: 「〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズム ～3.11 以後の報道から考える～」, 連続講座 市民による市民のためのメディア研究 第2回, 2012. 【招待講演】【一般向け】

林香里: 「ドイツの原発事故報道を考える: 韓・中・独・米 4 カ国報道比較調査結果より」, 国際シンポジウム「ポスト3.11 の日独市民社会」2012年3月11日(日)13時30分～17時30分 会場: 東京大学駒場キャンパスI 18号館ホールにて, 2012. 【招待講演】

馬場 章・教授

研究テーマ(主たるもの)

日本近世経済史

日本近世の度量衡をはじめとする計量制度、三貨を中心とする貨幣制度を文献資料と現物資料の連関に注目して実証的に解明する。

デジタルアーカイブズ科学

文化資源のデジタル化の理論と方法について研究する。

コンテンツ創造科学

デジタルコンテンツ、とりわけ電子的なゲームの面白さの解明とそれを構造化した制作理論の構築、およびシリアスゲームについて研究する。

研究業績(2011年度)

分担著書

馬場 章・研谷紀夫: 「つながる図書館・博物館・文書館—デジタル化時代の知の基盤づくりへ 第5章 デジタルアーカイブから知識化複合体へ——三基盤からとらえるデジタルアーカイブとその深化」, 石川徹也, 根本彰, 吉見俊哉 編, 東京大学出版会, 2011年.

講演・口頭発表

馬場章: “The Past : Game Over? -How to preserve Video Game Culture and why it is important to do so(ゲームオーバー? ビデオゲームの文化をどのように保存するのか、そして保存はなぜ大切なのか)”, ”Video Games in Japan : Past, Present and Future”(日本におけるビデオゲーム: 過去、現在、そして未来), 2011. 【招待講演】

馬場章: 「災害に立ち向かうゲーム、ゲーム機」, CEDEC2011, 2011. 【招待講演】

馬場章: “Die Historischen Photographien der Trautz-Kollektion an der Universitat Bonn(Japanologie)(ボン大学日本学専攻が所蔵するトラウトコレクションの歴史写真)”, JSPS-Abend, 2011. 【招待講演】

馬場章: 「教育界から見た日本のICT教育」, 「Life is Tech!」, 2011. 【招待講演】

Akira Baba: “Historische Photographien – eine Einführung、 Systematischer Überblick über den Bestand an Photomaterialien in der Trautz-Sammlung”, Workshop “ Zur Nutzbarmachung der Trautz-Sammlung als wissenschaftliche Ressource ”, 2011. 【招待講演】

Akira Baba・Tshio Kawase: “ Photoalben der Sammlung、 Photoabzüge der Sammlung、 Glasnegative und -positive der Sammlung”, Workshop “ Zur Nutzbarmachung der Trautz-Sammlung als wissenschaftliche Ressource ”, 2011. 【招待講演】

馬場章: 「知識創造に向けたデジタルアーカイブ」, East Asian Regional Branch of the International Council on Archives, EASTICA, 2011. 【招待講演】

新聞・報道

馬場章: 「ゲームにどれだけ教育的な効果が!?——東京大学の馬場研究室が『有罪×無罪』を使用した実験を実施」, ファミ通.com, 2011.

馬場章: 「任天堂が生き残りをかけて携帯ゲームを大幅値下げ。今、日本のゲーム業界はピンチなのか?」, ニュース探究ラジオ Dig, 2011.

馬場章: 「ゲームは使い方で学力向上につながる」, 『10歳までの子育ての教科書』(アスコム), 2011.

馬場章: 「ゲームのメリット・デメリットを知ろう!」, 月刊『灯台』, 2011.

馬場研究室: 「にっぽん 微笑みの国の物語」, NHK BSプレミアム, 2011.

馬場章: 「「Eine einzigartige Zeitreise ins alte Japan」(「懐かしい日本へユニークなタイムトリップ」)」, 『General-Anzeiger』, 2011.

馬場章: 「EASTICA 基調講演「知識創造にむけたデジタルアーカイブ」」, 『アーカイブズ』46号(国立公文書館), 2011.

馬場章: 「ファミコン史」, テレビ東京「ジョージ・ポットマンの平成史」, 2011.

古村 孝志・教授

研究テーマ(主たるもの)

地震とその揺れの可視化

大地震による強い揺れの発生と、平野での揺れの増幅を高密度地震観測データ解析と、地震波伝播のコンピュータシミュレーションをもとに調べている。地震波伝播の可視化技法の開発と、地球シミュレータおよび次世代スパコンを用いた大規模並列シミュレーションの開発も進めている。

研究業績(2011 年度)

水越 伸・教授

研究テーマ(主たるもの)

ソシオ・メディア論

メディアを情報技術の側からだけでなく、人間や社会の営みの側からもとらえるメディア論の構築。そのための思想的方法論として「批判的メディア実践」を構想、実践している。

メディア史

19 世紀後半から 20 世紀半ばにかけての電氣的メディア、電子的メディアをめぐる技術と社会のダイナミズムについての歴史的研究。

メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについての理論と実践に関する総合的な研究。

研究業績(2011 年度)

分担著書

水越伸:「メディアと社会(『現代用語の基礎知識 2012』所収)」, 自由国民社 編, 自由国民社, 2011 年.

水越伸:「情報(『現代デザイン事典 2011』所収)」, 勝井三雄・田中一光・向井周太郎(監修)、伊東順二・柏木博(編集委員) 編, 平凡社, 2012 年.

雑誌論文

水越伸:「批判的メディア実践と文化プログラムのデザイン」, 人工知能学会, Vol.26, No.5, pp.432-439, 2011 年.【査読有】

水越伸(インタビュー):「大学探検隊「ソシオ・メディア論 水越伸研究室」」, SUNDAI ADVANCE, Vol.2011 年度 1 号, 2011 年.【一般向け】

水越伸、滝川クリステル(対談):「いま、一番気になる仕事」, ゲーテ, 2011 年6月, pp.44-48, 2011 年.【一般向け】

水越伸:「新しいメディア・リテラシーの見取り図——大震災後文化を生きるために」, 月刊教職研修, 2011年8月号, pp.81-86, 2011年. 【一般向け】

水越伸:「いま問われるメディアリテラシー」, フィナンシャル・ジャパン, 85号, p.15, 2011年. 【一般向け】

水越伸:「メディアリテラシーを手に入れるために」, Voters, 第6号, 2012年. 【一般向け】

水越伸:「メディアリテラシーを身に付けた今の生活者が求める情報」, 宣伝会議, No.832, pp.40-41, 2012年. 【一般向け】

作品

水越伸、鳥海希世子:「あいうえお画文」, あいうえお画文, 2011.

水越伸、他:「尚綱学院メディアコンテ」, 尚綱学院メディアコンテ, 2012.

講演・口頭発表

水越伸:「大震災後、私たちの考えていること、やろうとしていること」, 第25回メル・プラッツ公開研究会, 2011. 【一般向け】

Shin Mizukoshi: "Communal Storytellings in A Regimented Society: Critical Media Practice on People's Media Literacy and Expression", Academic Conference "Emergent Forms of Engagement and Activism in Japan: Politics, Cultures and Technologies", 2011. 【招待講演】

水越伸:「メディア・ビオトープと市民参加型技術の展望」, 震災と情報:震災後の日本再建のための情報科学技術, 2011. 【招待講演】

水越伸:「あいうえお画文」まとめ, 「あいうえお画文」授賞式&トーク, 2011. 【一般向け】

Shin Mizukoshi: "Boring Big Class and Keitai: From Media Literacy to Mobile Storytelling", MobilityShifts: An International Future of Learning Summit, 2011. 【招待講演】

水越伸:「情報があふれかえる社会」から「表現が編みあがる社会」へ」, メディア・エキスプリモ シンポジウム 2011, 2011.

水越伸:「メディアリテラシー実践プロジェクト報告」, 民放連メディアリテラシー・シンポジウム「視聴者との新しい関係のために」, 2011. 【招待講演】【一般向け】

水越伸(司会、パネリスト):「メディアの森はどうあるべきか:ポスト3.11の語りと記憶から」, 第31回メル・プラッツ公開研究会, 2011. 【一般向け】

Shin Mizukoshi: "Ten Years of Exploration in the Jungle of Information Intelligence", MOTIVE&Media Exprimio cross cultural seminar, 2011.

水越伸(パネリスト):「メディアリテラシーに取り組む新たな実践共同体を構想する」, 第32回メル・プラッツ公開研究会, 2012. 【一般向け】

水越伸:「ポスト・メルのスケッチブック」, メルエキスポ 2012, 2012. 【一般向け】

新聞・報道

水越伸(テレビ出演):「たば☆さと GO! ～あいうえお画文」, 東京ケーブルネットワーク, 2011.

水越伸(テレビ出演):「衛星放送が照らした未来」, NHK, 2012.

目黒 公郎・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

著書

目黒公郎・野田朝男:「目で見る自然災害サバイバルハンドブック」, 法研, 2011 年.

目黒公郎:「震災から身を守る 52 の方法」, アスコム, 2011 年.

平田直, 佐竹健治, 目黒公郎, 畑村洋太郎:「巨大地震・巨大津波 ―東日本大震災の検証―」, 朝倉書店, 2011 年.

目黒公郎(部分執筆):「自分の命、家族の命を守るためにできること、サロン・ド・防災ダイジェスト「地震大国の防災を考える」想定を超える大震災に備えて」, 自由国民社, 2012 年.

目黒公郎(監修):「地震了!(地震の絵本の中国語版)」, 小熊出版, 2012 年.

雑誌論文

目黒公郎:「間違いだらけの地震対策⑤ 災害時にどう行動するか?」, ぼうさい, No.61, p.21, 2011 年.

目黒公郎:「M8M9 大地震に備えよ やっている家族はここまでやっている 伝言ダイヤルより公衆電話」, 週刊現代, 2011 年.【一般向け】

目黒公郎:「間違いだらけの地震対策⑥ 次世代型危機管理・防災マニュアルの作り方」, ぼうさい, No.62, p.21, 2011 年.

Muneyoshi Numada, Shinya Kondo, Masashi Inoue, and Kimiro Meguro:「Analysis of Description of Local Disaster Management Plan for Smooth and Effective Wide-Area Support System During Large-Scale Disaster」, Journal of Disaster Research, Vol.7, No.2, pp.147-159, 2011 年.

Yasunori Hada, Shinya Kondo, Kimiro Meguro, Miho Ohara, Shinsaku Zama, Makoto Endo, Keiji Kobayashi, Takeyasu Suzuki, Itsuki Noda, Hiroki Shimora, Ikuo Takeuchi, Satoshi Kobayashi, and Jumpei Arakawa:「Implementation of Demonstration of Information Linkage Supposing the Tokyo Metropolitan Near Field Earthquake Disaster」, Journal of Disaster Research, Vol.7, No.2, pp.160-172, 2011 年.

近藤伸也, 目黒公郎: 「防災関連学会の研究分野の動向分析に関する基礎的研究」, 地域安全学会梗概集, No.28, pp.69-72, 2011 年. 【査読有】

近藤伸也, 目黒公郎: 「防災関連学会における研究者の発表動向分析に関する基礎的研究」, 地域安全学会梗概集, No.29, pp.47-50, 2011 年. 【査読有】

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎: 「被災地外の人材を有効活用する遠隔建物被害認定のためのアプリケーションの開発」, 地域安全学会梗概集, No.29, 4 ページ, 2011 年. 【査読有】

Kimiro Meguro: 「CLOSING THE “OLD” ICUS AND MOVING TOWARDS THE “NEW” ICUS」, ICUS Newsletter Special Issue, 12 pages, 2011 年.

目黒公郎: 「未来責任を果たす復興を」, ニューズレター『学環学府』, No.33, 2011 年.

目黒公郎: 「東日本大震災を受けて復興のビジョン」, CIDIR ニュースレター, Vol.12, 2011 年.

目黒公郎: 「未来責任を果たす復興を」, ニューズレター『学環学府』, No.33, 2011 年.

目黒公郎: 「防災強化 自治体が今できること 被害軽減の要は「耐震補強」促進へ自治体、知恵絞る」, 日経グローバル, No.173, 2011 年. 【一般向け】

Kimiro Meguro: 「The mission of new ICUS towards sustainable urban systems」, ICUS Newsletter, Vol.11, No.1, 2011 年.

Kimiro Meguro: 「Farewell to Prof. Yoshitaka Kato」, ICUS Newsletter, Vol.11, No.1, 2011 年.

目黒公郎, 櫻井光太郎, Navaratnarajha Sathiparan, 沼田宗純: 「PP-band 工法による不整形石積み組積造の耐震化に関する実験的研究」, 平成 23 年度土木学会年次学術講演会, 2011 年.

沼田宗純, 目黒公郎: 「「被災現場, 応急救護所, 病院, ヘリポート」におけるトリアージ情報の広域的共有」, 平成 23 年度土木学会年次学術講演会, 2011 年.

目黒公郎: 「地震時の室内の安全性を確保するために、効果的な家具の転倒防止法について」, CIDIR ニュースレター, Vol.13, 2011 年.

近藤伸也, 目黒公郎: 「防災関連学会の研究分野動向分析に関する検討」, 第 13 回日本災害情報学会研究発表大会予稿集, pp.55-60, 2011 年.

沼田宗純・國分瑛梨子・坂口理紗・目黒公郎: 「2011 年東日本大震災直後のテレビ報道の基礎的分析—「効果的な災害対応に貢献する報道モデル」の構築に向けて—」, 第 13 回日本災害情報学会研究発表大会予稿集, No.B-4-2, pp.219-224, 2011 年.

Kimiro Meguro: 「ICUS welcomes Dr. Kohei Nagai」, ICUS Newsletter, Vol.11, No.2, 2011 年.

沼田宗純・大原美保・目黒公郎: 「静岡県立総合病院を中心とした広域的災害医療情報の収集と共有に向けたトリアージ訓練の実施」, 地域安全学会論文集, No.15, 2011 年. 【査読有】

近藤伸也, 沼田宗純, 秦康範, 野田五十樹, 末富岩雄, 井上雅志, 目黒公郎: 「地方自治体の物資搬送業務の計画と対応の実態」, 第 8 回日本地震工学会・大会-2011 梗概集, pp.244-245, 2011 年.

沼田宗純・國分瑛梨子・坂口理紗・目黒公郎:「2011年東日本大震災直後のテレビ報道と被害の関係」, 第8回日本地震工学会・大会-2011 梗概集, pp.256-257, 2011年.

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎:「大規模地震災害後の迅速な建物被害認定のための遠隔認定システムの開発」, 第8回日本地震工学会・大会-2011 梗概集, 2ページ, 2011年.

大原美保・目黒公郎・田中淳:「東日本大震災前後における緊急地震速報に対する住民意識の変化」, 第8回日本地震工学会・大会-2011 梗概集, 2ページ, 2011年.

松下朋子, 目黒公郎:「東日本大震災被災者支援 非医療従事者としての医療活動支援から」, 第30回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, pp.41-42, 2011年.

近藤伸也, 目黒公郎:「防災研究分野の時系列動向分析の試み」, 第30回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, pp.129-130, 2011年.

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎:「被災地外の人材を有効活用する大震災時向け遠隔建物被害認定システムの開発」, 第30回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, 2ページ, 2011年.

牧之段浩平, 大原美保, 目黒公郎:「水害時の効率的避難を実現するための3D水害リスク可視化システムの検討」, 第30回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, 2ページ, 2011年.

山本了平, 大原美保, 目黒公郎:「地域特性を考慮した緊急地震速報の効果的活用戦略に関する研究」, 第30回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, 2ページ, 2011年.

沼田宗純・大原美保・目黒公郎:「広域的災害医療情報の収集と共有のためのトリアージシステム (TRACY) の開発と静岡県立総合病院における実践的訓練の実施」, 第30回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, pp.113-114, 2011年.

Taiki Kou, Shinya Kondo, and Kimiro Meguro: 「Analysis of Revised Management Plan “Standing Orders on Disaster” in Bangladesh –What are the accomplishments and agendas of the recent revision–」, 第30回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, pp.97-98, 2011年.

居山拓矢・沼田宗純・大原美保・目黒公郎:「2011年東北地方太平洋沖地震による東大生研での地震観測記録と緊急地震速報の活用状況」, 第31回土木学会地震工学研究発表会講演論文集, No.1-179, 2011年.

櫻井俊彰・沼田宗純・目黒公郎:「PP-band工法による組積壁の耐震補強効果に関する応用要素解析」, 第31回土木学会地震工学研究発表会講演論文集, No.3-159, 2011年.

Kimiro MEGURO, Rajendra SOTI, Sathiparan NAVARATNARAJ, Muneyoshi NUMADA: 「DYNAMIC TESTING OF MASONARY HOUSES RETROFITTED BY BAMBOO BAND MESHES」, 第31回土木学会地震工学研究発表会講演論文集, No.3-187, 2011年.

藤生 慎・沼田宗純・大原美保・目黒公郎:「効率的な建物被害認定のための 被害写真管理手法の開発 -東日本大震災後の宮城県仙台市宮城野区での実装に基づく考察-」, 第31回土木学会地震工学研究発表会, No.4-119, 2011年.

大原美保, 近藤伸也, 沼田宗純, 目黒公郎:「東日本大震災後における関連学会の活動状況の俯瞰」, 第31回土木学会地震工学研究発表会講演論文集, No.4-060, 2011年.

國分瑛梨子・坂口理紗・沼田宗純・目黒公郎:「2011年東日本大震災におけるテレビ局の報道内容の比較-「効果的な災害対応に貢献する報道モデル」の構築のために-」, 第31回土木学会地震工学研究発表会講演論文集, No.4-185, 2011年.

石川哲也・沼田宗純・川崎昭如・目黒公郎:「山陰地方豪雪災害時の Twitter ユーザによる情報発信行動の分析」, 第31回土木学会地震工学研究発表会講演論文集, No.4-186, 2011年.

早乙女愛・沼田宗純・目黒公郎:「2011年東日本大震災における緊急支援物資の数量推移に関する研究-仙台市の救援物資を事例として-」, 第31回土木学会地震工学研究発表会講演論文集, No.4-188, 2011年.

沼田宗純・國分瑛梨子・目黒公郎:「東日本大震災における NHK 総合で取り上げられたキーワードの時系列分析」, 第31回土木学会地震工学研究発表会講演論文集, No.4-198, 2011年.

井原毅・藤生慎・沼田宗純・大原美保・目黒公郎:「東北地方太平洋沖地震における三陸地方の高地移転地域の調査報告」, 第31回土木学会地震工学研究発表会講演論文集, No.6-160, 2011年.

目黒公郎:「東日本大震災の被災地のスムーズな復旧・復興と将来の大震災への備え」, 建設マネジメント技術, 2011年.【一般向け】

目黒公郎:「被災地のスムーズな復旧・復興と将来の大震災への備え、大震災からの復旧、知られざる地域建設業の闘い(米田雅子編著)」, ぎょうせい, pp.168-174, 2012年.

目黒公郎:「首都直下地震 最悪のシナリオ」, 週刊朝日, 2012年.【一般向け】

目黒公郎:「地震学者のサバイバル術 目黒巻」, サンデー毎日 増大号, 2012年.【一般向け】

目黒公郎:「効果的な災害対応の貢献する報道モデルの構築に向けて(1)」, CIDIR ニュースレター, Vol.15, p.2, 2012年.

目黒公郎:「編集長インタビュー「目黒公郎先生にお聞きしました」」, JACIC 情報 105, Vol.27, No.1, pp.28-38, 2012年.

目黒公郎:「東京の「魔」の避難場所」, 朝日新聞ウィークリーAERA, 2012年.【一般向け】

目黒公郎:「市民、企業、行政一体の災害対策を」, 川崎市制だより特別号, 2012年.【一般向け】

目黒公郎:「「3.11—あの日から1年 次世代に引き継ぐ大震災の教訓」 特別インタビュー【第15回】“巨大地震連発で被害総額 100兆円超”に耐えられる? 財政破綻しかねない「スケール感なき防災対策」の罨」, ダイヤモンドオンライン, 2012年.【一般向け】

国際会議等

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, and Kimiro MEGURO: “Application of Triage System (Tracy) to the Drill of the Yamanashi University Hospital, Japan Society of Civil Engineers (JSCE)”, Proceedings of the Thirteenth International Summer Symposium, pp.301-304, 2011.

Rajendra Soti, Sathiparan Navaratnaraj, Muneyoshi Numada and Kimiro MEGURO: “Dynamic Testing of Masonry House Models Retrofitted by Bamboo Band Meshes, Japan Society of Civil Engineers (JSCE)”, Proceedings of the Thirteenth International Summer Symposium, pp.75-78, 2011.

Kawasaki, A., Henry, M., Meguro, K.: "Disaster information gathering behavior after the Tohoku Earthquake Part 1: Results of Japanese respondents", Proceedings of the 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.45-56, 2011.

Henry, M., Kawasaki, A., Meguro, K.: "Disaster information gathering behavior after the Tohoku Earthquake Part 2: Results of foreign respondents", Proceedings of the 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.149-161, 2011.

Miho OHARA, Kimiro MEGURO and Atsushi TANAKA: "Survey on People's Awareness of Earthquake Early Warning before and after the 2011 off the Pacific coast of Tohoku Earthquake", Proceedings of the 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.163-171, 2011.

Tomoko MATSUSHITA and Kimiro MEGURO: "Building back right learning from Tohoku", Proceedings of the 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.313-318, 2011.

Kohei MAKINODAN, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "Development of 3D viewer of flood disaster risk to enhance evacuation capacity of residents", Proceedings of the 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.389-398, 2011.

Makoto FUJUI, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "Development of remote system for supporting building damage assessment during large-scale earthquake disaster", Proceedings of the 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.567-576, 2011.

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, and Kimiro MEGURO: "Development and Application of triage system (TRACY)", Proc. of the 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.597-608, 2011.

Kimiro MEGURO, Shunichi KOSHIMURA, Muneyoshi NUMADA: "Simple and Inexpensive Tsunami Disaster Mitigation System for Indian Ocean Rim Regions by Combining Multi-purpose Ocean Observation Buoys and Properly Arranged Evacuation Centers using Religious Facilities", Proc. of the 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.683-690, 2011.

Shinya Kondo, Kimiro Meguro: "Development of University SCM Model in Preparation for Emergency", Proc. of the 10th New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, 2011.

Kimiro MEGURO, Rajendra SOTI, Sathiparan Navaratnaraj, Muneyoshi NUMADA: "INNOVATIVE RETROFITTING METHOD FOR MASONRY STRUCTURES BY BAMBOO-BAND", 9th CUEE and 4th ACEE Joint Conference, 5 pages, 2012.

Makoto FUJUI, Muneyoshi NUMADA, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "Development of Survey Management System for Building Damage Assessment", One Year After 2011 Great East Japan Earthquake - International Symposium on Engineering Lessons Learned from the Giant Earthquake-, 2012.

Makoto FUJUI, Muneyoshi NUMADA, Kazuyuki TAKADA, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "Damage Investigation of Sanriku Railway Suffered from the 2011 off the Pacific Coast of Tohoku Earthquake", One Year After 2011 Great East Japan Earthquake - International Symposium on Engineering Lessons Learned from the Giant Earthquake-, 2012.

Miho OHARA, Kimiro MEGURO and Atsushi TANAKA: "A Comparative Study on People's Awareness of Earthquake Early Warning before and after the 2011 Great East Japan Earthquake", One Year After 2011 Great East Japan Earthquake – International Symposium on Engineering Lessons Learned from the Giant Earthquake–, 2012.

その他論文

目黒 公郎: 「新生 ICUS と持続可能な都市システムの構築を目指して」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.393–394, 2011 年.

川崎 昭如, 目黒 公郎: 「災害リスク軽減と都市環境の改善に向けた住宅への雨水貯留槽の設置可能性に関する基礎的研究」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.451–456, 2011 年.

近藤 伸也, 目黒 公郎: 「防災関連学会の研究分野の動向分析に関する基礎的研究」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.457–460, 2011 年.

近藤 伸也, 目黒 公郎: 「危機対応時における大学の SCM モデルの構築に関する検討」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.461–463, 2011 年.

小林 明夫, 沼田 宗純, 目黒 公郎: 「平時から災害時まで利用可能な高齢者の生活習慣の遠隔見守り支援システムの研究」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.465–470, 2011 年.

沼田 宗純, 大原 美保, 目黒 公郎: 「「TRACY」を用いた被災現場, 応急救護所, 病院, ヘリポートにおけるトリアージ情報の広域的共有の取組み」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.471–479, 2011 年.

沼田 宗純, 大原 美保, 目黒 公郎: 「静岡県立総合病院におけるトリアージ訓練から得られたトリアージシステム「TRACY」の成果と課題」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.481–484, 2011 年.

小川 隆介, 大原 美保, 目黒 公郎: 「既存システム間の情報共有による病院の災害医療支援情報システムの設計」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.485–488, 2011 年.

居山 拓矢, 沼田 宗純, 大原 美保, 目黒 公郎: 「2011 年東北地方太平洋沖地震による生研の観測記録」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.511–515, 2011 年.

大原 美保, 目黒公郎: 「2011 年東北地方太平洋沖地震時における東京大学生産技術研究所での緊急地震速報の活用状況」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.517–520, 2011 年.

沼田 宗純, 高石 孟, 目黒 公郎: 「多目的観測ブイで観測された 2011 年東北地方太平洋沖地震による津波」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.521–524, 2011 年.

沼田 宗純, 藤生 慎, 井原 毅, 大原 美保, 目黒 公郎: 「2011 年東北地方太平洋沖地震における津波被災地域の調査速報」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.525–533, 2011 年.

藤生 慎, 下野 大樹, 牧之段 浩平, 井原 毅, 沼田 宗純, 大原 美保, 目黒 公郎, 高田 和幸, 岩倉 成志, 兵藤 哲朗: 「011 年東北地方太平洋沖地震における三陸鉄道の被害調査速報」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.535–540, 2011 年.

藤生 慎, 沼田 宗純, 大原 美保, 目黒 公郎: 「地震被害による建物被害認定の作業効率化手法に関する提案と実践」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.541–546, 2011 年.

沼田 宗純, 國分 瑛梨子, 坂口 理紗, 目黒 公郎: 「効果的な災害対応に貢献する報道モデル」の構築に向けた2011年東日本大震災直後のテレビ報道の基礎的分析, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.547-554, 2011年.

沼田 宗純, 國分 瑛梨子, 坂口 理紗, 目黒 公郎: 「効果的な災害対応に貢献する報道モデル」の構築に向けた2011年東日本大震災直後のWEBニュースの基礎的分析, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.555-561, 2011年.

目黒 公郎, 大原 美保, 沼田 宗純, 近藤 伸也: 「3.11net 東京(東日本大震災復興支援研究者ネットワーク)の活動報告 その1」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.735-737, 2011年.

18. 大原 美保, 近藤 伸也, 沼田 宗純, 目黒 公郎: 「東日本大震災後における関連学会の活動に関する分析」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.739-747, 2011年.

大原 美保, 近藤 伸也, 康 泰樹, 沼田 宗純, 目黒 公郎: 「東日本大震災後における社会的課題の全体像の俯瞰」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.749-754, 2011年.

沼田 宗純, 近藤 伸也, 井上 雅志, 目黒 公郎: 「広域的応援体制確立のための地域防災計画の比較分析」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.755-763, 2011年.

大原 美保, 目黒 公郎, 田中 淳: 「東日本大震災前後における緊急地震速報に対する住民意識の比較分析」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.811-816, 2011年.

吉成 英俊, 大原 美保, 目黒 公郎: 「地域特性を考慮した緊急地震速報の効果検証と今後の活用戦略に関する研究」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.817-822, 2011年.

目黒公郎・沼田宗純: 「2011年東北地方太平洋沖地震被害速報」, ICUS ニュースレター特集号(和文), 2011年.

Kimiro MEGURO and Muneyoshi NUMADA: 「Quick Report on the Great East Japan Earthquake and Giant Tsunami」, ICUS Newsletter Special Issue, 24 pages, 2011年.

講演・口頭発表

目黒 公郎: “Urban Earthquake Disaster Mitigation Systems”, IISEE Special Lecture, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎: 「災害のトータルマネジメント -その影響を最小化するために-」, 日本薬業政治連盟特別講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎: 「災害対応力の強化と現在 -地震-[確実にやってくる大地震に対して 防災対策のあるべき姿 -ハードとソフト、事前と事後、公と私-]」, 市町村アカデミー招待講演会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒 公郎: 「?」, 財団法人全国地域情報化推進協会 平成23年度第1回総会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒 公郎: 「今後の防災研究のあり方」, 科学技術・学術審議会 研究計画・評価分科会 安全・安心科学技術委員会(第28回), 2011.

目黒 公郎: 「緊急地震速報の効果的な利用法について」, 緊急地震速報利用者協議会特別講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎: 「今後の防災対策のあり方」, 東京土建一般労働組合第37回幹部学校招待講演会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災の持つ意味(私見)」, 東京電機大学「ライフラインを中心とした都市の防災」講演, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「総合的な防災力を向上させる情報マネジメントのあり方と課題」, 平成 23 年度 APPLIC 講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「地震から生命を守るために 切迫する地震と君たちの将来 ー巨大地震から自分と最も大切なものを守るためにー」, 京都大学工学部特別講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「防災計画・マニュアルの考え方について」, 神戸・人と防災未来センター, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「地震大国日本の地震頻発期を生き抜くために」, 駒場リサーチキャンパス公開, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒 公郎:“Earthquake Safer Non-Engineered Houses by Technological and Social Approaches”, Japan-China joint workshop on accident prevention and disaster mitigation policy, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災以降の防災まちづくり 東京直下地震で生き残れるか」, アキバテクノクラブ オープンセミナー, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災 この震災の持つ意味とは?」, 平成23年建設トップランナーフォーラム ー東日本大震災-復旧現場からの証言-, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災 この震災の持つ意味とは? (私見)」, 中央大学理工学部特別講演会, 2011.

目黒 公郎:「地震時に安全な住空間を確保するために」, 東京大学安全の日講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえて 今後の地震防災対策のあり方」, 日本生産性本部企画 埼玉県首長会議, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「パネルディスカッション」, 独立行政法人 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター主催公開シンポジウム, 2011. 【招待講演】

目黒 公郎:“Lessons Learned from the 2011East-Japan Great Earthquake Disaster”, Special Lecture at the 4th International Student Seminar at AIT, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「近年の地震災害を踏まえ今後の地震防災対策を考える」, SPEED 研究会講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「「都市防災」・「耐震診断と補強」」, NTT ラーニングシステムズ・防災士研修 平成 23 年度東京第 3 回防災士育成研修, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえて～首都圏の皆様が学ぶべき教訓と今後の防災対策のあり方～」, 平成 23 年度 千代田区 防災講演会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒 公郎:「危機管理学」, 自治大学校講演, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「災害レジリエンスの高い社会の実現を目指して」, さいたま市議会防災講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東京で大地震が起きたら ～東日本大震災以降のまちづくり～」, 都庁セミナー, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「『東京大地震が起きた時葛飾区はようになるか? それに対してどう備えるか?』, 宅建葛飾区支部研修会基調講演, 2011. 【招待講演】【一般向け】

目黒 公郎:「災害レジリエンスの高い社会の実現を目指して 効果的な防災対策を自立的に進めていく仕組みとは」, 日本 PM シンポジウム基調講演, 2011.

目黒 公郎:「都市の総合防災力の向上」, 東京都高度建設技術研究講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえて ～生活とビジネスを守る効果的な防災対策とは～」, JX 日鉱防災講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「災害レジリエンスの高い社会の実現を目指して」, 情報学環ホームカミングデー講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえた首都圏の地震防災対策のあり方」, 生研ホームカミングデー講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえて 東京都及び区市町村がすべきこと」, 東京都建設技術協会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえた今後の地震防災対策のあり方」, コンクリート材料学会, 2011.

目黒 公郎:“Implementation of earthquake safer non-engineered masonry houses through technological and social approaches”, JST-JICA Padang Symposium, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:“New Tsunami Disaster Mitigation System Considering Local Conditions of Indian Ocean Rim Region”, JST-JICA Jakarta Symposium, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえて 今後の地震防災対策のあり方?」, 土木学会特別講演会, 2011.

目黒 公郎:“Lessons Learned from the 2011East-Japan Great Earthquake Disaster”, UNU Symposium, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:“Disaster Mitigation Systems Considering Local Availability”, Applicability and Acceptability JSPS-NRCT セミナー「Study and research opportunities in Japan and perspective of Thailand by Japanese social scientists(日本への留学・研究機会の紹介と日本の社会学者から見たタイの将来展望)」, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえて 今後の地震防災対策のあり方」, 共研フォーラム, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「地震大国の地震頻発期に生きる皆様へ ー生活とビジネスを守る効果的な防災対策とは」, 東京工科大学 25 周年記念講演会, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえたこれからの地震対策」, 全国建設研修センター・第 2 回サテライト講習(土木構造物地震対策講習), 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「地震大国の大地震頻発期に生きる皆様へ ～自分と自分の大切なものをどうやって守るか?～」, 東大駒場祭公開講演会, 2011. 【一般向け】

- 目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえて 越谷市の皆さまが実施すべき防災対策とは?」, こしがや市民大学講演会, 2011. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「構造物の破壊」, 土木学会鋼構造委員会講演会, 2011.
- 目黒 公郎:“Disaster imagination”, 5th UN-CECAR International Conference in Tokyo by UNU, 2011.
- 目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえた首都圏の地震防災対策のあり方」, 東京大学朝日新聞寄附講座, 2011. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「効果的な家具の転倒防止法」, 本郷消防署講演会, 2011. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「防災から減災へ」, 川崎市中原区防災講演会, 2011. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「総合的地震防災システムについて」, 日本工業用水協会特別講演, 2011. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえた今後のライフライン防災対策のあり方」, 奥村組技術セミナー, 2011. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「確実にやってくる地震に対して 間違いだらけの地震防災対策 「学ぶべき本当の教訓と今すべきこと」」, 平成23年度 医療の高度化に対応した医療人養成推進事業(国公立大学病院栄養士研修)プログラム基調講演, 2011. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「強靱な社会インフラを実現するための情報マネジメントの考え方」, 第 32 回横幹連合技術フォーラム 情報共有による社会インフラの強靱化 ―システム技術の新たな挑戦課題―, 2011. 【一般向け】
- 目黒 公郎:“Implementation of Disaster Resilient Built Environment based on The Lessons Learned from Recent Disasters including The 2011 East-Japan Great Earthquake Disaster”, シンガポールRISTEX会議, 2011. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「住まいの耐震について」, 飯田橋生協防災講演会, 2011. 【一般向け】
- 目黒 公郎:“Total Disaster Management System considering Local Availability, Applicability and Acceptability”, NSET(ネパール地震工学会)防災講演会, 2012. 【一般向け】
- 目黒 公郎:“Total Disaster Management System considering Local Availability, Applicability and Acceptability”, ネパール日本大使館防災特別講演会, 2012. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「防災教育の大切さとその手法について」, 愛知県三河地区防災講演会, 2012. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえて 市川市の皆さまが実施すべき防災対策とは?」, 市川市防災講演会, 2012. 【一般向け】
- 目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえ、切迫する地震と君たちの将来 ―巨大地震から自分と最も大切なものを守るために―」, 大阪大学工学部特別講義, 2012.
- 目黒 公郎:「働く人にとっての防災 東日本大震災の発生から 1 年 プレスセミナー『働く人にとっての防災』」, ?, 2012. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえ、今後の地震防災対策のあり方」, 大和ライフネクスト共力会社会講演会, 2012. 【一般向け】

目黒 公郎: “Lessons learned from recent natural disasters in Japan”, Towards implementation of safer built environment 4th Symposium 2012 learning from Japan, Urban Society, 2012. 【一般向け】

目黒 公郎:「今後のわが国の防災に必要と考えている大きな方向性や視点について」, 土木研究所-東京大学生産技術研究所共同講演会, 2012. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえて～私の考える『地震防災』～」, 東京都水道局防災特別講演会, 2012. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえた今後の地震防災対策のあり方」, 大日本印刷特別講演会, 2012. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえた今後の地震防災対策のあり方」, 横浜市磯子区, 2012. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえた今後の地震防災対策のあり方「首都直下地震への備えはどうあるべきか」を考える」, 読売新聞主催のシンポジウム, 2012. 【一般向け】

新聞・報道

目黒 公郎:「ハザードマップ、災害シミュレーション」, BS フジ TV プライムニュース, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「東日本大震災 そのときのために（下）帰宅難民」, 産経新聞, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「大地震 児童は学校待機 首都圏の小学校 防災マニュアル見直し」, 朝日新聞, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「パネルディスカッション 東日本大震災の復興の課題と地域建設業の役割 「求められるバランスの視点」」, 建通信文, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「シリーズ キーマンが語る トウキョウ地図 第 6 回将来の被害、劇的に減らせ いま耐震補強進める制度を」, 東建月報, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「そのときに備えて 自宅耐震化を最優先」, 読売新聞, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「台風 12 号 都市型洪水の危険と注意」, TV 朝日, 2011. 【一般向け】

目黒 公郎:「防災講演会～東日本大震災を踏まえて市川市の皆さんがすべき防災対策とは?～」, 地域新聞 市川南版, 2012. 【一般向け】

目黒 公郎:「UI で災害国際シンポ、都市部の減災目指し「互いの経験共有を」」, じゃかるた新聞, 2012. 【一般向け】

目黒 公郎:「首都直下地震へ備え 国・地方・住民一体で、特別フォーラム「3.11 の教訓」、基調講演「災害想像力」が大切」, 読売新聞, 2012. 【一般向け】

目黒 公郎:「「3.11」とこれからの防災、特別インタビュー」, 水道産業新聞, 2012. 【一般向け】

山本 博文・教授

研究テーマ(主たるもの)

日本近世史

織豊政権から江戸時代にかけての政治史を中心に研究している。特に諸藩に残された史料を悉皆的に調査・分析することによって、近世国家の理念、幕藩関係史、諸藩の政治史・社会史などを究明することを目指している。

歴史社会学

江戸時代の武士の行動を、一次史料をもとに研究し、特異な倫理観を持つ武士が、いかなる社会構造の中から生まれてきたのかを明らかにしている。

研究業績(2011 年度)

著書

山本博文:「徳川将軍15代」, 小学館, 2011 年.

山本博文:「日曜日の歴史学」, 東京堂出版, 2011 年.

分担著書

山本博文:「刀狩令に見る秀吉文書の特質」, 山本博文・堀新・曾根勇二 編, 柏書房, 2011 年.

雑誌論文

山本博文:「秀吉文書の「自敬表現」および刀狩令について」, 『歴史学研究』, No.887, 2011 年. 【査読有】

吉見 俊哉・教授

研究テーマ(主たるもの)

20世紀日本とアメリカニズム

1920年代から敗戦を経て現在に至る日本の文化的アメリカニゼーションを焦点に、占領期における大衆意識の屈折、米軍基地の文化的影響、アメリカからの視線を媒介にした戦後的アイデンティティの再構築、消費社会的なリアリティを演じる自己の他者化といった歴史的展開を構造的に把握してきている。これまで国際関係や政治経済的な面からの日米関係の分析は多数なされてきたのに比べ、大衆文化やメディア文化、都市文化の面から戦後日本におけるアメリカニズムを歴史的に掘り下げていく研究をリードしてきた。とりわけ本研究は、日本と韓国、台湾、フィリピン、東

南アジア諸国との連続性に視点を広げ、これらの東アジア諸国に点在したアメリカ軍基地と同地域に大衆文化の関心に関心を向けている。帝国主義期から冷戦期への流れのなかで、ポスト植民地主義や文化研究、新しい文化史の視座を十分に消化しながらこのテーマに本格的に取り組むものである。

MALUI連携とデジタル知識基盤

デジタル技術は活字と視聴覚を架橋し、これまで多様な方式で蓄積されてきた文化的記憶を統合的に扱う。こうした技術的可能性にいち早く着目し、新たな記憶のプラットフォームを構築してきたのは、グーグルをはじめとするグローバル企業である。しかし、20世紀の大衆消費社会における文化資源の生産・流通・消費のサイクルを支えたマスメディア産業に代わり、やがて地球規模で広がる新たな知識循環型社会における文化資源の保存と活用、価値の創造のサイクルを支えていくのは、これまで公共的な文化施設として整備されてきた図書館、博物館・美術館、文書館・資料館、フィルムセンター、番組アーカイブなどの機関と大学、この新たな体制に適応した文化産業の横断的な連携、すなわちMALUI連携である。この場合、Mは Museum、Aは Archives、Lは Library、Uは University、Iは Industry を示す。これらの公共的な文化・知識機関の連携により、いかにした新たなデジタル知識基盤を構築していくことができるかについて探究を進めている。

20世紀東アジア文化史を書く

東アジアの若手研究者が共同で、20世紀全体を通じた東アジア文化史を書くことを目指している。これまで、Inter-Asia Cultural Studies や、Cultural Typhoon のプロジェクトで展開してきたネットワークと蓄積を基礎に、20世紀の東アジアが経験した様々な歴史をそれぞれの国民国家の枠を越えた仕方で記述したい。特に、第一次世界大戦と西洋の後退の東アジアにおける文化的インパクト、1920～30年代の東アジアの諸都市におけるモダン文化の浮上、日本の軍事侵略と終戦、植民地独立戦争、冷戦と朝鮮戦争、ベトナム戦争、様々な「戦後」と「成長」の時代の到来、トランスナショナルなメディア文化と、東アジアが経験した20世紀を共通の歴史として、最初から国民国家を越えた視座と枠組みのなかで集团的に記述していく。

研究業績(2011年度)

雑誌論文

吉見俊哉:「大学院教育の未来形はどこにあるのか」, 中央公論, Vol.126, No.2, pp.44-51, 2011年。【一般向け】

暦本 純一・教授

研究テーマ(主たるもの)

Human Computer Interaction

Ubiquitous Computing

Reality Sensing

研究業績(2011年度)

雑誌論文

末田航、味八木崇、暦本純一: 「実世界集合知による利用者の認知地図の可視化とモバイルインタラクションへの適用」, 情報処理学会論文誌, Vol.52, No.4, 2011 年. 【査読有】

Emi Tamaki, JunRekimoto: "PossessedHand: Controlling Hand Movements with Computer Output", IEEE Computer, Vol.44, No.15, pp.84-86, 2011 年. 【査読有】

末田航、味八木崇、暦本純一: 「実世界集合知による利用者の認知地図の可視化とモバイルインタラクションへの適用」, 情報処理学会論文誌, Vol.52, No.4, 2011 年. 【査読有】

国際会議等

Keita Higuchi, Tetsuro Shimada and Jun Rekimoto: "Flying Sports Assistant: External Visual Imagery Representation for Sports Training", The 2nd International Conference on Augmented Human, 2011. 【査読有】

Yoshio Ishiguro and Jun Rekimoto: "Peripheral Vision Annotation: Noninterference Information Presentation Method for Mobile Augmented Reality", The 2nd International Conference on Augmented Human, 2011. 【査読有】

Keita Higuchi, Yoshio Ishiguro and Jun Rekimoto: "Flying Eyes: Free-Space Content Creation Using Autonomous Aerial Vehicles", ACM CHI 2011, 2011. 【査読有】

Hitomi Tsujita and Jun Rekimoto: "HappinessCounter: Smile-Encouraging Appliance to Increase Positive Mood", ACM CHI 2011, 2011. 【査読有】

Emi Tamaki, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "PossessedHand: Techniques for controlling human hands using electrical muscles stimuli", ACM CHI2011, 2011. 【査読有】

Hitomi Tsujita and Jun Rekimoto: "Smiling Makes Us Happier: Enhancing Positive Mood and Communication with Smile-Encouraging Digital Appliances", Ubicomp 2011, pp.1-10, 2011. 【査読有】

Koh Sueda, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "Social Geoscape: Visualizing an Image of the City for Mobile UI Using User Generated Geo-tagged Objects", 8th International ICST Conference on Mobile and Ubiquitous Systems, 2011. 【査読有】

Emi Tamaki and Jun Rekimoto: "PossessedHand", IEEE World Haptics 2011, 2011. 【査読有】

Kana Misawa, Yoshio Ishiguro and Jun Rekimoto: "Ma petite chérie : What are you looking at? A Small Telepresence System to Support Remote Collaborative Work for Intimate Communication", the 3rd International Conference on Augmented Human (AH 2012), 2012. 【査読有】

その他論文

島田哲朗, 樋口啓太, 暦本純一: 「ShootAR: ユーザ姿勢を考慮したモバイル AR のための操作スタイルの提案」, インタラクション 2011 論文集, 2011 年. 【査読有】

辻田眸, 暦本純一: 「笑顔は人を幸せにするのか? 笑顔促進支援システム」, ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェア(WISS2011), 2011 年. 【査読有】

三澤 加奈, 石黒 祥生, 暦本 純一: 「LiveMask : 立体顔形状ディスプレイを用いたテレプレゼンスシステムにおけるコミュニケーションの評価」, インタラクシオン 2012, 2012 年. 【査読有】

講演・口頭発表

Jun Rekimoto: "Technologies for Augmenting Humans: from Human-Computer Interaction to Human-Computer Integration", Keynote at Bilateral DFG-Symposium on Interaction with Smart Artifacts, 2011. 【招待講演】

Jun Rekimoto: "From Augmented Reality to Augmented Human", International Design Culture Conference (IDCC2011), 2011. 【招待講演】

新聞・報道

Jun Rekimoto: 「Instrument of Control : Belts of electrodes can control muscles in the forearm to help a beginner play a musical instrument.」, MIT Technology Review, 2011. 【一般向け】

Jun Rekimoto: 「The 50 Best Inventions of 2011 (PossessedHand)」, TIME Magazine, 2011. 【一般向け】

Jun Rekimoto: 「Hand-hacking lets you pluck strings like a musical pro」, NewScientist, 2011. 【一般向け】

Jun Rekimoto: 「Possessed Hand' Teches You to Play Music」, ABC news, 2011. 【一般向け】

暦本純一: 「Science News: 拡張現実感 AR を超えて 東京大学 暦本純一研究室」, JST(科学技術振興機構), 2012. 【一般向け】

受賞

Yoshio Ishiguro, Jun Rekimoto: AH2011 Best Paper Award「Peripheral Vision Annotation: Noninterference Information Presentation Method for Mobile Augmented Reality」, 2011 年.

玉城絵美: 総長賞「総長賞」, 東京大学, 2012 年.

伊東 乾・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

大原 美保・准教授

研究テーマ(主たるもの)

緊急地震速報の効果的な利用法に関する研究

緊急地震速報を効果的に活用するために、地域における海溝型地震・活断層型地震の発生リスクを考慮した速報効果の検証、技術的戦略の提案を行うとともに、実際の速報発表時の住民の対応行動の調査や対応行動力向上のための環境整備を行っている。

組織の危機管理対応力の向上に関する研究

首都直下地震などの大規模災害時に、組織の事業・サービスを途絶することなく継続させるためには、組織の危機管理対応力を日頃から向上させておく必要がある。大原研究室では、大学・病院などの各種組織を対象とした、危機管理マニュアルのあり方や危機管理対応力を向上させるための方法論を研究している。

研究業績(2011 年度)

分担著書

大原美保:「災害対策全書(4)防災,減災」, ぎょうせい 編, ぎょうせい, 2011 年.

雑誌論文

沼田宗純,大原美保,目黒公郎:「静岡県立総合病院を中心とした広域的災害医療情報の収集と共有に向けたトリアージ訓練の実施」, 地域安全学会論文集, No.15, 2011 年.【査読有】

大原美保,目黒公郎,田中淳:「東日本大震災前後での緊急地震速報に対する住民意識の比較分析」, 日本災害情報学会誌「災害情報」, 2011 年.【査読有】

目黒公郎, 大原美保, 沼田宗純, 近藤伸也:「3.11net 東京(東日本大震災復興支援研究者ネットワーク)の活動報告 その1」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.33-36, 2011 年.

大原美保, 近藤伸也, 沼田宗純, 目黒公郎:「東日本大震災後における関連学会の活動に関する分析—3.11net 東京(東日本大震災復興支援研究者ネットワーク)の活動報告 その2—」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.37-46, 2011 年.

大原美保, 近藤伸也, 康泰樹, 沼田宗純, 目黒公郎:「東日本大震災後における社会的課題の全体像の俯瞰—3.11net 東京(東日本大震災復興支援研究者ネットワーク)の活動報告 その3—」, 生産研究, Vol.63, No.6, pp.47-52, 2011 年.

藤生慎,下野大樹,牧之段浩平,井原毅,沼田宗純,大原美保,目黒公郎,高田和幸,岩倉成志,兵藤哲朗:「2011 年東北地方太平洋沖地震における三陸鉄道の被害調査速報」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.535-540, 2011 年.

藤生慎,沼田宗純,大原美保,目黒公郎:「地震被害による建物被害認定の作業効率化手法に関する提案と実践」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.541-546, 2011 年.

沼田宗純,藤生慎,井原毅,大原美保,目黒公郎:「2011 年東北地方太平洋沖地震における津波被災地域の調査速報」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.525-533, 2011 年.

居山拓矢,沼田宗純,大原美保,目黒公郎:「2011 年東北地方太平洋沖地震による生研の観測記録」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.511-515, 2011 年.

沼田宗純,大原美保,目黒公郎:「「TRACY」を用いた被災現場, 応急救護所, 病院, ヘリポートにおけるトリアージ情報の広域的共有の取組み」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.471-479, 2011 年.

沼田 宗純, 大原 美保, 目黒 公郎:「静岡県立総合病院におけるトリアージ訓練から得られたトリアージシステム「TRACY」の成果と課題」, 生産研究, Vol.63, No.4, pp.481-484, 2011 年.

Hidetoshi YOSHINARI, Miho OHARA, Kimiro MEGURO: "A STUDY ON EXPECTED DISTRIBUTION OF LEAD TIME BY EARTHQUAKE EARLY WARNING", Bulletin of earthquake resistant structure research center, No.44, pp169-180, 2011 年.

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, Kimiro MEGURO: "PRACTICAL USE OF IT TRIAGE SYSTEM (TRACY) TO THE UNIVERSITY OF YAMANASHI HOSPITAL", Bulletin of earthquake resistant structure research center, No.44, pp.181-193, 2011 年.

Muneyoshi NUMADA, Makoto FUJUI, Tsuyoshi IHARA, Miho OHARA, Kimiro MEGURO: "Quick Report on the Great East Japan Earthquake and Giant Tsunami", Bulletin of earthquake resistant structure research center, No.44, pp.65-86, 2011 年.

国際会議等

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, and Kimiro MEGURO: "Application of Triage System (Tracy) to the Drill of the Yamanashi University Hospital", Proceedings of the Thirteenth International Summer Symposium, Japan Society of Civil Enginrrs (JSCE), 2011.

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, and Kimiro MEGURO: "Development and Application of triage system (TRACY)", Proc. of the 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, Chiang Mai, Thailand, 2011.

Makoto FUJUI, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "Development of remote surveillance system for building damage assessment during large-scale earthquake disaster", 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, Chen Mai, Thailand, 2011.

Miho OHARA, Kimiro MEGURO and Atsushi TANAKA: "Survey on People's Awareness of Earthquake Early Warning before and after the 2011 off the Pacific coast of Tohoku Earthquake", 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, Chen Mai, Thailand, 2011.

Makoto FUJUI, Muneyosho NUMADA, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "Development of Survey Management System for Building Damage Assessment", One Year After 2011 Great East Japan Earthquake - International Symposium on Engineering Lessons Learned from the Giant Earthquake-, 2011.

Makoto FUJUI, Muneyoshi NUMADA, kazuyuki TAKADA, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "Damage Investigation of Sanriku Railway Suffered from the 2011 off the Pacific Coast of Tohoku Earthquake", One Year After 2011 Great East Japan Earthquake - International Symposium on Engineering Lessons Learned from the Giant Earthquake-, 2011.

Miho OHARA, Kimiro MEGURO and Atsushi TANAKA : "A Comparative Study on People's Awareness of Earthquake Early Warning before and after the 2011 Great East Japan Earthquake", One Year After 2011 Great East Japan Earthquake - International Symposium on Engineering Lessons Learned from the Giant Earthquake-, 2011.

講演・口頭発表

大原美保, 近藤伸也, 沼田宗純, 目黒公郎: 「東日本大震災後における関連学会の活動状況の俯瞰」, 第 31 回土木学会地震工学研究発表会講演論文集, 2011.

藤生 慎, 沼田宗純, 大原美保, 目黒公郎: 「効率的な建物被害認定のための 被害写真管理手法の開発 - 東日本大震災後の宮城県仙台市宮城野区での実装に基づく考察-」, 第 31 回土木学会地震工学研究発表会, 2011.

井原毅, 藤生慎, 沼田宗純, 大原美保, 目黒公郎: 「東北地方太平洋沖地震における三陸地方の高地移転地域の調査報告」, 第 31 回土木学会地震工学研究発表会, 2011.

居山拓矢, 沼田宗純, 大原美保, 目黒公郎: 「2011 年東北地方太平洋沖地震による東大生研での地震観測記録と緊急地震速報の活用状況」, 第 31 回土木学会地震工学研究発表会, 2011.

沼田宗純, 大原美保, 目黒公郎: 「広域的災害医療情報の収集と共有のためのトリアージシステム (TRACY) の開発と静岡県立総合病院における実践的訓練の実施」, 第 30 回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, 2011.

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎: 「被災地外の人材を有効活用する大震災時向け遠隔建物被害認定システムの開発」, 第 30 回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, 2011.

牧之段浩平, 大原美保, 目黒公郎: 「水害時の効率的避難を実現するための3D水害リスク可視化システムの検討」, 第 30 回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, 2011.

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎: 「大規模地震災害後の迅速な建物被害認定のための遠隔認定システムの開発」, 日本地震工学会年次大会講演集, 2011.

吉成英俊, 大原美保, 目黒公郎: 「地域特性を考慮した緊急地震速報の効果的活用戦略に関する研究」, 第 30 回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, 2011.

大原美保, 目黒公郎, 田中淳: 「東日本大震災前後における緊急地震速報に対する住民意識の変化」, 日本地震工学会年次大会講演集, 2011.

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎: 「被災地外の人材を有効活用する遠隔建物被害認定のためのアプリケーションの開発」, 第 29 回地域安全学会研究発表会, 2011.

大原美保: 「東日本大震災における男女共同参画の視点で見た課題」, 災害・復興と男女共同参画 6.11 シンポジウム, 2011. 【招待講演】【一般向け】

大原美保: 「災害リスクを考慮した土地利用策および建物の耐震補強策に関する国際比較」, 国立国会図書館講演会, 2011. 【招待講演】

大原美保: 「地震動と緊急地震速報」, 千葉県教育研究会安全教育部会研修, 2011. 【招待講演】【一般向け】

大原美保: 「ジェンダーに配慮した災害対応の標準化に向けて」, 第 5 回日本性差医学・医療学会学術集会 「東日本大震災とジェンダー」シンポジウム, 2011. 【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

大原美保:「災害拠点病院 耐震に課題 建物に被害 200 人転院も 本紙全国アンケート」, 読売新聞 2011 年 5 月 16 日, 2011.

大原美保:「復興計画に女性参画を 都内でシンポ「弱者への福祉不十分」」, 静岡新聞(夕刊)2011 年 7 月 4 日, 2011.

大原美保:「災害に強い街づくり模索 地域再生 震災が問う 見えてきた課題」, 日本経済新聞 2011 年 7 月 26 日, 2011.

大原美保:「地震速報活用されず 震災以降「退避」2割」, 日本経済新聞 2011 年 11 月 13 日, 2011.

JASON G. KARLIN・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

講演・口頭発表

Jason G. Karlin: “Through a Looking Glass Darkly: Television Advertising, Idols and the Making of Fan Audiences”, Idols and Celebrity in Japanese Media Culture, 2011. 【招待講演】

Jason G. Karlin: “Through a Looking Glass Darkly: Television Advertising, Idols and the Making of Fan Audiences”, 2012 IOS-IASA Joint Workshop of Young Sociologists, Academia Sinica, Institute of Sociology, 2012. 【招待講演】

上條 俊介・准教授

研究テーマ(主たるもの)

車載画像センサーの開発

交差点等の一般道において、歩行者や自転車を車の事故から守るための安全運転支援システムの開発が世界的に行われている。当研究室では、独自の画像処理技術を活かし、歩行者や自転車を車載カメラを用いて認識する技術を開発している。

路車協調型安全運転支援技術

路側センサーから交通状況を的確に把握し、危険状況をドライバーに知らせることで事故を回避するシステムの開発を行っている。本研究では、情報提供を受けたドライバーの受容性を考慮したセンサ開発を行うことが重要である。

時空間 Markov Random Field Model による時空間画像の領域分割

コンピュータ・ビジョンでは画像上で移動物体同士が重なった場合(オクルージョン)において、個々の物体を分離して追跡することが困難であった。そこで、本研究では、この問題を時空間画像の領域分割と等価であることを明確にし、時空間 Markov Random Field Model を定義した。

これにより、オクルージョンが生じている場合でも正確に移動物体を画像上で分離することが可能となった。さらに、本手法は、低画角画像のようにオクルージョンが激しい場合でも効果的であることが証明された。

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

Takayasu Kawasaki, Kenji Onodera, Shunsuke Kamijo: "Identification of Novel Short Peptide Inhibitors of Soluble 37/48 kDa Oligomers of Amyloid β 42", Biosci,Biotechnol, Biochem, Vol.75(8), pp.1110198-1-6, 2011 年. 【査読有】

Yuuki Shibayama, HyungKwan Kim, Kaichi Fujimura, Shunsuke Kamijo: "On-board Pedestrian Detection by the Motion and the Cascaded Classifiers", INTERNATIONAL JOURNAL OF INTELLIGENT TRANSPORTATION SYSTEMS RESEARCH, Vol.9, No.3, pp.101-114, DOI: 10.1007/s13177-011-0034-0, 2011 年. 【査読有】

柴山 悠毅, 金 亨官, 上條 俊介: 「車載カメラを用いた歩行者検出と相対軌跡取得技術の開発」, 自動車技術会論文集, Vol.42, No.5, pp1139-1144, 2011 年. 【査読有】

日坂翔馬, 上條俊介: 「電波強度を用いた接近移動物体の検知」, 自動車技術会論文集, Vol.42, No.5, pp1145-1150, 2011 年. 【査読有】

Takashi Kurafuji 他 18 名: "A Scalable Massively Parallel Processor for Real-Time Image Processing", IEEE Journal of Solid-State Circuits, Vol.46, No.10, pp.2363-2373, 2011 年. 【査読有】

HyungKwan Kim, Yuuki Shibayama, Shunsuke Kamijo: "Precise Segmentation and Estimation of Pedestrian Trajectory using On-board Monocular Cameras", IEICE ITS Special issue, IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol.E95-A, No.1, pp.296-304, 2011 年. 【査読有】

国際会議等

Shoma Hisaka, Shunsuke Kamijo: "On-board Wireless Sensor of Collision Avoidance: Vehicle and Pedestrian Detection, at Intersection", 14th International IEEE Annual Conference on Intelligent Transportation Systems, ITSC2011, pp.198-205, 2011. 【査読有】

HyungKwan Kim, Yuuki Shibayama, Shunsuke Kamijo: "Acquisition of Pedestrian Trajectory Using On-Board Monocular Camera", 14th International IEEE Annual Conference on Intelligent Transportation Systems, ITSC2011, pp.544-549, 2011. 【査読有】

Shoma Hisaka, Shunsuke Kamijo: "Developments of Wireless Sensor Systems for Intersection Safety", 3rd IEEE Vehicular Networking Conference (VNC2011), 2011. 【査読有】

S.Hisaka, S.Kamijo: "Developments of Wireless Sensor System for Intersection", The 2011 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics(SMC2011), pp.1968-1974, 2011. 【査読有】

Atsushi Kawamura, Yuji Yoshimitsu, Kouichiro Kajitani, Takeshi Naito, Kaichi Fujimura, Shunsuke Kamijo: "Smart Camera network system for use in railway stations", The 2011 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics(SMC2011), pp.85-90, 2011. 【査読有】

Kaichi Fujimura, Shunsuke Kamijo Yuji Yoshimitsu, Takeshi Naito: "Behavior Understandings Based on State Transition of Postures and Locations at Railway Station", The 2011 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics(SMC2011), pp.91-96, 2011. 【査読有】

Shoma Hisaka, Yuuki Shibayama, Kaichi Fujimura, Kenji Onodera and Shunsuke Kamijo: "Collision Avoidance at Intersection Using Wireless Sensor", 18th ITS World Congress, p.3223, 2011. 【査読有】

Yuuki Shibayama, HyungKwan Kim, Shunsuke Kamijo: "Pedestrian Tracking by On-board Wideview Monocular Camera", 18th ITS World Congress, p.3226, 2011. 【査読有】

S. Hisaka and S. Kamijo: "A Study of On-board Sensing System Using Received Signal Strength Indication for Intersection Safety", The Transportation Research Board (TRB) 91st Annual Meeting, Paper#12-4406, 2011. 【査読有】

H. Kim, Y. Shibayama and S. Kamijo: "Precise Segmentation and Position Estimation of Pedestrians by the combination of the HOG Classifier and S-T MRF Model", The Transportation Research Board (TRB) 91st Annual Meeting, Paper#12-4526, 2011. 【査読有】

その他論文

日坂翔馬, 上條俊介: 「電波強度を用いた接近移動物体の検知」, 自動車技術会 春季大会, 2011 年. 【査読有】

柴山悠毅, 金亨官, 上條俊介: 「車載カメラを用いた歩行者検出と相対軌跡取得技術の開発」, 自動車技術会 春季大会, 2011 年. 【査読有】

上條俊介: 「ITS の研究と国際化」, 情報学環紀要『情報学研究』フィールドレビュー, 81 号 pp.117-121, 2011 年. 【一般向け】

藤村嘉一, 高橋俊允, 上條俊介: 「駅構内における姿勢・位置情報に基づいた行動把握フレームワーク」, 第 10 回 ITS シンポジウム(ITS Japan), PRP13-18, 2011 年. 【査読有】

日坂翔馬, 上條俊介: 「車載電波センサを用いた衝突予測手法」, 第 10 回 ITS シンポジウム(ITS Japan), PRP61-66, 2011 年. 【査読有】

大儀健一, 森賢二, 下玉利光恵, 松井達, 泉典宏, 松沼毅, 川崎洋輔, 田中翔太, 上條俊介: 「画像処理技術を活用した事故発生要因分析手法の高度化検討」, 第 10 回 ITS シンポジウム(ITS Japan), pp.109-114, 2011 年. 【査読有】

講演・口頭発表

上條俊介: “Transportation Politics and Analyses by Information Techonology”, Seminar for Historical Peninsula Traffic Demand Management, 2011. 【招待講演】【一般向け】

柴山悠毅, 金 亨官, 上條俊介: 「車載カメラを用いた歩行者検出と相対軌跡取得技術の開発」, 電子情報通信学会技術研究報告, 2011.

日坂翔馬, 柴山悠毅, 藤村嘉一, 上條俊介: 「電波強度を用いた接近移動物体の検知」, 電子情報通信学会技術研究報告, 2011.

上條俊介: 「センサー技術を用いた安全で効率の良い道路交通の実現」, 東京理科大学大学院特別講義, 2011. 【招待講演】

上條俊介: 「画像センシング技術の ITS への応用」, 第 178 回産学交流サロン「エネルギーからバイオまで、センシングの応用を探る」, 2011.

上條俊介: 「人と車の安全・安心な社会実現へ向けて」, 次世代画像入力, ビジョン部会見学会, 2011. 【招待講演】

上條俊介: 「ITSの先端技術とロードマップ : 日本の事例紹介」“ITS Technology and Road map : Case study in Japan”, イスタンブール市研修, 2012. 【招待講演】

上條俊介: 「画像処理による ITS 研究の最前線」, NHK 福岡招待講演, 2013. 【招待講演】【一般向け】

上條俊介: 「交通画像における歩行者認識」, 映像情報メディア学会講習会「人物画像認識の最新研究」, 2011.

受賞

高橋俊允: 優秀論文賞「駅構内における姿勢・位置情報に基づいた行動把握フレームワーク」, 第 10 回 ITS シンポジウム(ITS Japan), 2011 年.

特許

上條俊介: 「検出装置及び方法」, 特願 2011-110777, 2011 年 05 月.

上條俊介: 「挙動解析装置」, PCT/JP2011/068247 ④各国段階移行期限 2013/2/28, 2011 年 08 月.

上條俊介: 「画像における移動物体追跡方法及び装置」, 特願 2011-248771 特願 2010-005040 の分割, 2011 年 11 月.

北田 暁大・准教授

研究テーマ(主たるもの)

日本メディア史の実証的研究

広告、映画、新聞など近代のコミュニケーション文化において重要な役割を果たしてきたメディアを、歴史社会学的な手法で分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告の誕生』(2000年、岩波書店)、『<意味>への抗い』(2004年、せりか書房)などがある。

若者のコミュニケーション研究

現代若者たちのコミュニケーションの変容を、「保守化」傾向や「バックラッシュ」などの現象とあわせ、メディアの果たす役割に着目しつつ分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告都市・東京』(2002年、廣済堂出版)、『嗟う日本の「ナショナリズム」』(2005年、NHK出版)などがある。

理論社会学、コミュニケーション理論についての基礎的研究

「行為の同定問題」、「行為(者)責任の生成メカニズム」など社会学基礎論にかかわるテーマについて、政治哲学、倫理的行為論なども射程に入れつつ、考察を加えている。その成果を公刊したのものとして『責任と正義』(2003年、勁草書房)がある。

研究業績(2011年度)

分担著書

北田暁大他著:「若者の現在」, 小谷敏・芳賀学・土井隆義・浅野智彦 編, 日本図書センター, 2012年。

雑誌論文

北田暁大:「In den Wind schreibend;Friedrich.A—キツラー追悼」, 思想, Vol.1055, pp.147-156, 2012年。

講演・口頭発表

北田暁大:「コミュニケーションにとって趣味とは何か①—— 2010年練馬区若者文化調査に基づく趣味概念の再検討——」, 日本社会学会第84回大会, 2011。

北田暁大:“Ironischer Nationalismus in Japan”, Vortrag an der Uni.Leipzig, 2012. 【招待講演】

北田暁大:“Globalization and the Galapagos Effect of Knowledge?—Two faces of globalization and the structural transformation of discursive space”RONDAN” in recent Japan”, Postgraduate workshop Japan foundation/BAJS, 2012. 【招待講演】

北田暁大:「Konsumgesellschaft und Raum der Stadt」, Tokyo, Megapolis: Die Stadt als medialer Raum, 2012. 【招待講演】

北田暁大:“MANGA und die Kritik an ihm—Die Entwicklung der Kritik des Mangas in Japan”, Mänge festival(Japanisches Haus in Leipzig), 2012. 【招待講演】

北田暁大:「写真(撮影)と社会学」, ワークショップ トラウツ・コレクションの学術資源化, 2012. 【招待講演】

清水 晶子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

ROGER DALE SMITH・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

中尾 彰宏・准教授

研究テーマ(主たるもの)

ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワーク基盤構築技術の研究

オーバーレイネットワークの研究分野では、現在そして新しい将来のインターネットを支える様々なネットワークサービスやネットワークの仕組みを、インターネット内に埋め込まれた実験基盤(オーバーレイネットワークテストベッド)を用いることで実証実験し、性能評価や問題発見などを行うことを目的とする。本研究テーマでは、このような実証実験を広域で可能にする実験基盤の構築やノードの高度化技術の研究を目的とする。

ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワークを用いた経路制御技術の研究

オーバーレイルーティング(Overlay Routing)と呼ばれる、インターネットの可用性を向上したり様々なデータ通信の特性(QoS)を最適化する技術の研究を進めている。

サステナブル・ネットワーク・サービス基盤技術の研究

インターネット上に実装されたネットワークサービスへの DoS アタックや DDoS アタックなどの脅威に対し、サーバの仮想化とプロセスのマイグレーションを利用してサステナブルなサービスを実現するための基盤技術を研究開発し可用性を向上する研究を進めている。

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

吉田雅裕, 大坐畠智, 中尾彰宏, 川島幸之助: 「Share ネットワークに対するコンテンツポイズニングを用いたファイル流通制御方式」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.J94-B, No.5, pp.686-697, 2011 年.

吉田雅裕, 中尾彰宏: 「到達不可能ピアの影響を抑えたBitTorrentネットワーク計測方式」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS2011-67, Vol.111, No.196, pp.35-40, 2011 年.

国際会議等

Ping Du, Maoke Chen and Akihiro Nakao: "OFIAS: A Platform for Exploring In-Network Processing", Tridentcom, 2011. 【査読有】

Ping Du, Akihiro Nakao: "OFIAS: A TestBed for Exploring In-Path Processing Network", TridentCom 2011, 2011. 【査読有】

Masaki Fukushima, Toru Hasegawa, Teruyuki Hasegawa, Akihiro Nakao: "Minimum Disclosure Routing for Network Virtualization", Global Internet, INFOCOM IEEE Conference on Computer Communications Workshops, 2011. 【査読有】

HyunYong Lee, Akihiro Nakao: "SeederTrading: Trading Swarm Capacity for Improving Content Distribution", HotP2P, Eighth International Workshop on Hot Topics in Peer-to-Peer Systems, 2011. 【査読有】

S.Yamamoto and A.Nakao: "Testded Evaluation of P2P Shared Cache Architecture", ACM CFI2011, 2011. 【査読有】

Eiji Miyagaki, Akihiro Nakao: "Cache sharing method using IEEE 802.11 Wireless Access Points for mobile environment", IEEE International Conference on Communications, 2011. 【査読有】

Kiyohide Nakauchi, Kentaro Ishizu, Homare Murakami, Akihiro Nakao, Hiroshi Harada: "AMPHIBIA: A Cognitive Virtualization Platform for End-to-End Slicing", IEEE International Conference on Communications, 2011. 【査読有】

M. Yoshida, and A. Nakao: "A Resource-Efficient Method for Crawling Swarm Information in Multiple BitTorrent Networks", IEEE AHSP2011, 2011. 【査読有】

Soon Hin Khor and Akihiro Nakao: "MI: Cross-Layer Malleable Identity", IEEE International Conference on Communications, 2011. 【査読有】

Ryoji Furuhashi, Akihiro Nakao: "OpenTag: Tag-based network slicing for wide-area coordinated in-network packet processing", IEEE International Conference on Communications, 2011. 【査読有】

Ryoichi Kawahara, Tatsuya Mori, Noriaki Kamiyama, Shigeaki Harada, Haruhisa Hasegawa, Akihiro Nakao: "Traffic engineering using overlay network", IEEE International Conference on Communications, 2011. 【査読有】

HyunYong Lee, Akihiro Nakao, and JongWon Kim: "BiCo: Network operator-friendly P2P traffic control through bilateral cooperation between network operator and peers", Elsevier Computer Networks, Vol.55, No.issue 9, 2011. 【査読有】

HyunYong Lee, Masahiro Yoshida, and Akihiro Nakao: "Multi-swarm collaboration for improving content availability in swarming systems", Workshop on Grid and P2P Systems and Applications (GridPeer), 2011. 【査読有】

M. Yoshida, and A. Nakao: "Measuring BitTorrent Swarms Beyond Reach", IEEE International Conference on Peer-to-Peer Computing, 2011. 【査読有】

S.Yamamoto and A.Nakao: "In-Network P2P Packet Cache Processing using Scalable P2P Network Test Platform", IEEE P2P2011, 2011. 【査読有】

HyunYong Lee and Akihiro Nakao: "Peer-assisted network operator-friendly p2p traffic control technique", 7th International Conference on Network and Service Management (CNSM), 2011. 【査読有】

HyunYong Lee and Akihiro Nakao: "A performance study of network operator-friendly p2p traffic control technique", 36th IEEE Conference on Local Computer Networks (LCN), 2011. 【査読有】

S.Yamamoto and A.Nakao: "Fast Path Performance of Packet Cache Router using Multi-core Network Processor", ACM ANCS2011, 2011. 【査読有】

Yuncheng Zhu, Akihiro Nakao: "Content-Oriented Transport Protocol", Asia Workshop on Future Internet Technologies (AWFIT), 2011. 【査読有】

Ping Du and Akihiro Nakao: "Rethinking Business Model in Cloud Computing: Concept and Example", IEICE Transactions, Vol.94-D, No.12, pp.2119-2128, 2011. 【査読有】

HyunYong Lee, Masahiro Yoshida, and Akihiro Nakao: "Understanding of Network Operator-friendly P2P Traffic Control Techniques", IEICE Transactions on Information and Systems, Vol.E94-D, No.12, 2011. 【査読有】

HyunYong Lee, Masahiro Yoshida, and Akihiro Nakao: "Trading Seeder Bandwidth for Efficient Content Distribution in Swarming System", 2nd International Workshop on Densely Connected Networks 2012, 2012. 【査読有】

Ryoji Furuhashi and Akihiro Nakao: "Applications of wide-area network slicing for improving cloud platform access by OpenTag", IEEE The Fourth International Conference on COMMunication Systems and NETWORKS, 2012. 【査読有】

S.Yamamoto and A.Nakao: "P2P Packet Cache Router for Network-Wide Traffic Redundancy Elimination", IEEE ICNC2012, 2012. 【査読有】

HyunYong Lee, Masahiro Yoshida, Akihiro Nakao: "Caching-based Multi-swarm Collaboration for Improving Content Availability in BitTorrent", IEICE TRANSACTIONS on Information and Systems, Vol.E95D, No.5, 2012. 【査読有】

HyunYong Lee and Akihiro Nakao: "Efficient User-assisted Content Distribution over Information-centric Network", IFIP/TC6 Networking, 2012. 【査読有】

Yuncheng Zhu, Akihiro Nakao: "Upload Cache in Edge Networks", 26th International Conference on Advanced Information Networking and Applications, 2012. 【査読有】

Takehito Yamamoto, Yohei Katayama, Kazuhisa Yamada, Akihiro Nakao: "A Management Model for the Network Virtualization Platform to Provide Network Programmability", World Telecommunications congress 2012, 2012. 【査読有】

その他論文

中尾彰宏:「進化するネットワーク仮想化技術, 最新動向と今後」, 第 29 会インターネット技術第 163 委員会研究会, 2011 年.

安藤翔伍, 中尾彰宏:「ネットワークエッジにおける 重複トラフィック削減のための In-Network キャッシュの検討」, 電子情報通信学会技術研究報告, ネットワーク仮想化研究会, 2011 年.

H. Farhadi, A. Nakao, R. Furuhashi: "Toward Secure OpenTag", IEICE Society Conference 2011, 2011 年.

Y. Pu, A. Nakao, A. Shogo, Y. Tsukajima and T. Ban: "BeaconCast: Practical Information Dissemination via WiFi Beacons", IEICE Society Conference 2011, 2011 年.

HyunYong Lee, Masahiro Yoshida, Akihiro Nakao: "On Feasibility of P2P Traffic Control through Network Performance Manipulation", Technical Report of IEICE NV, 2011 年.

中尾彰宏:「Network Slicing at First and Last Mile」, 第 30 会インターネット技術第 163 委員会研究会(ITRC), 2011 年.

佐々木海, 呉湘筠, 吉田雅裕, 宮村(中村)浩子, 大坐畠智, 中尾彰宏, 高橋成雄: "Visualizing Scale Free Networks for the Analysis of P2P Network Traffic Data", 電子情報通信学会技術研究報告, 2012 年.

宮村(中村)浩子, 吉田雅裕, 大坐畠智, 高橋成雄, 中尾彰宏, 川島幸之助:「大規模ネットワークデータ解析のためのマルチレベルグラフィックアウト」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS2011, 2012 年.

西田祐二, 中尾彰宏:「無線 AP の仮想化による網内アドターゲティング」, 電子情報通信学会技術研究報告, NS2011, 2012 年.

塚島洋介, 中尾彰宏:「編集距離に基づくインターネットネットワークスパム検出」, 電子情報通信学会技術研究報告, ネットワーク仮想化研究会, 2012 年.

講演・口頭発表

Ryota Ozaki, Akihiro Nakao: "Reducing Memory Sharing Cost for Virtualized Infrastructure", Technical Report of IEICE NV, 2011.

安藤翔伍, 中尾彰宏:「ビデオ共有サービスを対象とした重複トラフィック削減手法の提案とシミュレーションによる評価」, 電子情報通信学会技術研究報告, ネットワーク仮想化研究会, 2011.

中尾彰宏:「進化するネットワーク仮想化」, 第 12 回 インターネットテクノロジーワークショッププログラム, 2011. 【招待講演】

Akihiro Nakao: "CoreLab and WiVi Project Towards Flexibly Programmable Network", KOREN Workshop 2011, 2011. 【招待講演】

Akihiro Nakao: "WiVi:WiFi Virtualization Infrastructure and Applications", IEEE ICC2011, 2011. 【招待講演】

Akihiro Nakao: "Wired and Wireless Network Virtualization Test-beds", 6th International Conference on Future Internet Technologies, 2011. 【招待講演】

Akihiro Nakao: "Network Virtualization Research Activities in Japan: VNode and WiVi", Invited Talk at ETRI, 2011. 【招待講演】

福嶋正機, 長谷川輝之, 長谷川亨, 中尾彰宏: 「ネットワーク仮想化環境における最小開示ルーティング方式の提案」, 電子情報通信学会技術研究報告, ネットワーク仮想化研究会, 2011.

Akihiro Nakao: "Network Virtualization Research Activities in Japan", NICTA, 2011. 【招待講演】

Akihiro Nakao: "Network Virtualization Research In Japan, Recent Updates", 1st Network Virtualization Symposium, 2011. 【招待講演】

古橋亮慈, 中尾彰宏: 「OpenTag を用いた網内データ複製によるクラウドアクセス堅牢化」, 電子情報通信学会技術研究報告, ネットワーク仮想化研究会, 2011.

Akihiro Nakao: "VNode: A Deeply Programmable Network Testbed Through Network Virtualization", On*Vector Workshop, 2012. 【招待講演】

中尾彰宏: 「ネットワーク仮想化基盤の研究開発」, 電子情報通信学会総合大会, 2012. 【招待講演】

片山陽平, 山本猛仁, 山田一久(NTT), 中尾彰宏: 「ネットワーク仮想化基盤における仮想ネットワーク管理モデルに関する一検討」, 電子情報通信学会技術研究報告, ネットワーク仮想化研究会, 2012.

金田泰, 中尾彰宏: 「「クリーンな仮想化」と要素独立進化型の仮想化ノード・アーキテクチャ」, 電子情報通信学会技術研究報告, ネットワーク仮想化研究会, 2012.

新聞・報道

中尾彰宏: 「国連下部組織 ITU-T のアカデミックメンバーに加盟」, http://www.u-tokyo.ac.jp/public/archive_j.html, 2011.

中尾彰宏: 「さっぽろ雪まつり 複数方式でネット配信」, 日経産業新聞, 2012.

受賞

Masaki Fukushima・Teruyuki Hasegawa・Toru Hasegawa(KDDI Labs.)・Akihiro Nakao(Univ. of Tokyo): 第11回 NS 研究賞「Minimum Disclosure Routing for Network Virtualization」, 電子情報通信学会, 2011 年.

特許

中尾彰宏, 池田泰弘, 川原亮一, 上山憲昭, 森達哉, 木村達明: 「ポイントツーポイント(P2P)トラフィック制御システム及び方法」, 特願 2011-213465, 2011 年 09 月.

中尾彰宏, 池田泰弘, 川原亮一, 上山憲昭, 森達哉, 木村達明: 「情報配信システム及び方法及びタグ変換装置及びタグ変換プログラム」, 特願 2011-220469, 2011 年 10 月.

中尾彰宏, Ping Du, 宮垣英司: 「無線ネットワークの仮想化アーキテクチャとそのシステム構築」, 特願 2011-299952, 2011 年 11 月.

中野 公彦・准教授

研究テーマ(主たるもの)

独立成分分析法(ICA)の車両振動解析への適用

独立成分分析(ICA)は混合された多チャンネルの計測情報から信号源を同定する方法です。主に生物物理学の領域で用いられていますが、故障検知、状態監視、振動源特定などの機械系分野でも有用な方法と考えられています。この ICA を自動車や鉄道の状態監視に利用することを提案し、実験や数値計算を通じて、その有効性を検討しています。

筋電位測定による自動車の乗り心地評価

自動車の乗り心地などの評価には、車体の加速度が用いられることもありますが、多くは、テストドライバーなどの官能評価によって調べますが、主観が入ることは否定できません。そこで、乗り心地の新しい評価指標の可能性として、運転中における乗員の筋電位を検討しています。実車試験などを通じて、その有効性を検討しています。

パーソナルモビリティビークル

近年になり、並行二輪車などの電子制御の存在を前提とした新しい小形の個人用の車両が登場してきました。これらをパーソナルモビリティビークルと呼んでおります。歩行者との親和性評価など、これらの車両を実際に都市に取り込むための研究を行っております。

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

中川智皓, 中野公彦, 須田義大, 平山遊喜: 「人力で走行する倒立振子型安定化車両の操舵性能」, 日本機械学会論文集(C 編), Vol.77, No.777, pp.1824-1835, 2011 年. 【査読有】

山邊茂之, 鄭仁成, 中野公彦, 安藝雅彦, 須田義大: 「エコドライブにおけるエコドライブ教示とエコ表示計がドライバの運転動作に与える影響」, 日本機械学会論文集(C編), Vol.77, No.781, pp.3290-3299, 2011 年. 【査読有】

鄭仁成, 山邊茂之, 李昇勇, 中野公彦, 安藝雅彦, 須田義大: 「ドライビングシュミレータによる自動隊列走行時のドライバの緊急回避行動分析」, 自動車技術会論文集, Vol.43, No.2, pp. 627-632, 2011 年. 【査読有】

Keisuke Taneura, Kimihiko Nakano, Pallav Koirala, Kesayoshi Hadano: 「On the Resonance Characteristics of the Float Type Power Generation Device」, Journal of Environment and Engineering, Vol.6, No.3, pp.542-553, 2011 年. 【査読有】

Shigeyuki Yamabe, Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda: 「Physical Fatigue Comparison of Eco-Driving and Normal Driving」, Journal of System Design and Dynamics, Vol.5, No.5, pp.1-11, 2011 年. 【査読有】

国際会議等

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Masanori Ohori, Shigeyuki Yamabe, Hiroki Nakamura, Yoshihiro Suda: "Electromyography Signal of Masseter Muscle to Evaluate Driver Stress Intensity", The 2nd Korea-Japan Joint Symposium on Dynamics and Control (K-J Symposium 2011), pp.73-76, 2011. 【査読有】

Seungyong Lee, Kimihiko Nakano, Shigeyuki Yamabe, Rencheng Zheng, Masahiko Aki, Yoshihiro Suda: "Driver-vehicle-traffic environment for simulated automatic platooning", The 2nd Korea-Japan Joint Symposium on Dynamics and Control (K-J Symposium 2011), pp.149-151, 2011. 【査読有】

Hiroki Nakamura, Shigeyuki Yamabe, Kimihiko Nakano, Daisuke Ymanaguchi, Yoshihiro Suda: "Driver Risk Perception and Physiological State During Automatic Platooning Experiments Using a Driving Simulator", The 2nd Korea-Japan Joint Symposium on Dynamics and Control (K-J Symposium 2011), pp.208-211, 2011. 【査読有】

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Shigeyuki Yamabe, Seungyong Lee, Masahiko Aki, Yoshihiro Suda: "Bio-signal indices to evaluate driver's sense of presence by simulated driving experiments", ISB 2011, 2011. 【査読有】

Yoshihiro Suda, Shigeyuki Yamabe, Kimihiko Nakano, Eiji Ichihara, Yasuo Oosawa, Munehisa Horiguchi, Akira Mizuno: "Camber control by tire with two layer compound for tread part to improve fuel efficiency of automobile", IAVSD 2011, 2011. 【査読有】

Hiroki Nakamura, Kimihiko Nakano, Rui Ohashi: "Estimation of road irregularities with vertical acceleration of a car body using independent component analysis," IAVSD 2011, 2011. 【査読有】

Rengcheng Zheng, Masanori Ohori, Kimihiko Nakano, Shigeyuki Hori, Yuji Okamoto, Yoshihiro Suda: "Sternocleidomastoid Muscle Activity in Keeping the Head Stable while Slalom Driving", IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics 2011, 2011. 【査読有】

Rengcheng Zheng, Shigeyuki Yamabe, Seung yong Lee, Kimihiko Nakano, Hiroki Nakamura, Masahiko Aki, Yoshihiro Suda: "Driver's behaviors of emergency avoidance during automatic platooning by using a driving simulator", 18th ITS World Congress, 2011. 【査読有】

Seungyong Lee, Kimihiko Nakano, Shigeyuki Yamabe, Rencheng Zheng, Masahiko Aki, Yoshihiro Suda: "Simulation platform for automatic platooning using a driving simulator", 18th ITS World Congress, 2011. 【査読有】

その他論文

中村弘毅, 中野公彦, 方芳, 鄭仁成, 大堀真敬: 「運転者緊張度とステアリンググリップ力の相関に関する考察」, 生産研究, 2011年.

方芳, 中野公彦, 朴啓彰, 熊谷靖彦, 鄭仁成, 中村弘毅, 大堀真敬, 田岡浩, 岡田訓: 「音声刺激が高齢ドライバの運転行動に与える影響」, 生産研究, 2011年.

中野公彦: 「減圧トンネル超高速鉄道—日本の3学会(土木学会、電気学会、日本機械学会)での検討内容—」, 日本機械学会誌, 2011年.

石坂宏幸, 鈴木儀匡, 青木啓二, 森田康裕, 安藝雅彦, 中野公彦, 須田義大: 「隊列走行における元圧調整ブレーキ装置のコンセプト検討 —ITS 隊列走行車両用ブレーキ装置—」, 自動車研究, 2011年.

安藝雅彦, 鄭仁成, 山邊茂之, 中野公彦, 李昇勇, 須田義大, 鈴木儀匡, 石坂宏幸, 佐久間淳, 河島宏紀: 「ドライバの回避行動分析に基づく隊列走行ブレーキシステムと異常時の安全性評価試験」, 生産研究, 2011 年.

李昇勇, 中野公彦, 安藝雅彦, 山邊茂之, 鄭仁成, 須田義大: 「自動隊列走行車両のパラメータ同定」, 生産研究, 2011 年.

山邊茂之, 鄭仁成, 李昇勇, 中野公彦, 安藝雅彦, 須田義大: 「自動運転隊列走行時の操舵回避におけるドライバ挙動の検討」, 生産研究, 2011 年.

鄭仁成, 山邊茂之, 李昇勇, 中野公彦, 中村弘毅, 安藝雅彦, 須田義大: 「ドライビングシュミレータを用いた複数台のトラックの隊列走行実験」, 生産研究, 2011 年.

講演・口頭発表

鄭仁成: 「ドライビングシュミレータによる自動隊列走行時のドライバの緊急回避行動分析ーエネルギーITS推進事業の開発ー」, 自動車技術会 2011 年春季大会, 2011.

中野公彦: 「自動車走行時に受ける加速度に対する胸鎖乳突筋筋電位の応答」, 自動車技術会 2011 年春季大会, 2011.

安藝雅彦: 「隊列走行におけるブレーキシステムの信頼性向上の検討(第1報)ーエネルギーITS推進事業の開発ー」, 自動車技術会 2011 年春季大会, 2011.

鈴木儀匡: 「隊列走行におけるブレーキシステムの信頼性向上の検討(第2報)ーエネルギーITS推進事業の開発ー」, 自動車技術会 2011 年春季大会, 2011.

中野公彦: 「回避行動分析に基づくブレーキシステムの改良による自動隊列走行時の安全性の評価」, 日本機械学会第 12 回「運動と振動の制御」シンポジウム, 2011.

中森大樹: 「周辺情報を提示する倒立振り子型車両の制作」, 日本機械学会第 12 回「運動と振動の制御」シンポジウム, 2011.

李溶根: 「公共交通システムとしてのパーソナルモビリティ・ビーグル活用」, 日本機械学会第 12 回「運動と振動の制御」シンポジウム, 2011.

中野公彦: 「科学的事故調査とは」, 安全工学シンポジウム, 2011.

中野公彦: 「パラレルファクタ分析法を用いた光ファイバセンサ出力のノイズ除去」, 日本機械学会 Dynamics and Design Conference 2011, 2011.

李昇勇: 「ドライビングシュミレータによるトラック自動隊列走行の模擬」, 日本機械学会 2011 年度年次大会, 2011.

胡紅綱: 「貨物輸送時に荷物が受ける振動の解析」, 日本機械学会 2011 年度年次大会, 2011.

方芳: 「実車実験による白質病変ドライバの特徴の抽出」, 日本機械学会 2011 年度年次大会, 2011.

山口大助: 「省エネ運転制御アルゴリズムに関する研究」, 日本機械学会 2011 年度年次大会, 2011.

安藝雅彦:「隊列走行車両のブレーキシステム改良と回避行動分析に基づく安全性評価」, 自動車技術会 2011 年秋季大会, 2011.

石坂宏幸:「A New Concept of Brake System for ITS Platoon Heavy Duty Trucks and Its Pre-evaluation」, 自動車技術会 2011 年秋季大会, 2011.

中野公彦:「独立成分分析法を用いた自動車振動からの路面状態推定」, 自動車技術会 2011 年秋季大会, 2011.

中村弘毅:「運転者緊張度とステアリンググリップ力の相関に関する考察」, 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011.

方芳:「音声刺激が高齢ドライバの運転行動に与える影響」, 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011.

鄭仁成:「ドライビングシュミレータを用いた複数台のトラックの隊列走行実験」, 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011.

山邊茂之:「自動運転隊列走行時のドライバ挙動を考慮した隊列車間の検討」, 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011.

李昇勇:「自動隊列走行車両のパラメータ固定」, 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011.

安藝雅彦:「ドライバの回避行動分析に基づく隊列走行ブレーキシステムと異常時の安全性評価試験」, 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011.

朴啓彰:「頭部 MRI で評価される脳萎縮度が実車安全運転挙動に与える影響」, 第 10 回 ITS シンポジウム 2011, 2011.

李溶根:「車間制御及び軌道追従制御を利用したパーソナルモビリティ・ビーグルによる公共交通システム」, 日本機械学会第 20 回交通・物流部門大会, 2011.

安藝雅彦:「隊列走行用大型車のための積載状況に応じた制動試験」, 日本機械学会第 20 回交通・物流部門大会, 2011.

中森大樹:「倒立振子型パーソナルモビリティ・ビーグルの安定性と乗り心地の関係」, 日本機械学会第 20 回交通・物流部門大会, 2011.

中村弘毅:「ドライビングシュミレータへの力覚支援操舵システムの導入」, 日本機械学会第 20 回交通・物流部門大会, 2011.

山邊茂之:「ドライビングシュミレータを用いた短車間距離隊列走行時のドライバ挙動解析」, 日本機械学会第 20 回交通・物流部門大会, 2011.

若林秀:「車軸に取り付けられたモータによる鉄道貨車の前後振動抑制」, 第 18 回鉄道技術・政策連合シンポジウム J-RAIL2011, 2011.

丹羽 美之・准教授

研究テーマ(主たるもの)

メディア研究

テレビやラジオ、映画や写真、新聞や雑誌、広告やマンガ、携帯やインターネットなど、様々なメディアと社会の関係について、歴史的かつ実践的な研究を行っている。

ジャーナリズム研究

激変する情報環境において現代のジャーナリズムが直面する課題や困難について研究している。またドキュメンタリーの制作や批評を中心に、次世代のジャーナリストの教育と養成に取り組んでいる。

ポピュラー文化研究

現代のポピュラー文化が作り出す様々な文化や社会意識について、社会学的な観点から研究している。テレビ番組や映画など、ポピュラー文化のアーカイブにも取り組んでいる。

研究業績(2011 年度)

分担著書

丹羽美之:「対話としてのテレビ文化―日・韓・中を架橋する」, 岩淵功一 編, ミネルヴァ書房, 2011 年.

雑誌論文

丹羽美之:「交差する映像と学術―映画・テレビ・デジタルメディア」, 日本都市社会学会年報, No.29, pp.39-45, 2011 年. 【査読有】

作品

丹羽美之・吉見俊哉・中村秀之・筒井武文・鳥羽耕史・とちぎあきら(監修):「長編記録映画『夢と憂鬱―吉野馨治と岩波映画』」, 長編記録映画『夢と憂鬱～吉野馨治と岩波映画』完成記念上映会(主催:東京大学大学院情報学環)、ゆふいん文化・記録映画祭 2011、山形国際ドキュメンタリー映画祭 2011、第 24 回東京国際映画祭(文化庁映画週間), 2011.

その他論文

丹羽美之:「系列や地域、民放や NHK の枠を越えて―全国制作者フォーラム 2011」, 放送文化基金報(第 74 号), 2011 年. 【一般向け】

丹羽美之:「テレビの転形期としての 1970 年代」, 同時代史学会ニューズレター(第 18 号), 2011 年.

丹羽美之・黄木紀之・谷原和憲・清水正樹:「メディアは東日本大震災をどう伝えたか?」, GALAC(2011 年 10 月号), 座談会, 2011 年. 【一般向け】

丹羽美之:「送り手と受け手が対話する場を」, 公共放送インタビュー(下巻)2009-2011, インタビュー, 2011 年. 【一般向け】

丹羽美之:「公開講座:わたしのテレビジョン 青春編」,山形国際ドキュメンタリー映画祭 2011(公式カタログ),解説,2011年。【一般向け】

丹羽美之:「牛山純一の遺したもの」,テレビに挑戦した男・牛山純一(公式パンフレット),解説,2011年。【一般向け】

講演・口頭発表

丹羽美之:「わたしのテレビジョン 青春編」,山形国際ドキュメンタリー映画祭(主催:特定非営利活動法人山形国際ドキュメンタリー映画祭),2011。【招待講演】【一般向け】

丹羽美之:「ドキュメンタリスト木村栄文の世界」,公開講座:木村栄文レトロスペクティブ(主催:RKB 毎日放送・映画美学校・東風),2011。【招待講演】【一般向け】

丹羽美之:「メディアは東日本大震災をどう伝えたか～臨時災害放送局の調査から～」,公益財団法人放送文化基金研究報告会「東日本大震災とメディア」(主催:放送文化基金),2011。

新聞・報道

丹羽美之:「テレビ名作を特集上映 番組は公共の財産」,「毎日新聞」2011年10月14日(金)夕刊8面(コメント),2011。

丹羽美之:「テレビ界と交流 もう一度(山形国際ドキュメンタリー映画祭 2011 それぞれの視点②)」,「山形新聞」2011年11月22日(火)朝刊文化面(寄稿),2011。

受賞

東京大学大学院情報学環記録映画アーカイブ・プロジェクト:平成23年度文化庁映画賞・文化記録映画優秀作品賞「長編記録映画「夢と憂鬱—吉野馨治と岩波映画」」,文化庁,2011年。

東京大学大学院情報学環・学際情報学府「東京 3.11 の記録」プロジェクト:第31回「地方の時代」映像祭 2011・奨励賞(市民・学生・自治体部門)「震災シューカツ 3.11—とある就活生の場合」,「地方の時代」映像祭実行委員会,2011年。

原田 至郎・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報社会のガバナンスに関する研究

ICTに依存する情報社会のガバナンスについて、特に技術的側面とそれを支える制度および専門家に着目した研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ処理に関する技術的・制度的研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ上での利用に関する技術的研究開発、およびその標準化をめぐる制度的研究

アジアにおける政治システムや価値観・政治意識に関する研究

カンボジアを中心とする、文献調査やフィールドワーク、アジア・バロメーター・プロジェクトの調査結果などに基づいた分析

研究業績(2011 年度)

堀 里子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

医薬品・健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築

- * 臨床事例を活用した医療従事者間情報交換・研修システムの構築と展開
- * 健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築と展開

新規医薬品情報を創製するための研究

- * ヒト胎盤組織を用いた薬物の胎児移行性及び胎児毒性の定量的評価
- * 薬物輸送担体や代謝酵素の阻害を介した消化管における薬物間相互作用の検討

薬物動態・薬力学理論に基づくテーラーメイド・処方設計システムの開発

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

Shintaku K, Hori S, Satoh H, Tsukimori K, Nakano H, Fujii T, Taketani Y, Ohtani H, Sawada Y: "Prediction and evaluation of fetal toxicity induced by NSAIDs using transplacental kinetic parameters obtained from human placental perfusion studies", Br J Clin Pharmacol., Vol.73, No.2, pp.248-256, 2011 年. 【査読有】

Awa K, Satoh H, Hori S, Sawada Y.: "Prediction of time-dependent interaction of aspirin with ibuprofen using a pharmacokinetic/pharmacodynamic model", J Clin Pharm Ther, Vol.2011 Nov 28. doi: 10.1111/j.1365-2710.2011.01313.x., 2011 年. 【査読有】

Yamamuro F, Miki A, Kondo G, Maeda T, Satoh H, Hori S, Sawada Y.: "Individual differences in prothrombin timeinternational normalized ratio variation following coadministration of the anticancer agents S-1 and warfarin: 3 case reports", Int J Clin Pharmacol Ther, Vol.49, No.11, pp.700-704, 2011 年. 【査読有】

平山匡彦, 田中秀和, 鈴木慎太郎, 大村平自, 永瀬正義, 作元誠司, 菅原正典, 北原敏弘, 宮崎長一郎, 山下登, 吉谷清光, 三木晶子, 佐藤宏樹, 堀里子, 澤田康文: “離島における一般用医薬品のインターネット購入に関する意識調査ーインターネットを使用する居住者を対象としてー”, 薬学雑誌, Vol.131, No.5, pp.783-799, 2011年. 【査読有】

渡邊哲夫, 佐藤宏樹, 堀里子, 三木晶子, 大谷壽一, 澤田康文: 「ツロブテロール貼付後の血漿中濃度に及ぼす製剤特性と皮膚透過性の影響に関する薬物動態学的解析」, 薬学雑誌, Vol.131, No.10, pp.1483-1492, 2011年. 【査読有】

64. 澤田康文, 三木晶子, 堀里子, 佐藤宏樹, 大谷壽一, 大津史子: 「災害時における薬物治療の注意点「薬が飲めない使えない」「生活・体調の変化」に対応した薬学的管理」, 日病薬誌, Vol.47, No.9, pp.1101-1113, 2011年.

阿波圭介, 佐藤宏樹, 堀里子, 澤田康文: 「ケトプロフェンテープ先発・後発医薬品の全身移行性の in vitro 放出試験による予測」, 薬学雑誌, Vol.132, No.1, pp.135-144, 2012年. 【査読有】

森本 一夫・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011年度)

分担著書

森本一夫: 「私は貧しいサイドです: フムス受給資格証明書書式二通」, 近藤信彰編『ペルシア語文化圏史研究の最前線』編, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2011年.

雑誌論文

Kazu: “Avvalin nishan az siyadat-i Safaviyan dar kutub-i ansab”, Payam-i Baharistan, Vol.11, pp.241-263, 2011年. 【査読有】

その他論文

森本一夫: 「ムハンマド一族の研究」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究 82, 119-123頁, 2011年.

山内 祐平・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報通信技術を利用した学習環境のデザイン

教育の情報化が急速な勢いで進んでいるが、学習は空間／活動／共同体／人工物の微妙なバランスの中で発生する複雑な事象である。インターネットなどの情報通信技術を学びの場に導入する際に、様々な要因をどうデザインすれば適切な学習環境を構成できるかを、実践研究の中で明らかにする。

研究業績(2011 年度)

分担著書

山内祐平:「教育方法 40 デジタルメディア時代の教育方法 [Ⅲ-1 デジタル教材の開発と教育方法]」, 教育方法学会編 編, 図書文化, 2011 年.

雑誌論文

山内祐平:「ラーニングコモンズと学習支援 (特集 : ラーニングコモンズと利用者サポート)」, 情報の科学と技術, Vol.61, No.12, pp.478-482, 2011 年. 【査読有】

舘野 泰一, 大浦弘樹, 望月俊男, 西森年寿, 山内祐平, 中原淳:「アカデミック・ライティングを支援する ICT を活用した協同推敲の実践と評価」, 日本教育工学会論文誌, Vol.34, No.4, pp.417-428, 2011 年. 【査読有】

国際会議等

Yamauchi, Y., Tsubakimoto, M., Kitamura, S., Misono, T., Otsuji, Y., & Suzuki, H.: "The Socla Project: An attempt to build an innovative study environment through SNS linkage of second-year high school students and working adults", ED-MEDIA2011, pp.1276-1282, 2011. 【査読有】

Yamada, M, Kitamura, S., Misono, T., Kitani, N., & Yamauchi, Y.: "Development of an online English learning environment using a user-based collaborative filtering system", Proceedings of IADIS International Conference Cognition and Exploratory Learning in Digital Age (CELDA2011), pp.115-122, 2011. 【査読有】

その他論文

安齋勇樹, 森玲奈, 山内祐平:「創発的コラボレーションを促すワークショップデザイン」, 日本教育工学会第 27 回大会講演論文集, 2011 年.

高橋薫, 椿本弥生, 北村智, 大辻雄介, 鈴木久, 山内祐平:「高校生を対象としたグループでの相互推敲を支援するシステム『Re:』の開発と評価」, 日本教育工学会第 27 回大会講演論文集, 2011 年.

内記麻子, 北川美宏, 森玲奈, 山内祐平, 小柳和喜雄:「ワークショップのファシリテーションを学ぶためのカリキュラム・デザイン」, 日本教育工学会第 27 回大会講演論文集, 2011 年.

山内祐平:「教育実践研究論文査読シミュレーション」, 日本教育工学会第 27 回大会講演論文集, 2011 年.

山内祐平, 北村智, 椿本弥生, 御園真史, 大辻雄介, 鈴木久:「ソーシャルメディアを利用したキャリア学習環境」, 日本教育工学会第 27 回大会講演論文集, 2011 年.

山田政寛, 北村智, 御園真史, 山内祐平: 「井の中の蛙」効果に基づいた協調学習支援システムの開発, 日本教育工学会第 27 回大会講演論文集, 2011 年.

池尻良平, 山内祐平: 「東京大学歴史的解決策を現代の問題の解決方法の生成に応用する力を育成するゲーム学習のデザインと評価」, 日本教育工学会第 27 回大会講演論文集, 2011 年.

菊池裕史, 山内祐平: 「児童のデジタル英語教材利用時における親子間学業的援助要請行動の分析」, 日本教育工学会第 27 回大会講演論文集, 2011 年.

伏木田稚子, 北村智, 山内祐平: 「専門教育としてのゼミナールにおける学習者要因・学習環境・学習成果の関係—マルチレベル相関分析を用いて—」, 日本教育工学会第 27 回大会講演論文集, 2011 年.

土居由布子, 佐藤朝美, 山内祐平: 「NHK クリエイティブライブラリーユーザーの映像制作活動と付随する学習に関する調査研究」, 日本教育工学会第 27 回大会講演論文集, 2011 年.

山口 いつ子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメントに関する比較制度研究

これまで進めてきた表現の自由、メディア法、サイバー法及び知的財産法をめぐる憲法学的考察を基盤として、今後のネット上のコミュニケーション特性を方向付けるであろう「ユビキタス化」による社会変容という文脈の下で、情報の自由、規制及び保護をめぐる法のエンフォースメントに際して諸利益間の調整のあり方が問われている幾つかの問題領域に着目し、主に日米欧の議論を取り上げて比較制度分析の観点から検討を加える作業を通じて、こうした利益調整において考慮されるべき、情報や情報通信技術をめぐる法の基底にある価値原理や、対立する諸利益の間のバランスを図るための論理技術を探求していく。

より具体的には、現在、情報の自由、規制及び保護に関する以下の三つの作業を柱として、本研究を進めている。

第一に、情報の自由の理論的基礎として、表現の自由を憲法で保障することのそもそもの意義や根拠を問いかける原理論に着目し、この自由が複数の価値の組み合わせによって支えられているという価値構造や、自由の限界を根拠付ける論理について、考察を行っている。

第二に、こうした従来の法における表現活動ないし情報流通の「自由」と「規制」のバランスが、今日、新たな情報通信技術の発達の下で問い直されている状況を、マス・メディアの報道・取材の自由、通信と放送の融合化、プライバシー・個人情報保護、著作権などの個別の争点を取り上げながら、検討している。

第三に、財産としての情報の保護のあり方をめぐって、とりわけ、「知的財産権」と「自由な情報流通」とが衝突する場面に着目し、そこでの両者の調整—つまりは、情報の「保護」と「自由」との調整—における均衡にかかわる課題に取り組んでいる。

研究業績(2011 年度)

講演・口頭発表

山口いつ子: 「スマート・サーベイランス環境におけるプライバシー価値の正当化と組込み (Justifying and Embedding Privacy Values in Smart Surveillance Environments)」, 日米法学会第 48 回総会シンポジウム「ユビキタス時代の情

報法における基底的価値とエンフォースメント(Fundamental Values and Enforcement of Information Law in the Ubiquitous Network Age)], 2011.

受賞

山口いつ子: 第3回 内川芳美記念 マス・コミュニケーション学会賞『『情報法の構造—情報の自由・規制・保護』(東京大学出版会、2010年)』, 日本マス・コミュニケーション学会, 2011年.

山田 育穂・准教授

研究テーマ(主たるもの)

空間情報科学および地理情報システム(GIS)

空間統計学および計量的解析法

都市環境と健康

研究業績(2011年度)

雑誌論文

Smith, K.R., C.D. Zick, L. Kowaleski-Jones, B.B. Brown, J.X. Fan, and I. Yamada: "Effects of Neighborhood Walkability on Healthy Weight: Assessing Selection and Causal Influences.", *Social Science Research*, Vol.40, No.5, pp.1445-1455, 2011年. 【査読有】

国際会議等

Yamada, I.: "Spatial Variations in Associations between Neighborhood Walkability and Socio-demographic Characteristics: A Case Study in Utah", *The Association of American Geographers 107th Annual Meeting*, 2011.

Yamada, I. and A. Okabe: "New approaches to Moran's I test of spatial autocorrelation", *The Association of American Geographers 108th Annual Meeting*, 2012.

その他論文

Ikuho Yamada: "A Review of "Geographies of Obesity: Environmental Understandings of the Obesity Epidemic"", *The Professional Geographer*, Book review, 2011年.

講演・口頭発表

山田育穂: 「Spatial Inequality in the Risk of Low Birthweight in the Greater Los Angeles Area, California, USA」, 応用地域学会 2011年度第25回研究発表大会, 2011.

山田育穂:「健康的な住環境を目指して ～米国の肥満研究を題材に～」, 日本教育学会 第 70 回大会, 公開シンポジウムⅡ「子供の安全と健康」, 2011. 【招待講演】

山田育穂:「都市が健康をつくる? -米国ソルトレイクシティの肥満研究を題材に-」, 平成 23 年度「家族でナットク! 理系最前線Ⅲ～未来のワタシに会う日」シンポジウム, 2011. 【招待講演】【一般向け】

山田育穂:「Risk of Low Birthweight and Neighborhood Contextual Factors: A Case Study in the Greater Los Angeles Area, California, USA」, 地理情報システム学会第 20 回研究発表大会, 2011.

山本 隆一・准教授

研究テーマ(主たるもの)

医療情報の安全性確保とプライバシー保護に関する研究

医療情報の可用性、完全性、機密性の適切な確保と、情報主権者の権利としてのプライバシーと教育・研修・研究・公益目的の利用を調和させるための技術的課題および制度や運用を中心とする人的要素の課題についての研究。

広域分散診療情報データベースへの知識発見手法の応用

電子カルテが普及した際に構成されると予想される広域分散診療情報データベースをモデル化し、随時蓄積される診療情報に対して動的な知識発見手法の適応についての研究

医療における公開鍵基盤の応用に関する研究

公開鍵基盤を医療ドメインに応用するにあつての、資格属性の取り扱いなどの問題の解決と国際的な調和に関する研究

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

山本 隆一:「保健医療分野での通信技術の課題」, 電子情報通信学会誌, Vol.94, pp.380-384, 2011 年.

山本 隆一:「レセプトデータはどう活用されるのか」, 月刊保険診療, Vol.66, No.10, pp.46-50, 2011 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

山本 隆一:「二つの大規模データベースプロジェクト 医療情報の利活用へ向けて」, 第 14 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 2011. 【招待講演】

山本 隆一:「医療情報の利活用の拡大と地域見守り推進事業」, FIT2011 第 10 回情報科学技術フォーラム, 2011. 【招待講演】

山本 隆一:「大震災と診療情報の継続」, 日本医療情報学会特別シンポジウム「大震災と診療情報の継続」, 2011.

山本 隆一:「医療情報システムのセキュリティと病理システム」, 第10回日本テレパソロジー・バーチャルマイクロスコピー研究会記念総会, 2011.【招待講演】

山本 隆一:「レセプト情報の活用のあり方について」, H23 年度日本医師会医療情報システム協議会シンポジウム VI, 2011.【招待講演】

石井 健太郎・助教

研究テーマ(主たるもの)

インタラクティブシステム

ロボットや CG エージェントといった自律システム・人間同士のコミュニケーションを支援するシステムについて研究している。これまでに、自律ロボットや自律エージェントの話しかけ手法やふるまいの生成手法を提案している。また、アバターを利用した遠隔コミュニケーションシステムを提案している。

ユーザインタフェース

ユーザの指示や好みをコンピュータシステムに伝える技術・コンピュータシステムが持つ情報をユーザにとって自然な形態で提示する技術について研究している。これまでに、レーザポインタ・タッチ操作でロボットを操作するインタフェースを提案している。また、任意の壁・床・天井から音が聞こえる特殊なスピーカを用いて音で位置を提示するシステムを提案している。

センサネットワーク

人間の動作を認識して集約・解析するための技術について研究している。これまでに、異なるセンサ環境においても自律ロボットが同様に動作するためのセンサネットワークフレームワークを提案している。また、認識した動作から人間の状況を推定して、ロボット・エージェント・コンピュータサービスが状況に適した動作を行うシステムを提案している。

研究業績(2011 年度)

国際会議等

Hiroataka Osawa, Kentaro Ishii, Seiji Yamada, and Michita Imai: "Grounding Cyber Information in the Physical World with Attachable Social Cues", The 1st International Workshop on Cyber-Physical Systems, Networks, and Applications, pp.41-47, 2011.

James E. Young, Kentaro Ishii, Takeo Igarashi, and Ehud Sharlin: "Style by Demonstration: Teaching Interactive Movement Style to Robots", The 17th ACM International Conference on Intelligent User Interfaces, pp.41-50, 2012.【査読有】

その他論文

石井健太郎, 大澤博隆, 山田誠二: 「物体にキャラクターイメージを想起させる情報提示手法のオーサリングツール」, 2011 年度人工知能学会全国大会(第 25 回)論文集, 1E4-2in, 2011 年.

石井健太郎, 大澤博隆, 山田誠二: 「物体擬人化インタラクションにおける対話コンテンツの生成」, 第 62 回人工知能学会先進的学習科学と工学研究会, pp.7-12, 2011 年.

谷口祐司, 石井健太郎, 大澤博隆, 中臺一博, 今井倫太: 「アバタコミュニケーションのためのポインティング操作インタフェースの設計」, HAI シンポジウム 2011, II-1B-2, 2011 年.

石井健太郎, 谷口祐司, 大澤博隆, 中臺一博, 今井倫太: 「身体性遠隔コミュニケーションにおけるユーザとアバタの視点の一致」, インタラクション 2012 論文集, pp.49-56, 2012 年. 【査読有】

受賞

James E. Young, Kentaro Ishii, Takeo Igarashi, and Ehud Sharlin: Best Paper Award「Style by Demonstration: Teaching Interactive Movement Style to Robots」, The 17th ACM International Conference on Intelligent User Interfaces, 2012 年.

加藤 綾子・助教

研究テーマ(主たるもの)

アナログ録音技術を基軸としたレコード産業システムの成立と変容

レコード産業は技術、ビジネス、音楽の相互作用から成る大規模技術システムであるといえる(武石、2005)。同産業は、蓄音器の発明によるアナログ録音技術を基軸として成立・発展してきた。旧来存立していたこの産業システムが、新たな技術革新とリわけデジタル化、ネットワーク化の影響を受けて、近年、大幅な転換を迫られている。レコード産業を支える主たる事業は、(1)媒体に固定されたサウンドすなわち「原盤」を複製し、流通・販売して収益を上げる原盤ビジネスと、(2)原盤権・著作権を所有することで対価を得る権利ビジネスの 2 つであったが、これらの存続が難しくなっている。目下の研究課題は、このアナログ録音技術を基軸としたレコード産業システムにいかなる相互作用と変動が生じているのかを解明することである。

情報メディア技術の変化と音楽産業の変容に関する実証的研究

技術革新に伴い変動する音楽産業の構造に関して実証的な調査分析を行っている。同産業の産業組織は歴史的にレコード会社に垂直統合していたが、のちに生産部門(原盤制作)は外部化・分散化し、流通・小売部門はプラットフォーム化した。先行研究では 2000 年代以降、原盤制作が再びレコード会社に回帰する動きが指摘された。そこで、近年 30 年間の 3000 タイトルを対象に調査を行い、(1)原盤制作主体と(2)生産に係る組織間関係の推移に関して以下のことを明らかにした。

- (1)原盤制作主体の変容:レコード会社による原盤制作の回復は、2000 年よりも早い 1990 年代中頃から後半である。
- (2)組織間関係の変化:1980 年代には相対的に分業的な状態であったが、1990 年代中葉以降、急激に統合的な組織間関係となる。ただし、各時期における統合の実態は質的に異なる。

本研究の貢献は、これまで定性的分析が行われることの多かったレコード産業の構造変化に関する研究領域に、国

内レコード・ビジネスの基本的な分業・協業体系であるトライアングル体制(レコード会社、芸能事務所、音楽出版社の三者関係)を分析枠組みとして導入し、新たな分析軸を提供したことと、その変化を量的に示したことである。本研究は平成 23 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)若手研究(B)の支援を受けた。

コンテンツ産業の進化モデルの再検討—音声のデジタル化と生産消費者の伸張

デジタル録音技術の登場は 1960 年代に遡るが、1982 年のコンパクト・ディスク(CD)登場により最終消費者に届けられる媒体もデジタルに対応したものとなった。他方で 1980-90 年代を通して、音楽制作におけるデジタル化が生産体制を変容させてきた。また、パソコンとインターネットの普及は、一般消費者によるコンテンツの編集・改変・創作を容易にした。産業外部における消費者の生産活動は、1970 年代頃から指摘されているが、その量的拡大が産業構造を変容させる一因となっている可能性がある。これらを踏まえ、先行研究が示唆したコンテンツ産業の進化モデルの再検討を行っている。

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

加藤綾子:「日本のレコード・ビジネスの構造変化に関する定量的分析—トライアングル体制における組織間関係の変化」, ポピュラー音楽研究, Vol.15, pp.3-22, 2012 年。【査読有】

加藤綾子:「顕在化する消費者行動に関する考察—消費者による音楽の自作自演」, 情報文化学研究, 第 5 号, pp.23-30, 2012 年。

講演・口頭発表

加藤綾子:「音楽産業に関連した教育及び研究の紹介」, 大学生音楽産業フォーラム(於 八王子市学園都市センター), 2011。【一般向け】

加藤綾子:「日本のレコード産業に見る技術革新と構造変化に関する研究」, 日本社会情報学会(JSIS&JASI)合同研究発表大会(第 26 回)(於 静岡大学), 2011。

加藤綾子:「情報産業に見る 3 つの変化—レコード産業を事例に」, 情報文化学会第 19 回大会(於 東京大学), 2011。

加藤綾子:「技術革新と産業の構造変化—日本のレコード産業を事例に」, 社会・経済システム学会第 30 回大会(於 東京大学), 2011。

加藤綾子:「PCM 録音がもたらすレコード産業の構造転換」, 日本ポピュラー音楽学会第 23 回大会(於 大阪市立大学), 2011。

金 成 功・助教

研究テーマ(主たるもの)

戦後東アジアにおけるマスメディアの形成と文化交流の歴史

「戦後東アジアにおけるマスメディアの形成と文化交流の歴史」を禁止、タブー、海賊版などのキーワードを中心に解析する研究を進めている。とくに「戦後韓国における日本大衆文化禁止」といった現象に注目し、文化政策、ジャーナリズム、テレビ放送、海賊版の流通・消費、著作権問題などを研究対象としている。公式的な文化交流とは一線を引いているこれらのキーワードに注目することで、メディア文化研究における新しい視座と思考の可能性を探ることをめざしている。

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

金 成攻: 「文化的国境と想像された禁止——50—60 年代韓国大衆文化における倭色の文化政治」, 東京大学大学院情報学環紀要『情報学研究』81, 2011 年.

金 成攻: 「流動する「境界」——60—80 年代における日韓のメディア空間と文化越境に関する考察」, 東京大学大学院情報学環紀要『情報学研究』82, 2012 年.

その他論文

金 成攻: “2011 年、テレビの憂鬱—7 月 24 日、日本アナログ放送の終了”, Pressian, 韓国語連載コラム, 2011 年. 【一般向け】

金 成攻: “メディアがつくり出した日本型ブルドーザの疾走—論争的人物橋元はだれか”, Pressian, 韓国語連載コラム, 2011 年. 【一般向け】

金 成攻: “コンクリート？人それはあなたが決めることです—政権交代2年、原点に戻った日本と『家政婦ミタ』現象”, Pressian, 韓国語連載コラム, 2011 年. 【一般向け】

金 成攻: “反韓流運動をあざ笑う痛快な方法”, Pressian, 韓国語連載コラム, 2011 年. 【一般向け】

金 成攻: “野田内閣と新しいマニュアル—困難のなかで誕生したドジョウ内閣へのまなざし”, Pressian, 韓国語連載コラム, 2011 年. 【一般向け】

金 成攻: “もしイム・ジェボムが日本の歌手だったら？:彼の人生に感動できない理由”, Pressian, 韓国語連載コラム, 2011 年. 【一般向け】

金 成攻: “僕らはアトムの子どもさ:原子力と発展主義、その強固な絆”, Pressian, 韓国語連載コラム, 2011 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

KIM Sungmin(金成攻): “Black Ships and Pirate Ships: Bordering and Trans-bordering Cultural Flows in Korean Popular Culture since 1945”, The Department of East Asian Languages and the Asian Studies Program Georgetown University, 2011. 【招待講演】

KIM Sungmin(金成攻): “Global Media, Pirate Culture and National Identity: The Rise of New Media in South Korea in the 1980s”, 10th Conference of the European Sociological Association. Geneva, Switzerland, 2011.

佐藤 朝美・助教

研究テーマ(主たるもの)

知性を育む保育環境デザインに関する研究

東京大学情報学環とミサワホームとのプロジェクトにおいて、より良い保育環境デザインについて共同研究(研究代表者:東京大学大学院情報学環 山内 祐平 准教授)を行っております。3年間かけて、保育における学びを指向した空間を提案すべく個々研究を行う予定です。社会性を育む遊具の提案・開発・評価を行います。

家族内コミュニケーションを支援するデジタルストーリーテリングシステムの開発研究

家族内コミュニケーションを支援するオンライン環境として、デジタルストーリーテリングシステムの開発研究を行っております。科学研究費補助金(基盤C)の交付により、3年間かけて成果を出していく予定です。

Narrative Skill 習得を促す親の語りの引き出し方の向上を支援するシステムの開発研究

幼児の物語行為における親の役割に着目し、Narrative Skill 習得を促す親の語りの引き出し方の向上を支援するシステムを構築し、実践を継続しております。”親子 de 物語”は、親子で物語を作成し、その過程を Web カメラで録画、ビデオを親が自身で振り返ると同時に他の親子とビデオを共有していく、自己調整学習の仕組みを備えた Web アプリケーションです。

研究業績(2011 年度)

国際会議等

Tomomi SATO, Tamie Asakura, Mio Tsubakimoto: "PeKay's Little Author": Developing a Storybook Creation Software for Family Narratives.", ED-MEDIA 2011, pp.1203-1208, 2011. 【査読有】

講演・口頭発表

柴田アドリアーナ・高橋薫・佐藤朝美・山内祐平:「在日ブラジル人児童を対象としたデジタル日本語教材の開発」, 第二言語研究会(JASLA)第80回第2言語習得研究会(関東), 2011.

佐藤朝美, 山内祐平, 星野俊樹, 星野裕之, 中川正男:「社会性を育む保育環境デザインーごっこ遊び遊具の提案.」, 第8回こども環境学会 2011 年大会, 2011.

佐藤朝美, 朝倉民枝, 椿本弥生:「幼児の Narrative Skill 発達につながる Family Narrative の支援に関する研究.」, 日本教育工学会第27回大会, 2011.

土居由布子, 佐藤朝美, 山内祐平:「NHK クリエイティブライブラリーユーザーの映像制作活動と付随する学習に関する調査研究.」, 日本教育工学会第27回大会, 2011.

佐藤朝美, 朝倉民枝, 椿本弥生: 「幼児の Narrative Skill 発達につながる Family Narrative の支援に関する研究. 」, 子ども学会議学術集会, 2011.

受賞

佐藤朝美: 第5回キッズデザイン賞[ソーシャルキッズサポート部門]「親子 de 物語(オンラインコミュニティ)」, キッズデザイン協議会, 2011 年.

佐藤朝美, 山内祐平, 星野俊樹, 星野裕之, 中川正男: 第8回こども環境学会 2011 年大会優秀ポスター発表賞受賞「社会性を育む保育環境デザイナーごっこ遊び遊具の提案. 」, こども環境学会, 2011 年.

竹内 文乃・助教

研究テーマ(主たるもの)

疫学研究(大気汚染)

微笑粒子状物質(PM)による大気汚染が心筋梗塞や脳梗塞といった動脈硬化性疾患に影響するかどうか、大規模な疫学研究データを解析することで検討している(統計解析を担当)

疫学研究(循環器疾患)

日本の成人を対象に、健康診断ベースに動脈硬化性疾患発症リスクの探索および定量をする疫学研究に対して、統計解析手法の適用を試みる

疫学研究(小児の環境と健康)

妊婦および小児の環境ホルモンや化学物質への曝露が妊娠や性比の決定、精神・身体発達などどのように影響するか、全国6万人の妊婦を登録して追跡することで検討を行う(統計解析を担当)

研究業績(2011 年度)

分担著書

友滝愛, 佐藤弘樹, 竹内文乃 他: 「保健師・保健師をめざす学生のためのなぜ? どうして? 疫学・保健統計」, 医療情報科学研究所 編, メディックメディア, 2011 年.

雑誌論文

Ohsumi S, Shimozuma K, Ohashi Y, Takeuchi A, Suemasu K, Kuranami M, Ohno S, Watanabe T.: "Subjective and Objective Assessment of Edema during Adjuvant Chemotherapy for Breast Cancer Using Taxane-Containing Regimens in a Randomized Controlled Trial: The National Surgical Adjuvant Study of Breast Cancer 02.", *Oncology*, Vol.82, No.3, pp.131-138, 2011 年. 【査読有】

Igarashi T, Finet JE, Takeuchi A, Fujino Y, Strom M, Greener ID, Rosenbaum DS, Donahue JK.: "Connexin Gene Transfer Preserves Conduction Velocity and Prevents Atrial Fibrillation.", *Circulation.*, Vol.125, pp.216-225, 2011 年. 【査読有】

Tsakamoto A, Ohno K, Tsukagoshi T, Maeda S, Nakashima K, Fukushima K, Fujino Y, Takeuchi A, Tsujimoto H.: "Ultrasonographic Evaluation of Vincristine-Induced Gastric Hypomotility and the Prokinetic Effect of Mosapride in Dogs.", *Journal of Veterinary Internal Medicine.*, Vol.25, pp.1461-1464, 2011 年. 【査読有】

講演・口頭発表

Takeuchi A: "Power Calculation and Simulation for Studies of Estimating Chronic Health Effect of PM2.5 Using Three-Level Hierarchical Random Effect Model.", *Joint Statistical Meetings*, 2011.

受賞

竹内文乃: 日本計量生物学会 奨励賞「Monte Carlo Sensitivity Analysis for Adjusting Multiple-bias in the longitudinal cardiovascular study.」, 2011 年.

南後 由和・助教

研究テーマ(主たるもの)

戦後日本における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究

都市・空間論、メディア論、芸術・技術社会学が交差する観点から、戦後日本における建築家の有名性が、建築家、国家、クライアント、ユーザーによって歴史的にいかにかに表象され、建築物として空間化してきたのかを分析している。なかでも建築家の職能運動の変遷、建築ジャーナリズムの系譜、一般紙誌における建築家の表象、クライアントの属性と地理的分布に関する研究を重点的に行っている。

アンリ・ルフェーヴル、シチュアシオニストの都市・建築論に関する理論的・実践的研究

理論的研究として、1950～70 年代におけるアンリ・ルフェーヴルの空間論とコンスタントの都市・建築プロジェクト「ニューバビロン」が建築界に与えた影響を分析している。実践的研究として、社会学と建築学を越境して、現代の建築家との協働のリサーチ・プロジェクトを精力的に展開している。その他、今日的な都市の事例分析として、グラフィティ／落書きのフィールドワークを行っている。

研究業績(2011 年度)

分担著書

南後由和: 「黒川紀章——マスメディア時代の建築家像」『メタポリズムの未来都市』pp.260-266, 森美術館 編, 新建築社, 2011 年.

Yoshikazu NANGO: “Kisho Kurokawa: A Portrait of an Architect in the Age of Mass Media”, Metabolism, The City of the Future, pp.261-267”, Mori Art Museum 編, Shinkenchiku-sha, 2011 年.

南後由和: 「「文庫解説」『都市への権利』(森本和夫訳)、pp.226-247」, アンリ・ルフェーヴル 編, ちくま学芸文庫, 2011 年.

南後由和・塚本由晴・大和田芳弘・正木覚: 「“つながりのデザイン”を考える」『ジャパンガーデンデザイナーズ協会 10 周年記念フォーラム記念誌』, ジャパンガーデンデザイナーズ協会 編, ジャパンガーデンデザイナーズ協会 10 周年記念フォーラム, 2011 年.

雑誌論文

大野和士・阿部純・犬塚悠・南後由和・難波阿丹・橋本尚樹・松山秀明・柳井良文・渡邊宏樹: 「指揮者・大野和士氏インタビュー——内的必然性から響きあう音楽」, 情報学環研究 調査研究編, No.28, pp.203-242, 2011 年.

その他論文

南後由和・ホンマタカシ: 「今日の写真 2011⑥」, アサヒカメラ, 2011 年 6 月号、pp.165-169, 2011 年.

南後由和: 「自然の写真から、写真の自然へ」, Takashi Homma『IN OUR NATURE』, foreword, 2011 年.

塚本由晴・貝島桃代・乾久美子・南後由和: 「パブリックスペースをつくる——共同・共有に向けた建築的アプローチ」, 新建築, 2011 年 7 月号、pp.30-35, 2011 年.

鈴木謙介・南後由和・濱野智史: 「ソーシャルネットワークは都市を開くのか、閉じるのか」, city&life, No.100、pp.12-19, 2011 年.

南後由和: 「広告＝都市のリアリティ」, ちくま, 2011 年 8 月号、pp.12-13, 2011 年.

林文浩・荏開津広・南後由和・大山エンリコイサム: 「ポストグラフィティの開拓線」, ユリイカ, 2011 年 8 月号、pp.216-227, 2011 年.

南後由和: 「いま必要とされる建築家像をめぐって」, OPENERS Website「いま、世界が注目するニッポンの若手建築家たち」, 2011 年. 【一般向け】

南後由和・ホンマタカシ: 「今日の写真 2011⑪」, アサヒカメラ, 2011 年 11 月号、pp.181-185, 2011 年.

大山エンリコイサム・南後由和: 「私たちもバンクシーの映画を取り巻く現象の共犯者」, WebDICE, 2011 年.

南後由和: 「乾久美子『浅草のうち』書評」, 新建築 住宅特集, 2012 年 2 月号、p.161, 2011 年.

講演・口頭発表

南後由和: 「グラフィティの過去・現在・未来——ストリートにおける都市とメディアの交わり」, 日本都市社会学会, 2011.

ホンマタカシ・大西麻貴・南後由和: 「建築と写真」, gallery koko, 2011.

矢部智仁・大島芳彦・内山博文・南後由和・川合通裕・篠原聡子:「集合住宅のコモンデザイン——集まって住むかたちを探す」, 赤城神社・参集殿, 2011.

福住廉・南後由和:「戦後美術の周辺とその社会背景」, 中原佑介を読む——美術批評の地平(ヒルサイドライブラリー), 2011.

南後由和・長谷川豪:「横浜ハーバーシティ・スタディーズ 2011 チューター」, 北仲スクール, 2011.

篠原聡子・南後由和・西川祐子:「『おひとりハウス』刊行記念トークセッション」, 赤城神社・参集殿, 2011.

山名善之・南後由和:「メタボリズムの未来都市展:ギャラリートーク」, 森美術館, 2011.

中島直人・豊川斎赫・大野秀敏・八束はじめ、西沢大良・吉村靖孝、南後由和・藤村龍至:「Live Round About Journal 2011」, LIXIL GINZA, 2011.

Charlie Koolhaas・重松象平・南後由和:「Metabolism Trip 展トークイベント」, gallery koko, 2011.

南後由和:「Urbanism for Design: Public&Commitment 最終講評会」, 北仲スクール, 2011.

南後由和:「生きられた建築・都市・社会」, 東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科卒業／修了研究・制作展特別講演会, 2011.

南後由和:「情報による空間の変容」, STUDIO4°C, 2011.

南後由和:「都市について考える」, オルナティブ・カフェ(アートエリア B1), 2011.

難波和彦・中田千彦・南後由和・羽鳥達也・酒井康史・石川初:「避難地形時間地図——縮退時代における都市の記述法へ」, リビング・デザインセンターOZONE, 2011.

西 兼志・助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

松前 恵環・助教

研究テーマ(主たるもの)

情報と法を巡る現代的課題

デジタル化・ネットワーク化の進展による「情報」のあり方の変容がもたらす、「法」を巡る現代的な課題について、研究を行っている。具体的には、本来的に「情報」と密接な関わりを有するメディア法制、情報公開法制、プライバシー・個人情報保護法制、知的財産権法制等に加え、情報通信技術の発展に伴って新しく生じた、ISP の法的責任、コンピュータ犯罪、迷惑メール、違法・有害コンテンツの流通等の課題に対応するための法制を対象として、検討を進めている。

プライバシー・個人情報保護に関する法原理と制度

「プライバシー」や「プライバシー権」といった概念の意義やその価値、プライバシーの保護と個人情報の保護との関係あるいは個人情報保護制度の意義、個人情報保護制度の現状と課題等、プライバシー・個人情報保護に関する法原理の考察と制度の検討を行っている。この際、我が国のプライバシー・個人情報保護法制にとりわけ大きな影響を与えている米国、欧州の議論や制度に着目して、比較法的研究を行っている。

先端技術とプライバシー・個人情報保護

インターネットに続くユビキタス、そして、クラウドといった先端技術の進展に伴い、プライバシー・個人情報を巡る状況はどのように変容し、それによってプライバシーにはどのような脅威がもたらされているのか、そして、それに対してプライバシー・個人情報保護制度はどのようにあるべきなのか——情報通信技術の進展と情報のあり方の変容という視点から、プライバシー・個人情報保護についての研究を行い、新たな枠組みについて考察している。

研究業績(2011 年度)

講演・口頭発表

松前恵環:「個人の『識別』とプライバシー—ID 制度を巡る米国の議論を題材に—」, 堀部政男情報法研究会 連続シンポジウム「共通番号制度と国民 ID 時代に向けたプライバシー・個人情報保護法制のあり方〈課題と提言〉」第 6 回シンポジウム, 2011. 【一般向け】

米倉 将吾・助教

研究テーマ(主たるもの)

情動ロボティクス

ロボットが人間のように感情・情動を持つようになるためには、何が必要なのか。
また、そもそもロボットが感情や情動を持っているとはどういう事なのか。
現象論、進化論、脳科学を出発点として、エモーショナルなロボットの構成を試みている。

思いやり共感システム

誰かの悲しみを敏感に感じ取りそっと寄り添ったり、
自然や芸術の美しさを感じたり、その感動を誰かと共有したり、

このような夢のようなシステムをつくり出すために必要な脳型情報処理システムを構築する事を試みている。

身体性知能

非限定的状況においても適応創発的に対応する事の出来るシステムを構築するために、アフォーダンス・ゲシュタルト・価値システム・身体性を軸として知能の創発、行動の創発のための構成論に取り組んでいる。

研究業績(2011 年度)

石川 雄章・特任教授

研究テーマ(主たるもの)

新技術の社会への実装(イノベーション・モデル)

ITをはじめとする新しい技術を社会に実装する際には、多くの場合、技術というよりはむしろ、多様なステークホルダーとの調整や既存の社会システムの見直し等が課題となる。こうした解題に対応しつつイノベーションを実現するためには、ステークホルダーの把握、共通目標の設定、コアメンバーの任命とチームの結成、権利と責任の適正な分担、検討プロセス及び場の設計、といった幅広い領域にわたる戦略的な取り組みが必要となる。21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」では、ユビキタス技術の現場への適用をテーマに、政府、自治体などの取り組みを通じて、実証的にこのテーマにアプローチしている。

ITガバナンス(公的セクターにおける枠組みとCIOの役割)

ITガバナンスとは「企業が競争優位構築を目的に、IT戦略の策定・実行をコントロールし、あるべき方向へ導く組織能力」(「企業のITガバナンス向上に向けて」(通商産業省 1999)とされているが、公的セクターにおいてもIT戦略の策定・実行をコントロールすることは重要な課題である。特に、公的セクターは民間セクターとは異なる評価基準、行動制約があり、また社会的な制度設計という特別な機能を有する。こうしたことを前提に、COBITなどの標準的なITガバナンスのフレームワークを参考に、自らの県でのCIOの経験などを踏まえて、公的なセクターにおけるITガバナンスの枠組みとCIOの役割について研究している。

社会的合意形成

新しい技術・制度の社会への導入など、社会的に大きな影響をあたえる行為を行う際には、事前に関係者の合意を得たうえで進めることが望ましく、こうした活動を怠った場合には、最悪の場合、社会的な反発を招く恐れもある。その一方で、こうした活動を行う組織は社会的に確立しておらず、また方法論も制度として十分ではない。このため、社会的合意形成を支援するNPO法人PI-Forum(ピー・アイ・フォーラム)の活動を通じて、実証的に社会的合意形成の意義、方法、知恵、事例などを研究している。

研究業績(2011 年度)

講演・口頭発表

石川雄章:「情報技術によるインフラ高度化」, 茨城県高度情報化推進協議会, 2011. 【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「ICTによる次世代のインフラ管理」, 建設コンサルタンツ協会【招待講演】, 2011.

石川雄章:「ユビキタスビジネスソリューション」, TRON SHOW, 2011.

小林 真輔・特任准教授

研究テーマ(主たるもの)

センサーネットワーク

小型で無線通信可能なセンサーネットワークの研究。ハードウェアからソフトウェアまでのトータルアーキテクチャの研究を行っている。

組み込みシステム

組み込みシステムのハードウェア並びにソフトウェアの研究

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

Kenichi MIZUGAKI, Tatsuo NAKAGAWA, Ryosuke FUJIWARA, Shinsuke KOBAYASHI, Noboru KOSHIZUKA, Ken SAKAMURA: "UWB-IR Wireless Accurate Location System for Sensor Network", IEICE TRANSACTIONS on Communications, Vol.E94-B, No.5, pp.1432-1437, 2011 年. 【査読有】

国際会議等

Shinsuke Kobayashi, Yukihiro Shigesada, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Interoperable Spatial Information System Architecture Based on Ubiquitous ID Infrastructure", The 4th IEEE International Workshop on Service Science and Systems, pp.435-440, 2011. 【査読有】

碓谷 紀夫・特任准教授

研究テーマ(主たるもの)

Digital Archive Digital Heritage における情報統制手法の確立

文化資源をデジタル化して公開する Digital Archive や Digital Heritage における、メタデータやオントロジなどの情報統制手法の確立を行う。

近代メディア表象論

近代におけるメディア表象を、近年では特に明治以降の国葬を対象としたメディア表象について研究する。

研究業績(2011 年度)

分担著書

研谷紀夫 北岡タマ子 高橋英一 三橋徹:「文化資源デジタル化のためのハンドブック」, 研谷紀夫 編, 東京大学情報学環/凸版印刷共同研究, 2011 年.

馬場章 研谷紀夫:「デジタルアーカイブアーカイブから知識化複合体へ」, 石川 徹也,根本彰,吉見俊哉 編, 東京大学出版会, 2011 年.

雑誌論文

研谷紀夫:「皇族・華族を対象とする人名典拠情報の構築と Digital Cultural Heritage への活用」, アート・ドキュメンテーション研究, Vol.19, pp.36-53, 2011 年. 【査読有】

研谷紀夫:「公葬のメディア表象の形成と共同体におけるその受容と継承-伊藤博文の国葬における新聞・雑誌・絵葉書・写真帖を中心に」, 共立女子大学文芸学部紀要, No.58, pp.37-57, 2011 年.

国際会議等

Norio TOGIYA, Takanori KAWASHIMA: "A System for Referencing Personal Names through Iconography and Sharing an Authoritative Information Source for Personal Names by API", Digital Humanity2011, pp.373-376, 2011. 【査読有】

その他論文

研谷紀夫:「アーカイブズの構造情報とデジタルデータの仕様情報の入力を重視した Digital Cultural Heritage とのそのコンテンツマネジメントシステム」, 情報処理学会シンポジウム じんもんこん 2011 論文集, 2011 年.

研谷紀夫:「博覧都市東京(第 4 回)「博覧会としての復興都市と、図録としての絵葉書」」, 日本絵葉書会会報 第 37 号, 2011 年.

研谷紀夫:「博覧都市東京(第 3 回)「知の博覧メディアとしての絵葉書～坪井正五郎」に見る江戸の文化と近代知の出会い～」, 日本絵葉書会会報 36 号, 2011 年.

講演・口頭発表

研谷紀夫:「GUIを用いた関連語編集機能とメタデータへの関連語登録機能を実装した Digital Cultural Heritage の実践例」, 情報組織化研究グループ月例研究会報告, 2011.

研谷紀夫:「文化資源のデジタル化とその情報記録の課題～『文化資源のデジタル化に関するハンドブック』を題材として」, 公益財団法人東京都歴史文化財団 P+ARCHIVE レクチャー, 2011.

北岡タマ子, 研谷紀夫, 高橋英一:「『文化資源のデジタル化に関するハンドブック』におけるドキュメンテーションの特徴」, アート・ドキュメンテーション学会秋季研究会, 2011.

研谷紀夫:「写真原板の分析を通じた明治期写真館研究の実践とその課題」, 日本写真芸術学会年次大会, 2011.

市川 暢之・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

点検・維持管理等現場業務の効率化

社会基盤の老朽化に伴う点検・維持管理業務量の増大に対応するため、現場業務で発生する情報の流れに着目した点検作業等の効率化と質の向上を実現する手法・機器等について研究する

研究業績(2011 年度)

講演・口頭発表

市川暢之:「情報技術活用による現場作業の支援方策の体系化」, 土木学会年次後援会, 2011.

受賞

市川暢之: 平成 23 年度全国大会第 66 回年次学術講演会優秀講演者「情報技術活用による現場作業の支援方策の体系化」, 土木学会, 2011 年.

田中 克直・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

木下 裕美子・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

分担著書

Kinoshita, Yumiko: "Service Entities in Open-Closed Innovation: The Growth of Service Economy for Smaller Firms Driven by Information Technology (IT) and Knowledge-Intensive Services (KIS), In: Developing Economies: Innovation, Investment and Sustainability, Ch 1", Carcillo, Joanne M. 編, Nova Science Publisher, 2011 年.

雑誌論文

Kinoshita, Yumiko: "Contribution of Knowledge-Intensive Services to Economic Growth", The International Journal of Economic Policy Studies, Vol.5, pp.13-32, 2011 年. 【査読有】

その他論文

Kinoshita, Yumiko; Gotoh, Reiko; Sudoh, Osamu: "A Preliminary Report on A Challenge to Compute Real-time Consumer Price Index in the Framework of Cyber Physical Systems (CPS) Using Large-scale Online Household Record Data", Proceedings of the 25th Annual Conference of Japan Association for Social Informatics, pp.261-264, 第 26 回全国大会予稿集, 2011 年.

金 伯柱・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

地引 泰人・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

鄭 鎬碩・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

高橋 薫・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

高橋薫:「学部生を対象とした実用文作成指導の試み」, AJ ジャーナル(日本語教育学会 SIG アカデミック・ジャパニーズ・グループ), No.3, pp.118-126, 2011 年.

講演・口頭発表

高橋薫・藤本徹・野口雅乃・鈴木久・大辻雄介・山内祐平:「Facebook を活用した高校生のキャリア教育支援の試み—「移動する子ども」であるベトナム人高校生は自らの学びをどのように捉えていたか—」, 「移動する子どもたち」国際研究集会, 2011.

高橋薫・程琳・山内祐平:「ランゲージエクステンジ活動における学習者満足度に関する研究」, 世界日本語教育大会 International Conference on Japanese Language Education, 2011.

高橋薫・椿本弥生・北村智・鈴木久・大辻雄介・山内祐平:「高校生を対象としたグループでの相互推敲を支援するシステム「Re:」の開発と評価」, 日本教育工学会 第 27 回全国大会, 2011.

高橋薫・稲生知子・槌田和美・西田みどり・中村広幸:「レポートライティングの問題設定の支援が産出する文章に与える影響」, 日本教育心理学会 53 回総会, 2011.

高橋薫:「学部生を対象とした実用文作成指導の試み」, アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会(日本語教育学会 SIG), 2011.

柴田アドリアーナ・高橋薫・佐藤朝美・山内祐平:「在日ブラジル人児童を対象としたインフォーマルラーニング教材の開発—デジタル日本語教材「にほんごまなぼう!」」, 第二言語習得研究会, 2011.

藤本 徹・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

ソーシャルメディアを利用した学習環境デザイン

ベネッセ先端教育技術学講座において、Facebook を利用した高校生向けのプロジェクト学習や基礎学習支援環境のデザインを行い、ソーシャルメディア環境における学びの場のあり方を研究している。また、ソーシャルメディアを利用した思考図解化支援ツールの開発を通して、時間的・空間的制約に縛られずに知的生産活動を促進・共有できる思考活動支援環境の提供に取り組んでいる。

デジタルゲームの教育利用

教育をはじめとする社会の諸領域の問題解決のために開発、利用されるデジタルゲーム「シリアスゲーム」の研究動向を調査し、教育現場やインフォーマルな学習の場で利用されるゲームのあり方や効果的な利用方法の開発について研究している。

ゲームフルデザイン方法論の研究

ゲームデザインの手法を取り入れて教育・学習活動をデザインするアプローチを「ゲームフルデザイン」と捉え、デザイン方法論の体系化とモデルカリキュラムの開発に取り組んでいる。米国を中心に開発が進んでいる「クエスト型カリキュラム」や「マルチプレイヤークラスルーム」などの手法を研究し、国内の大学において「クエスト型授業」アプローチの開発と実践を進めている。

研究業績(2011 年度)

著書

ジェイン・マクゴニガル著、妹尾堅一郎監訳、藤本徹、藤井清美訳：「幸せな未来は「ゲーム」が創る」, 早川書房, 2011 年.

雑誌論文

藤本徹：「効果的なデジタルゲーム利用教育のための考え方」, コンピュータ&エデュケーション, Vol.31, 2011 年. 【査読有】

藤本徹：「シリアスゲーム開発を題材としたゲーム開発者教育の導入」, デジタルゲーム学研究, Vol.5, No.2, 2012 年. 【査読有】

講演・口頭発表

妹尾堅一郎, 藤本徹：「マイケル・サンデル教授「白熱教室」の授業法 ～講義形式の可能性と限界等を考察する～」, PC カンファレンス 2011, 熊本大学, 2011 年 8 月 7 日, 2011.

藤本徹：「ゲーム要素を活かした学習ソフト開発の事例研究」, 第 27 回日本教育工学会全国大会ワークショップ, 首都大学東京, 2011 年 9 月 17 日, 2011. 【一般向け】

藤本徹, 山田政寛：「近年のゲームの教育利用研究の動向と今後の課題」, 第 27 回日本教育工学会全国大会予稿集 (課題研究), 181-184, 首都大学東京, 2011 年 9 月 19 日, 2011.

藤本徹：「シリアスゲーム産業の形成と今後の展開」, 九州大学シリアスゲームシンポジウム、東京ミッドタウン、2011 年 12 月 7 日, 2011. 【招待講演】【一般向け】

藤本徹:「学校はゲームから何を学べるか」, CIEC 北海道支部第 5 回研究会, 2012 年 3 月 30 日, 2012. 【招待講演】

藤本徹, 御園真史, 高橋薫, 大辻雄介, 鈴木久, 山内祐平, :「数学教育のためのゲーム型学習 Facebook アプリケーションの開発」, ゲーム学会「ゲームと教育」研究部会第5回研究会, 香川大学, 2012 年 3 月 9 日, 2012.

藤本徹:「大学教育における「クエスト型授業」の開発と実践」, 日本デジタルゲーム学会 2011 年次大会, 立命館大学, 2012 年 2 月 25 日, 2012.

別所 正博・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス歩行者ナビゲーションの研究

ユビキタスコンピューティング技術を応用した、都市環境での歩行者移動支援に関して研究を行っている。

具体的には、

- * 誘導コンテキストに応じた最適な情報 PUSH を実現するためのソフトウェア機構
 - * 障害者の移動支援を念頭とした、利用者の身体特性と環境のアクセシビリティを考慮したナビゲーション手法
 - * 都市環境でのランドマークベースの自然な道案内生成手法
- といったテーマに取り組んでいる。

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

Lee Fueng Yap, Takeshi Yashiro, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "SUCAS: smart-card-based secure user-centric attestation framework for location-based services", Int. J. Information Privacy, Security and Integrity, Vol.1, No.2/3, pp.160-183, 2011 年. 【査読有】

Lee Fueng Yap, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Secure Consumer-Oriented Integrated Services Using Activity-Based Attestation for Converging Online and In-Store Shopping Experience", International Journal of Computer Theory and Engineering, Vol.4, No.2, pp.165-170, 2011 年. 【査読有】

講演・口頭発表

別所正博, 中尾彰宏, 越塚 登, 坂村 健:「場所情報サービスのためのデータキャッシュ機構に関する分析」, 2012 年電子情報通信学会 総合大会, 2011.

堀 聖司・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

作品制作を中心とした錯視的映像表現に関する研究

コンピュータ・グラフィクスを使用し制作した複数の異なった視点移動の映像を、ひとつの画面内に部分的に合成することによって生じる視覚の競合を利用した錯視的映像作品の制作。切り抜き合成用に使用する動画素材にも視点移動する三次元形状のシルエットを用いることでさらに視覚の競合が助長される。

研究業績(2011 年度)

前田 拓人・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

東海・東南海・南海地震の連動性評価研究

将来連動して発生する可能性があることが指摘されている東海・東南海・南海地震について、被害予測精度を向上させるため、詳細な地下構造を用いた大規模計算機による強震動・津波連成シミュレーションを行う。

地震波動伝播・散乱問題

地震波は伝播する過程で固体地球内部の短波長不均質構造によって散乱され、大きく乱されていく。また、海陸境界においては音波と地震波の間の相互変換が起り、地震による海中音響波は発生することがある。本研究では弾性波動論・基盤地震観測網による高密度データ解析・大規模数値計算それぞれのアプローチから、不均質構造内部での地震波の伝播過程をモデル化する。

研究業績(2011 年度)

著書

Haruo Sato, Michael C. Fehler, and Takuto Maeda: "Seismic Wave Propagation and Scattering in the Heterogeneous Earth : Second Edition", Springer, 2011 年.

雑誌論文

Shinako Noguchi, Takuto Maeda, and Takashi Furumura: "FDM simulation of an anomalous later phase from the Japan Trench subduction zone earthquakes", Pure and Applied Geophysics, Vol.2011, in press, doi:10.1007/s00024-011-0412-1, 2011 年. 【査読有】

Takuto Maeda and Takashi Furumura: "FDM simulation of seismic waves, ocean acoustic waves, and tsunamis based on tsunami-coupled equations of motion", Pure and Applied Geophysics, in press, doi:10.1007/s00024-011-0430-z, 2011 年. 【査読有】

Teito Takemoto, Takashi Furumura, Tatsuhiko Saito, Takuto Maeda, and Shinako Noguchi: "Spatial- and frequency-dependent properties of site amplification factors in Japan derived by the coda normalization method", Bulletin of the Seismological Society of America, in press, 2011 年. 【査読有】

Takanori Matsuzawa, Kazushige Obara, Takuto Maeda, Yoichi Asano, and Tatsuhiko Saito: "Love and Rayleigh wave microseisms excited by migrating ocean swells in the North Atlantic detected in Japan", Bulletin of the Seismological Society of America, in press, 2011 年. 【査読有】

Obara, K., T. Matsuzawa, S. Tanaka, T. Kimura, and T. Maeda: "Migration properties of non-volcanic tremor in Shikoku, southwest Japan", Geophysical Research Letters, Vol.38, No.L09311, doi:10.1029/2011GL047110, 2011 年. 【査読有】

Takashi Furumura, Shunsuke Takemura, Shinako Noguchi, Teito Takemoto, Takuto Maeda, Kazuhisa Iwai and Simanchal Padhy: "Strong ground motions from the 2011 off-the Pacific-Coast-of-Tohoku, Japan (Mw = 9.0) earthquake obtained from a dense nationwide seismic network", Landslides, Vol.8, No.3, pp.333-338, doi:10.1007/s10346-011-0279-3, 2011 年. 【査読有】

Takuto Maeda, Takashi Furumura, Shin: "Significant tsunami observed at ocean-bottom pressure gauges during the 2011 off the Pacific coast of Tohoku Earthquake", Earth, Planets and Space, Vol.63, No.7, pp.803-808, 2011 年. 【査読有】

Takuto Maeda, Kazushige Obara, Takashi Furumura, and Tatsuhiko Saito: "Interference of long-period seismic wavefield observed by the dense Hi-net array in Japan", Journal of Geophysical Research, Vol.116, No.B10303, doi:10.1029/2011JB008464, 2011 年. 【査読有】

Hisashi Utada, Hisayoshi Shimizu, Tsutomu Ogawa, Takuto Maeda, Takashi Furumura, Tetsuya Yamamoto, Nobuyuki Yamazaki, Yuki Yoshitake, and Shingo Nagamachi: "Geomagnetic field changes in response to the 2011 off the Pacific Coast of Tohoku Earthquake and Tsunami", Earth and Planetary Science Letters, Vol.311, No.1-2, pp.11-27, doi:10.1016/j.epsl.2011.09.036, 2011 年. 【査読有】

講演・口頭発表

前田拓人・古村孝志: 「地震と津波の統合シミュレーション法の大規模並列計算」, 日本地球惑星科学連合 2011 年大会, 2011.

Takuto Maeda and Takashi Furumura: "Huge-scale compound simulation of seismic waves and tsunamis", AOGS 2011, 2011.

前田拓人・古村孝志・野口科子・武村俊介・岩井一央・Shiann-Jong Lee・酒井慎一・篠原雅尚: 「2011 年東北地方太平洋沖地震の強震動・海中音波・地殻変動・津波の統一的シミュレーション」, 日本地震学会 2011 年秋季大会, 2011.

Maeda, T., T. Furumura, S. Noguchi, S. Takemura, K. Iwai, S.-J. Lee, S. Sakai, and M. Shinohara: "A unified numerical simulation of seismic ground motion, ocean acoustics, coseismic deformations and tsunamis of 2011 Tohoku earthquake", AGU Fall Meeting 2011, 2011.

新聞・報道

前田拓人: 「3連動地震「京」で被害予測」, 読売新聞, 2011.

前田拓人:「巨大地震「京」で被害予測」, 読売新聞, 2012.

前田拓人:「スパコン「京」で地震の被害最小限に」, 日本計量新報, 2012.

水島 希・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

Brain-Machine Interface 研究開発における倫理的諸問題への対処システム構築

文部科学省脳科学研究戦略推進プログラムにおいて佐倉統分担研究者の担当する「Brain-Machine Interface の脳神経倫理的および法的枠組みに関する研究」のうち、BMI 研究開発プロジェクト内部において、どのような倫理問題対処システムを構築すべきかを検討し、試行する。特に現在は、研究倫理コンサルテーション(ベンチサイド倫理コンサルテーション)窓口を設置し、研究のあらゆる段階で生じる倫理課題への迅速な対処を試行している。

フェミニズム科学批評による脳神経科学分析

先端科学技術領域である脳神経科学において、フェミニズム科学批評の立場から諸課題を抽出する。

研究業績(2011 年度)

分担著書

水島希:「テクノロジーとヘルスケア 女性身体へのポリティクス」, 日比野由利、柳原良江 編, 生活書院, 2011 年.

その他論文

水島希:「ゲーム脳と脳トレをどう考えるか」, 『生物の科学 遺伝』, Vol.65, No.4, pp.45-46, 2011 年. 【一般向け】

水島希:「技術と知をわたしたちの手にとりもどす—原発事故後の放射線対策と女性」, 『わたしたちの 21 世紀』, Vol.67, pp.19-23, 2011 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

Mizushima, N. & O. Sakura: 「Project-based approach to identify the ethical, legal and social implications; a model for national project of brain machine interface development.」, 第 34 回日本神経科学大会 Neuroscience 2011、ポスター発表、2011 年 9 月 17 日、パシフィコ横浜., 2011.

Mizushima, N. & O. Sakura: “Project-based approach to identify the ethical, legal and social implications; a model for national project of brain machine interface development.”, 2011 Annual Meeting of the International Neuroethics Society, 10th Nov. 2011, the Carnegie Institution for Science, Washington DC., 2011.

水島希、佐倉統:「ブレイン・マシン・インターフェイス開発における工学系研究者の視点——専門領域の違いによる倫理的・社会的課題の認識の違い」, 科学技術社会論学会、第 10 回年次研究大会、2011 年 12 月 4 日、京都大学、2011.

森川 茶民・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

食事に関わるライフログ共有技術基盤

食事画像の処理、分類

User Interaction Techniques for Multimedia Retrieval

We investigate novel user interaction techniques for fast and efficient multimedia querying and retrieval. Three new types of visual queries are proposed for retrieving different types of multimedia. Iconic queries facilitate editorial image retrieval and social multimedia retrieval. Simple sketches on a map form spatial queries for retrieving location-based multimedia. Sketches on an interactive calendar form queries for temporal multimedia retrieval. We also propose an interactive querying strategy that combines multiple search dimensions, to facilitate easier refinement of searches. We design and develop prototype applications that use the proposed interaction techniques and querying strategy, for evaluation of the proposed techniques.

研究業績(2011 年度)

分担著書

S. Rho, G. C. de Silva, M. Bertini, S. Kopf (Eds.): "Journal of Multimedia Tools and Applications (MTAP) - special issue on Advances in Convergence of Multimedia", S. Rho 編, Springer Verlag, 2011 年.

国際会議等

G. C. de Silva, K. Aizawa: "Capturing, Using and Sharing a Lifelog Dataset", The 2nd ECIR workshop on Information Access for Personal Media Archives (IAPMA 2011), 2011. 【査読有】

G. C. de Silva, K. Aizawa: "An Image-based Online Dietary Assessment System", Experimental Biology 2011, 2011. 【査読有】

G. C. de Silva, K. Aizawa, Y. Arase, X. Xie: "Interactive Social, Spatial and Temporal Querying for Multimedia Retrieval", The 9th International workshop on Content Based Multimedia Indexing (CBMI 2011), 2011. 【査読有】

森川 茶民: "CLUSTERING MEAL IMAGES IN A WEB-BASED DIETARY MANAGEMENT SYSTEM", ICME 2011, 2011. 【査読有】

T. Miyazaki, G. C. de Silva, K. Aizawa: "Image Based Calorie Content Estimation for Dietary Assessment", The 3rd international workshop on Multimedia for Cooking and Eating Activities (CEA 2011), 2011. 【査読有】

森川 茶民: "Automated Awareness and Visualization of Contactability in Networked Environments", 2012 International Conference on Human Centered Computing Environments, 2012. 【査読有】

その他論文

森川 茶民: "User Assisted Segmentation of Meal Images Using Touch Points Entered on a Smart Phone", 電子情報通信学会2012総合大会, 2012年.

講演・口頭発表

森川 茶民: "User Interaction Techniques for Multimedia Retrieval", International Symposium on Spatial Media, 2012. 【招待講演】

特許

デシルヴァ ガムヘワゲ チャミンダ:「食事画像セグメンテーション・システム」, 2011年05月.

湧田 雄基・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

Human Context Recognition using Ubiquitous Sensors

主に歩行者をターゲットとして、使用者に取り付けたセンサや都市空間に配置されたセンサ(ユビキタスセンサ)からの情報を利用し、利用者の位置、状態または行為を推定することを研究目標とする。こうした利用者の情報を活用し、よりリッチなサービスの提供を実現する。

ロボットによるイベント認識のための概念構造の自立的構造化

本研究では、ロボットによる自由度が高くかつロバストな実環境における現象理解と解釈(イベント認識)を実現するためのロボット自身が保有する概念構造を自立的に獲得し構造化するためのアーキテクチャの構築を行う。なお、本研究は、文部科学省科学研究費補助金による援助を受けて実施する。

ネットワークロボットを用いた睡眠を中心とする生活パターン管理・調整支援

本研究では、人の日常生活を観測可能な画像センサを搭載したロボットおよびウェアラブル型の生体センサをワイヤレスネットワークでリンクすることにより、人の生活パターンを管理・調整することが可能なシステムを構築した。提案システムでは、脈波が取得可能な生体センサおよび画像認識による人状態推定手法を組み合わせることにより、日常生活での人の行動を推定することが可能である。また、生体リズムの動的変動特性に注目し、人の活性度および活動パターンを調整する手法について提案した。なお、本研究は、文部科学省科学研究費補助金の援助により実施した。

研究業績(2011 年度)

尾崎 亮太・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

Khor Soon Hin・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

趙 志鎬・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

In Yeop Jang, Ji-Ho Cho, and Kwan H. Lee: "3D human modeling from a single depth image dealing with self-occlusion", Multimedia Tools and Applications, Published online, 2011 年. 【査読有】

杜 平・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

中路 武士・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

映画と技術

情報記号論やメディア論を背景に、映画の表象文化と視聴覚技術の関係を研究する。映像アーカイブを構築しながら、デジタル・テクノロジーを「批評の道具」として映像解析に活用し、アルケオロジーやグラマトロジーの観点から、メディア・テキストの読解、イメージの分析を批判的に行う。映画史・視覚文化史におけるテクノロジーの変遷(特にデジタル化)を追いながら、運動と時間のイメージ論を技術論的観点から再構築することを目指す。

研究業績(2011 年度)

雑誌論文

ゲーリー・ホール(著)、中路武士+谷島貫太(訳):「海賊哲学——オープン・アクセス、オープン編集、フリー・コンテンツ、フリーで／自由で／オープンなメディア」、『現代思想』(青土社), Vol.39, No.10, pp.202-225, 2011 年。【一般向け】

講演・口頭発表

Takeshi NAKAJI and Kanta TANISHIMA: "Beingn the Absence of Memory: from Hiroshima mon amour to H story", « La catastrophe en fiction », Temps forts de la programmation culturelle de Todai Forum 2011, ENS Lyon, France , 2011.

二宮 利江・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

自律分散ネットワーク型組織のマネジメントにおける環境とガバナンス

多様な分野の技術者、専門家が関係する大規模なプロジェクトの運営を目的とし、中央集権型ではなくネットワーク型の組織を作り、分散している関係者が自律的に活動しながら、全体として一つの目的を達成するためのマネジメントに必要な環境およびガバナンスについて、ネットワーク分析の手法を取り入れながら考察する。

行動観察手法を用いた社会インフラ施設の維持管理業務の効率化

社会インフラ施設の維持管理業務の実態を行動観察手法を用いて分析し、ユーザインタフェース、感性、安全、ロバストネス、メンテナンス、人間工学の観点から業務をサポートするシステムの要件を抽出する。その要件を基に、人間中心の業務支援システムを設計、開発し、業務の効率化を図る。

オープンプラットフォームを用いた人材育成に関する研究

「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座で提言している5つの施策のひとつ「技術力の維持と安全性の向上」を目指した人材育成の方法について、オープンプラットフォームを用いて検討する。また、当該プラットフォームを活用してインフラインノベーション研究会の活性化を図る。

研究業績(2011 年度)

分担著書

T. Ninomiya, N. Ichikawa, Y. Ishikawa: "Environment and Governance for Network Management" in Emerging Themes in Information Systems and Organization Studies, Marco De Marco 編, Springer, 2011 年.

講演・口頭発表

二宮利江、市川暢之、石川雄章: 「維持管理業務を実施する体制(組織・業務・スキル)の実態調査」, 土木学会全国大会, 2011.

宮垣 英司・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

無線端末の仮想化

仮想ネットワーク構築時に端末上において仮想化端末を構築する。また、ユーザー端末自体を仮想ネットワークに参加させることを用意なものとするために、特に無線端末上に置ける仮想化・仮想ネットワークへの参加を容易にする技術の研究開発

研究業績(2011 年度)

その他論文

宮垣英司 中尾彰宏: 「無線 LAN アクセスポイントを用いたキャッシュ共有手法」, 電子情報通信学会総合大会, 2012 年.

麥 琛・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

森下 壮一郎・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

山本 周・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2011 年度)

IV. 外部資金獲得状況

平成 24 (2012) 年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人が関係する外部資金の状況を、情報学環研究協力系のデータをもとに、収録しています。

1. 科学研究費補助金交付一覧
2. 寄付講座
3. 受託研究受入一覧
4. 奨学寄附金受入
5. 共同研究受入一覧
6. その他外部資金

1. 科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研究課題	研究代表者	直接経費	間接経費	計
基盤研究 (A)	ライフログ情報処理基盤の構築:取得、処理、共有へ向けて	相澤 清晴	7,500,000	2,250,000	9,750,000
基盤研究 (A)	デジタル茶室の花鳥風月のな時空間創出技術	河口 洋一郎	7,500,000	2,250,000	9,750,000
基盤研究 (A)	歴史情報学に基づく明治期社会モデルの研究—写真資料を用いた華族社会構造の解析—	馬場 章	11,200,000	3,360,000	14,560,000
基盤研究 (A)	東アジアにおける地域協力枠組み発展の政治過程	田中 明彦	7,800,000	2,340,000	10,140,000
基盤研究 (A)	視聴覚を利用した見まね学習によるアクティブな動的動作生成に関する研究	池内 克史	8,800,000	2,640,000	11,440,000
基盤研究 (A)	法令・人事から見た近世政策決定システムの研究	山本 博文	5,100,000	1,530,000	6,630,000
基盤研究 (B)	大規模分散環境を用いたP2Pネットワーク流通ファイル制御システムの研究	中尾 彰宏	4,100,000	1,230,000	5,330,000
基盤研究 (B)	自己調整学習を支援する協調フィルタリングを用いた英語学習環境の構築と評価	山内 祐平	3,200,000	960,000	4,160,000
基盤研究 (B)	脳神経科学と社会の相互作用——事例研究と枠組み構築——	佐倉 統	2,900,000	870,000	3,770,000
基盤研究 (B)	メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について：8カ国国際比較研究	林 香里	4,700,000	1,410,000	6,110,000
基盤研究 (B)	「中国」と向き合って：日韓台対中進出企業の現地化プロセスに関する比較社会学的研究	園田 茂人	1,900,000	570,000	2,470,000
基盤研究 (B)	立体顔情報表示による遠隔実在感の創出	暦本 純一	5,600,000	1,680,000	7,280,000
基盤研究 (B)	記録映画アーカイブに見る戦後日本イメージの形成と変容	丹羽 美之	3,100,000	930,000	4,030,000
基盤研究 (B)	テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究と批評プラットフォームの制作	石田 英敬	6,800,000	2,040,000	8,840,000
基盤研究 (B)	西欧教会ならびにオペラ劇場の動学的音場解析とその比較	伊東 乾	6,100,000	1,830,000	7,930,000
基盤研究 (C)	噴火災害に備えた避難システムの実効性向上に関する研究	田中 淳	600,000	180,000	780,000
基盤研究 (C)	ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメントに関する比較制度研究	山口 いつ子	800,000	240,000	1,040,000
基盤研究 (C)	家族内コミュニケーションを支援するデジタルストーリーテリングシステムの開発研究	佐藤 朝美	1,200,000	360,000	1,560,000
基盤研究 (C)	組織の境界を越えた情報セキュリティのガバナンスに関する研究	田中 秀幸	1,100,000	330,000	1,430,000
基盤研究 (C)	高密度地震観測データ解析と大規模数値計算に基づくフィリピン海プレートモデルの構築	古村 孝志	1,500,000	450,000	1,950,000
挑戦的萌芽研究	拡張した人工生命系を研究するための革新的な実験システムの開発と実験	池上 高志	500,000	150,000	650,000
挑戦的萌芽研究	蛋白質メカニズムの階層的理解に関する研究	上條 俊介	1,500,000	450,000	1,950,000

挑戦的萌芽研究	イノベーションのための効果的なアイデア生成に関する行動経済学的分析	植田 一博	1,900,000	570,000	2,470,000
挑戦的萌芽研究	高齢者運転能力判断用ドライビングシミュレータの現実感の評価	中野 公彦	2,000,000	600,000	2,600,000
若手研究 (A)	ウェブサービスによる典拠情報の提供とその活用に関する研究	研谷 紀夫	4,100,000	1,230,000	5,330,000
若手研究 (B)	サブカルチャー資本と若者の社交性についての計量社会学的研究	北田 暁大	200,000	60,000	260,000
若手研究 (B)	内部構造を持つ3次元モデルの作成手法に関する研究	五十嵐 健夫	1,300,000	390,000	1,690,000
若手研究 (B)	現代都市再開発における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究	南後 由和	600,000	180,000	780,000
若手研究 (B)	情報メディア技術の変化と音楽産業の変容に関する実証的研究	加藤 綾子	700,000	210,000	910,000
若手研究 (B)	地震動と津波の3次元動的統合シミュレーション	前田 拓人	1,400,000	420,000	1,820,000
若手研究 (B)	クラウドソーシングが育てる高速な実環境対話型概念獲得	湧田 雄基	1,700,000	510,000	2,210,000
特別研究員奨励費	地殻・マントル内短波長不均質構造と高周波地震動の伝播特性に関する研究	武村 俊介	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	モバイル空間での利用に適した実世界指向インタフェースに関する研究	石黒 祥生	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	著作者人格権の本質論	酒井 麻千子	400,000	0	400,000
特別研究員奨励費	キリシタン禁制の日本の特質—中国、朝鮮との比較を踏まえて—	清水 有子	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	日米同盟の制度化:その歴史的展開と因果メカニズム	吉田 真吾	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	俳句の情報学的分析——オートポイエーシス概念にもとづいて	大井 奈美	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	オンラインゲーム体験を用いた小学校における情報モラル教育の実践	鎌倉 哲史	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	インターネット上の情報流通に対する「間接規制」に関する総合的研究	成原 慧	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	A S E A Nにおける規範の変容とその国内的要因	湯川 拓	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	P 2 Pネットワークにおける汎用性を高めたボイジング方式の開発	吉田 雅裕	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	移動する身体 of 管理—生体認証技術の需要と受容をめぐる—	高野 麻子	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	人と機械の統合的な状態監視に関する研究	中村 弘毅	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	日用品を利用した高齢者向けヘルスケアシステムの開発	辻田 眸	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	江戸幕府大目付の政治史的研究	山本 英貴	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	高密度地震観測データ解析に基づく、伝播・増幅特性の定量化と強震動予測の応用	竹本 帝人	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	ブレイン・マシン・インターフェイスへの市民認識反映コミュニケーションモデルの構築	磯部 太一	700,000	0	700,000

特別研究員奨励費	科学知・科学技術の生産過程に社会的マイノリティが参加するための方法の検討	渡部 麻衣子	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	日本のテレビゲーム産業における技術革新のマネジメントと競争優位性の研究	馬場 章	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	高周波地震波の散乱による地殻の不均質性の推定	古村 孝志	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	ロボットのモデリングを用いた、認識における社会的相互作用の役割	池上 高志	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	自律ロボットを用いたカオスの遍歴現象の研究	池上 高志	900,000	0	900,000
合計	50 件		122,700,000	32,220,000	154,920,000

2. 寄付講座

寄附講座名称	寄附者	担当教員等	寄附金額計	備 考
ベネッセ先端教育技術学	株式会社ベネッセホールディングス	山内裕平(兼務)	90,000,000	(設置期間 H19.4.1～H25.3.31)
合計	1 件		90,000,000	

6. その他外部資金

プログラム名	課題名	金額 (円)
研究者海外派遣基金助成金 (組織的な若手研究者等海外派遣プログラム)	「アジア・グローバルゼーション・スタディズ」若手研究者育成プログラム	15,730,000
二国間交流事業共同研究/セミナー	日韓シンポジウム「東アジアにおけるグローバル・コミュニケーションの新たな風景」	995,400
震災復興・日本再生支援事業	放射性物質への不安を抱える住民へのメンタルヘルスケア	369,000
合計	3 件	17,094,400

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

平成25年1月 発行

編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京都文京区本郷7丁目3番1号

郵便番号 113-0033

電話：03-5841-5905 Fax:03-5841-5916

Email: tosyo@iii.u-tokyo.ac.jp

印刷・製本

株式会社 創志企画

東京都新宿区山吹町8-1番

郵便番号 162-0801

電話:03-3267-5503 Fax:03-3235-3263

Email: soshi@kind.ocn.ne.jp
